博　多　32

――博多遺跡群第68次発掘調査報告――

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第287集

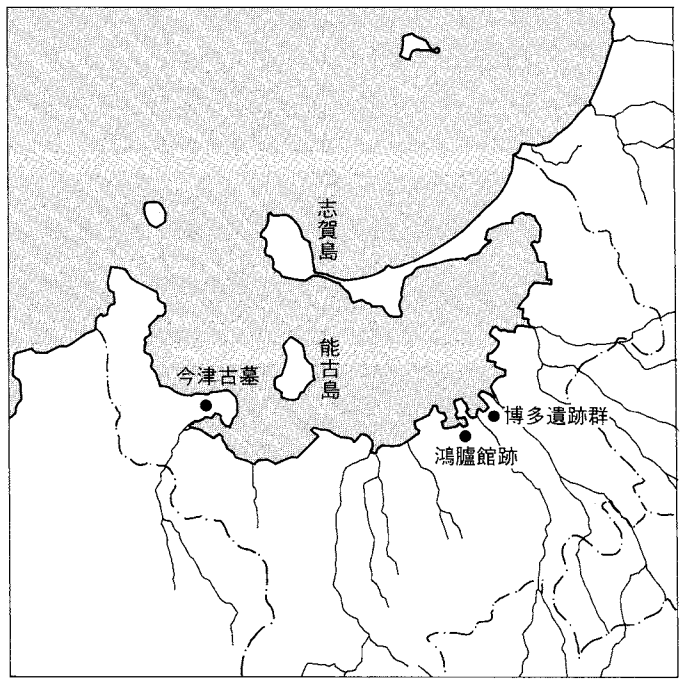
1992

福岡市教育委員会

博　多　32

——博多遺跡群第68次発掘調査報告——

福岡市埋蔵文化財調査報告書第287集



1992

福岡市教育委員会

第68次調査第１面全景（南から）

第68次調査第２面全景（南から）

石積遺構SX32（東から）

溜桝SX03，及びSX21　完掘状況（西から）

序　　文

福岡県の北西部に位置する福岡市は、玄界灘に面して豊かな自然環境と歴史的な遺産に恵まれています。しかし、近年は福岡市における著しい都市化によってこれらは失われつつあります。私共は自然環境や歴史的遺産について保護し、後世に伝えていくことの責を負っていることは言うまでもありません。

福岡市教育委員会では、各種の開発事業に伴い、埋蔵文化財の発掘調査を行い記録保存に努めているところです。

本書は平成２年度に発掘調査を行った博多遺跡第68次調査の成果について報告するものです。この調査地点は「息の濱」と呼ばれた砂丘上に立地しており、平安時代の終わりから江戸時代までの遺構・遺物を発見することができました。なかでも元寇の役と同時期の護岸状石積みは、中世都市博多を復原をする上での重要な手懸かりになるものと考えられます。

本書が埋蔵文化財へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としてご活用頂ければ幸いに存じます。

平成４年３月31日

福岡市教育委員会
教育長　井　口　雄　哉

例　　言

1．本書は福岡市博多区古門戸98－1他の特別養護老人ホーム建設に伴い、福岡市教育委員会が平成2（1990）年10月29日から3（1991）年1月31日の期間中に発掘調査を実施した博多（はかた）遺跡群第68次調査の報告である。

2．本書に掲載した遺構の実測は井沢洋一、菅波正人、吉田扶希子、多田映子、福田小菊、西嶋彰子、上村素が行った。

3．遺物の実測は吉田、牛房綾子、中西香、田中昭子、井沢が行った。

4．遺構・遺物の製図は牛房、中西、田中、松枝礼子が担当した。

5．遺構・遺物の写真撮影は井沢、吉田が行った。

6．本書に掲載する遺構一覧表は吉田が、遺物一覧表は牛房、中西が作成した。

7．本書作成にあたって小山田緑、倉光京子、多田映子、西嶋彰子、福田小菊の協力を得た。

8．遺構番号は発掘調査中に於いて検出した順に番号をふり、本書では遺構略号を遺構番号の頭に付けた。遺構の略号として用いたのはSE（井戸）、SK（土壙）、SX（不定形土壙・墓・構築物）である。

9．本書の遺物番号は遺構の種類毎に通し番号で示し、挿図・図版番号に一致させている。

10．遺構に用いた方位は磁北である。

11．本書に掲載した陶磁器の鑑定、及び分類については九州陶磁文化館の大橋康二氏にお願いした。又、瓦文字の解読は文化財整備課の三木氏に依頼した。

12．本報告にかかわる図面・写真・遺物などの一切の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。

13．編集は吉田、牛房、中西の協力のもと井沢が行った。

遺跡調査番号	9042			遺跡番号	HKT－68
地番	福岡市博多区古門戸町98－1			分布地図番号	千代博多48
開発面積	640㎡	調査対象面積	640㎡	調査面積	353.6㎡
調査期間	1990年（平成2年）10月29日～1991年（平成3年）1月31日				

本　文　目　次

第1章　は　じ　め　に …… 1
　1．発掘調査に至る経緯 …… 1
　2．発掘調査の組織 …… 1
第2章　立　　地 …… 5
第3章　調　査　経　過 …… 7
　1．試掘調査の概要 …… 7
　2．発掘調査の概要 …… 7
　(1)　調　査　経　過 …… 7
　(2)　土　　層 …… 7
　(3)　第1～3面の調査概要 …… 8
　3．遺構・遺物解説 …… 9
　(1)　土壙（SK）及び出土遺物 …… 9
　(2)　井戸（SE）及び出土遺物 …… 28
　(3)　不定形土壙・墓・構築物（SX）及び出土遺物 …… 75
　(4)　トレンチの調査 …… 111
　(5)　Pit 出 土 遺 物 …… 117
　(6)　遺構面出土遺物 …… 117
第4章　ま　と　め …… 122
　1．遺構・遺物の時代・時期について …… 122
　2．石積遺構（SX32）について …… 126
付編1　調査地点の地形および地質 …… 134
付編2　博多第68次調査出土遺物岩石薄片作製鑑定報告 …… 140

挿　図　目　次

Fig. 1　博多68次調査の範囲図（縮尺 1/300） …… 2
Fig. 2　博多遺跡群と周辺の遺跡（縮尺 1/50,000） …… 3
Fig. 3　博多遺跡群と調査地点位置図（縮尺 1/9,000） …… 4
Fig. 4　第68次調査地点位置図（縮尺 1/2,000） …… 6
Fig. 5　第68次調査第1・2面遺構配置図（縮尺 1/150） …… 9

Fig. 6　第68次調査第２・３面遺構配置図（縮尺 1/150）…… 11
Fig. 7　土壙SK01～04・06～09・12・13実測図（縮尺 1/40）…… 12
Fig. 8　土壙SK01・02出土遺物実測図（縮尺 1/3・1/4）…… 14
Fig. 9　土壙SK03～06出土遺物実測図（縮尺 1/3）…… 15
Fig.10　土壙SK06～09出土遺物実測図（縮尺 1/3・1/4）…… 17
Fig.11　土壙SK10～12出土遺物実測図（縮尺 1/2・1/3）…… 18
Fig.12　土壙SK15・17～20実測図（縮尺 1/40）…… 20
Fig.13　土壙SK13・15～18出土遺物実測図（縮尺 1/2・1/3・1/4）…… 21
Fig.14　土壙SK19・20出土遺物実測図（縮尺 1/2・1/3）…… 22
Fig.15　土壙SK21・23実測図（縮尺 1/40）…… 23
Fig.16　土壙SK24実測図（縮尺 1/40）…… 24
Fig.17　土壙SK21・22出土遺物実測図（縮尺 1/3・1/4）…… 25
Fig.18　土壙SK21・22・24出土遺物実測図（縮尺 1/3）…… 26
Fig.19　井戸SE01・02実測図（縮尺 1/40）…… 28
Fig.20　井戸SE01出土遺物実測図（縮尺 1/2・1/3・1/4）…… 29
Fig.21　井戸SE04実測図（縮尺 1/40）…… 31
Fig.22　井戸SE03・05・07実測図（縮尺 1/40）…… 32
Fig.23　井戸SE02掘り方出土遺物実測図①（縮尺 1/3）…… 35
Fig.24　井戸SE02掘り方出土遺物実測図②（縮尺 1/3）…… 36
Fig.25　井戸SE02井筒出土遺物実測図③（縮尺 1/3）…… 37
Fig.26　井戸SE02出土遺物実測図④（縮尺 1/3・1/4）…… 38
Fig.27　井戸SE03出土遺物実測図①（縮尺 1/3）…… 39
Fig.28　井戸SE03出土遺物実測図②（縮尺 1/3・1/4）…… 40
Fig.29　井戸SE04出土遺物実測図①（縮尺 1/3）…… 41
Fig.30　井戸SE04出土遺物実測図②（縮尺 1/2・1/3・1/4）…… 42
Fig.31　井戸SE05出土遺物実測図（縮尺 1/4）…… 44
Fig.32　井戸SE12・14実測図（縮尺 1/40）…… 45
Fig.33　井戸SE12出土遺物実測図（縮尺 1/2・1/3）…… 47
Fig.34　井戸SE12・13出土遺物実測図（縮尺 1/4）…… 48
Fig.35　井戸SE13・14出土遺物実測図（縮尺 1/3）…… 49
Fig.36　井戸SE14出土遺物実測図①（縮尺 1/3）…… 50
Fig.37　井戸SE14出土遺物実測図②（縮尺 1/2・1/3・1/4）…… 51
Fig.38　SX19・井戸SE15・16実測図（縮尺 1/40）…… 52

Fig.39　井戸SE15・16出土遺物実測図（縮尺 1/3・1/4）…… 54
Fig.40　井戸SE18・19実測図（縮尺 1/40）…… 55
Fig.41　井戸SE18出土遺物実測図①（縮尺 1/3）…… 57
Fig.42　井戸SE18出土遺物実測図②（縮尺 1/3・1/4）…… 58
Fig.43　井戸SE18出土遺物実測図③（縮尺 1/4）…… 59
Fig.44　井戸SE19出土遺物実測図（縮尺 1/3・1/4）…… 60
Fig.45　井戸SE20実測図（縮尺 1/60）…… 62
Fig.46　井戸SE20掘り方出土遺物実測図①（縮尺 1/3）…… 65
Fig.47　井戸SE20掘り方出土遺物実測図②（縮尺 1/3）…… 66
Fig.48　井戸SE20掘り方出土遺物実測図③（縮尺 1/3）…… 67
Fig.49　井戸SE20掘り方出土遺物実測図④（縮尺 1/3・1/4）…… 68
Fig.50　井戸SE20出土遺物実測図⑤（縮尺 1/4）…… 69
Fig.51　井戸SE20井筒出土遺物実測図⑥（縮尺 1/3）…… 70
Fig.52　井戸SE20出土遺物実測図⑦（縮尺 1/3・1/4）…… 71
Fig.53　井戸SE20掘り方出土遺物実測図⑧（縮尺 1/4）…… 72
Fig.54　井戸SE20掘り方出土遺物実測図⑨（縮尺 1/4）…… 73
Fig.55　SX01・02・07実測図（縮尺 1/40）…… 76
Fig.56　SX01・02出土遺物実測図（縮尺 1/3）…… 78
Fig.57　溜桝SX03実測図・土層図（縮尺 1/60）…… 79
Fig.58　SX02出土遺物実測図（縮尺 1/3）…… 83
Fig.59　SX02・03出土遺物実測図（縮尺 1/2・1/3・1/4）…… 84
Fig.60　溜桝SX03出土遺物実測図①（縮尺 1/3）…… 85
Fig.61　溜桝SX03出土遺物実測図②（縮尺 1/3）…… 86
Fig.62　溜桝SX03出土遺物実測図③（縮尺 1/3）…… 87
Fig.63　溜桝SX03出土遺物実測図④（縮尺 1/3）…… 88
Fig.64　溜桝SX03出土遺物実測図⑤（縮尺 1/4）…… 90
Fig.65　溜桝SX03出土遺物実測図⑥（縮尺 1/2・1/3・1/4）…… 91
Fig.66　溜桝SX03出土遺物実測図⑦（縮尺 1/3・1/4）…… 93
Fig.67　SX04出土遺物実測図（縮尺 1/3）…… 94
Fig.68　SX14・15・16実測図（縮尺 1/40）…… 95
Fig.69　SX07出土遺物実測図（縮尺 1/3）…… 97
Fig.70　SX10・11・14出土遺物実測図（縮尺 1/3）…… 98
Fig.71　SX16出土遺物実測図①（縮尺 1/3）…… 100

Fig.72　SX16出土遺物実測図②（縮尺 1/3・1/4） …… 101
Fig.73　SX20・21・23実測図（縮尺 1/40） …… 102
Fig.74　SX18～20出土遺物実測図（縮尺 1/3） …… 104
Fig.75　SX21出土遺物実測図（縮尺 1/3） …… 105
Fig.76　SX30出土遺物実測図（縮尺 1/2・1/3） …… 106
Fig.77　土壙墓SX31実測図・出土遺物実測図（縮尺 1/40・1/3） …… 107
Fig.78　石積遺構SX32実測図（縮尺 1/60） …… 109
Fig.79　石積遺構SX32出土遺物実測図（縮尺 1/3） …… 110
Fig.80　Ａトレンチ西壁土層図（縮尺 1/40） …… 111
Fig.81　Ｂ・Ｃトレンチ土層図（縮尺 1/80） …… 112
Fig.82　Ａ・Ｂ・Ｃトレンチ出土遺物実測図（縮尺 1/3） …… 115
Fig.83　第Ⅳ期砂堆層出土遺物実測図（縮尺 1/2・1/3・1/4） …… 116
Fig.84　Pit 02・04出土遺物実測図（縮尺 1/3） …… 117
Fig.85　遺構面出土遺物実測図①（縮尺 1/3） …… 118
Fig.86　遺構面出土遺物実測図②（縮尺 1/3） …… 119
Fig.87　遺構面出土遺物実測図③（縮尺 1/4） …… 120
Fig.88　文字瓦拓影（縮尺 1/1） …… 120
Fig.89　第68次調査出土の貨幣（縮尺 1/1） …… 121
Fig.90　石積遺構SX32（点線部分）と調査地点位置図（縮尺 1/8,000） …… 126
Fig.91　西区・早良区の元寇防塁 …… 131
Fig.92　石積遺構SX32上端部の状態（縮尺 1/90） …… 132

表　目　次

Tab. 1　第68次調査遺構一覧表 …… 143
Tab. 2　第68次調査遺物一覧表 …… 149
Tab. 3　第68次調査出土瓦類一覧表 …… 173
Tab. 4　第68次調査石製品及び土製品一覧表 …… 177
Tab. 5　第68次調査青銅製品一覧表 …… 177
Tab. 6　第68次調査鉄製品一覧表 …… 178
Tab. 7　第68次調査SX02・03出土木製品及び竹製品一覧表 …… 182

第1章　は　じ　め　に

1．発掘調査に至る経緯

平成２年（1990）３月９日、福岡市博多区古門戸町在住の石橋清助氏は同じ町内に所有している土地を「老人福祉のために役立てて欲しい」旨で、福岡市に寄付された。この所有地は、自宅に隣接した駐車場で、面積は約660㎡である。石橋氏は御両親を老人保健施設などに入院させており、「生まれ育った所に施設があれば最適ではないか」との想いから寄付を思い立たれた由。これを受けて福岡市民生局では、老人福祉法による施設を作る構想を検討すると共に、平成２年度に埋蔵文化財の発掘調査、平成３年度に建設工事、平成４年４月オープンのスケジュールで特別養護老人ホームを建設する運びとなった。

分布地図によれば、この地域は博多遺跡群の北端に位置しており、従来から遺跡の発掘調査例も少ないところから、「息の濱」の砂丘の形成や、町屋の発展を知る手懸かりとなることが期待できた。

平成２年２月26日に石橋氏により埋蔵文化財事前審査願いが申請されたため、３月13日に試掘調査を行った。この結果、現地表から2.3mの深さで、中世末～近世の遺構や遺物を検出すると共に、石垣状の構造物を発見した。

発掘調査は老人ホームの建物敷地に限定して行っており、調査面積は353.6㎡である。調査は山留工事及び、地表上面から深さ1.8mまでの鋤取り工事が終了次第実施することとし、平成２年10月29日から平成３年１月31日までの期間に行った。尚、当該調査地点の西側約80mに位置する株式会社中埜産業が発注した社屋建設工事においても、当該調査地点と同様の護岸状石積みが発見されていることを付記しておく。

2．発掘調査の組織

調査委託	福岡市民生局高齢者対策部高齢者福祉課
調査主体	福岡市教育委員会文化財部（前文化部）埋蔵文化財課
調査総括	課長　柳田純孝（前任）
	第２係長　柳沢一男（前任）
調査・整理	主任文化財主事　井沢洋一
庶務	松延好文（前任）、寺崎幸男
試掘調査	吉留秀敏、佐藤一郎

調査・整理補助　高田一弘、吉田扶希子、牛房綾子、中西香、田中昭子

調　査　作　業　家村冨基郎、井上八郎、内野弘行、神田武則、熊本交伸、斉藤善弘、島津明男、高尾甚一郎、橋良平、藤善弘、原田敬一郎、村田圭介、八尋弘人、横尾泰広、吉川春美、吉川順岳、上田エイ子、上野ミヤコ、上村素、江里ヨシエ、小山田緑、荻野敦子、木村みさを、黒木美代子、小林光子、坂本ハツ子、高石ヤス子、高木志保、永井鈴子、西口キミ子、野田文香、箱田香代子、堀タケ子、宮崎ヨシ子、宮原スマ子、脇山喜代子

整　理　作　業　荻野敦子、小山田緑、倉光京子、多田映子、西嶋彰子、箱田香代子、福田小菊

発掘調査にあたっては民生局高齢者福祉課をはじめ関係者の方々に多大なご協力をいただいたことを記して感謝の意を表わしたい。

博多さくら園の現況

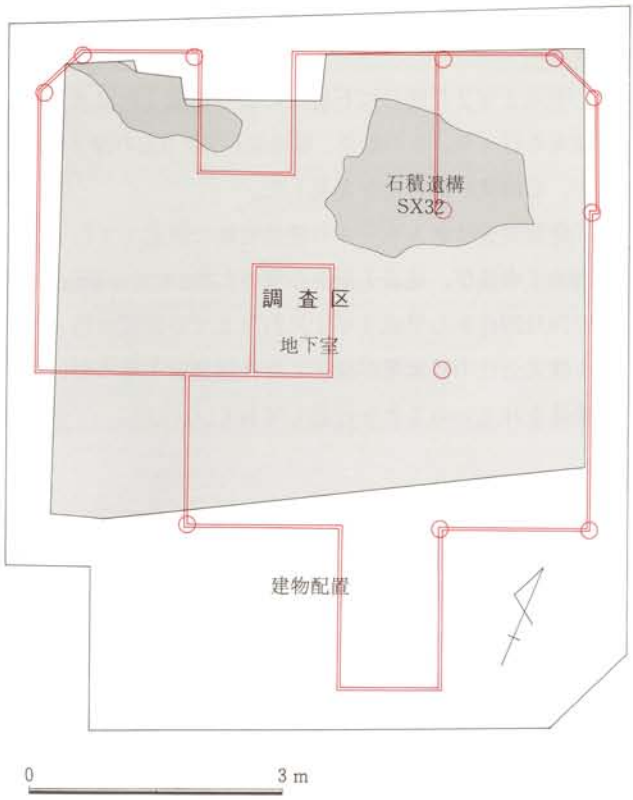
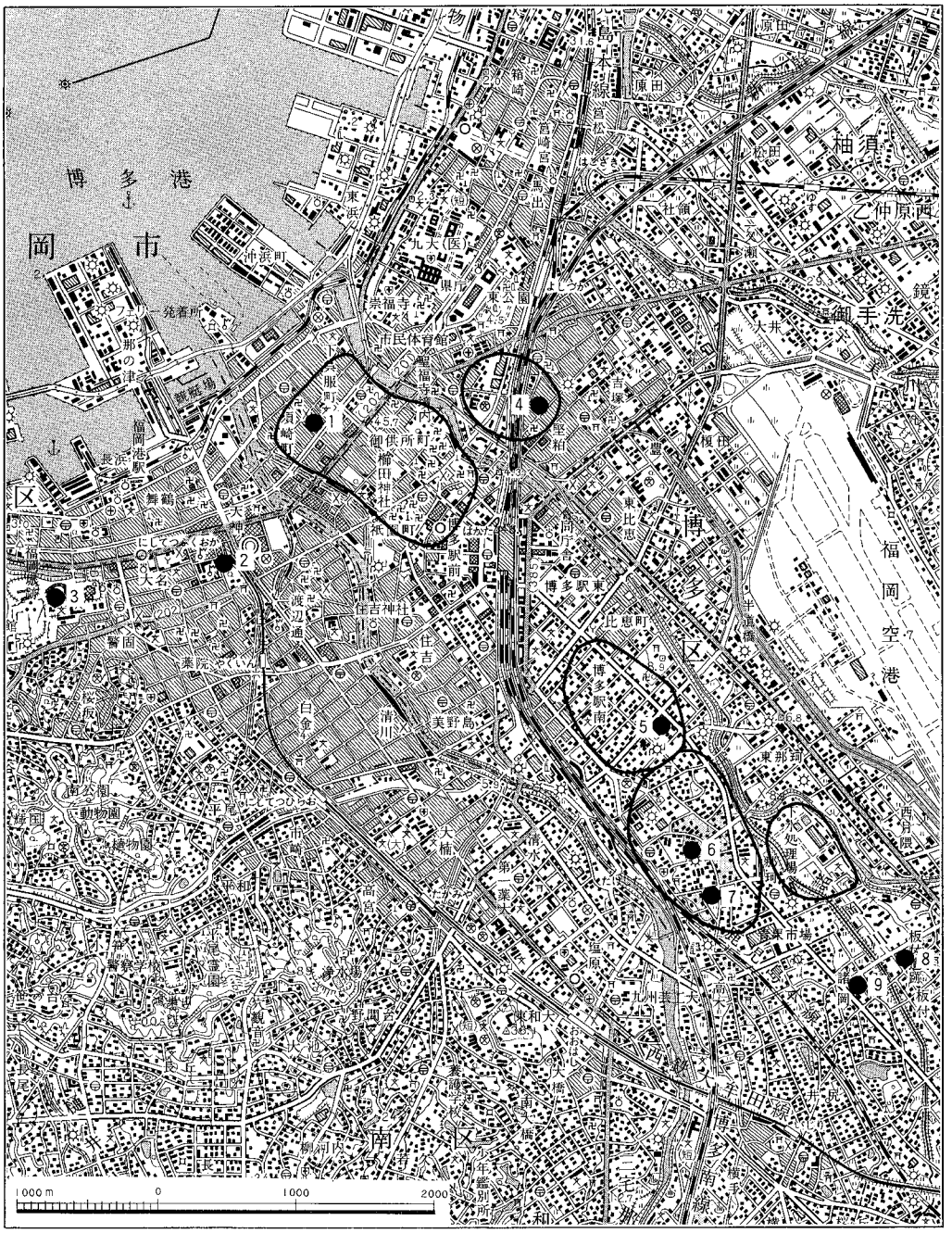


Fig. 1　博多68次調査の範囲図（縮尺 1/300）



1. 博多遺跡群
2. 肥前堀跡
3. 鴻臚館跡
4. 堅粕遺跡
5. 比恵遺跡
6. 那珂八幡古墳
7. 那珂遺跡群
8. 板付遺跡
9. 諸岡遺跡

Fig. 2　博多遺跡群と周辺の遺跡（縮尺 1/50,000）

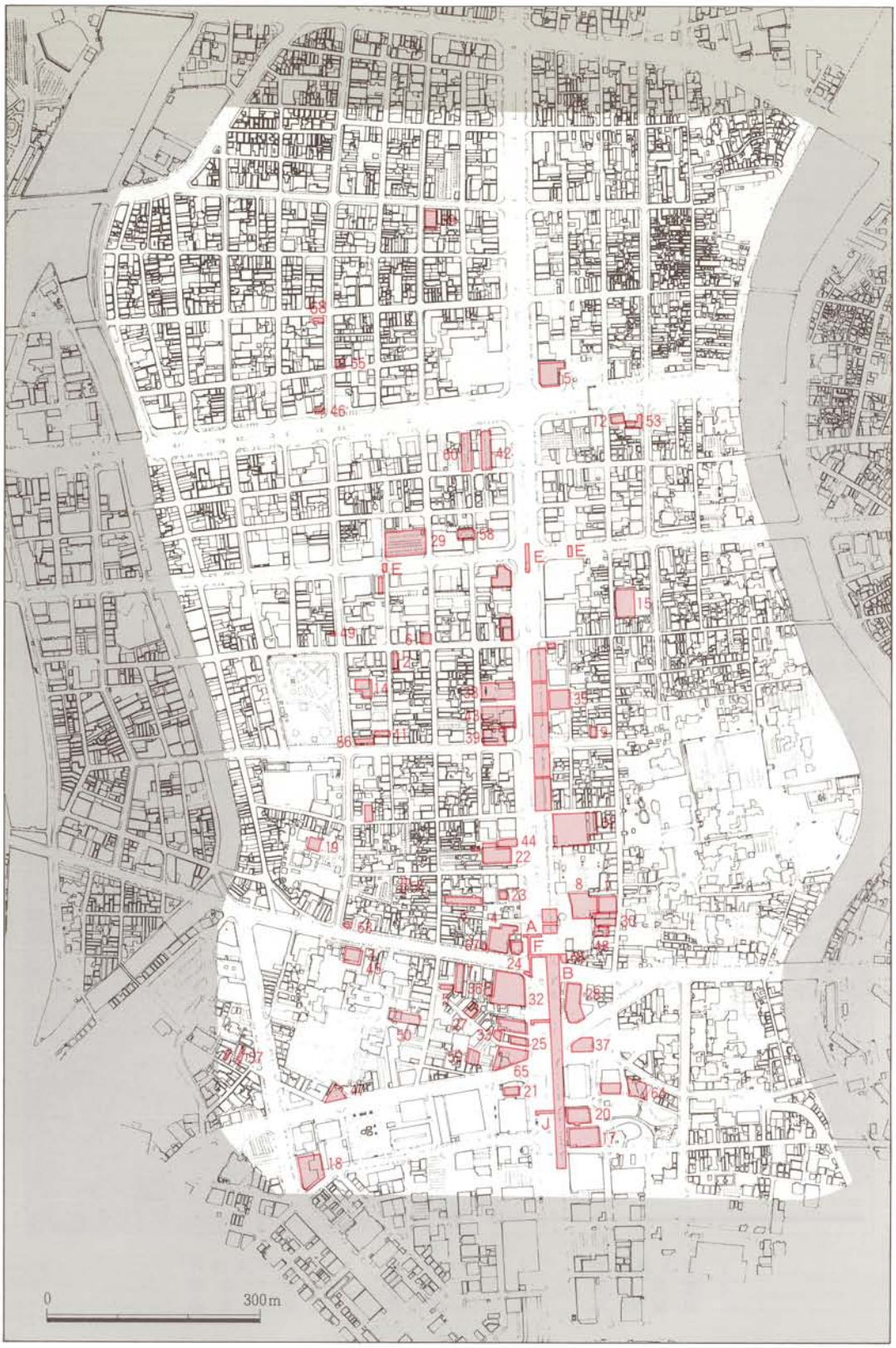


Fig. 3　博多遺跡群と調査地点位置図（縮尺 1/9,000）

第2章　立　　地

福岡市のほぼ中央を占める福岡平野は南北に延びる洪積台地と沖積平野からなり、北は博多湾に面し、東は三郡山塊、南から西は背振山塊の山々で画されている。この平野には南北方向に貫流する御笠川と那珂川の二大河川が存在し、北側の博多湾岸には砂丘を形成している。この砂丘は縄文時代の海進以後に形成されたもので、内陸部から海岸部へ向けて３つの列状を呈している。これらの砂丘は歴史的にて大きくは「息の濱」と「博多濱」と呼ばれるふたつの砂丘に分けられ、現在の明治通りをその境としている。博多遺跡群はその砂丘上に立地し、東は石堂川、南を旧比恵川、西は那珂川によって画される。遺跡の範囲は東西約１km、南北約1.5kmを想定している。この地域は、博多駅前の商業地域として市街化しており、標高４～５ｍを測る。遺構は時代毎に幾層にも重なっており、現在の地表の下、約１～５ｍの深さに検出できる。弥生時代から古墳時代の遺跡は「博多濱」に分布するが、古代末から中世初頭には息の濱でも遺構が認められ、中世後半期になると、遺跡の分布が飛躍的に拡大することが文献や発掘調査においても明らかになっている。これは、砂丘の形成が博多濱から息の濱へ拡大し、更に人工的な干拓などにより、町の中心も次第に息の濱へ移ったものと考えられる。

今回の発掘調査地点は、この「息の濱」と呼ばれる砂丘の北側傾斜面上に位置する。

石積遺構SX32の発掘作業風景（西から）

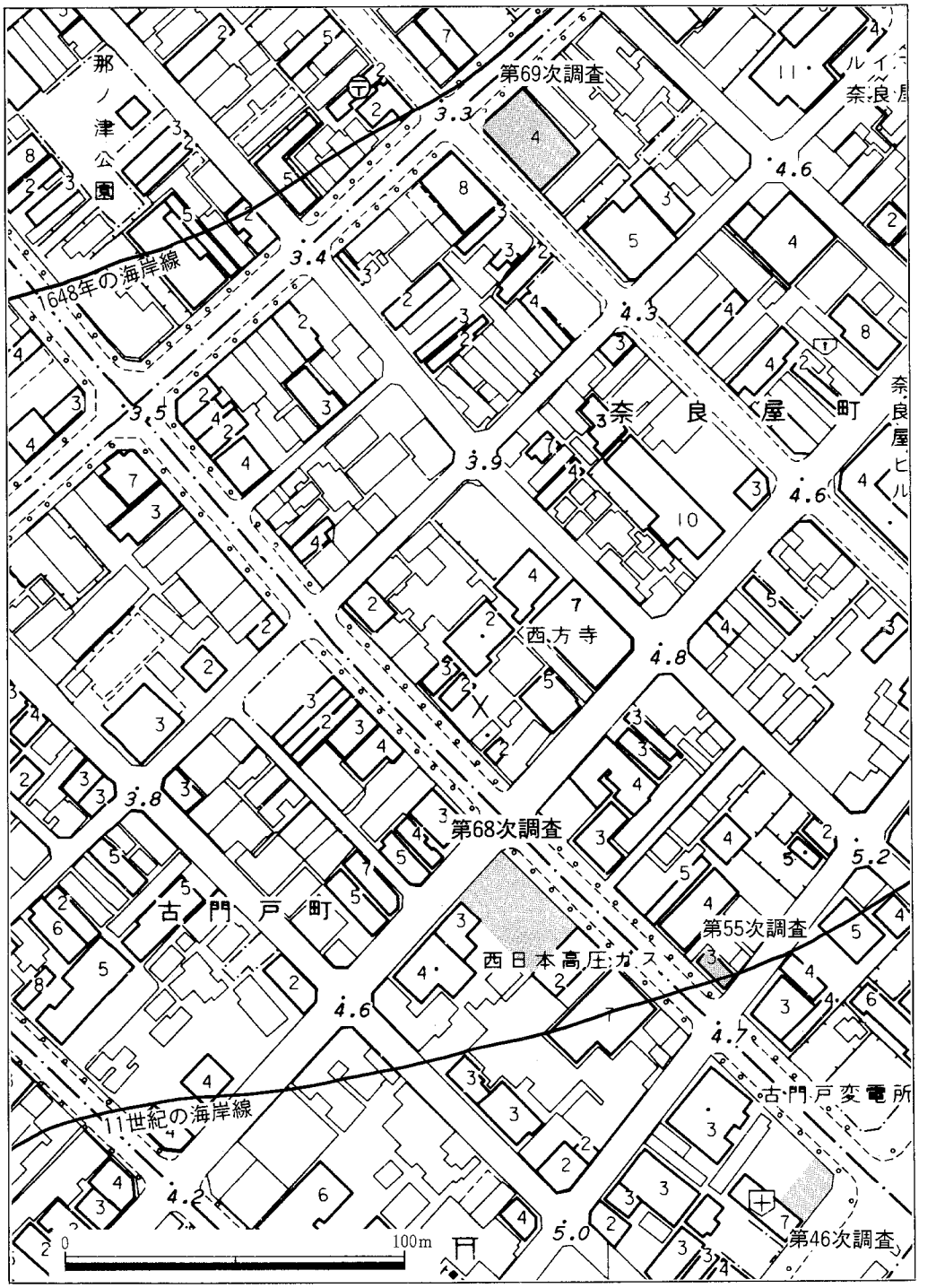


Fig. 4　第68次調査地点位置図（縮尺 1/2,000）

第3章　調　査　経　過

1．試掘調査の概要

平成２年３月13日に実施した。周辺では第46・55次調査が行われているが、当該地はこれらの西側に位置しており、従来の試掘調査によれば、中世の遺構・遺物が出土しない地域と考えられていた。

調査は敷地の中央部分に北西から南東方向のトレンチを設けた。このトレンチは長さ14m、深さ2.8mを測る。トレンチ南東側の土層々位は、①盛土、②黒色土（近世攪乱）、③黒灰色砂質土（近世）、④黄褐色粗砂（中世）となっている。黄褐色粗砂層はGL－210cmの深さで検出できる。中世末の土師器皿が出土しており、砂層の厚さはGL－280cmまで確認できた。又、北西側では、深さ230cmまで攪乱が入っているが、その下から石垣状の構造物を検出した。この石積みは大略東西方向で、黄白色粗砂層上面に築かれている。博多の町割りである横町筋に並行しているところから、「聖福寺の絵図」に描かれている元寇防塁、或いは石城府の名称の元となった石築地の可能性をもっているため発掘調査を実施することとなった。

2．発掘調査の概要

(1)　調 査 経 過

発掘調査は平成２年（1990）10月29日から平成３年（1991）１月31日の期間に実施した。調査に先立って、外周のフェンス工事、山留工事、調査範囲内の鋤取り工事が行われている。この鋤取り工事は地表面から1.8mの深さまで近世層及び攪乱層を除去しており、この面の標高は約2.5mを測る。これを便宜的に第１面と称した。第２面は試掘調査で検出した石積遺構を対象にしたが、面的にいえば、第１・２面の遺構は同一面上で検出できる。江戸時代と中世遺構の切り合いの関係から２回に分けて調査を行った。第３面は第２面の遺構面の断ち割りの際に検出した遺構面である。調査期間の制約から部分的に調査した。調査対象面積は640㎡あったが、敷地内に調査事務所を設置したことや残土搬出のための駐車スペースをとったために調査範囲は結果的に353.6㎡に縮まった。

(2)　土　　層

調査地点は砂丘上に立地しており、現在の地表面の標高は約4.3mを測る。地山は海辺の砂堆層で、標高2.0m前後を測る。

先述したとおり、敷地の外周に山留工事が施工されたことや調査区南側の傾斜面には擦り付け

が行われたために、精細な土層観察は不可能であった。井戸SE15・16の上位における土層面では、現在の地表から深さ約2.3mまでは近世・現代の攪乱が著しく、遺構の検出は困難な状況を示していた。深さ2.5m前後からは黄灰色を呈した地山の砂層面が検出できる。この面においてのみ遺構を確認することが比較的容易であった。この面が調査第1面にほぼ相当する。層位は大略に述べるとⅠ現代の客土層、Ⅱ近・現代の攪乱層、Ⅲ海砂堆積層、Ⅳ風成層の順に堆積している。焼土層も一部に遺存していたが、時期を明確にできなかった。

(3) 第1～3面の調査概要

第1・2面の分別は層位的見解に立ったものではなく、調査の作業上において便宜的に設定したものであり、これらの面が時代・時期を区切った生活面（文化層）を示すものではないことを断っておきたい。ここでは第1～3面における遺構の検出状況を述べることにとどめ、詳細については別項にゆずりたい。

1) 第1面（Fig. 5）

標高2.0m～2.5mを測る。(1)の調査経過の中で述べた様に、試掘調査のデータに合わせて深さ1.8mまで機械的に掘り下げられたのであるが、結果的には北側に風成砂層の一部を残して、浜砂堆積層の上面を遺構面とすることになった。この面では中世・近世の遺構が検出できるが、上位からの攪乱も多く、特に調査区の中央部分は5m四方の攪乱壙が存在した。検出した遺構は土壙、井戸、溜桝、土壙墓などである。いずれも上部が削平をうけている。近世の石垣積みの溜桝や中世末の石組井戸等は上部を撤去されており、これが鋤取り工事によるものか不明であるが、少なくともこれらの遺構内には現代的な遺物は入っていなかった。

遺構は13世紀～18世紀までの時期幅をもっているが、砂層内、或いは遺構内からは11世紀～19世紀までの遺物が出土している。

2) 第2面（Fig. 5・6）

遺構面の標高は第1面と同一である。第1面において護岸状の石積遺構SX32の一部を検出していたが、この遺構の全容を明らかにするために、切り合っていた遺構を全て除去した結果、この石積遺構SX32が海岸線を示すことが判明した。この石積遺構SX32の上部には風成砂層が堆積しているが、石積遺構の北側下部は浜砂が堆積していた。石積遺構SX32は南から北へ傾斜する浸食斜面に構築されていた。

石積遺構北側裾部分の標高は0.87mを測る。この石積遺構の北側或いは南側浜砂堆積層からは12～14世紀の遺物を検出した。詳細は後述したい。

3) 第3面（Fig. 6）

標高約1.1mを測る。地山の断ち割りのトレンチによって土壙墓、Pitを検出したため、土壙墓を中心として約3.4㎡を発掘調査した。地山は浜砂の堆積層である。土壙墓には龍泉窯系の青磁碗が副葬されており、12世紀後半代～13世紀前半を示している。

3．遺構・遺物解説

(1)　土壙（SK）及び出土遺物

素掘りの穴を土壙（SK）と称した。他の遺構と切り合い関係にあるため、平面形が明確ではない土壙もある。平面形は大略、隅丸長方形・不整円形・不整楕円形に分けられる。隅丸長方形を呈する土壙にはSK01・07・21が相当する。不整円形の土壙はSK02・03・04・06・13・15・19・23・24で、不整楕円形にはSK09・17・18・20が相当する。

SK01（Fig. 7）　長軸の長さ194cmを測る。断面形は逆梯形で、上部は削平を受けている。SX02に切られる。覆土は灰黒色を呈する。

遺物（Fig. 8）は土師器皿、土師質土器の火舎片（7）、龍泉窯系青磁碗片（8）がある。小皿

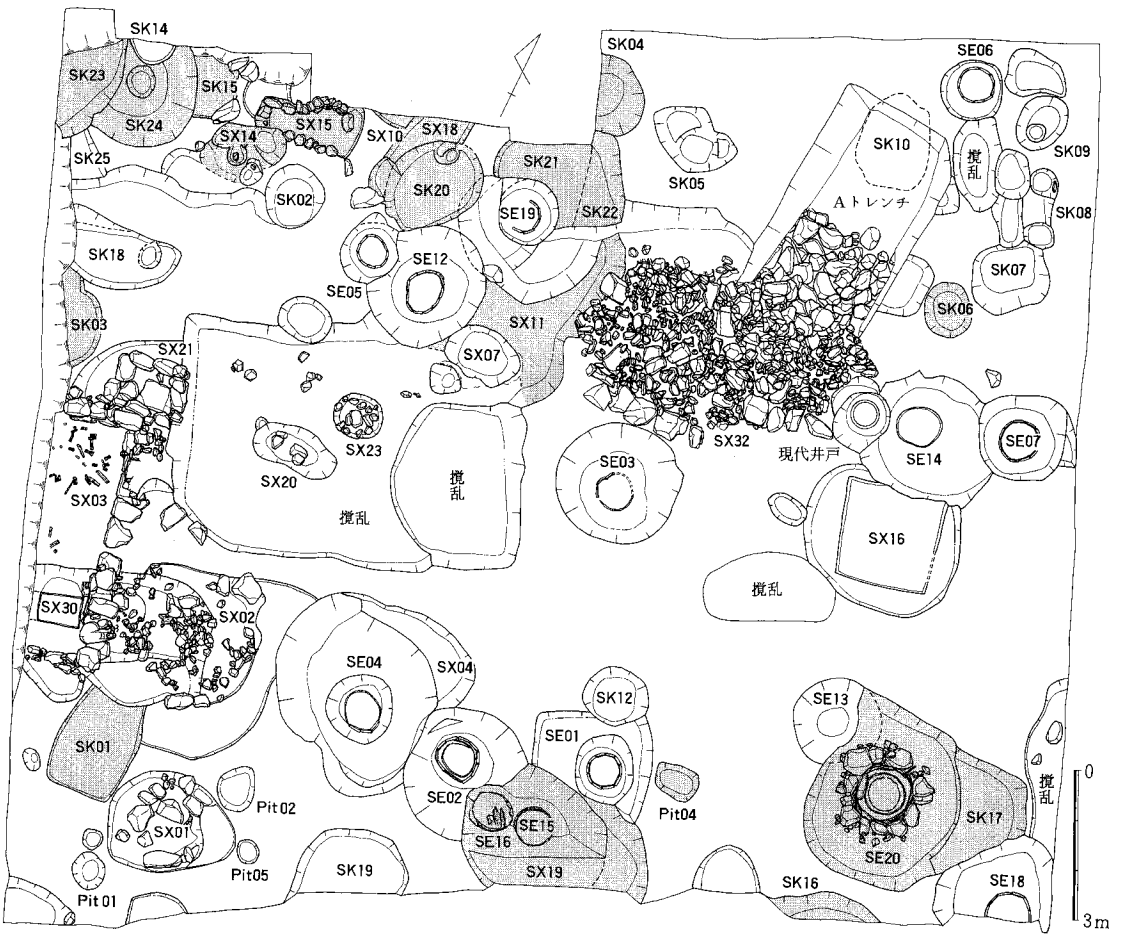


Fig. 5　第68次調査第１・２面遺構配置図（縮尺 1/150）　※アミは中世遺構

第68次調査　第１面全景（南から）

第68次調査　第２面全景（南から）

土壙SK07・08（東から）

土壙SK09（東から）

Fig. 6　第68次調査第２・３面遺構配置図（縮尺 1/150）

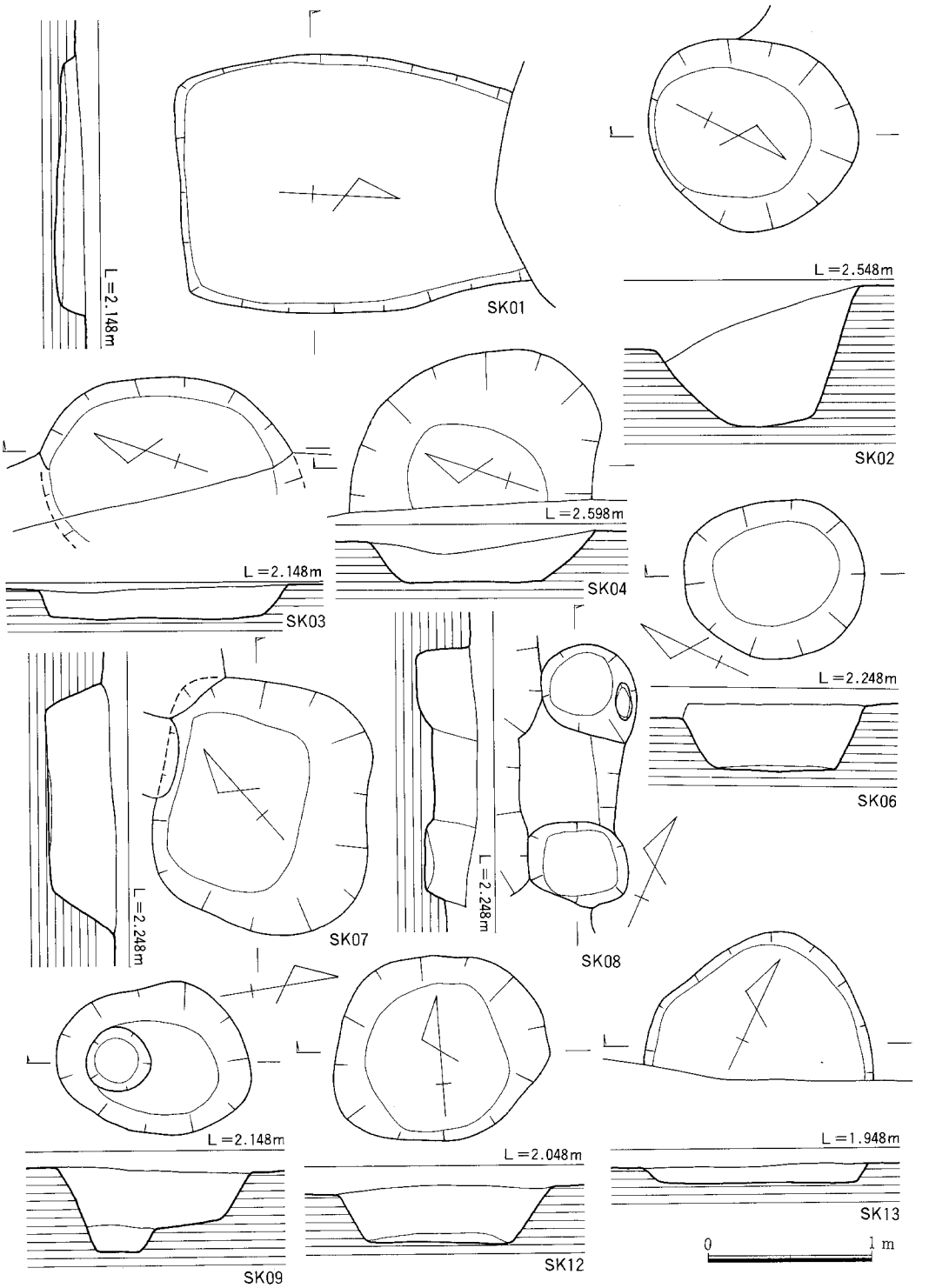
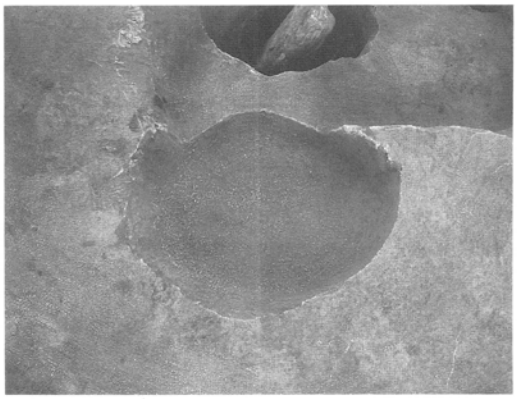
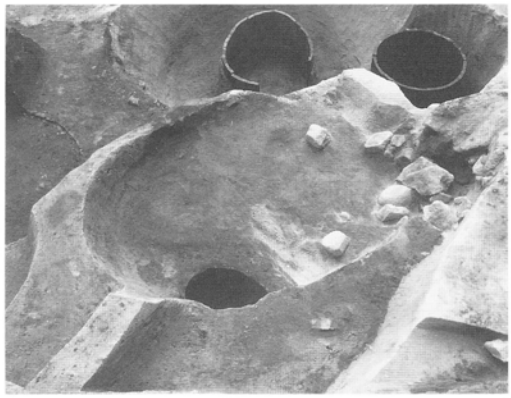


Fig. 7　土壙SK01～04・06～09・12・13実測図（縮尺 1/40）



土壙SK12（北から）



土壙SK20（北から）

（1～4）は口径7.0～7.6cm、小皿（5・6）は口径8.0～8.8cmを測る。いずれも糸切り底である。火舎の外面には梅花文をスタンプする。

SK02（Fig. 7）　平面形は不整円形を呈し、断面形は摺鉢状である。長径は128cmを測る。

遺物（Fig. 8）は土師器小皿（9～11）、龍泉窯系青磁碗片（17）、盤片（16）、肥前白磁碗（12）、有田焼碗（13）、唐津焼碗（15）、国産陶器瓶片（14）、土師質土器蓋（19）、火舎（22）、瓦質土器（20・21）、丸瓦（24）、平瓦（25）、石製硯（23）が出土した。小皿は口径6.2～7.0cmを測る。唐津焼碗は高台が低く、釉色は暗緑灰色を呈するが、内面は全体に釉がかいらぎ状を呈する。19の土師質蓋は消炭壺の蓋と思われる。20の瓦質摺鉢は口縁部内面を肥厚させている。大内系の土器である。21・22の火舎の外面は黒色研磨されており、雲文のスタンプがある。22の外面には花文のスタンプがある。平瓦は桟を有する瓦で、これは1674年以降の所産である。23の硯は陸部の残片で、厚さ1.1cm、深さ0.25cmを測る。石材は小豆色凝灰岩である。

SK03（Fig. 7）　SK18に切られる。平面形は不整円形を、断面形は逆梯形を呈する。現存の長さ150cmを測る。

遺物（Fig. 9）は土師質土器の捏鉢（26）、陶器摺鉢（27）が出土した。27の陶器摺鉢の下し目は7本単位である。備前焼である。

SK04（Fig. 7）　平面形は不整円形を、断面形は逆梯形である。現存の長径は152cmを測る。

遺物（Fig. 9）には土師器小皿（28～30）、坏（31・32）、陶器甕片（33）がある。28の小皿は口径8.1cm、29・30は口径7.0cmを測る。29の外底部に板目痕がある。31の坏は体部の立ち上がりが強く、口径と底径の比が小さい。口径11.0cm、器高3.0cmを測る。小皿の29・30が伴うものと考えられる。33の陶器甕は内外面に灰釉が施される。内外面共にカキ目状の条痕がある。唐津系であろう。

SK05（Fig. 5）　平面形は不整形を呈し、断面形は逆梯形である。最大径188cmを測る。

遺物（Fig. 9）には土師器皿・坏、土師質土器鉢（36）、国産陶器、染付碗（34）・皿（35）、瓦

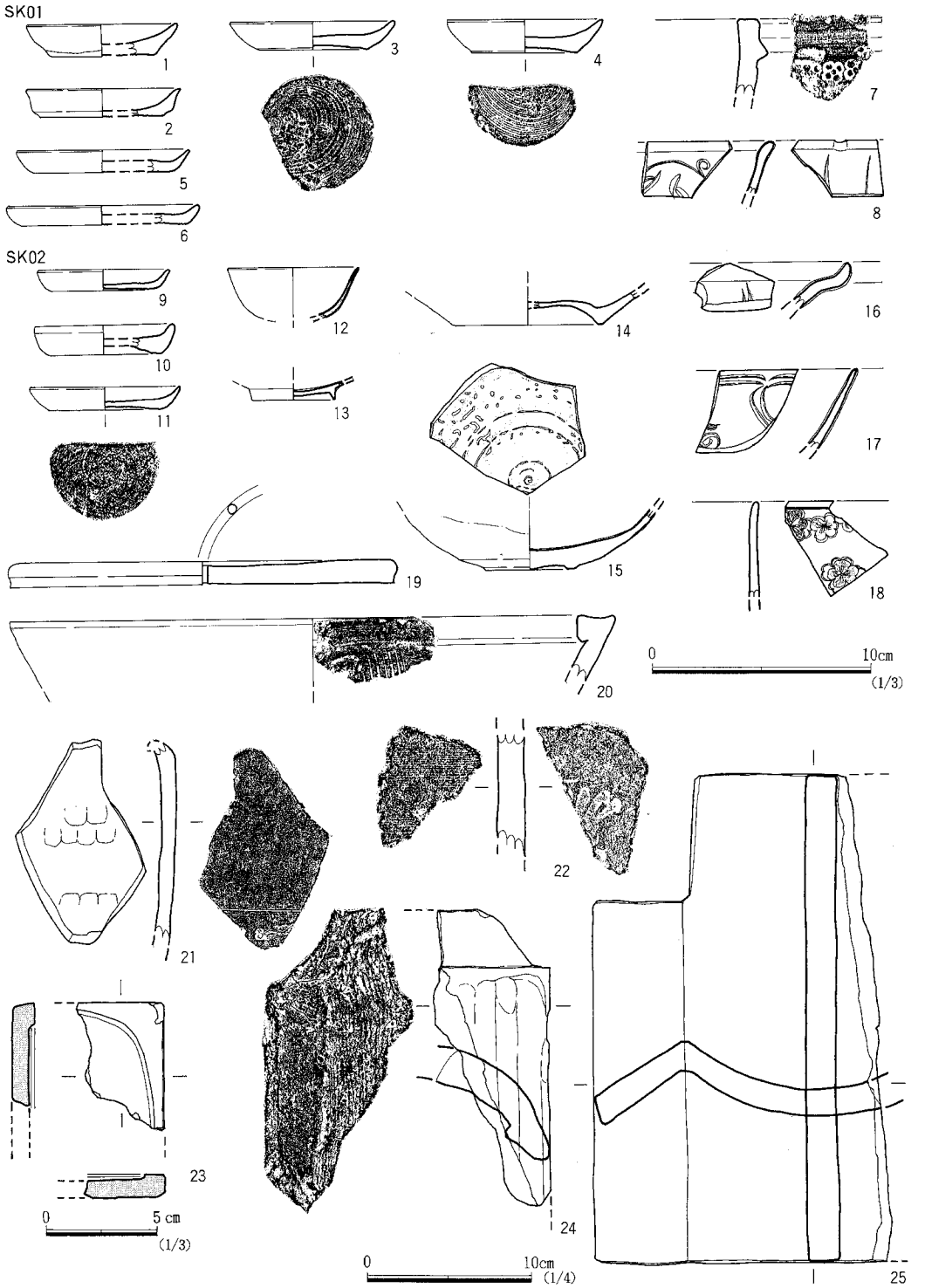


Fig. 8　土壙SK01・02出土遺物実測図（縮尺 1/3・1/4）

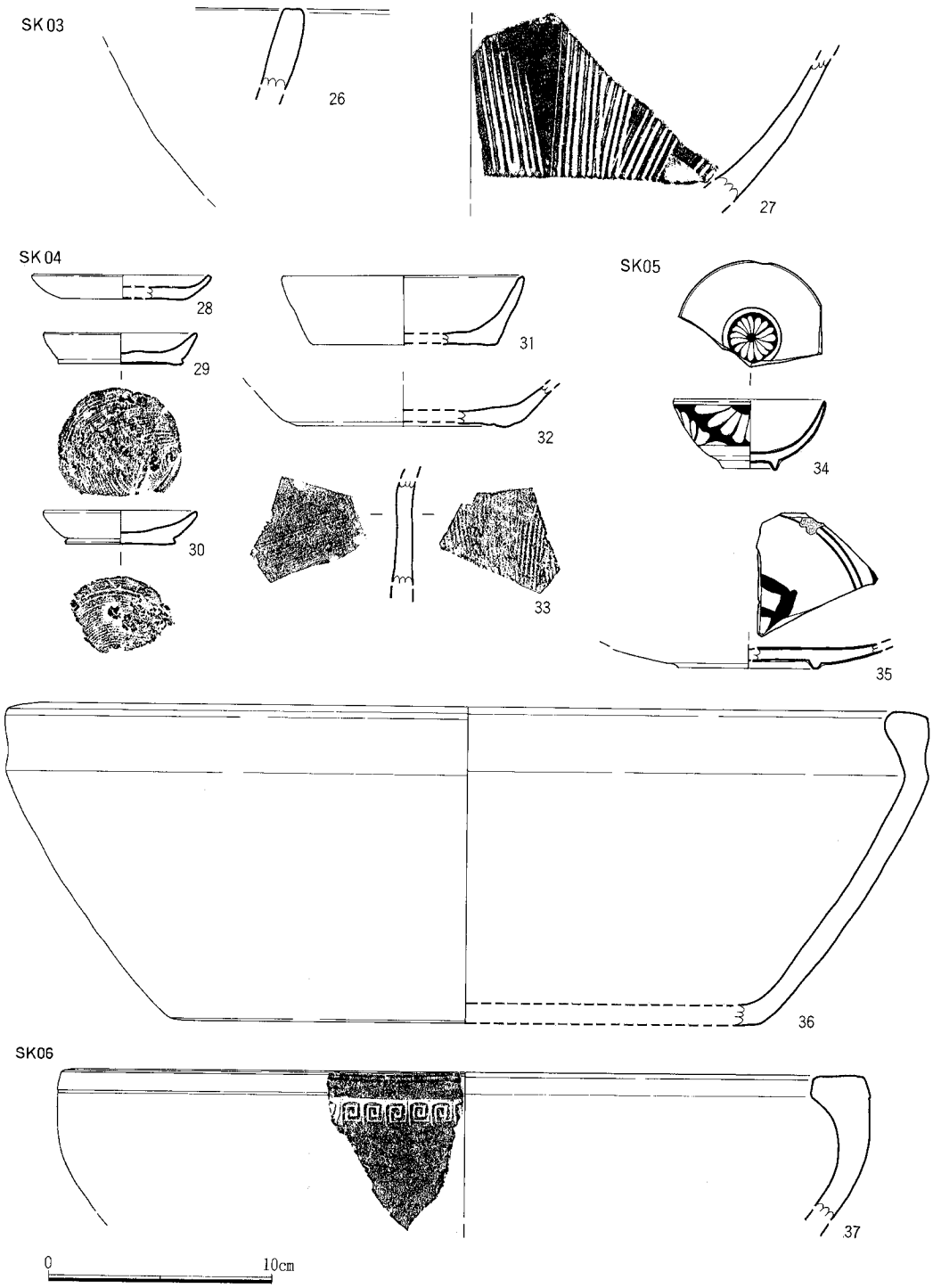


Fig. 9　土壙SK03～06出土遺物実測図（縮尺 1/3）

類がある。34の染付碗は口径7.0cm、器高3.1cmを測る。内底見込み、体部外面に菊花文を配している。36の土師質土器鉢は口径39.0cm、器高24.6cmを測る。体部上位に屈曲をもち、口縁部を肥厚させる。

SK06（Fig. 7）　平面形は不整円形、断面形は逆梯形を呈する。長径111cmを測る。

遺物（Fig. 9・10）は土師器小皿(38)、坏(40・41)、明代青磁碗(39)、瓦質土器火舎(37・42)、李朝陶器（43）がある。38の皿の口径は7.0cmを測る。40・41は糸切り底の坏で、口径は11.6cm・13.4cmを測る。37の火舎は口径37.8cmを測る。外面に雷文を施す。42は有脚の火舎で、脚外面に雲文を印刻する。43の李朝摺鉢は口径が22.8cmを測る。内面にヘラ描きの下し目がみられる。

SK07（Fig. 7）　平面形は隅丸長方形を呈し、断面形は逆梯形である。最大長は155cmを測る。

遺物（Fig.10）には白磁皿（44）、唐津焼甕（45）、鉢（46）、軒平瓦（47）がある。44は明代の白磁で、高台径8.0cmを測る。45の唐津焼甕は平底で、外底部に目痕がある。46は上げ底気味で、外底部に砂目がある。47の軒平瓦は瓦当厚約4.6cmを測る。外縁は深い。中心飾りは不明で、左右に梅花文と唐草文を配しているものと考えられる。

SK08（Fig. 7）　平面形は不整形を呈し、南北に各々Pit が存在する。現存長163cmを測る。

遺物（Fig.10）は白磁皿（48）、染付碗（49・50）が出土している。49・50は体部に丸みをもち、内底見込みに形状の不明な文様を描く。1800年代の伊万里碗である。48は肥前系の白磁皿と考えられる。

SK09（Fig. 7）　平面形は不整楕円形を、断面形は逆梯形である。長径は118cmを測る。壙底部の南側にPit がある。

遺物（Fig.10）は土師器小皿（51）、坏（53・54）、唐津系の皿（52）がある。51は糸切り底で、板目痕がある。口径6.8cm、器高1.2cmを測る。53は体部が強く立ち上がっており、口径11.6cmを測る。54はいわゆる大内系の坏で、体部は大きく開き、器高は低い。口径14.6cmを測る。52の皿は口縁部が屈曲しており、暗い飴色釉を施している。

SK10（Fig. 5）　平面形は不整隅丸長方形を呈しており、廃棄物土壙として利用していた。

遺物（Fig.11）の内、56は土師器の高坏脚部である。表面は磨滅している。57は肥前系の陶器摺鉢の破片で、単位が6本以上の下し目がある。58は唐津焼の皿で、内底見込みに砂目痕がある。口径13.2cm、器高3.4cmを測る。暗い灰緑色釉を内外面に施している。55は唐津焼碗で、内外面は淡い灰褐色釉を施す。

SK12（Fig. 7）　平面形は不整方形を、断面形は逆梯形である。最大長132cmを測る。

遺物（Fig.11）は江戸時代を中心としている。59は糸切りの土師器小皿で、口径7.0cm、器高1.7cmを測る。60は白磁の猪口で、口銹が施されている。61は伊万里染付碗で、外面に網目文と花文を配している。63は染付皿で、SX03からも同一個体片が出土している。65は蓋で、肥前系である。灰色の胎土に透明釉をかけている。64は陶器天目で、高取系と考えられ、高台畳付及び内側は釉

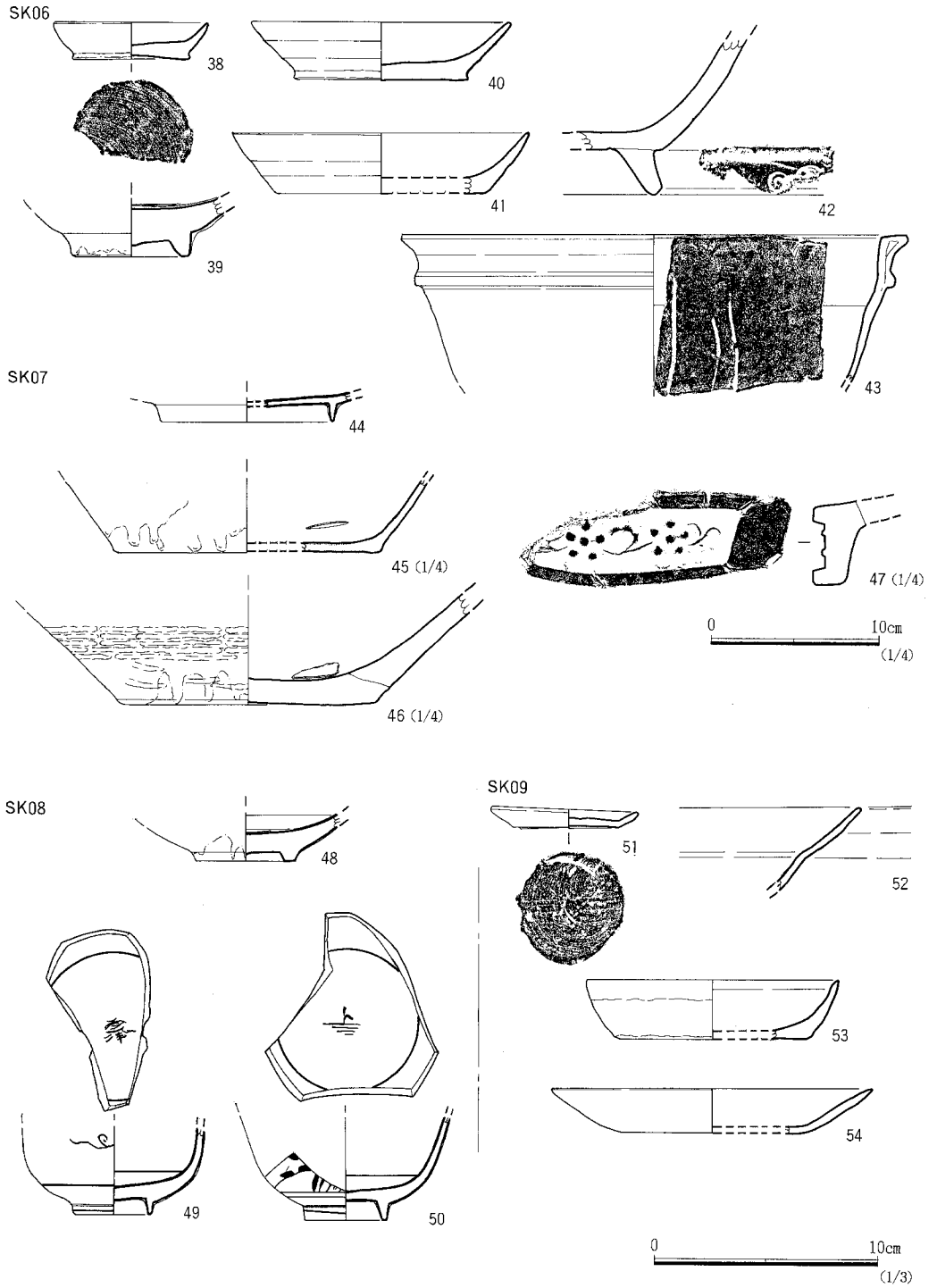


Fig.10　土壙SK06～09出土遺物実測図（縮尺 1/3・1/4）

ハギが施されている。胎土は灰黄色である。62は耳付の壺で、透明釉が全体にかかる。胎土は灰色を呈している。舶載の陶器である。66は唐津系の摺鉢、67は高取系の摺鉢、68は筑前系の甕である。陶磁器の時期は63を除いて17世紀後半から18世紀後半に比定できる。69は「熙寧元寶」である。

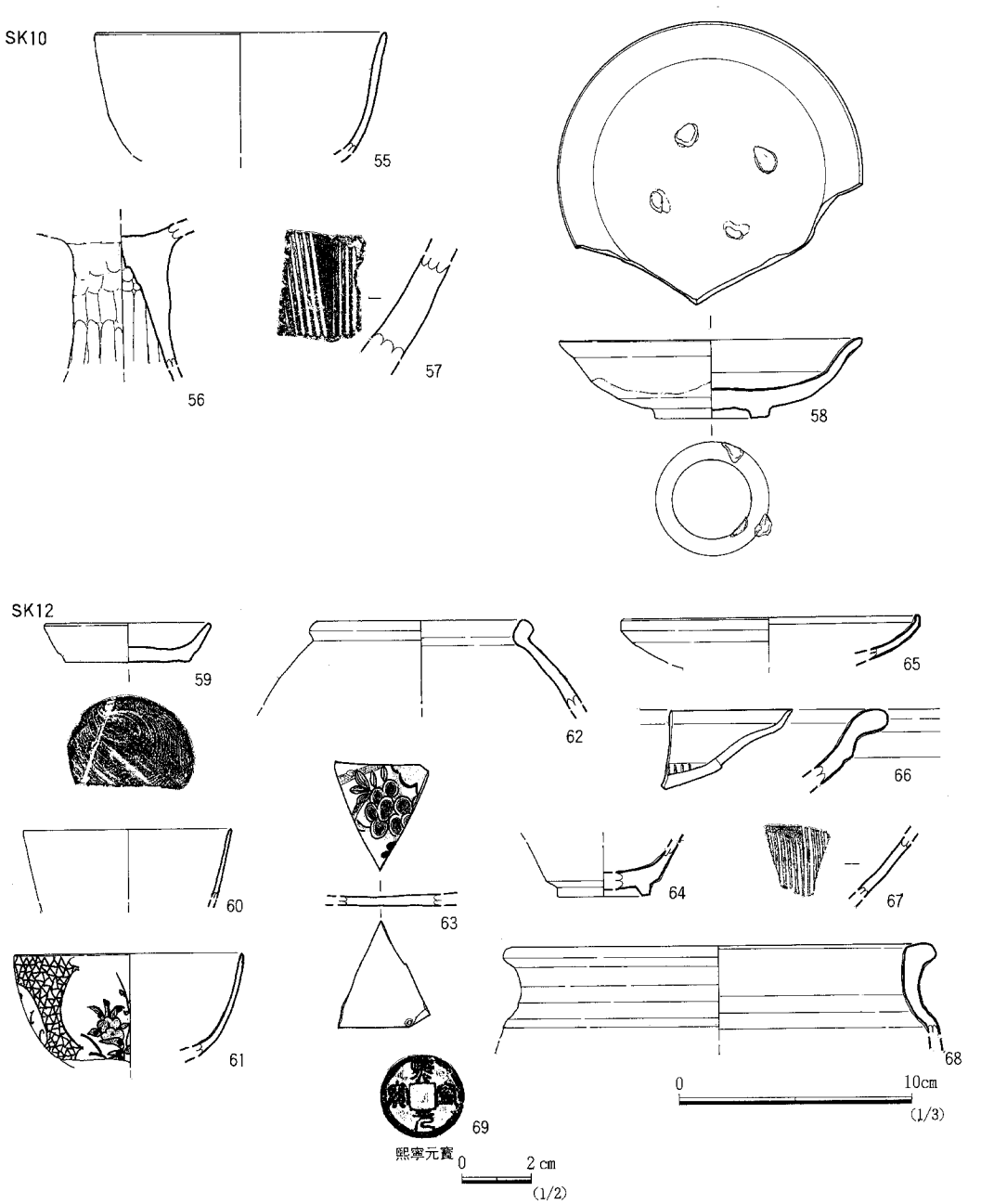


Fig.11　土壙SK10・12出土遺物実測図（縮尺 1/2・1/3）

SK13（Fig. 7）　境界地にある。不整円形を呈している。上部の削平は著しい。長径は138cmを測る。

遺物（Fig.13）は少なく、糸切りの土師器小皿（70・71）がある。口径は6.8cm、器高は1.35cm・1.8cmを測る。71の体部は丸味をもっている。

SK15（Fig.12）　SK24に切られているため全形は不明であるが、平面形が不整円形を呈するものと考えられる。現存長は127cmを測る。

遺物（Fig.13）はⅧ類－1の白磁碗（72）が出土した。他に貨幣（73）が1点ある。破片のため貨幣名称は不明である。

SK16（Fig. 5）　南側の境界地に位置しており、SK13と切り合い関係にある。形状は不明である。現存長183cmを測る。

遺物（Fig.13）は土師器小皿（74・75）・坏（76）が出土した。74・75は体部が開く器形で、口径7.8・8.2cm、器高1.5・1.4cmを測る。76の坏は口径11.8cmを測る。

SK17（Fig.12）　井戸SE18・20に切られる。平面の形状は不整楕円形を呈する。現存長は225cmを測る。

遺物（Fig.13）の土師器小皿（77・78）・坏（80）は糸切り底である。79は須恵器坏蓋で、口径は10.0cmを測る。81は土師質土器の捏鉢である。内面はヨコハケ調整を施している。

SK18（Fig.12）　西側境界地に位置する。平面形は不整楕円形を呈し、長径は203cmを測る。

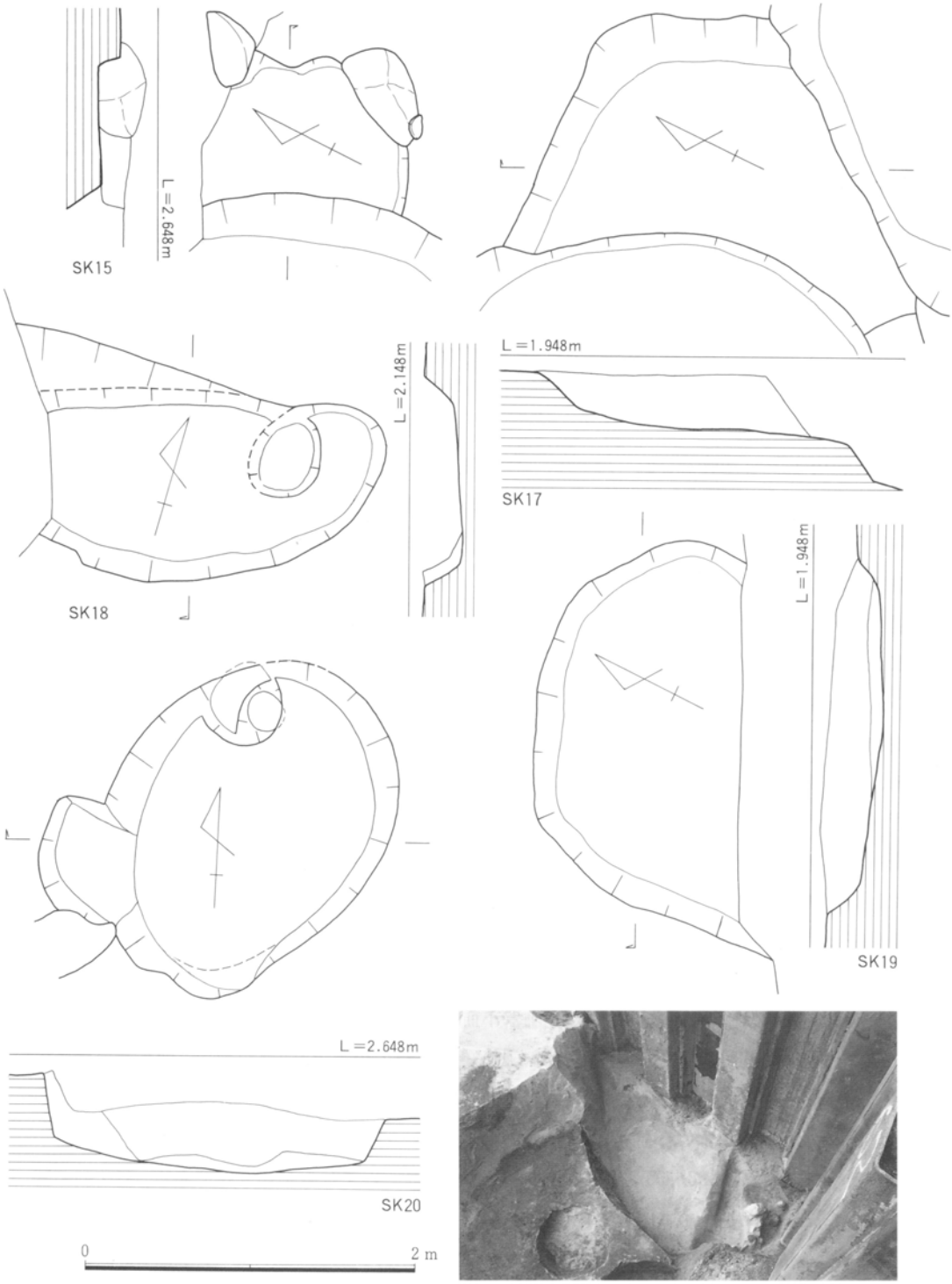
遺物（Fig.13）の内、82・83は土師器坏で、糸切り底である。85は唐津鉄絵皿、87は唐津焼碗である。87の高台は三日月高台で、畳付に砂目が残る。灰緑色釉を内外面に施すが、高台部にかいらぎがみられる。86は備前焼摺鉢で、格子目状に下し目を施す。内面の磨滅は著しい。84は伊万里染付皿である。88の軒丸瓦は瓦当径13.7cmを測る。瓦当面の三巴文は左回りで、尾が短い。珠文は14個である。

SK19（Fig.12）　南側境界地に位置する。平面形は不整円形を、底面はレンズ状を呈する。現存長は232cmを測る。

遺物（Fig.14）の内、89は糸切り底の土師器小皿、90は須恵質土器の甕片で、外面に綾杉状の叩きを施す。91は長方形の瓦質火舎で、四隅に脚が付く。鉢の深さは4.3cmを測る。内外面は黒色を呈する。体部下位に板目状の調整を行う。92の貨幣名称は「開元通寶」であろう。

SK20（Fig.12）　平面形は不整楕円形を呈し、底面はレンズ状に窪む。最大径192cmを測る。

遺物（Fig.14）の内、93～95が土師器皿、96・97は坏で、いずれも糸切り底である。93・94の器高は低く、立ち上がりが小さい。口径は7.5・6.8cm、96・97の口径は11.6・12.0cm、器高2.1・2.6cmを測る。98は明代の青磁碗で、緑色釉は厚い。外底と内底見込みに釉ハギがある。99は薄手の磁器碗で、胎土は灰白色を呈し、外面の釉は鉄釉、内面は透明釉である。100は明代染付碗、101は明代の青磁碗であるが、二次火のため緑味を帯びた茶褐色を呈する。103・104は高麗青磁



土壙SK23（北から）

Fig.12　土壙SK15・17～20実測図（縮尺 1/40）

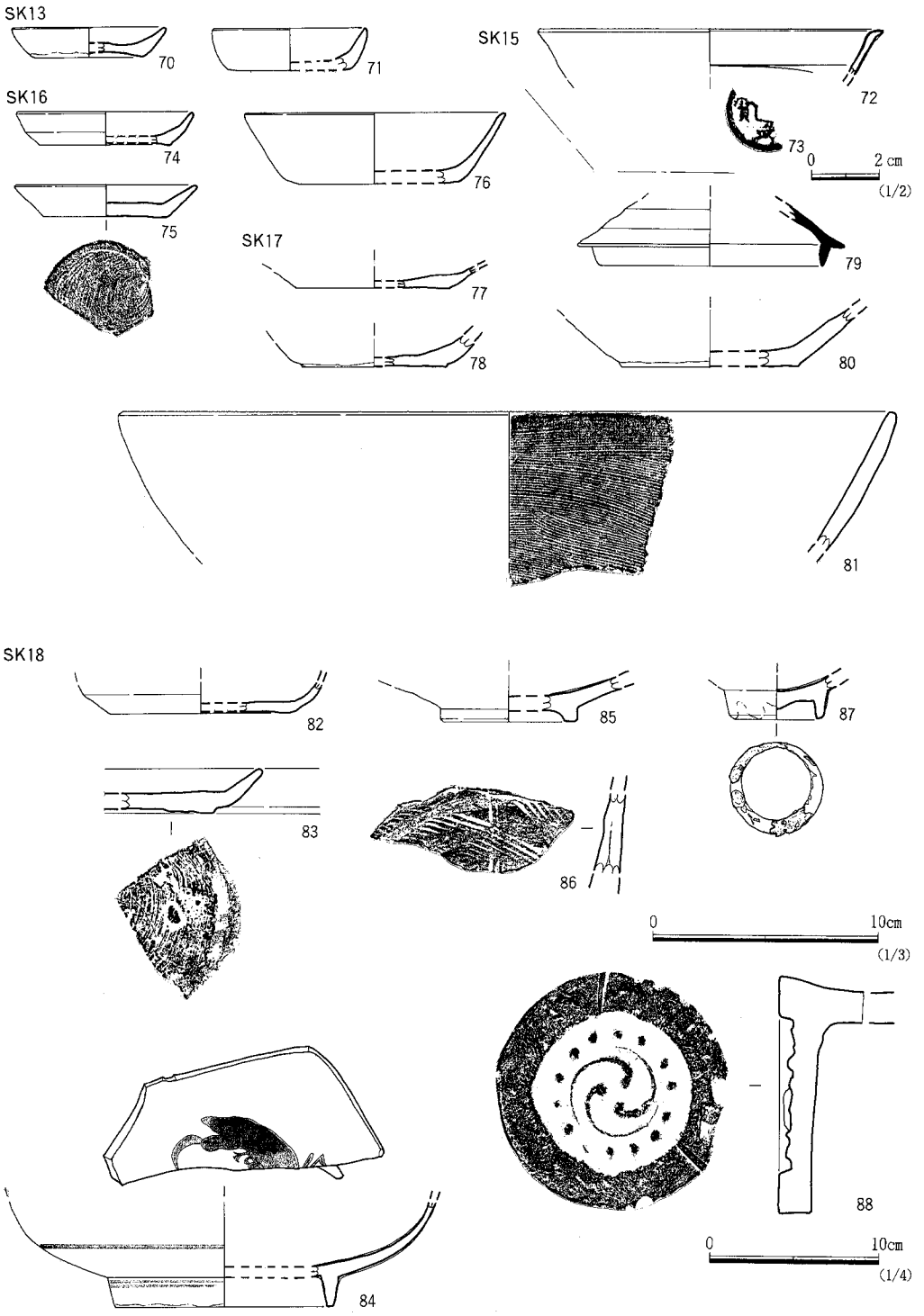


Fig.13　土壙SK13・15～18出土遺物実測図（縮尺 1/2・1/3・1/4）

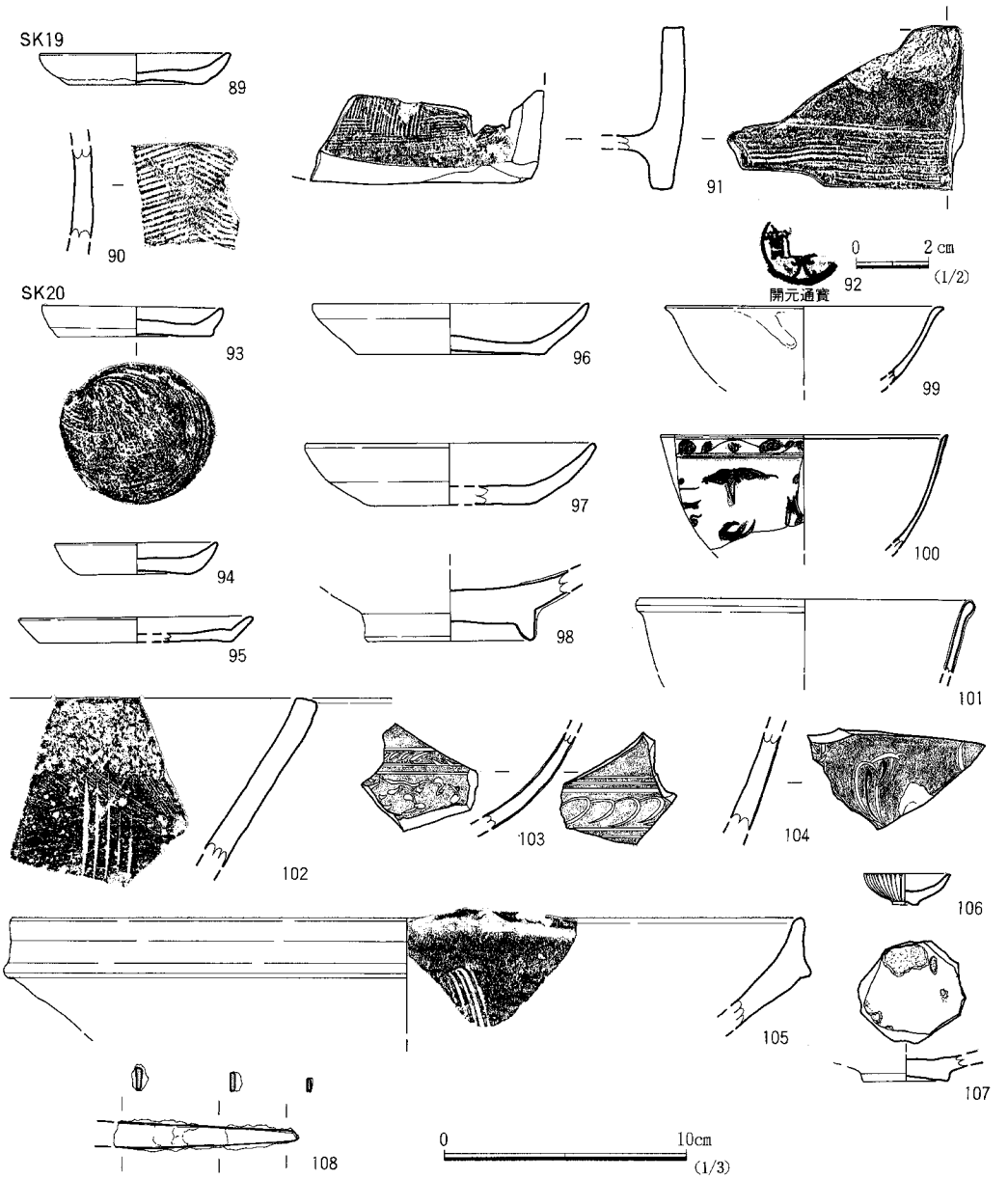


Fig.14　土壙SK19・20出土遺物実測図（縮尺 1/2・1/3）

で、象嵌を施す。104は瓶、103は碗である。103の象嵌には白色粘土、104の象嵌には白色粘土と黒色土を用いている。102は土師質土器の摺鉢で、５本単位の下し目がある。105は備前焼摺鉢のⅣ期、106は伊万里の紅皿である。107は李朝の皿で、内底と外底に砂目が残る。暗灰青色釉である。108は鉄製刀子で、刃部を破損している。

SK21（Fig.15）　井戸SE19に切られる。北側境界地に位置しているが、平面形は隅丸長方形と考

えられる。最大の長さ188cmを測る。北側境界地の斜面が崩壊する危険性があったため、発掘は未完了である。規模からみて、井戸であろう。

遺物（Fig.17）の内、109・110は土師器糸切り皿、111～113は土師器の坏である。110には板目痕がある。115は国産陶器の甕で、海上り品である。116は瓦質土器の火舎で、突帯上部に木葉文の印刻がある。117は軒平瓦で、瓦当面の中心飾りに宝珠形を用い、5回転の唐草文を左右に配する。蔓草は唐草から一本ずつ派生している。118は丸瓦で、内側に縄紐痕がある。

SK22（Fig.15）　北側境界地に位置するため、遺構の全形は不明である。井戸SE19、土壙SK21、SX18と切り合い関係にある。平面形は不整の隅丸方形を呈しており、最大の長さは200cmを測る。土壙SK21はSK22のほぼ中央に位置する。未発掘のために用途は不明であるが、井戸の可能性もあることから、SX18・SK21・22は一体の遺構と見做すこともできる。

遺物（Fig.17）の内、119は土師器皿で、板目痕がある。120は土師器坏、121は瓦質土器の摺鉢、122は三島手の李朝象嵌粉青沙器で、瓶の破片であろう。124は軒平瓦、123は丸瓦である。123の背部には縄目叩き痕がある。

SK21・22出土遺物（Fig.17・18）　126は土師器の坏、127は瀬戸・美濃系の皿、128は朝鮮白磁の皿、129は唐津焼皿、131は備前焼の摺鉢、132は上野焼の片口である。130は鉄製釘である。125は平瓦で、凹部に布目があり、凸部に斜格子叩きを施す。

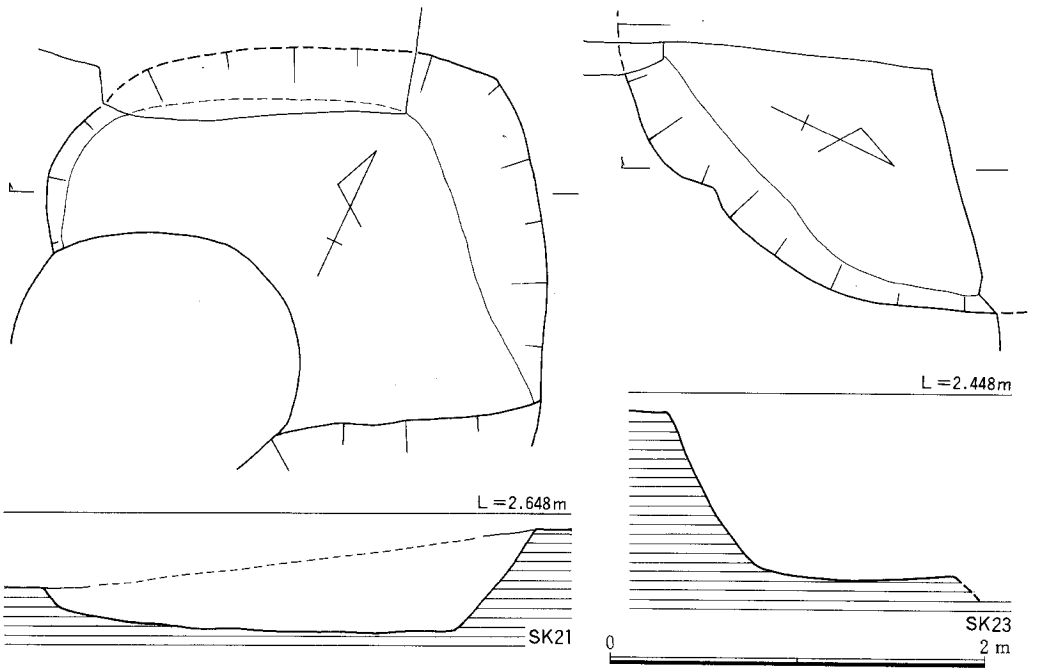


Fig.15　土壙SK21・23実測図（縮尺 1/40）

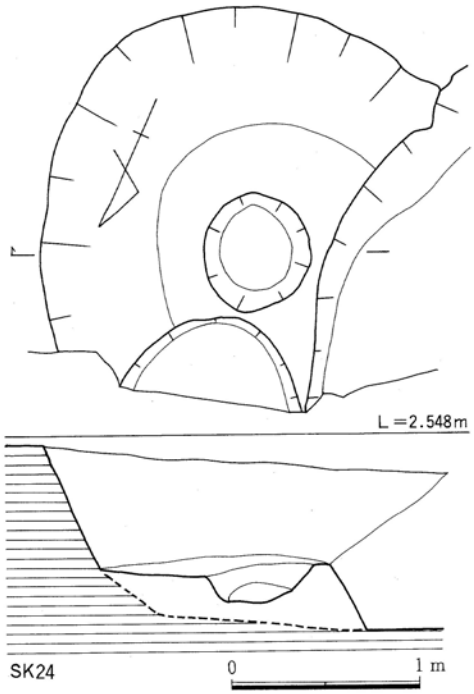


Fig. 16　土壙SK24実測図（縮尺 1/40）

土壙SK20～22、井戸SE19、SX11（南から）

土壙SK24（西から）

SK23（Fig. 15）　北西側の境界地に位置するため規模は不明である。平面形は不整円形である。深さは41.5cmを測る。

遺物は中世の土師器片などが出土した。

SK24（Fig. 16）　北側境界地に位置し、SK23に切られている。平面形は不整円形を呈し、底面に直径57cmを測るPit が存在する。井戸と考えられるところから、この小Pit は曲物を据えた位置であろう。掘り方の深さは83.5cmを測る。

遺物（Fig. 18）の内、133は土師器皿、134は坏である。135は明の染付皿で、呉笥底である。136は龍泉窯系青磁碗で、外面に線彫りの鎬蓮弁文を施す。137は瀬戸天目碗、138は瓦質土器摺鉢の底部片、139は水注の把手、140は備前焼のⅣ期摺鉢である。

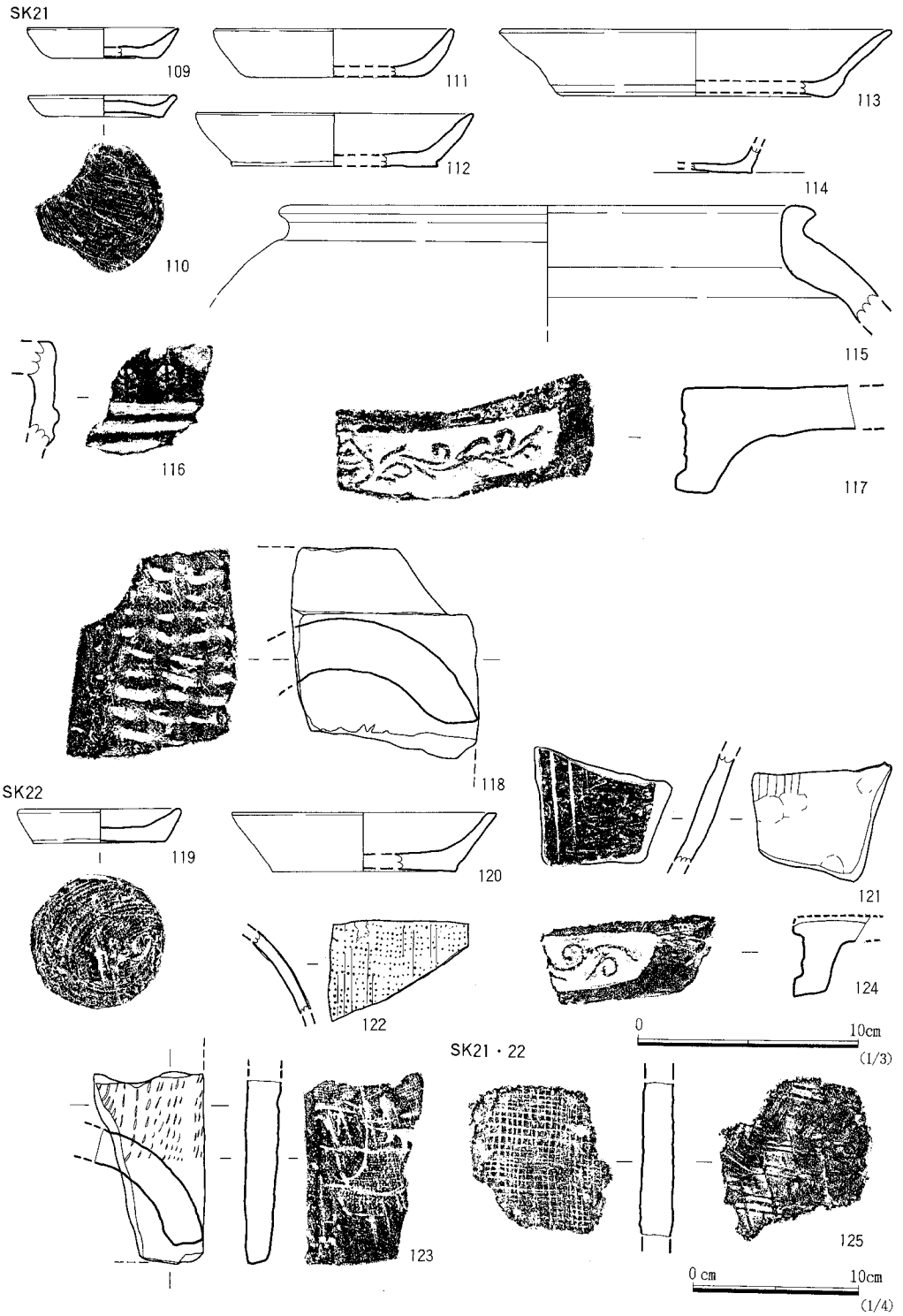


Fig.17　土壙SK21・22出土遺物実測図（縮尺 1/3・1/4）

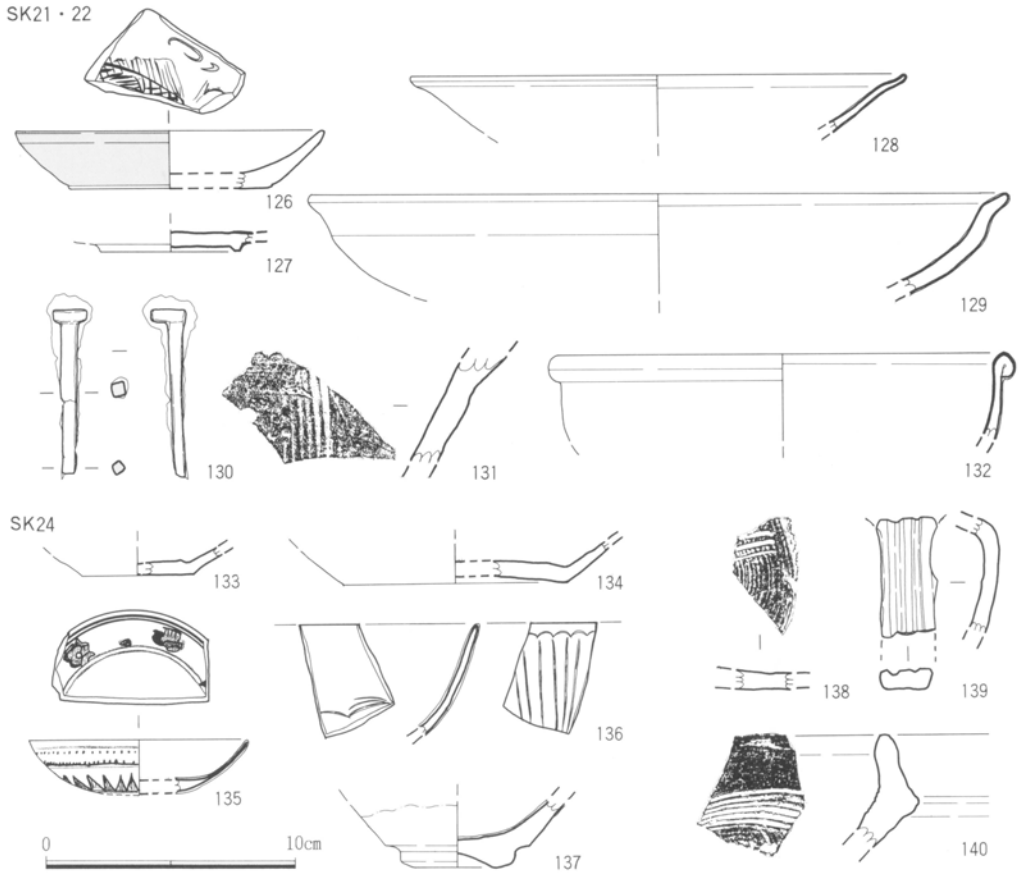
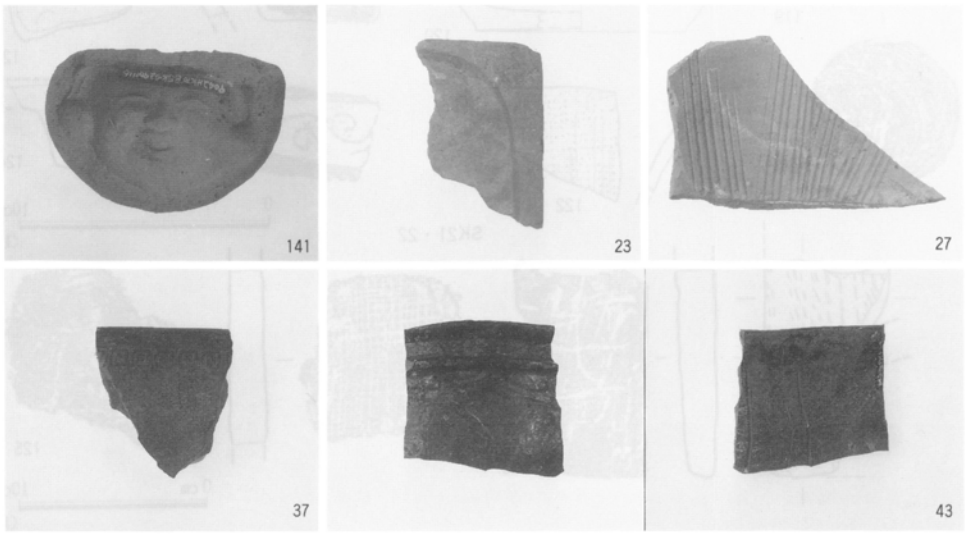
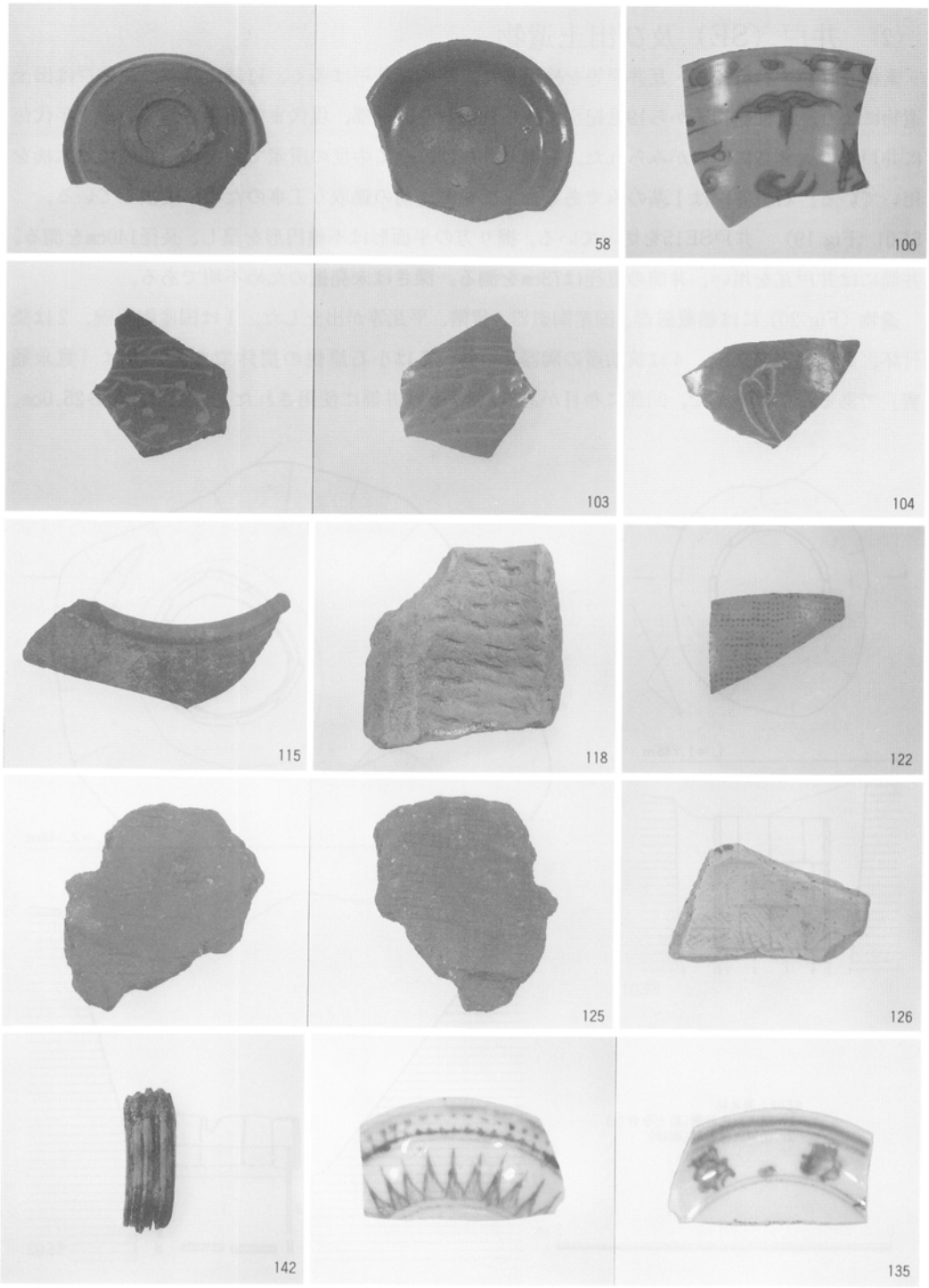


Fig.18　土壙SK21・22・24出土遺物実測図（縮尺 1/3）



土壙SK02・03・06出土遺物

※数字は実測図の番号に一致する
141はSK02出土



土壙SK10・20～22・24出土遺物

※数字は実測図の番号に
一致する
142はSK22出土

(2) 井戸（SE）及び出土遺物

素掘り井戸・石組井戸・瓦井戸等を検出した。特に瓦井戸は多く、11基に及ぶ。瓦井戸は出土遺物により、17世紀初頭から19世紀迄に作られており、一部、現代まで使用されている。年代毎に井戸瓦の大きさに違いがみられた。素掘り井戸は、全て中世の所産であるが、井筒には木桶を用いている。石組井戸は１基のみである。上部を調査前の鋤取り工事のために破損している。

SE01（Fig.19） 井戸SE15を切っている。掘り方の平面形は不整円形を呈し、長径140cmを測る。井筒には井戸瓦を用い、井筒の直径は73cmを測る。深さは未発掘のため不明である。

遺物（Fig.20）には舶載磁器、国産陶磁器、貨幣、平瓦等が出土した。１は国産陶器碗、２は染付坏、３は同安窯系碗、４は筑前産の陶器片口鉢、５は小石原焼の摺鉢である。６は「寛永通寶」である。７は平瓦で、凹部に布目がある。８・９は井筒に使用された井戸瓦で、長さ25.0cm、

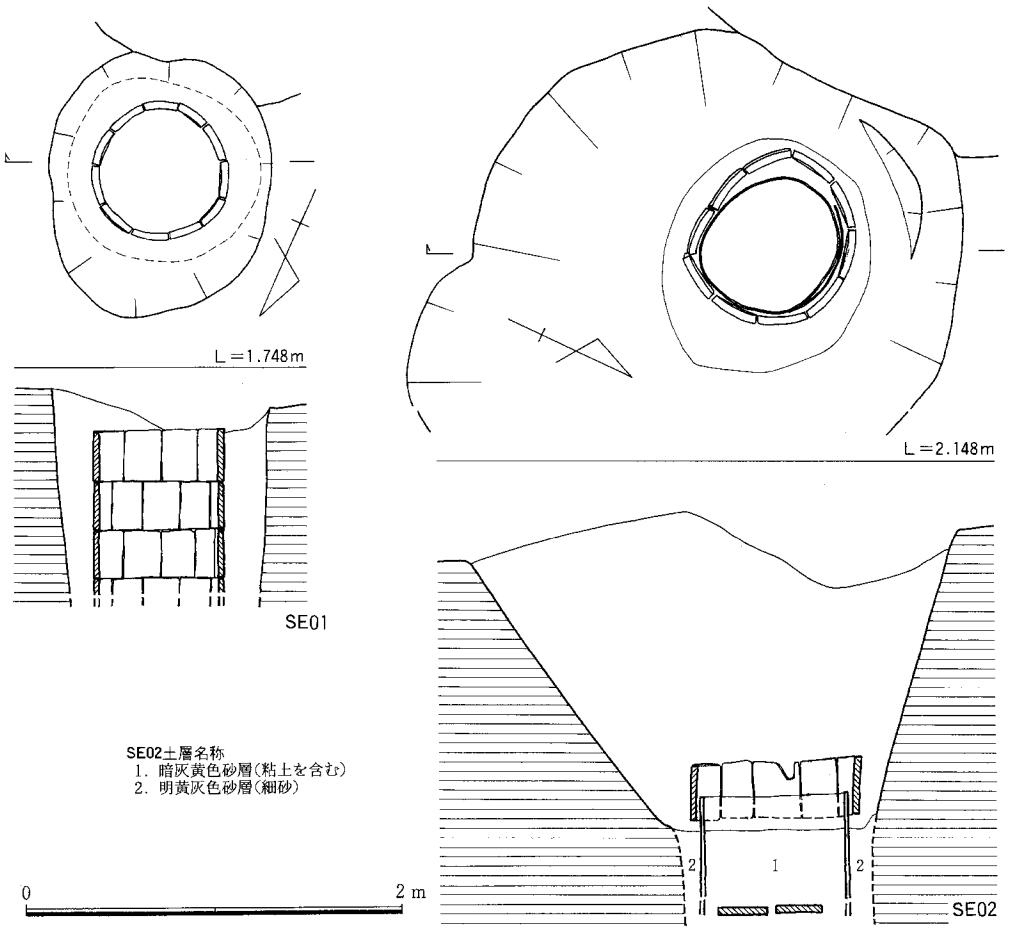


Fig.19 井戸SE01・02実測図（縮尺 1/40）

井戸SE02（南から）

井戸SE02土層状態（東から）

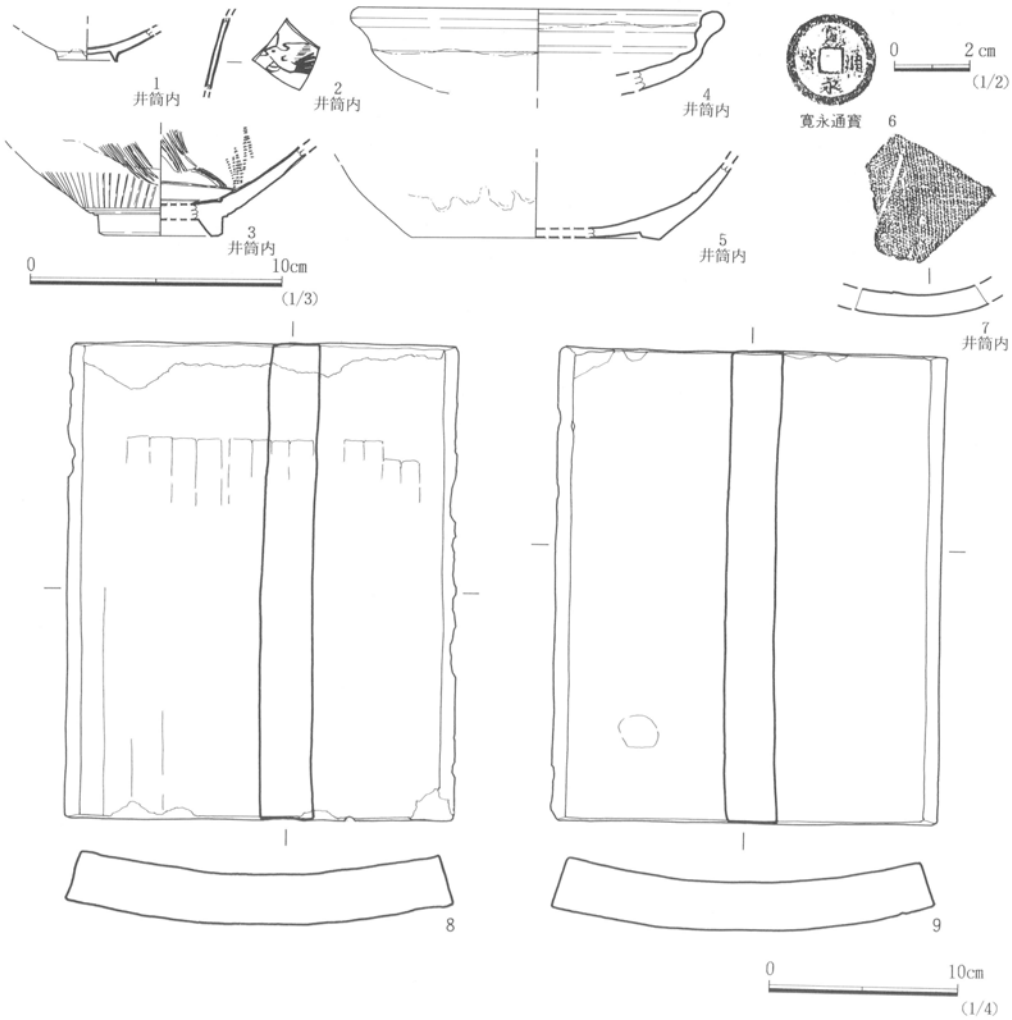
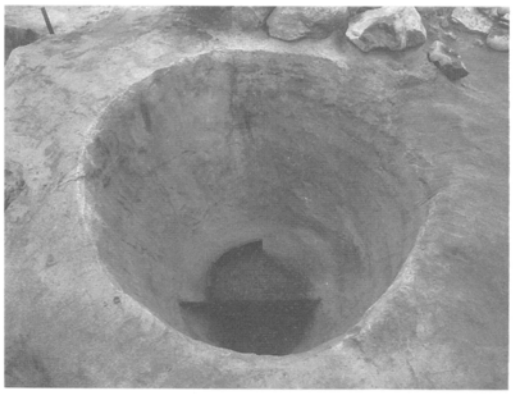
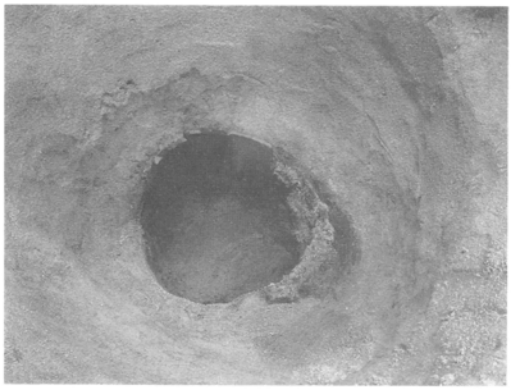


Fig.20　井戸SE01出土遺物実測図（縮尺 1/2・1/3・1/4）

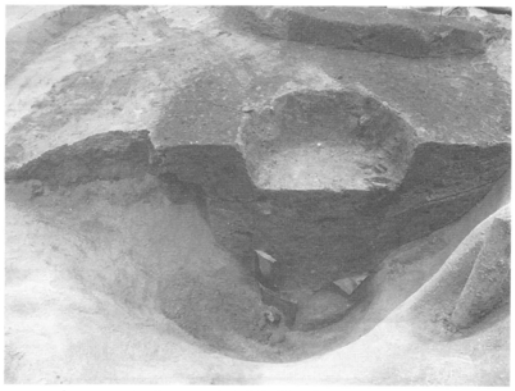


井戸SE03（南から）

井戸SE03底面（南から）



井戸SE04（東から）



井戸SE04土層状態（西から）

幅20.5cm、厚さ2.8cmを測る。

SE02（Fig.19）　掘り方の平面形は不整円形を呈し、長径260cmを測る。井筒は井戸瓦を用いるが、底面には木桶を据えている。井戸瓦は最下部の一段目のみ遺存する。井筒の直径は約90cm、桶の直径は74cm、深さ143cm以上を測る。

遺物（Fig.23～26）は土師器坏・皿、唐津焼、伊万里焼、瀬戸焼、備前焼、土師質土器、瓦質土器、瓦類、砥石、鉄製品が出土した。11～59は掘り方より出土した。11～18は土師器の皿で、いずれも糸切り底である。19・20は糸切りの土師器坏である。21～33は陶磁器の皿で、28は明の白磁皿、22～26は唐津焼皿で、22は溝縁皿、24は絵唐津である。25の内底には胎土目痕がある。27は内山窯の銅緑釉皿、29は肥前青磁釉皿、30は舶載の白磁皿である。31・33は肥前染付皿、34は染付小坏である。35～44は陶磁器で、35は龍泉窯系青磁碗、36は白磁碗、37は肥前半磁器碗、38は肥前白磁碗、39は青磁香炉、40は肥前青白磁碗である。40の内底には目痕がある。41～44は陶器碗で、41は肥前陶器碗、42は上野焼、43は天目、44は瀬戸天目である。45～49は陶器摺鉢で、45・46は備前焼、47～49は唐津焼である。50は東播系須恵質鉢、51は瓦質土器摺鉢、52は土師質土器鉢、53・54は国産陶器甕、57は唐津焼壺、55・56は朝鮮系の須恵質土器、58・59は瓦質土器

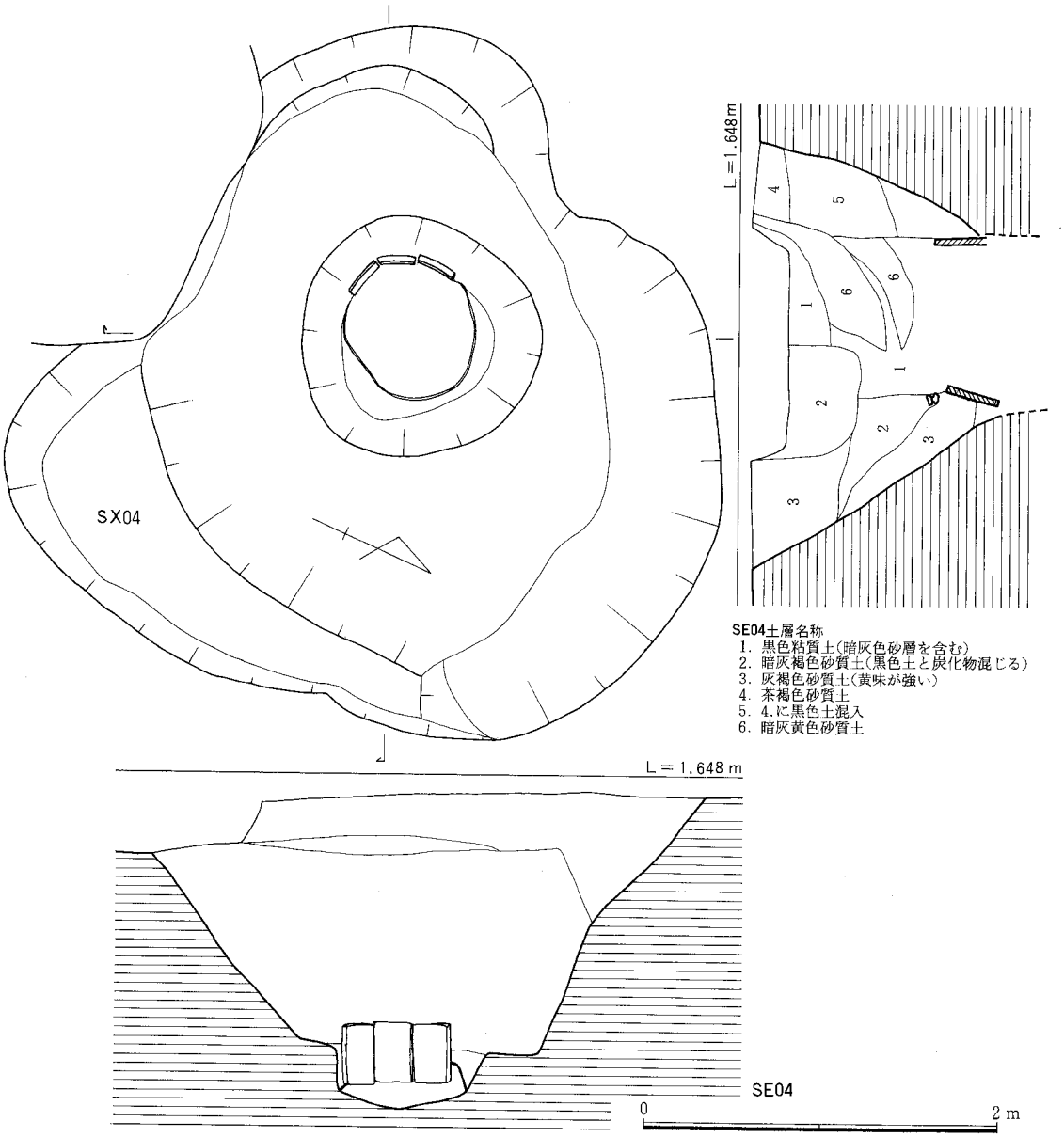


Fig.21　井戸SE04実測図（縮尺 1/40）

の火舎である。59の外面には雷文のスタンプがある。

60～82は井筒内から出土した。60は糸切りの土師器皿、61・62は土師器坏、63は国産の皿、64・65は香炉で、64は染付、65は小石原産である。66～68は碗で、66は京焼、67は染付、68は唐津焼である。69～73は摺鉢であるが、69は高取焼、70～72は備前焼、73は瓦質土器である。75・76は瓦質土器で、75は火舎で、76は大甕片であろう。77・78は鉄製品で、78は釘である。79は砥

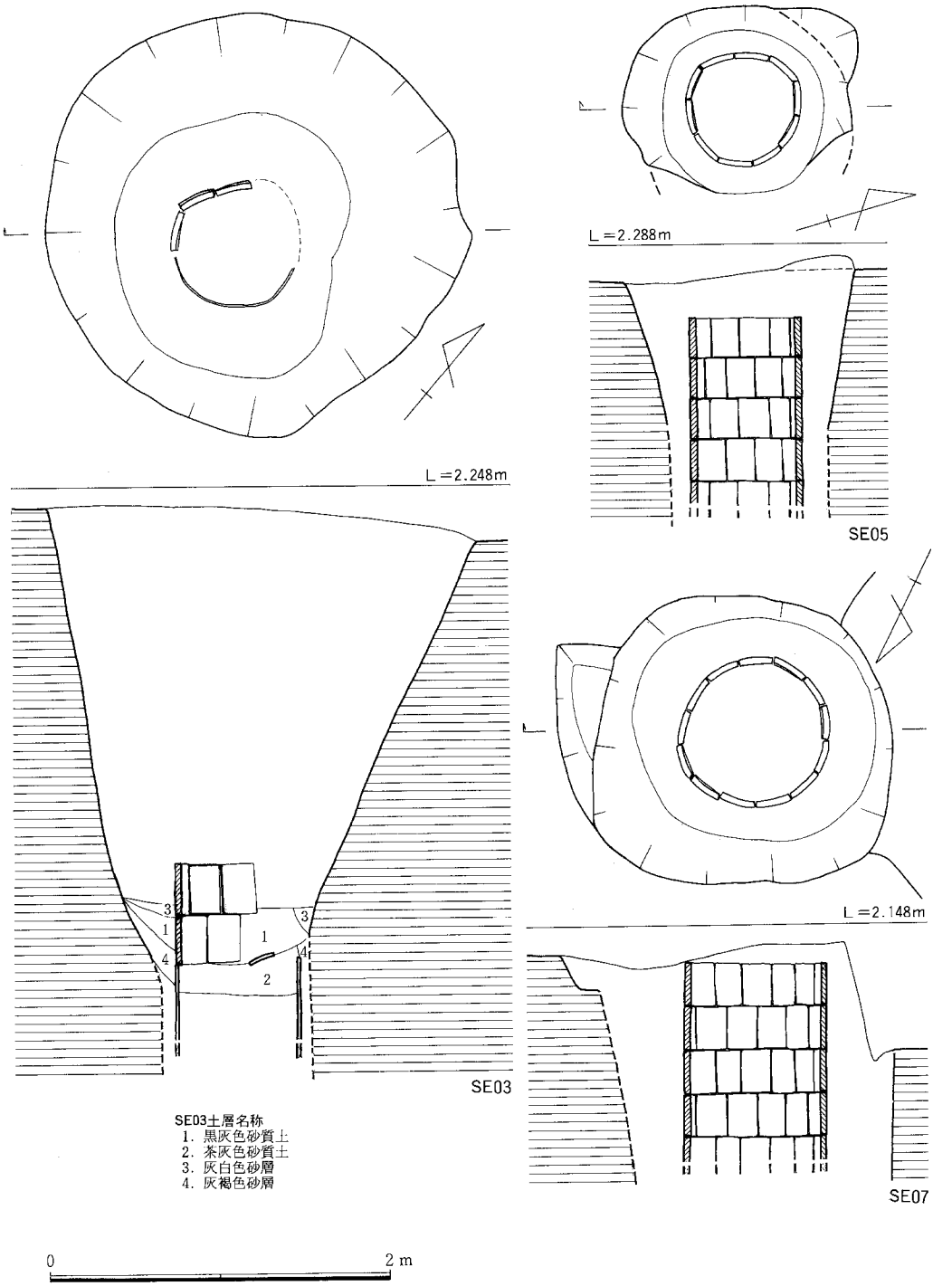


Fig.22　井戸SE03・05・07実測図（縮尺 1/40）

石、80は平瓦である。81・82の井戸瓦は長さ29.8cm、幅25.8cm、厚さ3.0cmを測る。

SE03（Fig.22）　掘り方の平面形は不整円形を呈する。瓦井戸である。掘り方の深さは約287cm以上で、井筒の直径は75cmを測る。井筒の瓦はほとんど抜き取られており、下から2段分しか遺存していない。底部には木桶を据えており、直径70cm、高さ20cm以上を測る。

遺物（Fig.27・28）は土師器坏・皿、肥前系陶磁器、舶載陶器、備前焼、瓦質土器、瓦類が出土した。16～17世紀の所産と考えられる。83・87・88・90・92～94・100・102・103・105～107は井筒内出土、他は掘り方からの出土である。83～85は土師器の糸切り皿、87・88は土師器坏、86は舶載白磁皿、89は唐津焼皿、90は肥前染付碗、91は上野焼藁灰釉の碗、92は李朝陶器碗、93は唐津焼溝縁皿、94は舶載陶器盤である。95・96は薄手の陶器で、内面に青海波・同心円状の叩きを施す。胎土は暗褐色を呈しており、李朝陶器と考えられる。97～99は瓦質土器で、97は火舎、98・99は摺鉢である。100は唐津系摺鉢で、口縁部内外面に施釉する。101は炻器系の甕で、備前焼と考えられる。102は鞴の羽口である。103・104の丸瓦は凸面に縄目叩きがある。105は平瓦、106・107は井戸瓦であるが、この井戸瓦の長さは31.0cm、幅24.7cm、厚さ2.9cmを測る。

SE04（Fig.21）　井戸SE02に切られる。掘り方の平面形は不整隅丸長方形を呈し、長径336cm、深さ176cmを測る。井筒の井戸瓦は下部の一段のみ遺存しており、底には木桶の痕跡がある。桶の直径は約74cmを測る。

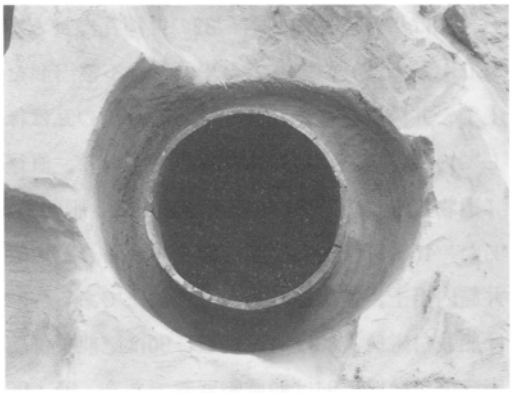
遺物（Fig.29・30）には土師器坏・皿、李朝陶磁器、明染付、唐津焼、高取焼、瓦質土器、瓦類、鉄製品、石製品、坩堝がある。16世紀末～17世紀初頭の所産であろう。108～110・124・131・133・134・137・139・140は掘り方からの出土で、他は井筒からの出土である。108・109は土師器の糸切り皿、110～114は土師器の糸切りの坏、115は龍泉窯系の蓮弁文青磁碗、116・117は李朝陶磁器で、117は白磁である。118は明染付皿、119は唐津焼碗、120は上野・高取系の碗、121～123は唐津焼皿で、121・123は絵唐津である。124～127は陶器の片口で、124は唐津焼、126・127は筑前産であろう。128は陶器の破片である。129は土師質土器の摺鉢、130～133は瓦質土器で、130は摺鉢、131～133は火舎である。133の外面には梅花文の刻印がある。134は坩堝、135は石製硯、136は石臼の受皿の部分である。137・138は用途不明の鉄製品、139・140は軒平瓦、141・142は井戸瓦である。軒平瓦139の中心飾りには三葉文を用いている。井戸瓦の大きさは長さ30.8cm、幅24.5cm、厚さ3.2cmを測り、SE03の井筒に用いている井戸瓦と同一規格である。

SE05（Fig.22）　瓦井戸である。井戸SE12を切っている。掘り方径は小さく、長径134cmを測る。平面形は不整円形を呈する。井筒は直径68cm、深さは98cm以上を測る。完全に発掘していないため、井戸瓦のみ採取した。

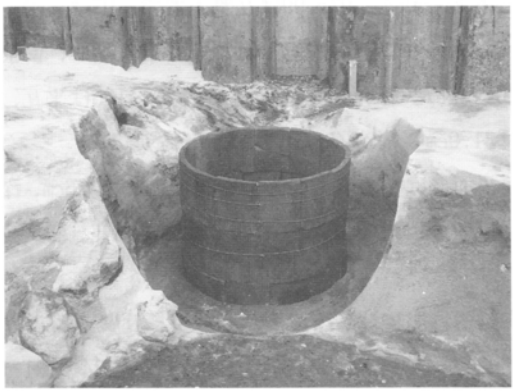
遺物（Fig.31）には143・144の井戸瓦がある。大きさは長さ24.9cm、幅20.6cm、厚さ2.8cmを測り、SE03・04出土の井戸瓦に比べ小型である。

SE07（Fig.22）　調査区の東側境界地に位置する。瓦井戸SE14を切っている。瓦井戸で、掘り方

井戸SE05（東から）

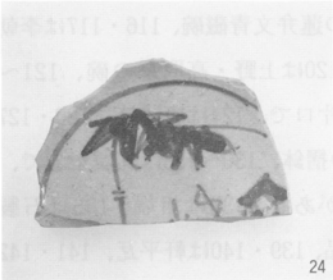


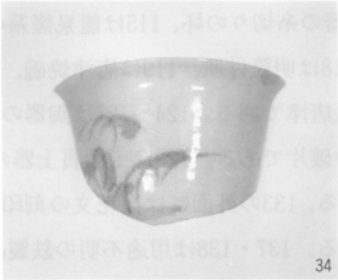
井戸SE06（北から）

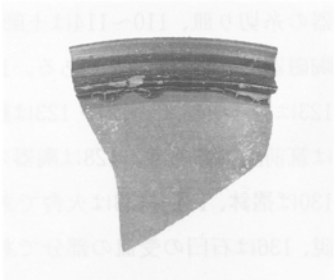


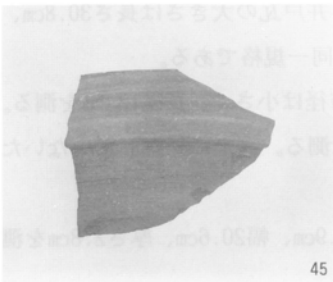
井戸SE07（西から）

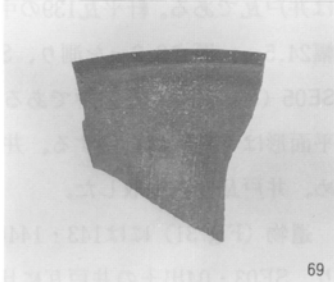
井戸SE05・12（南から）











井戸SE02出土遺物

※数字は実測図の番号に一致する。

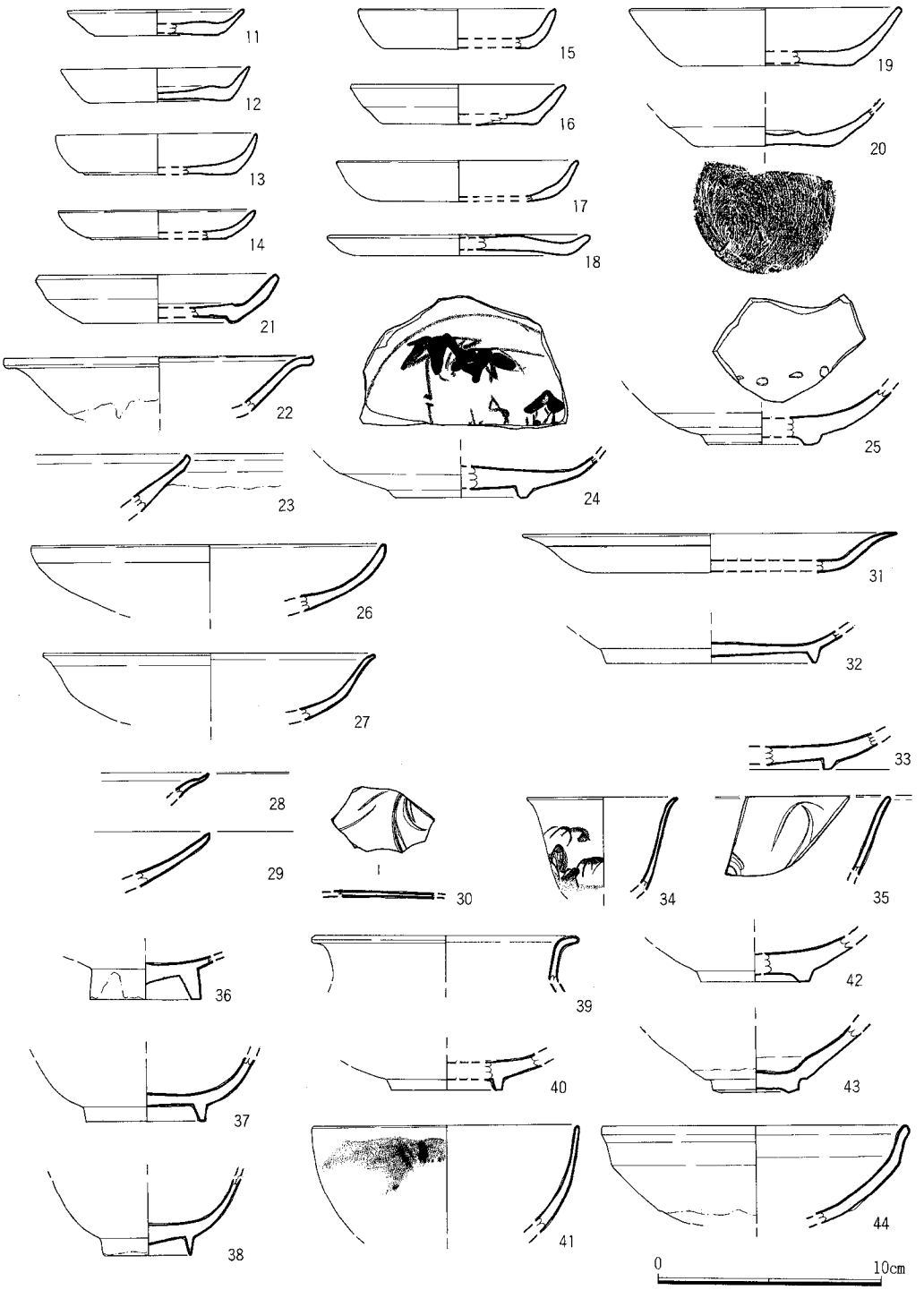


Fig.23　井戸SE02掘り方出土遺物実測図 ①（縮尺 1/3）

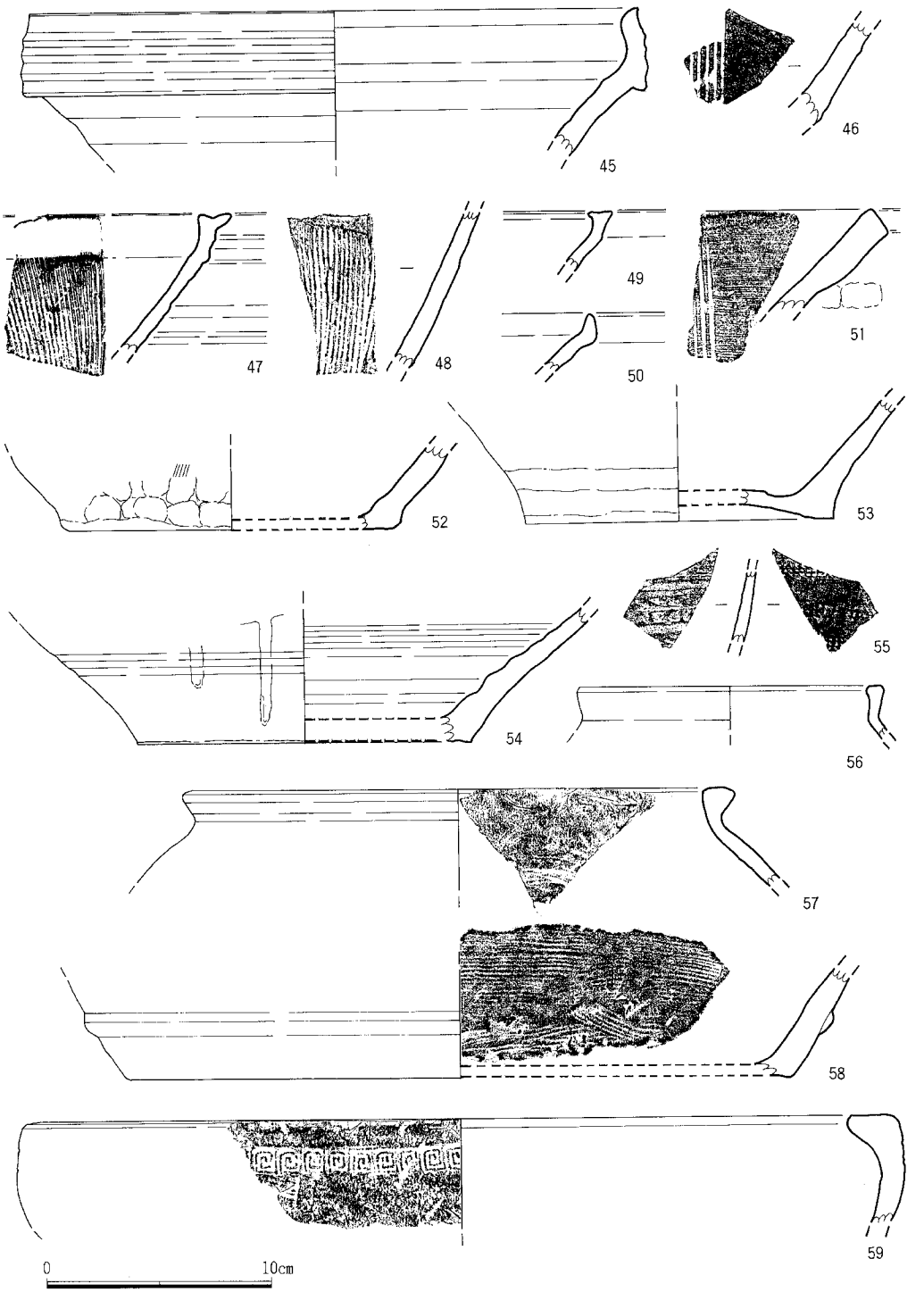


Fig.24　井戸SE02掘り方出土遺物実測図 ②（縮尺 1/3）

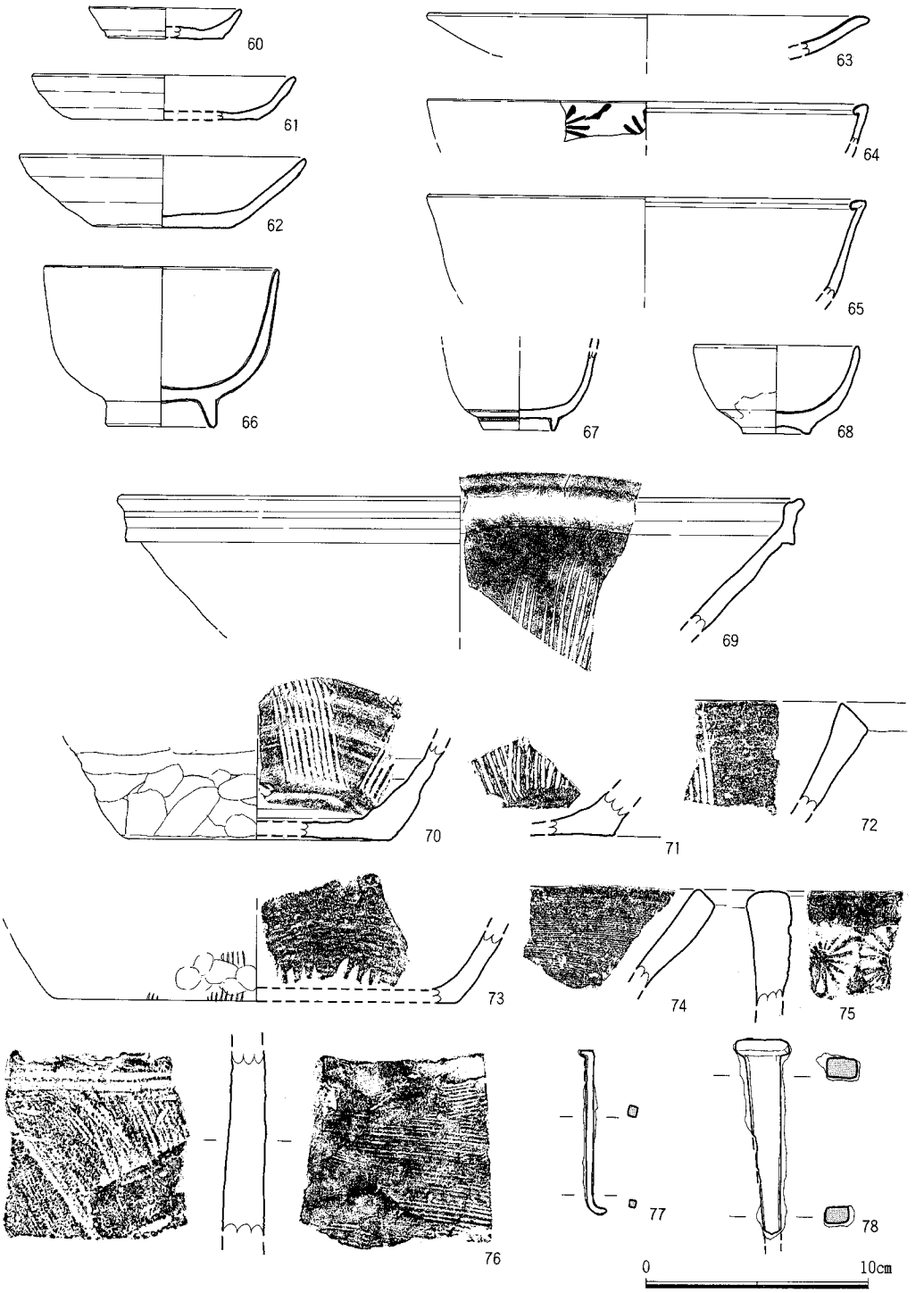


Fig.25　井戸SE02井筒出土遺物実測図 ③（縮尺 1/3）

79(1/3)
掘り方

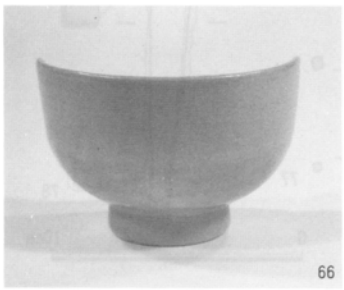
80
掘り方

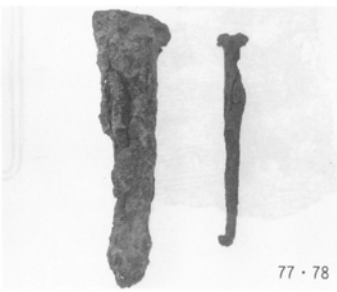
0 20cm
(1/4)

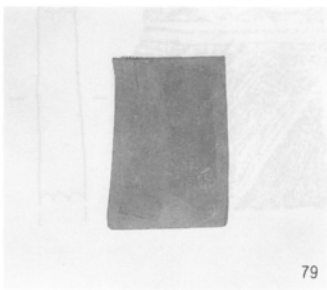
81

82

Fig.26　井戸SE02出土遺物実測図 ④（縮尺 1/3・1/4）







SE02出土遺物

※数字は実測図の番号に一致する。

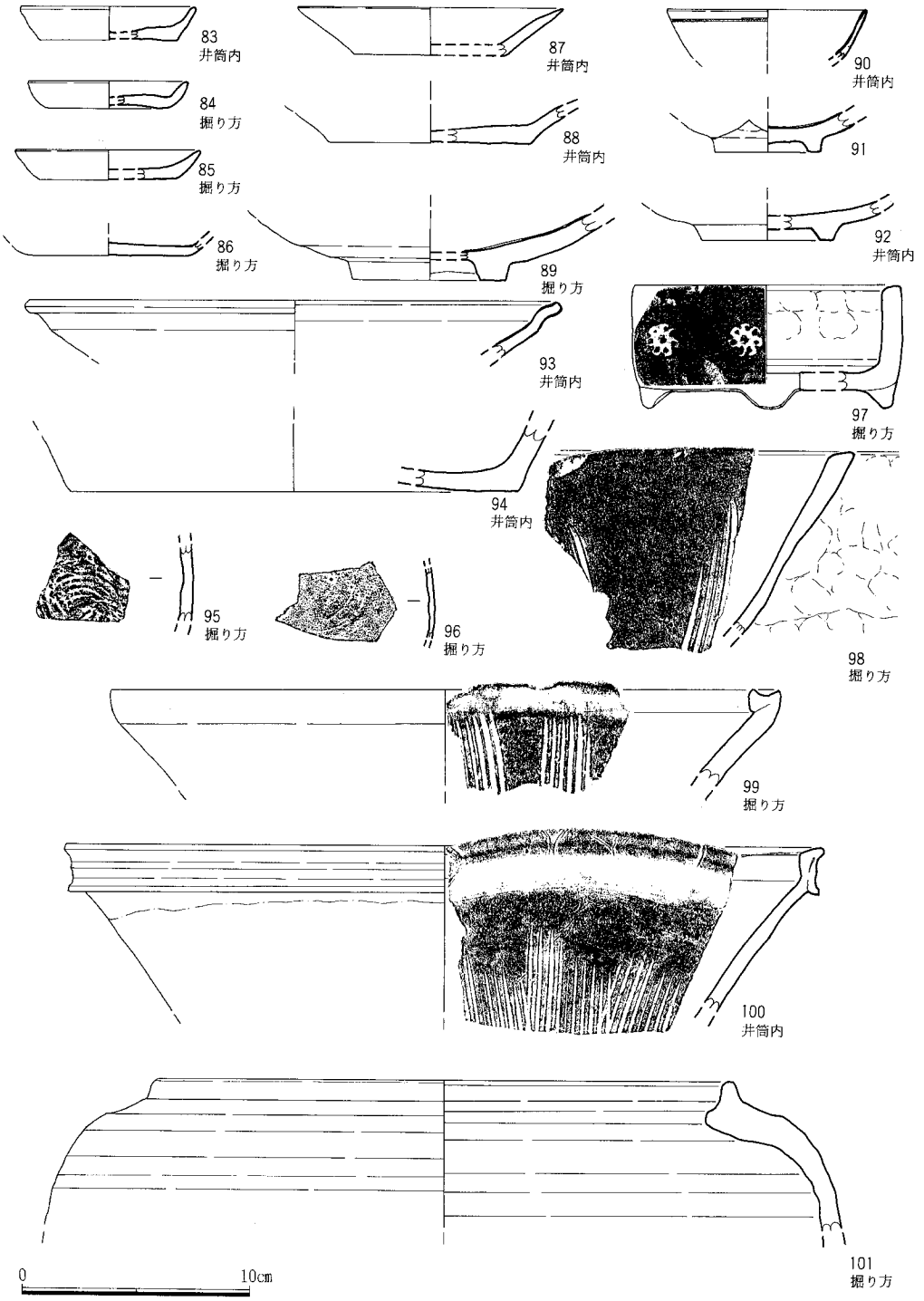


Fig.27　井戸SE03出土遺物実測図 ①（縮尺 1/3）

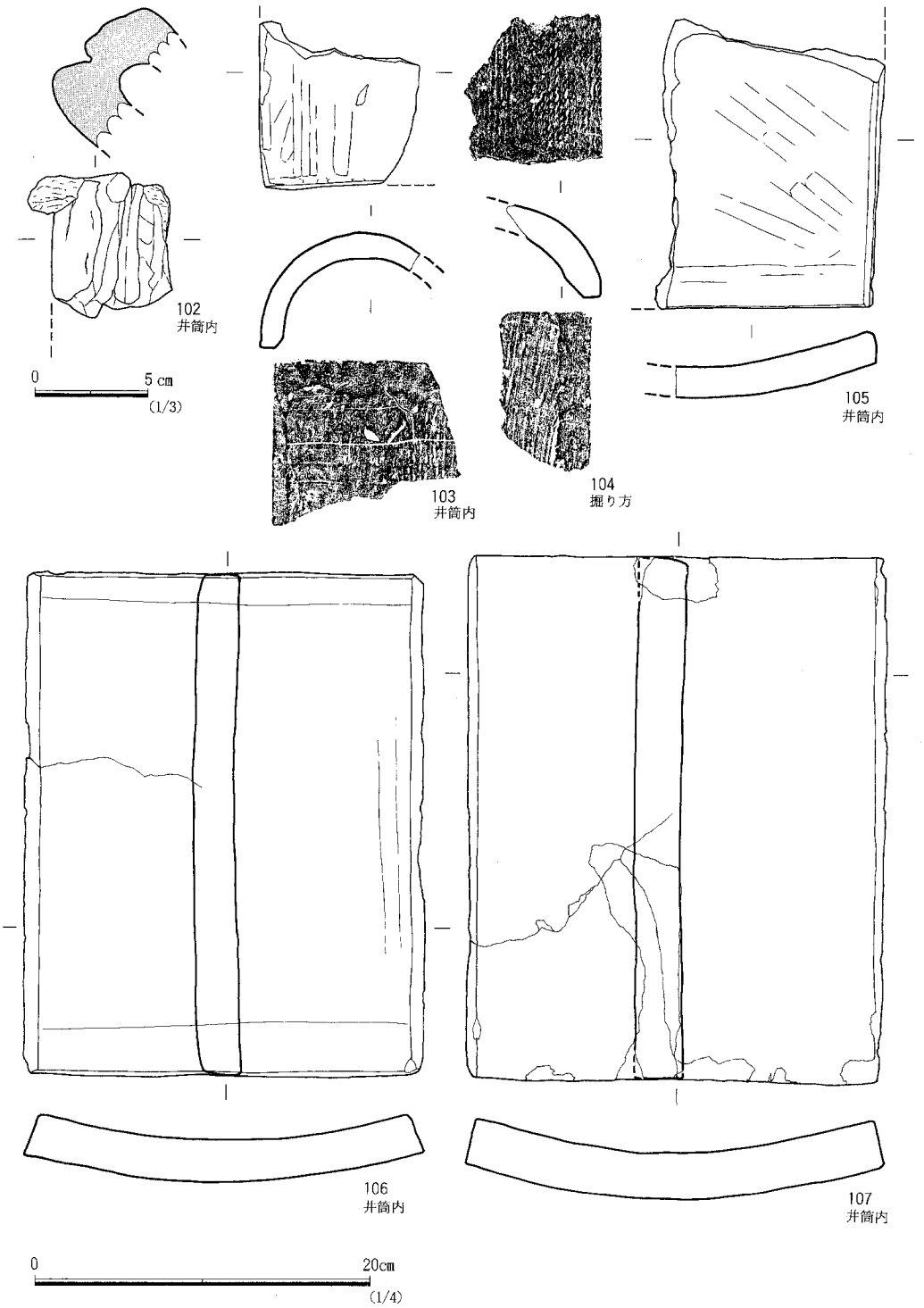


Fig.28　井戸SE03出土遺物実測図 ②（縮尺 1/3・1/4）

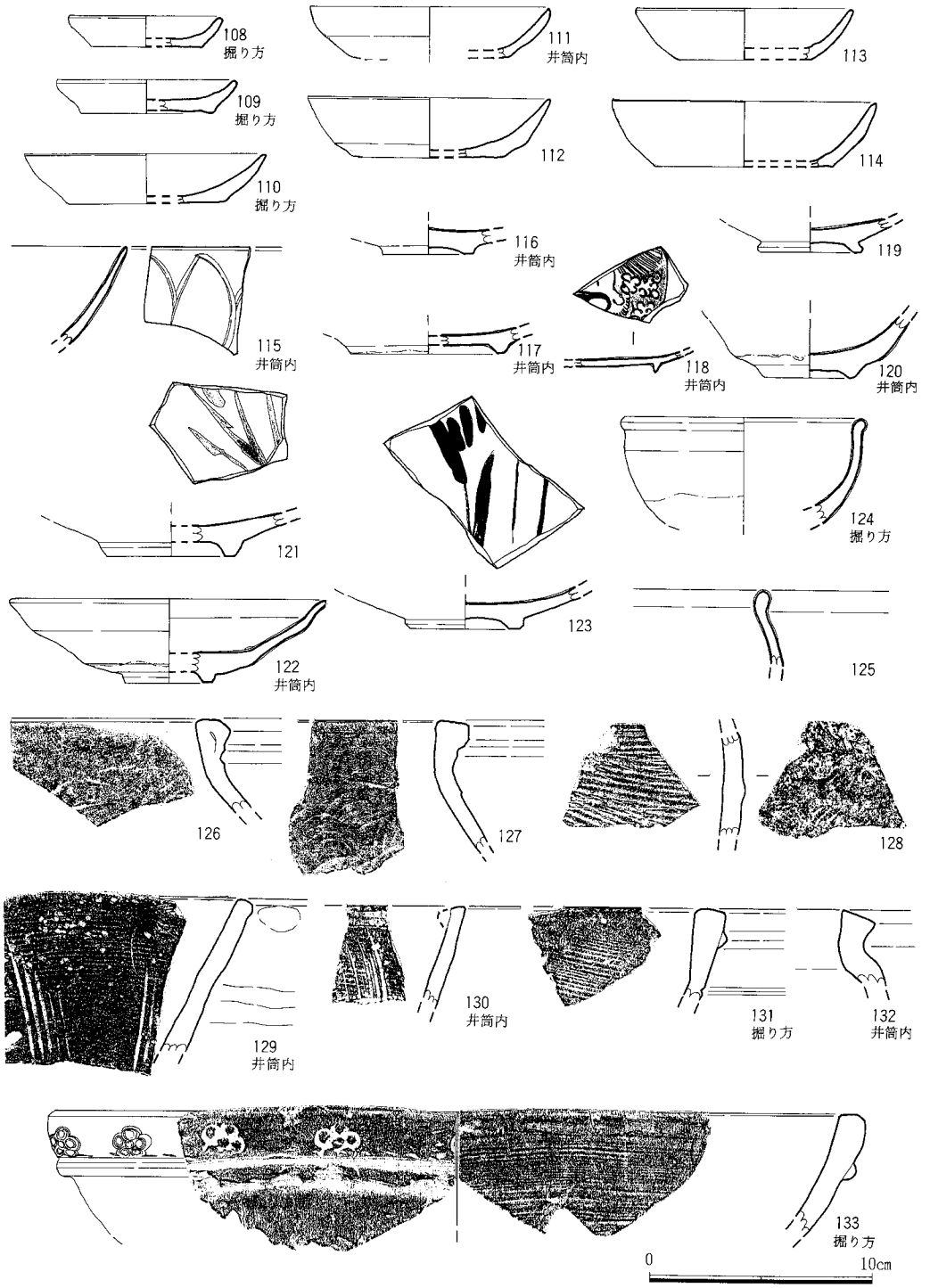


Fig.29　井戸SE04出土遺物実測図 ①（縮尺 1/3）

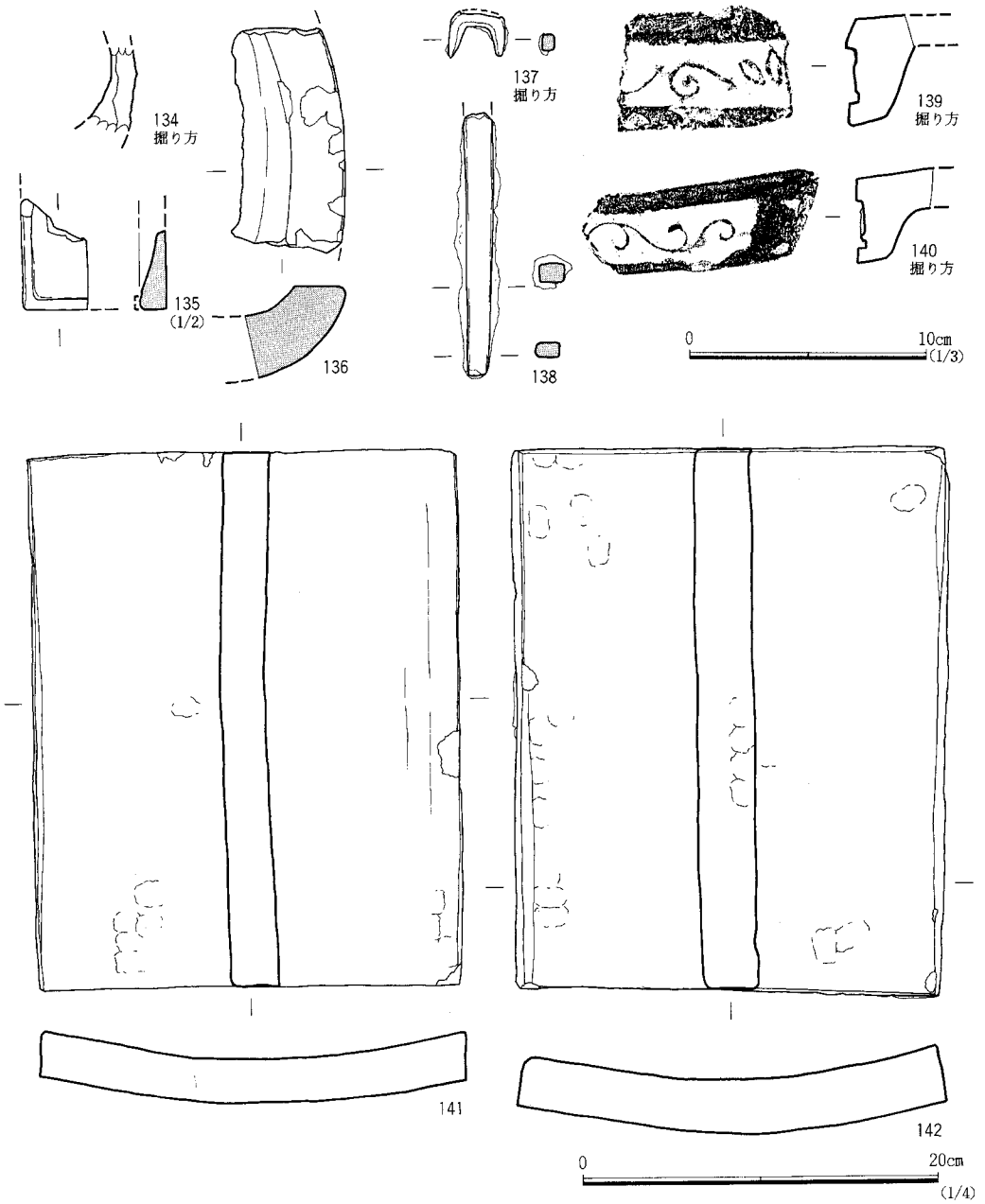
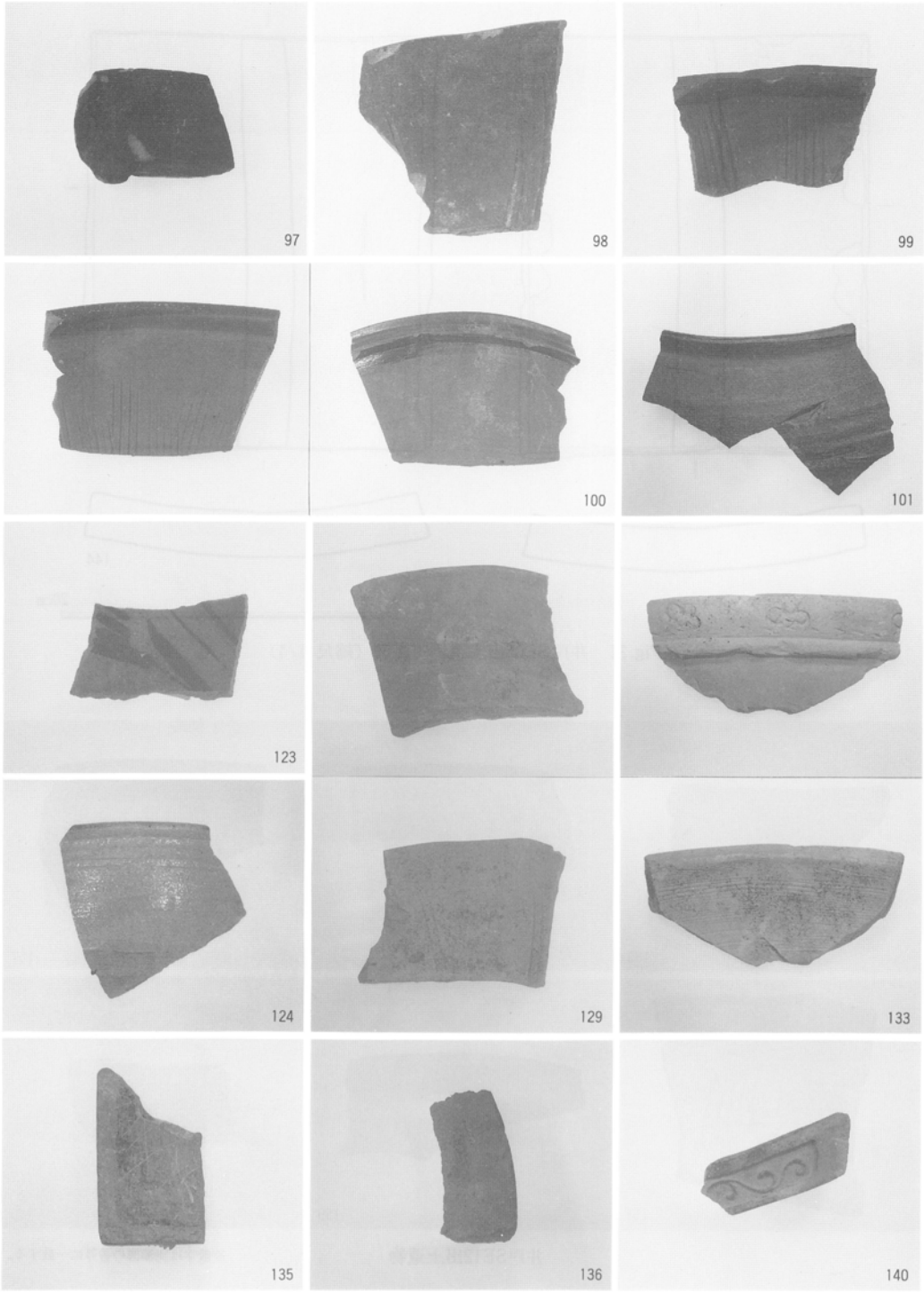


Fig.30　井戸SE04出土遺物実測図 ②（縮尺 1/2・1/3・1/4）

は不整円形を呈している。井筒は井戸瓦を用いており、直径84cmを測る。深さは5段目まで確認した。

遺物には近世陶磁器類が出土したが、図示し得ない。



井戸SE03・04出土遺物

※数字は実測図の番号と一致する。

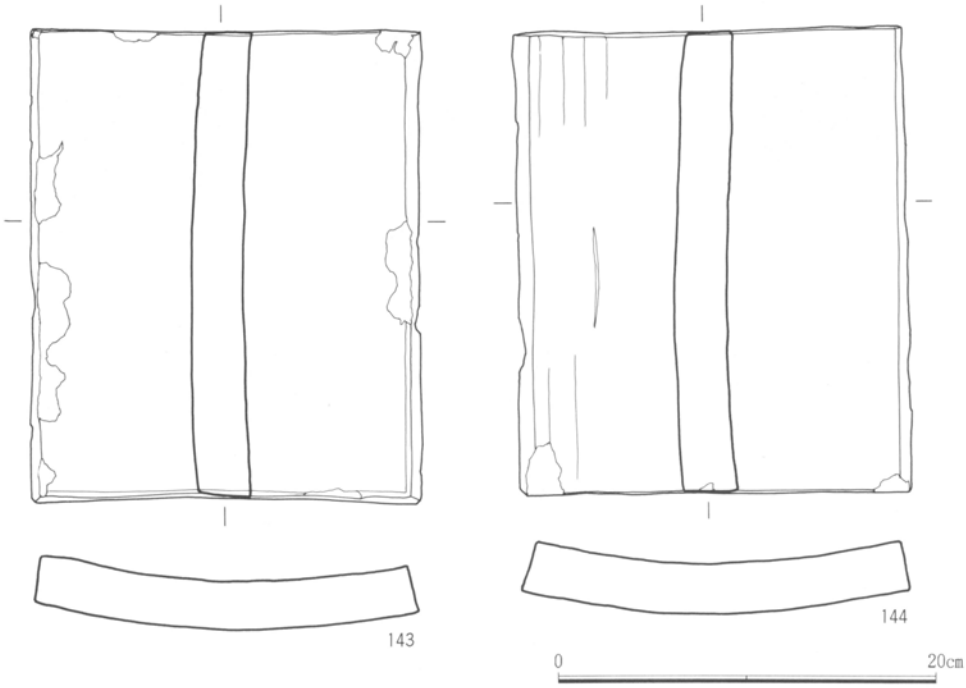
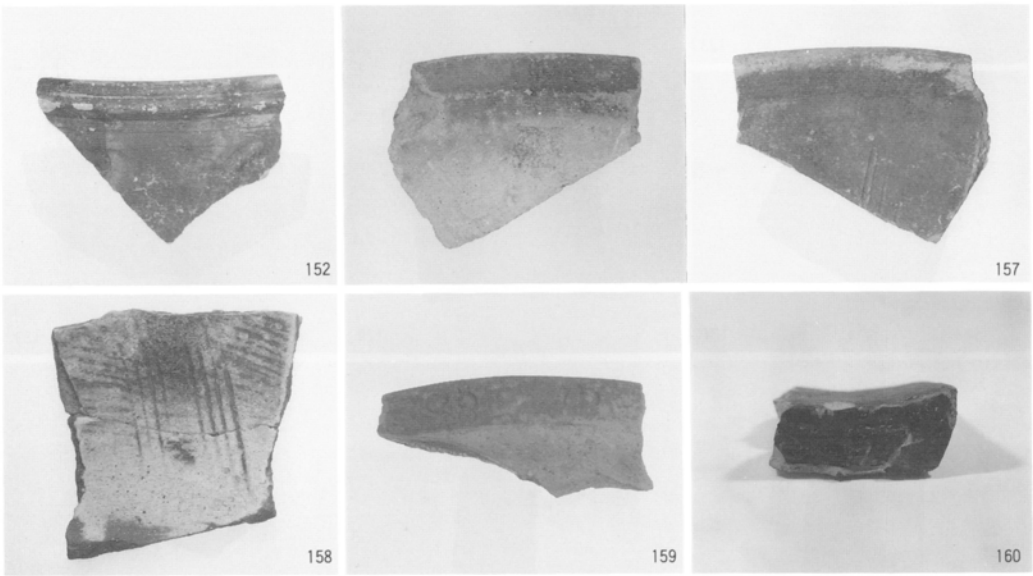


Fig.31　井戸SE05出土遺物実測図（縮尺 1/4）



井戸SE12出土遺物　　※数字は実測図の番号に一致する。

SE12（Fig.32）　瓦井戸である。井戸SE05に切られる。掘り方の平面形は不整円形を呈し、長径242cmを測る。井筒の瓦は5段以上遺存しており、直径85cm、深さ87cm以上を測る。

遺物（Fig.33・34）は土師器坏、肥前系陶磁器、瀬戸焼、高取焼、瓦質土器、瓦類、貨幣、土錘等がある。145～147は土師器坏で、145・146は糸切り底である。148は青白磁で、内底は釉ハギがある。149・150は陶器碗で、150は唐津焼である。151は瀬戸焼の波状口縁皿である。152～155は陶器で、152は高取系片口、153も同じく高取系摺鉢である。156～159は瓦質土器で、156・157は摺鉢、159は火舎である。159は備前焼のⅤ期摺鉢の模倣と考えられる。160は軒平瓦、162は「開元通寶」、163は土錘である。164は井戸瓦である。161は茶臼の破片で、上面に擦り目がある。

SE13（Fig.5）　素掘り井戸と考えられる。掘り方の平面形は不整円形を呈し、長径180cm、深さ

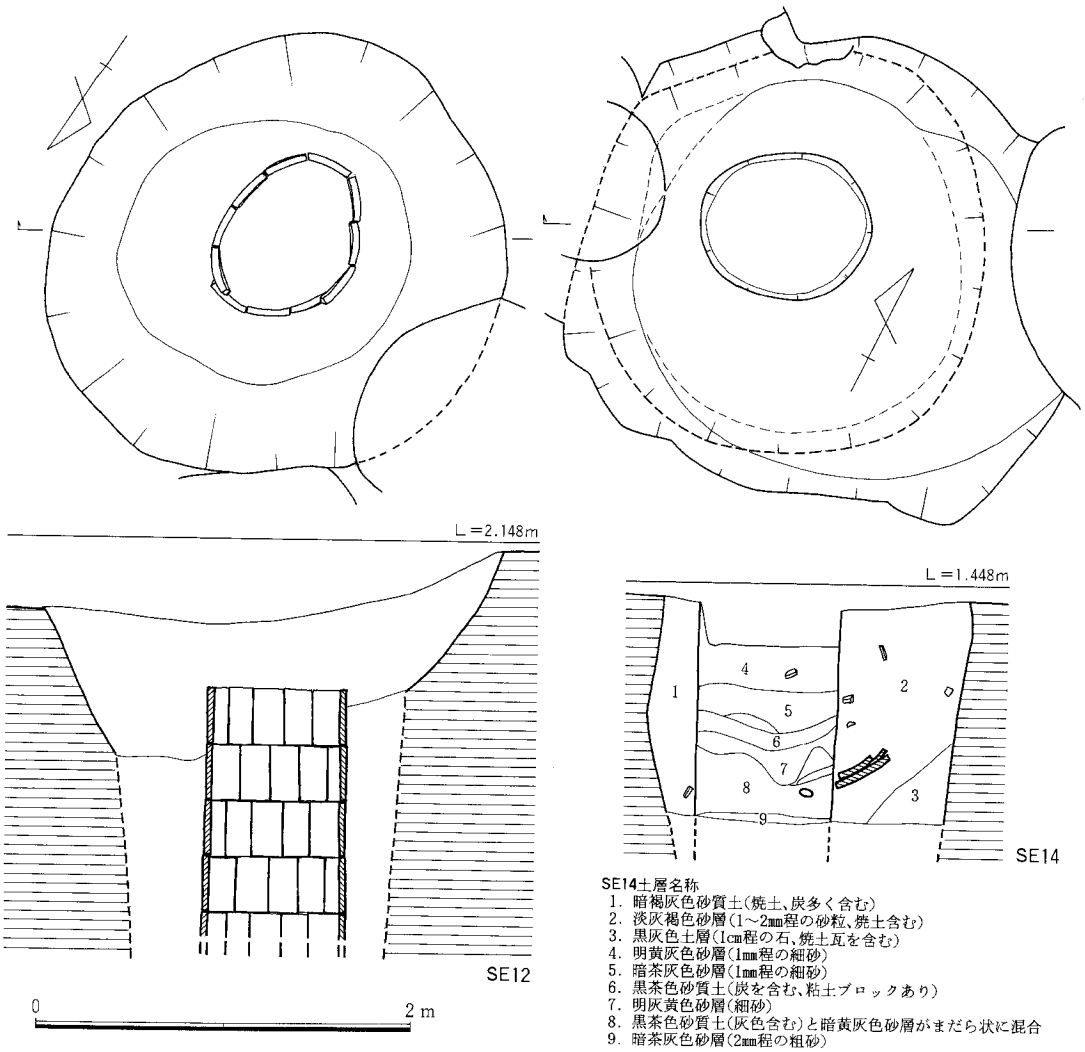


Fig.32　井戸SE12・14実測図（縮尺 1/40）

26cmを測る。

遺物（Fig.34・35）は土師器皿・坏、舶載青磁、肥前系陶磁器、土師質土器、瓦類が出土した。167～169は土師器の糸切り皿、170は土師器坏、171は青磁碗、172は肥前染付皿で、内底に菊枝文がある。173・174は肥前染付碗、175は陶器甕で、内面に青海波の叩き痕がある。176は土師質土器の摺鉢である。166は井戸瓦で、165は丸瓦である。

SE14（Fig.32）　瓦井戸である。SE07に切られ、SX16を切っている。掘り方は大きく、平面形は不整円形を呈する。長径220cmを測る。瓦は抜き取られているが、土層観察により、井筒の直径は75cmを測る。

遺物（Fig.35～37）は土師器皿、舶載磁器、肥前系陶磁器、関西系陶器、土師質土器、瓦類、鉄製品、青銅製品、貨幣が出土した。18世紀代の遺物を中心としている。178は舶載白磁碗、179～181は龍泉窯系青磁碗、182・183は肥前染付碗、187は肥前染付の蓋物がある。184は唐津碗、185・186・188・189は陶器碗で、186・189は京焼系である。190～194は皿で、190は明の染付皿、191～193は肥前染付皿で、194は唐津焼皿である。195・197は陶器の片口である。195は肥前、197は筑

井戸SE12（南から）

井戸SE13（南から）

井戸SE14（東から）

井戸SE14（南から）

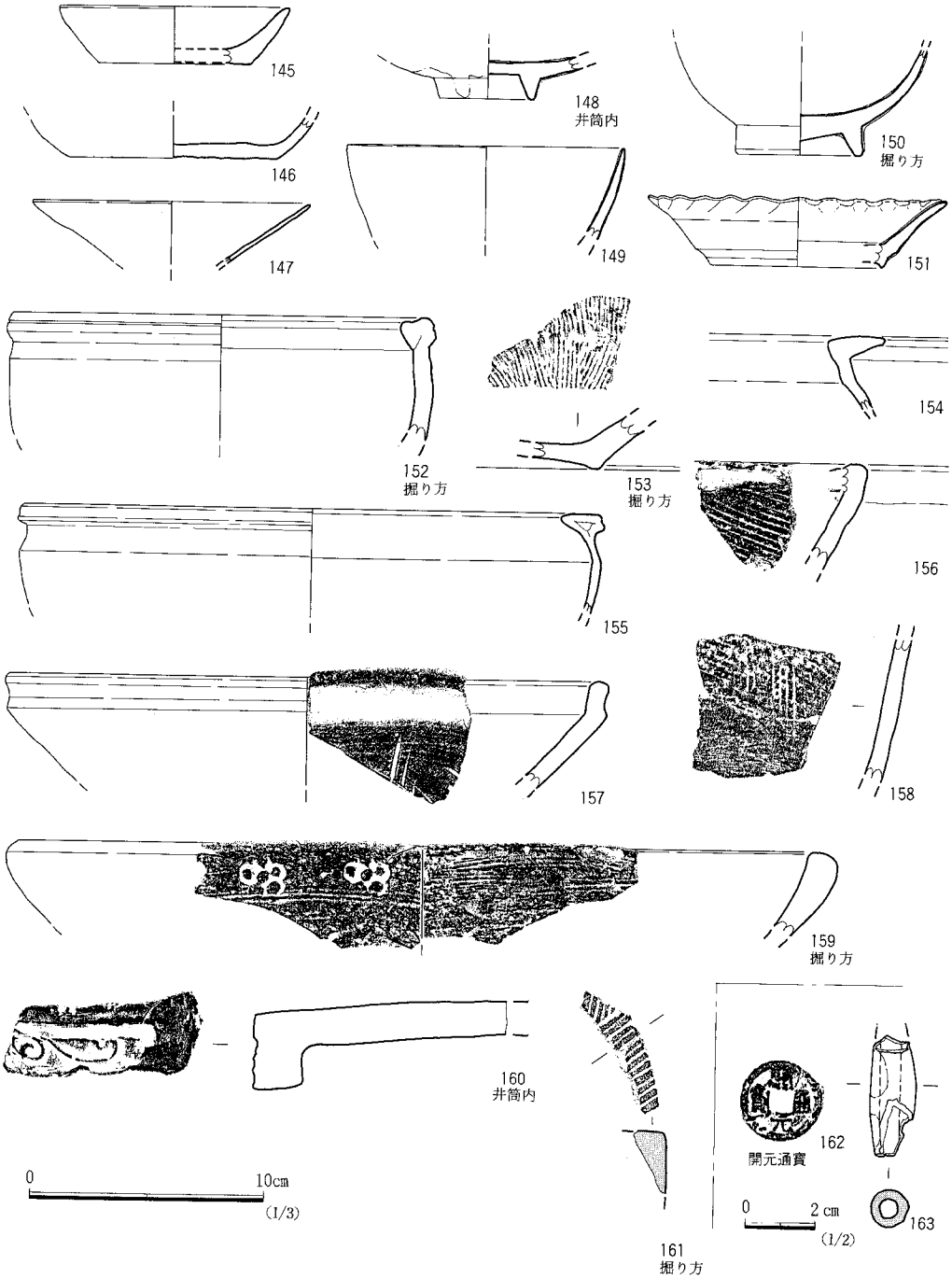


Fig.33　井戸SE12出土遺物実測図（縮尺 1/2・1/3）

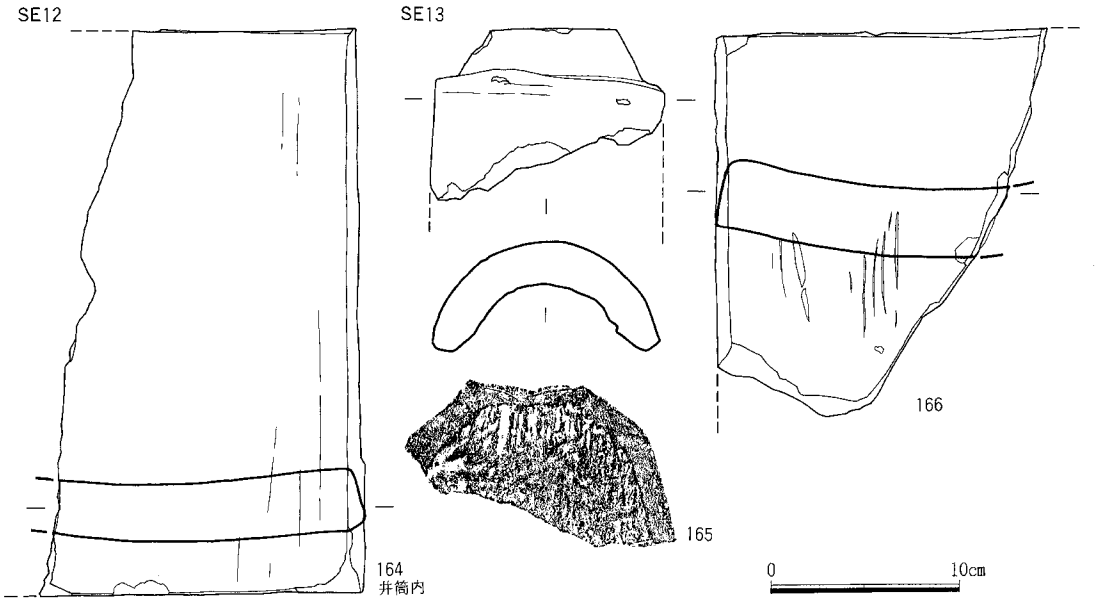


Fig.34　井戸SE12・13出土遺物実測図（縮尺 1/4）

前産であろう。196は灯明具の秉燭、199・203は国産陶器摺鉢である。198は青磁香炉である。200は土師質土器の焙烙、201・202・205は瓦質土器で、202は火舎である。204・206は体部が２重壁の構造になった素焼きの七輪である。207は鉄製釘、208は青銅製煙管の吸口部分、209は「祥符通寶」、210は「寛永通寶」、211・212は井戸瓦である。井戸瓦の大きさは長さ25.2cm、幅20.5cm、厚さ2.8cmを測る。SE05の井戸瓦と同一の規格である。

SE15（Fig.38）　SE16を切っている。SE02、SX19などと切り合うため、掘り方の遺存状態は悪いが、平面形は不整円形であろう。直径約344cm、深さ190cmを測る。壙底は平坦で、井筒には木桶を用いる。直径82cmを測る。厚さ1.8cm、幅17～21cmの板材を26枚用いている。桶の高さは不明。桶の外面に１条の竹製のタガ痕がある。

遺物（Fig.39）は土師器皿・坏、高麗・李朝陶磁器、土師質土器、瓦質土器、瓦類、鉄製品がある。213・215～222・225～231は全て井戸の掘り方出土である。213～217は土師器の糸切り皿、218～225は糸切り底の坏である。226は高麗青磁皿で、口径11.0cm、器高3.7cmを測る。227は瓦質土器の火舎、229は瓦質土器の摺鉢、228は土師器の器台脚である。230の軒平瓦は瓦当部を欠失しているが、平瓦部の凸部には、斜格子の叩き痕がある。231・232は鉄製の釣針である。

SE16（Fig.38）　SE02・SE15に切られるため、形状をとどめていない。井筒には木桶を用いており、直径83cmを測る。桶の外面下部に竹製のタガが１条遺存していた。板材は厚さ1.6cm、幅15～

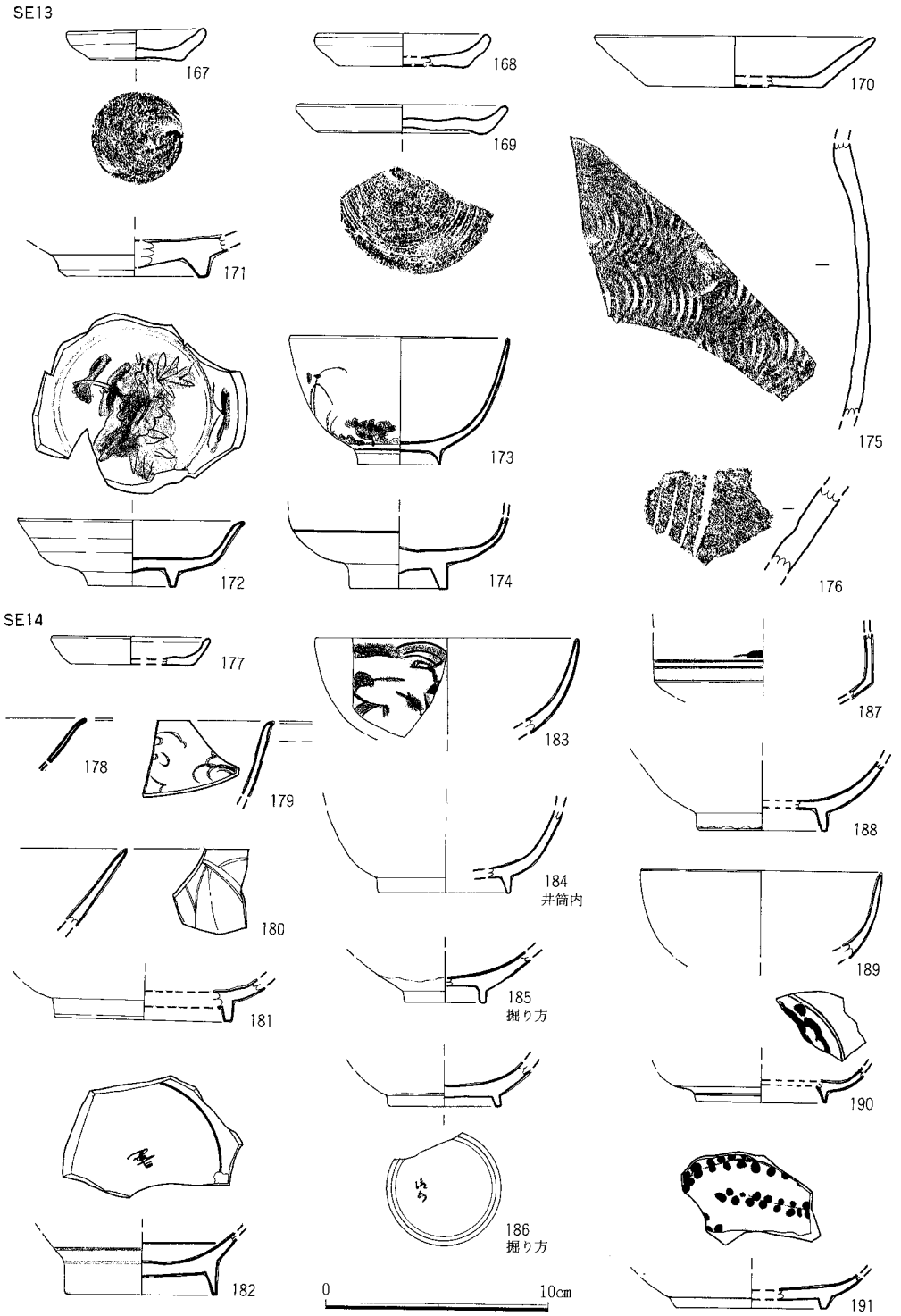


Fig.35　井戸SE13・14出土遺物実測図（縮尺 1/3）

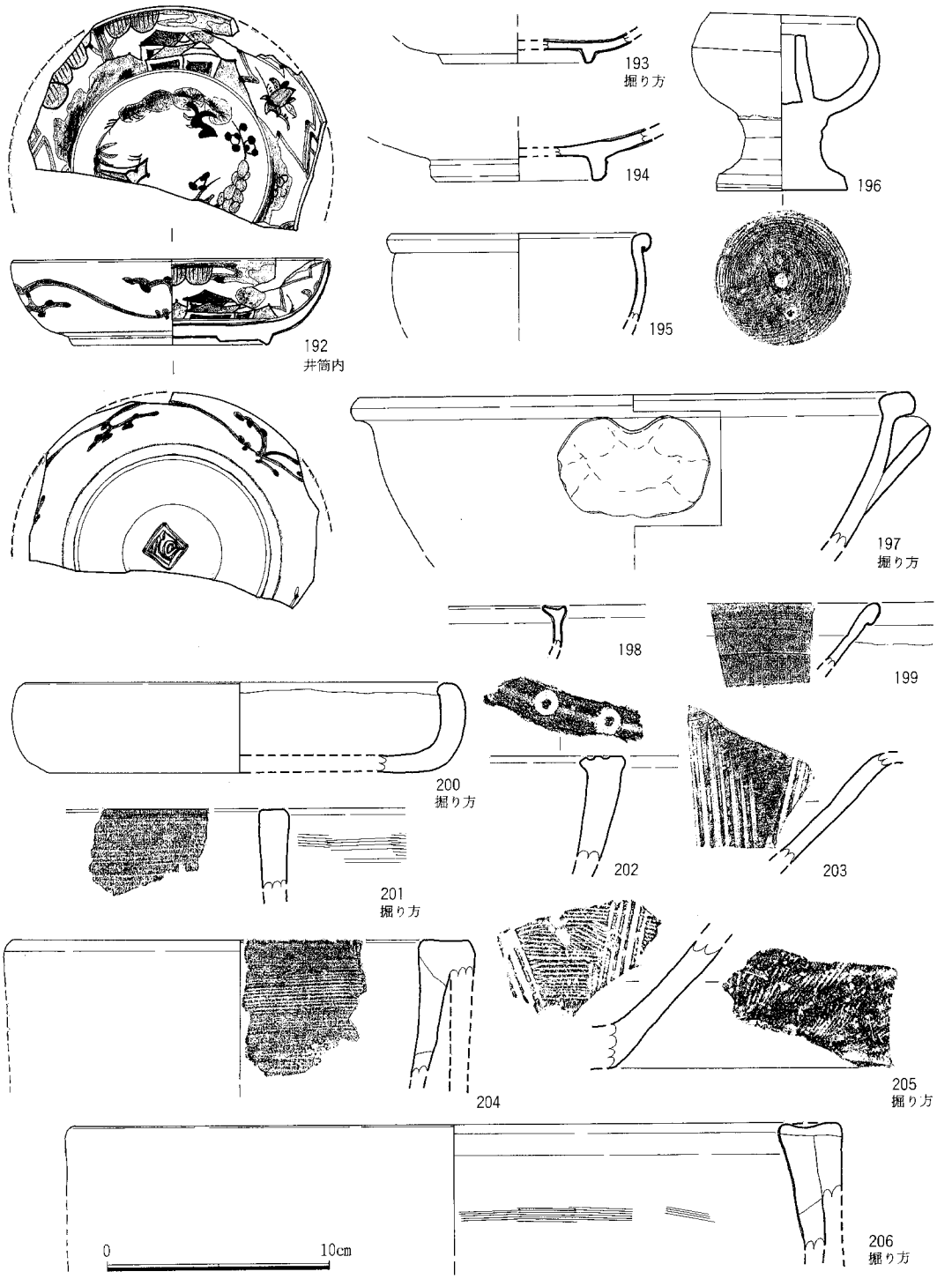


Fig.36　井戸SE14出土遺物実測図 ①（縮尺 1/3）

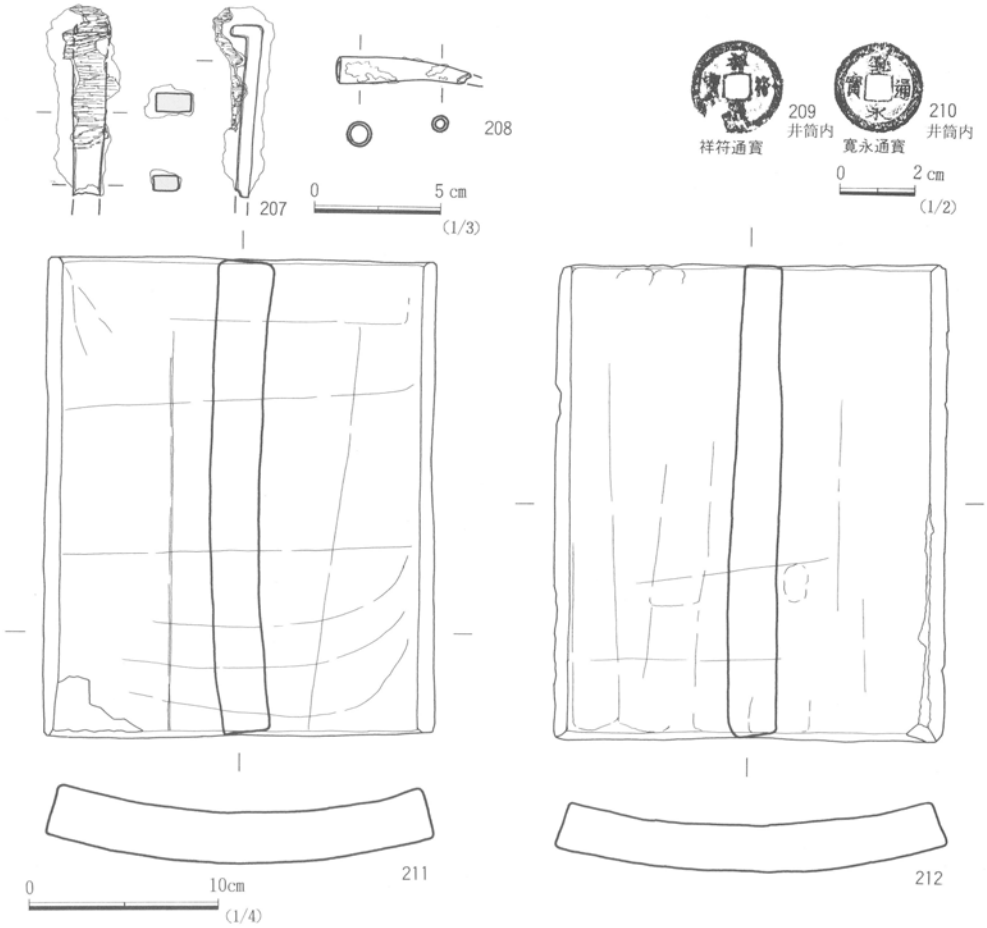
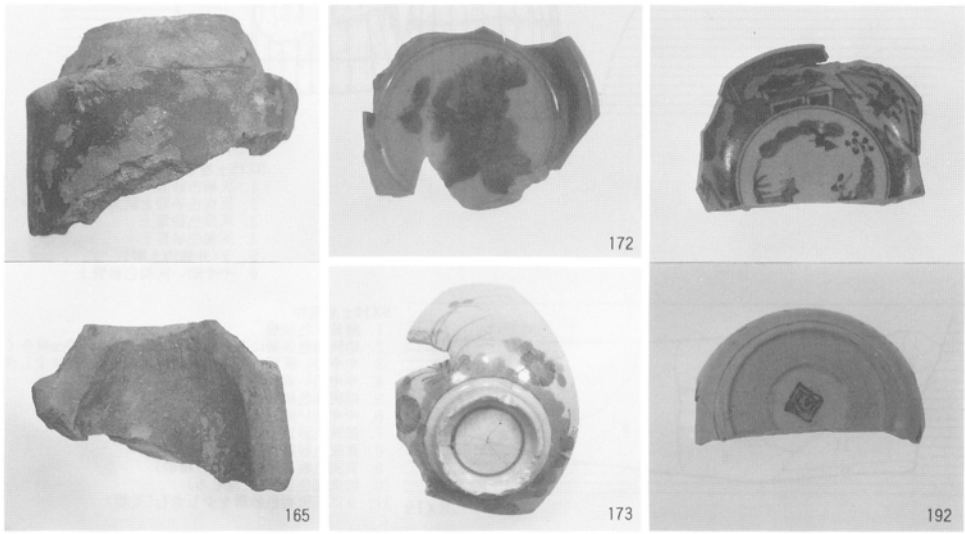
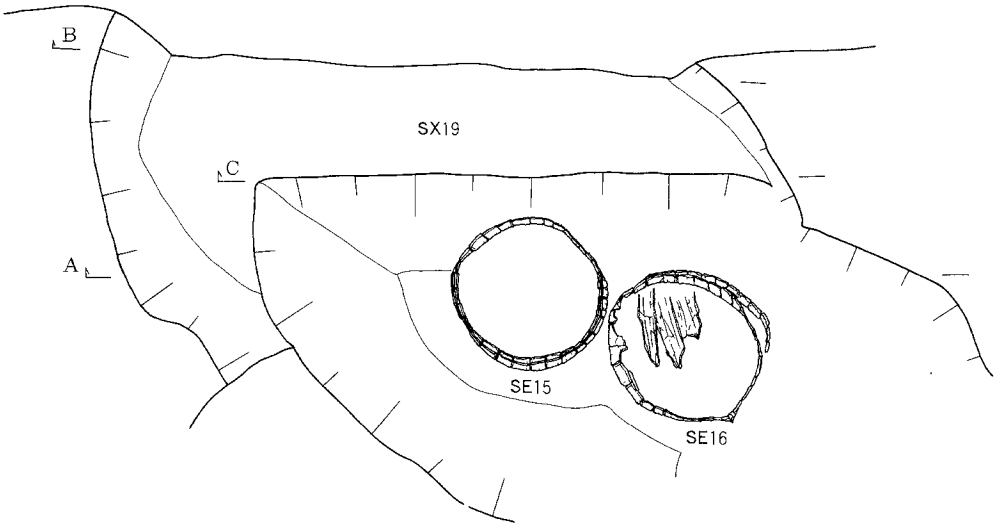


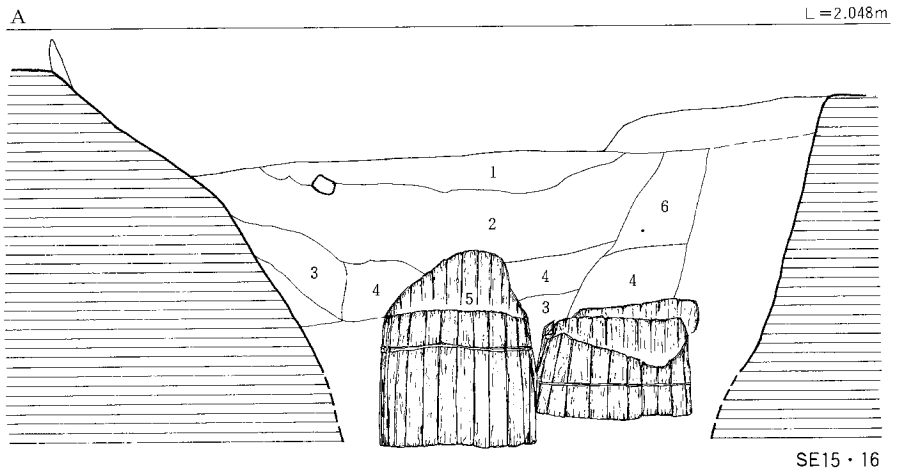
Fig.37　井戸SE14出土遺物実測図 ②（縮尺 1/2・1/3・1/4）



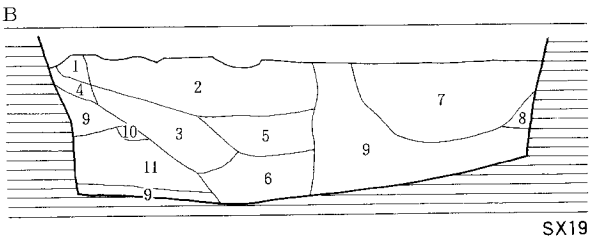
井戸SE13・14出土遺物

※数字は実測図の番号に一致する。





SE15土層名称
1. 灰褐色砂層
2. 灰褐色砂層と灰黒色粘質土との互層
3. 灰黒色砂質土
4. 灰褐色砂質土
5. 3(井筒内土層)
6. やや暗い灰褐色砂質土



SX19土層名称
1. 暗黄灰色砂層
2. 暗灰褐色砂層に黄灰色砂少し混じる(1～2cm炭多く含む)
3. やや暗い灰褐色砂層に黄灰色粗砂混じる(炭少し含む)
4. やや暗い黄灰色砂層
5. 暗灰褐色砂層と黄灰色砂層(粗砂)の互層
6. やや暗い灰褐色砂層(小石混じる)
7. 暗灰色砂質土(炭・礫混じる)
8. 黄灰色砂層(粗砂)に7が混じる
9. 黄灰色粗砂層(2～5mmの粗砂)
10. 暗灰褐色砂層(炭混じる)
11. 9に暗灰褐色砂層を少し含む(互層)

0 2 m

Fig.38 SX19・井戸 SE15・16実測図 (縮尺 1/40)

井戸SE19土層状態（北から）

井戸SE15土層状態（北から）

井戸SE15・16（北から）

井戸SE15木桶検出状態（北から）

井戸SE16木桶検出状態（北から）

井戸SE19（北から）

22cmを測る。26枚使用している。木桶は２段まで確認した。

遺物（Fig.39）は土師器坏・皿、舶載磁器が出土した。いずれも井戸掘り方の出土である。233・234は糸切り底の土師器坏である。他には青磁碗、白磁碗がある。

SE18（Fig.40）　南側境界地にあるため規模は不明。瓦井戸である。掘り方の平面形は不整円形

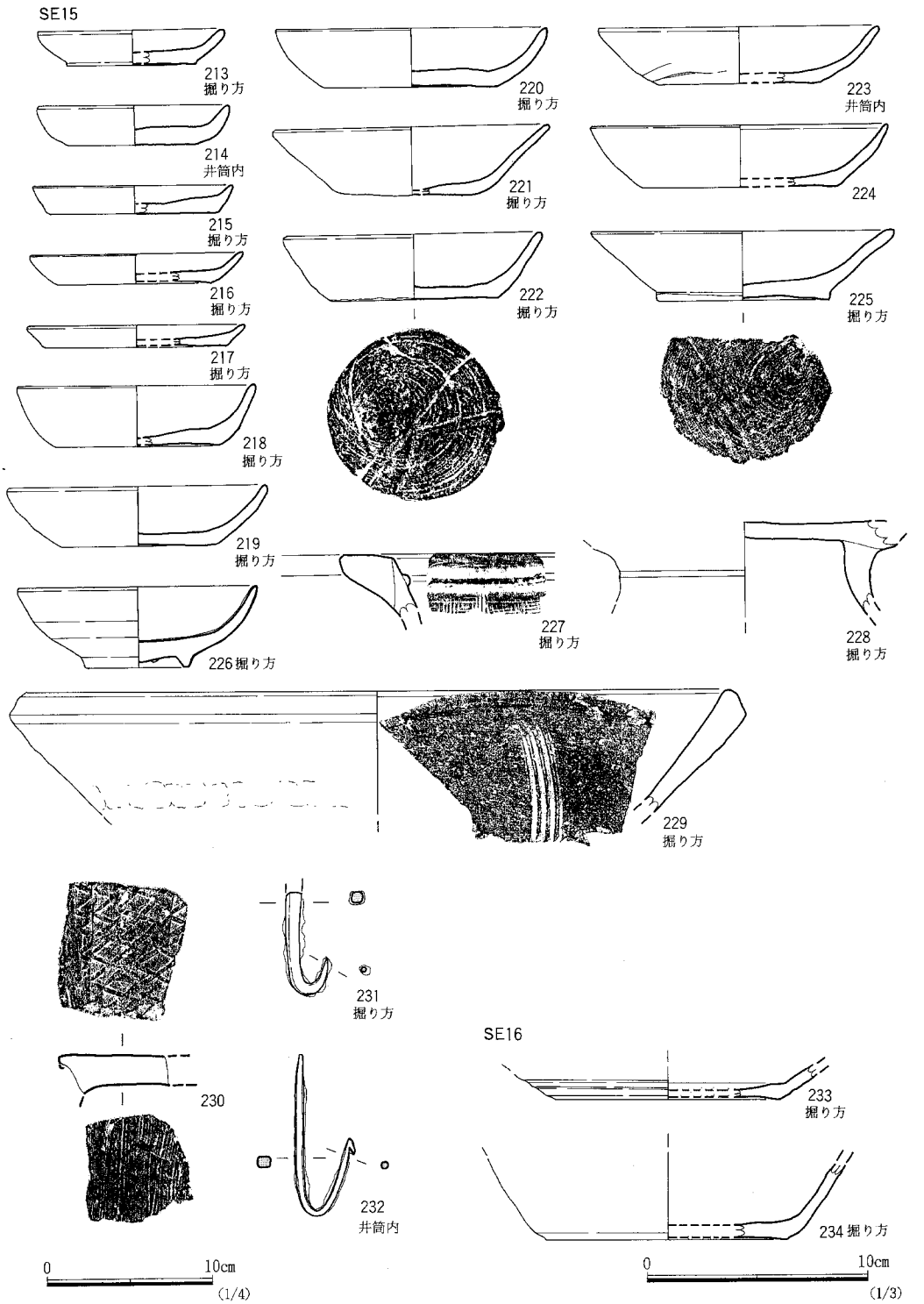
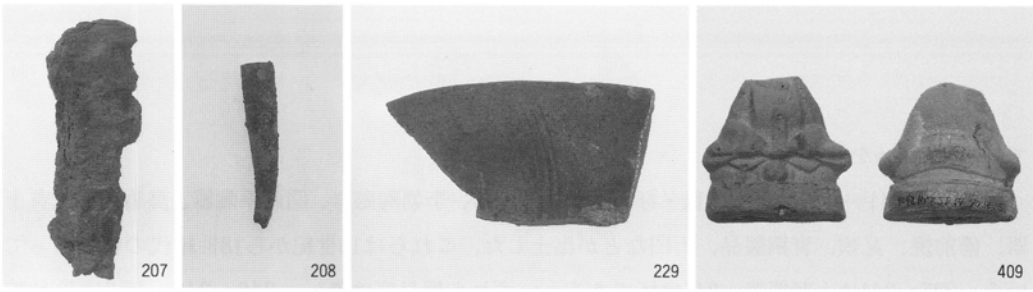


Fig.39　井戸 SE15・16出土遺物実測図（縮尺 1/3・1/4）



井戸SE14・15出土遺物

※数字は実測図の番号と一致する。
409はSE14出土

井戸SE18（南から）

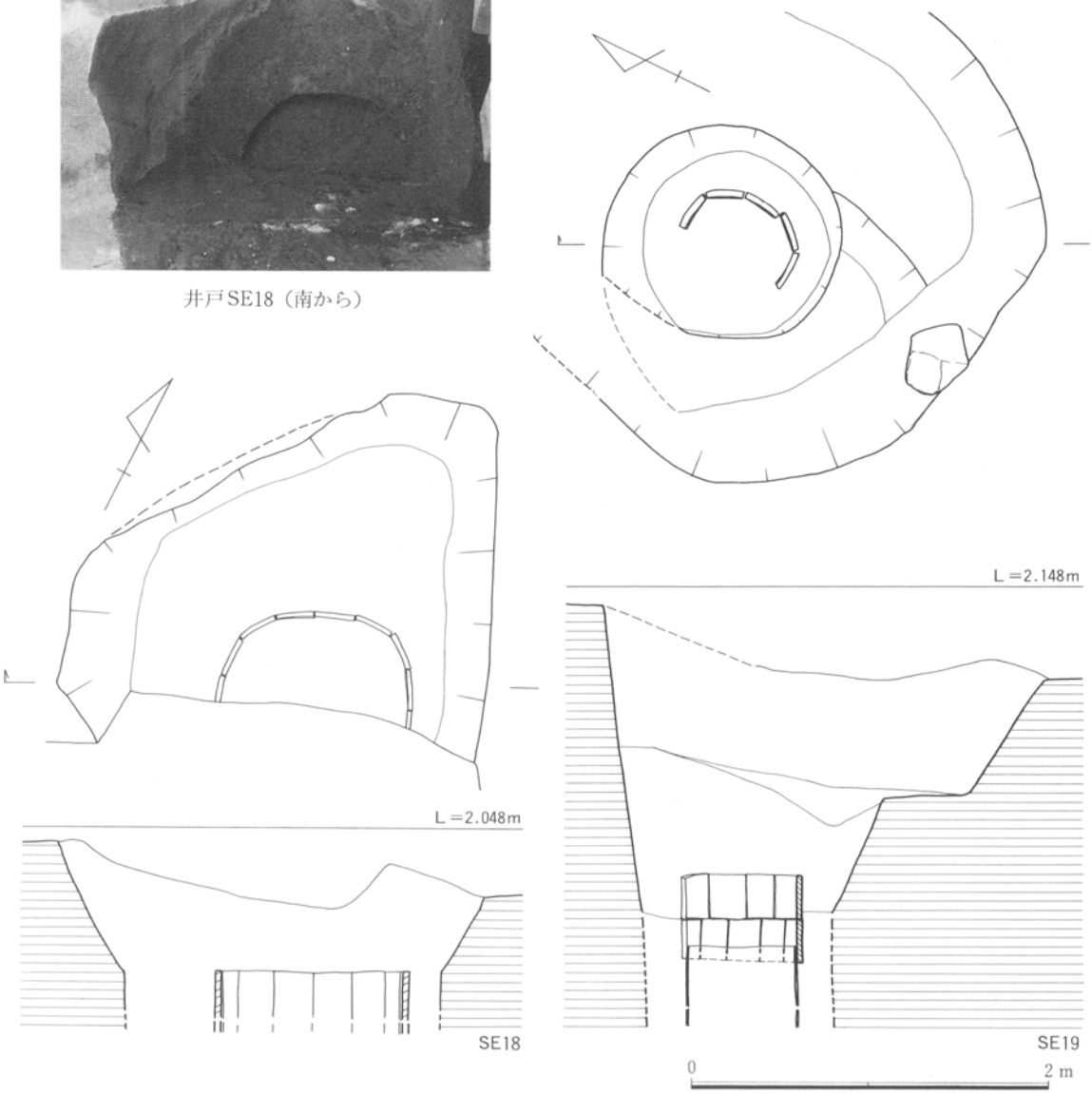


Fig.40　井戸 SE18・19実測図（縮尺 1/40）

で、直径110cmを測る。

遺物（Fig.41～43）は土師器皿・坏、肥前系陶磁器、李朝陶磁器、関西系陶器、高取焼、瓦質土器、備前焼、瓦類、青銅製品、石臼などが出土した。これらは16世紀から18世紀代の幅をもっている。235～244は土師器皿、245は坏である。いずれも板目痕は無い。246～249・252は染付碗で、246～248は明染付、251・252は肥前染付である。250は肥前陶器碗である。252の外面には蓮弁状のヘラ彫りがある。253は肥前産猪口である。254～256は唐津刷毛目碗、257は京焼風碗である。

258～263は皿で、258は明染付、259・260は肥前染付、261は李朝白磁皿、263は唐津焼、262はクロム青磁皿である。264は高取焼の片口鉢であろう。265～267は瓦質土器で265は鉢、266・267は火舎である。268～273は陶器摺鉢で、268は上野・高取系、269・272・273は唐津系、270は備前焼である。276は陶器甕の破片で、内面に青海波の叩きを施す。274・275は軒丸瓦で、瓦当面に三巴文を配している。277の軒平瓦の瓦当面には5回転の唐草文を施す。280・281は丸瓦で、背部に縄目叩き痕がある。282の平瓦には糸切り痕を残し、釘穴がある。283は平瓦、284は方形の瓦塼、285・286は井戸瓦である。279は石臼の上臼で、復原径34cm、器高10.3cm、上部のくぼみの復原径22.6cm、深さ2.5cmを測る。把手を取り付ける穴は方形を呈し、横2.8cm、縦3.5cm、奥行4.5cmを測る。下面が合わせ面になっており、放射条の条痕を施す。この条痕は8等区分され、区画線の間には基準と平行な条線が8本～9本単位に施される。間隔は不均等である。上・下の臼の心棒の軸受穴は中央にあって、直径2.4cmを測る。又、穀物の供給孔は復原直径3.8cmを測る。臼の表面仕上げは粗い。材質は凝灰岩である。278は青銅製の匙である。全長16.1cm、柄の幅0.5cm、厚さ0.05cmを測る。首の部分で折れ曲がっている。又、柄の先端も反っているが、これは本来の形状と考えられる。

SE19（Fig.40）　瓦井戸である。SK21を切っている。掘り方の平面形は不整円形を呈し、長径は約290cmを測る。瓦はほとんど抜かれており、下部の2段分を確認した。井戸底には木桶を据えていた。

遺物（Fig.44）は明青磁、肥前系陶磁器、東播系須恵器、瓦質土器、土師質土器、瓦類である。16世紀末～17世紀の所産であろう。287・288は唐津焼皿、289は明の青磁碗、290は肥前の白磁皿、291は肥前の青磁皿である。292は瓦質土器の火舎、293は土師質土器の摺鉢、294は須恵質土器である。295は陶器の破片で、内面に青海波の叩き痕があり、鉄釉を薄く施す。296・297は井戸瓦で、大きさは長さ30.9cm、幅24.1cm、厚さ3.8cmを測る。その他に馬の歯が出土している。

SE20（Fig.45）　石組井戸である。SE13に切られる。前述した通り、井戸の上部は調査前の鋤取り工事で破壊されている。掘り方の平面形は不整円形を呈し、長径431cmを測る。石組みの井筒は7段まで遺存しており、深さ228cmを測る。井筒の下部には木桶を据え、更にその内側に刳抜きの木桶を据えている。

遺物（Fig.46～54）は、掘り方、及び井筒内から多量に出土した。土師器皿・坏、明青磁、染

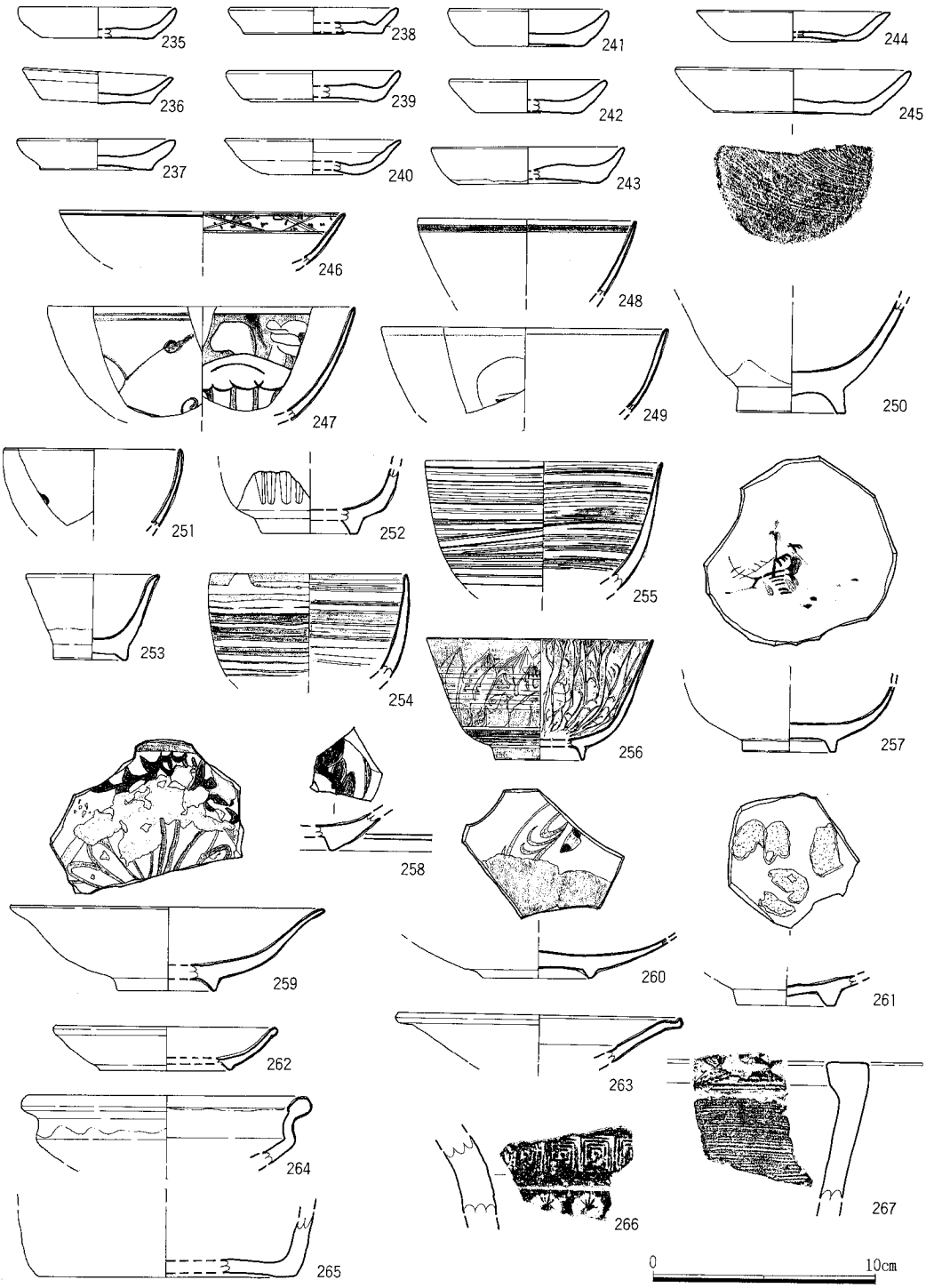


Fig.41　井戸 SE18出土遺物実測図 ①（縮尺 1/3）

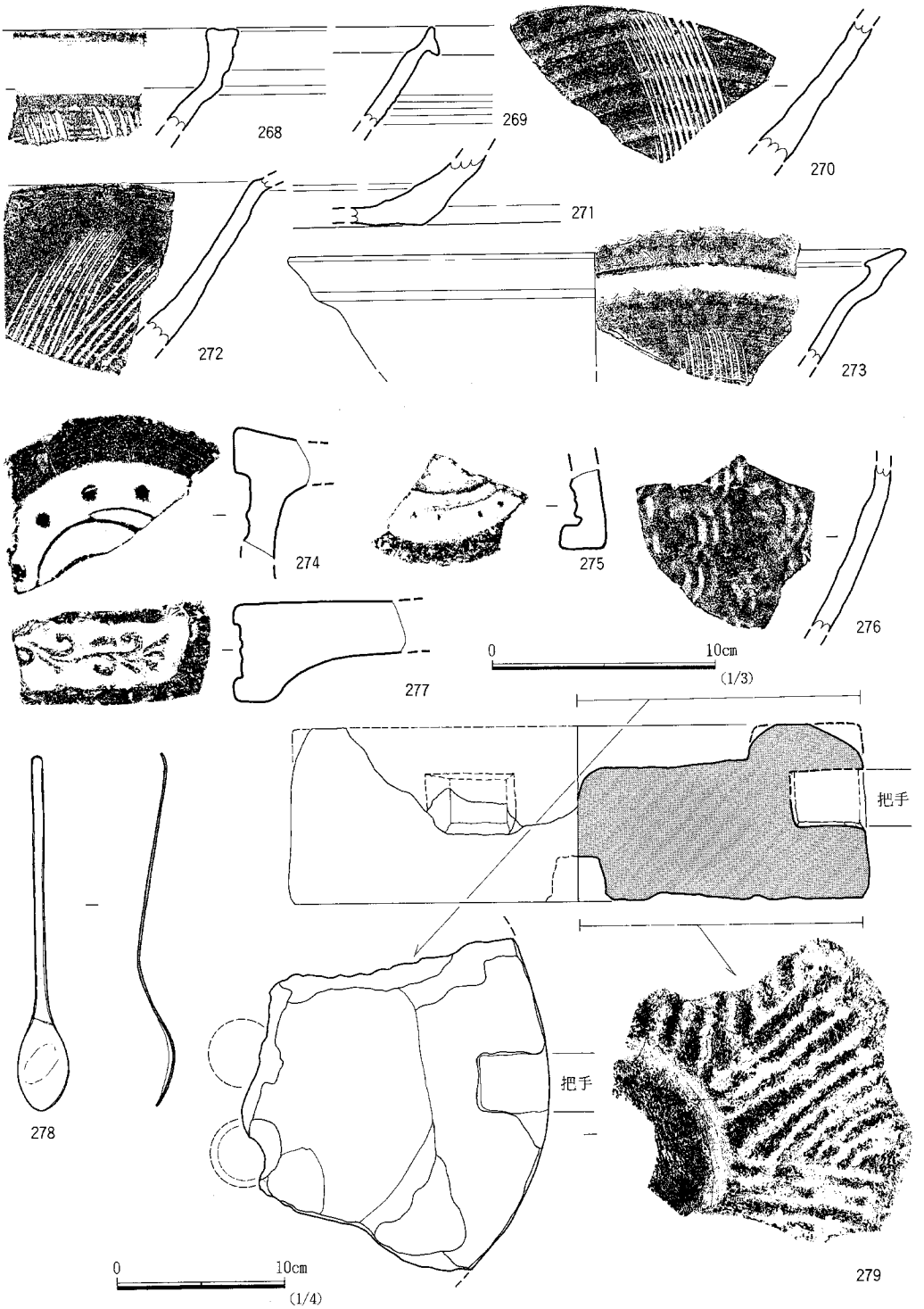


Fig.42　井戸 SE18出土遺物実測図 ②（縮尺 1/3・1/4）

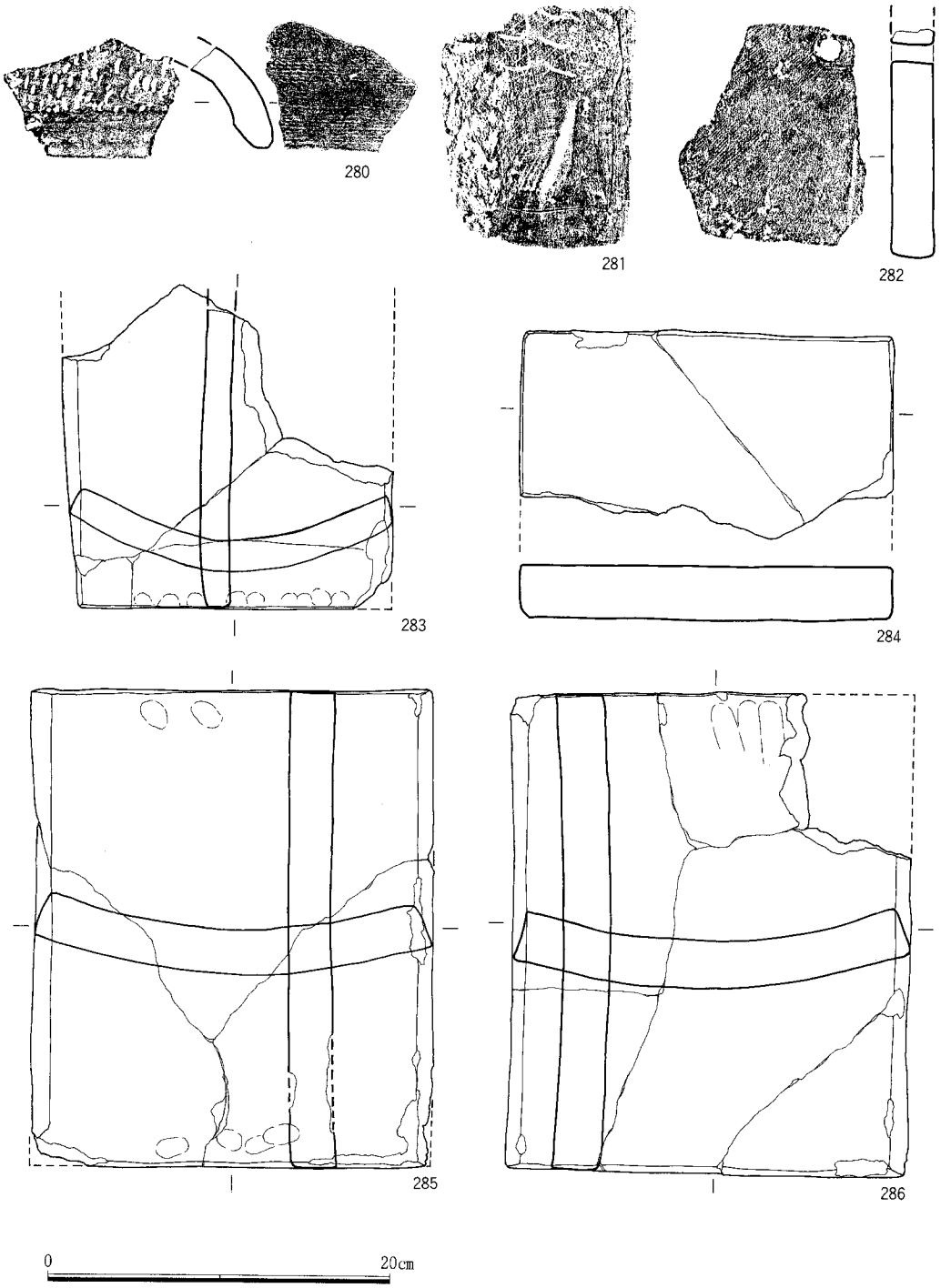


Fig.43　井戸 SE18出土遺物実測図 ③（縮尺 1/4）

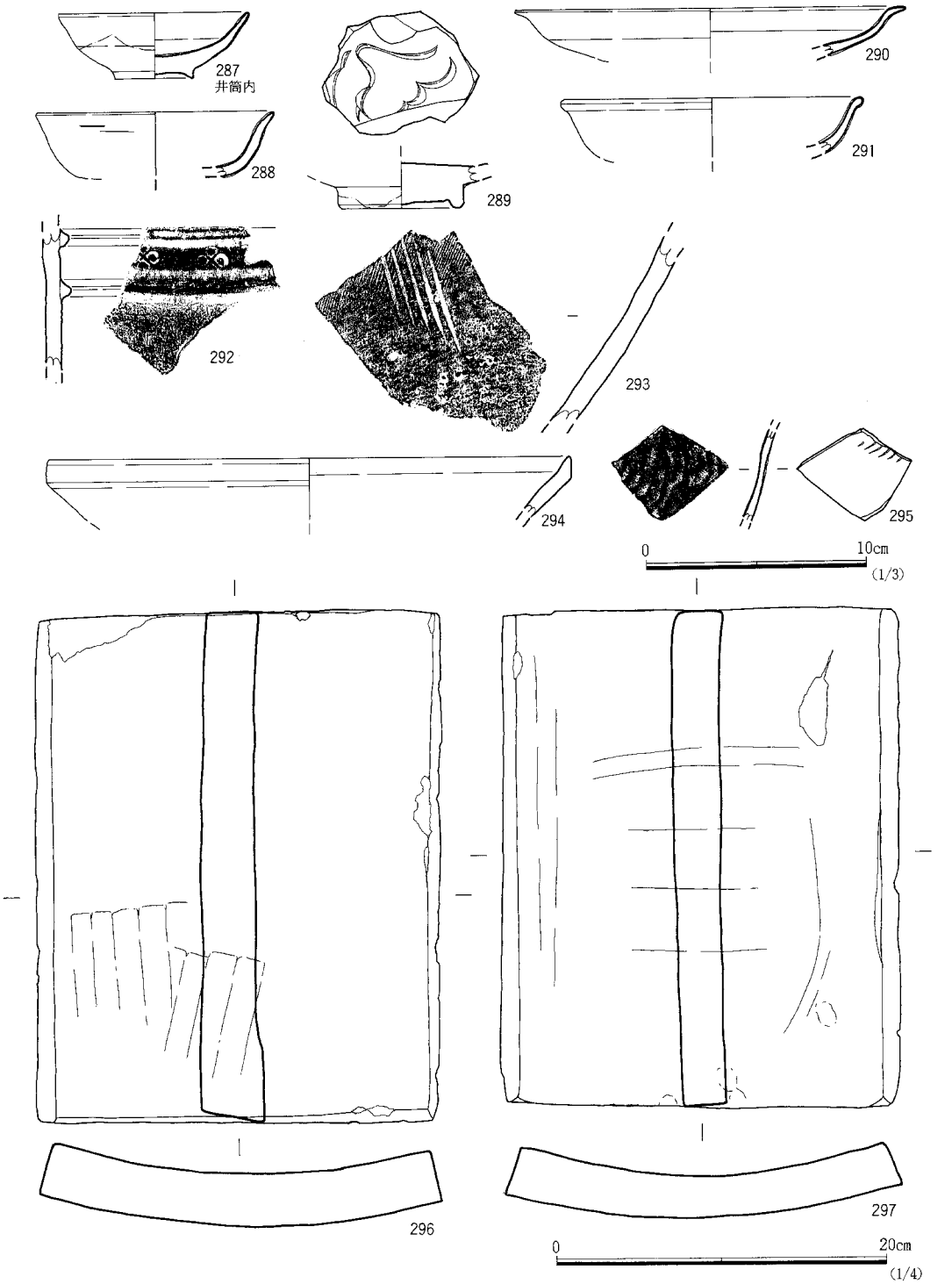
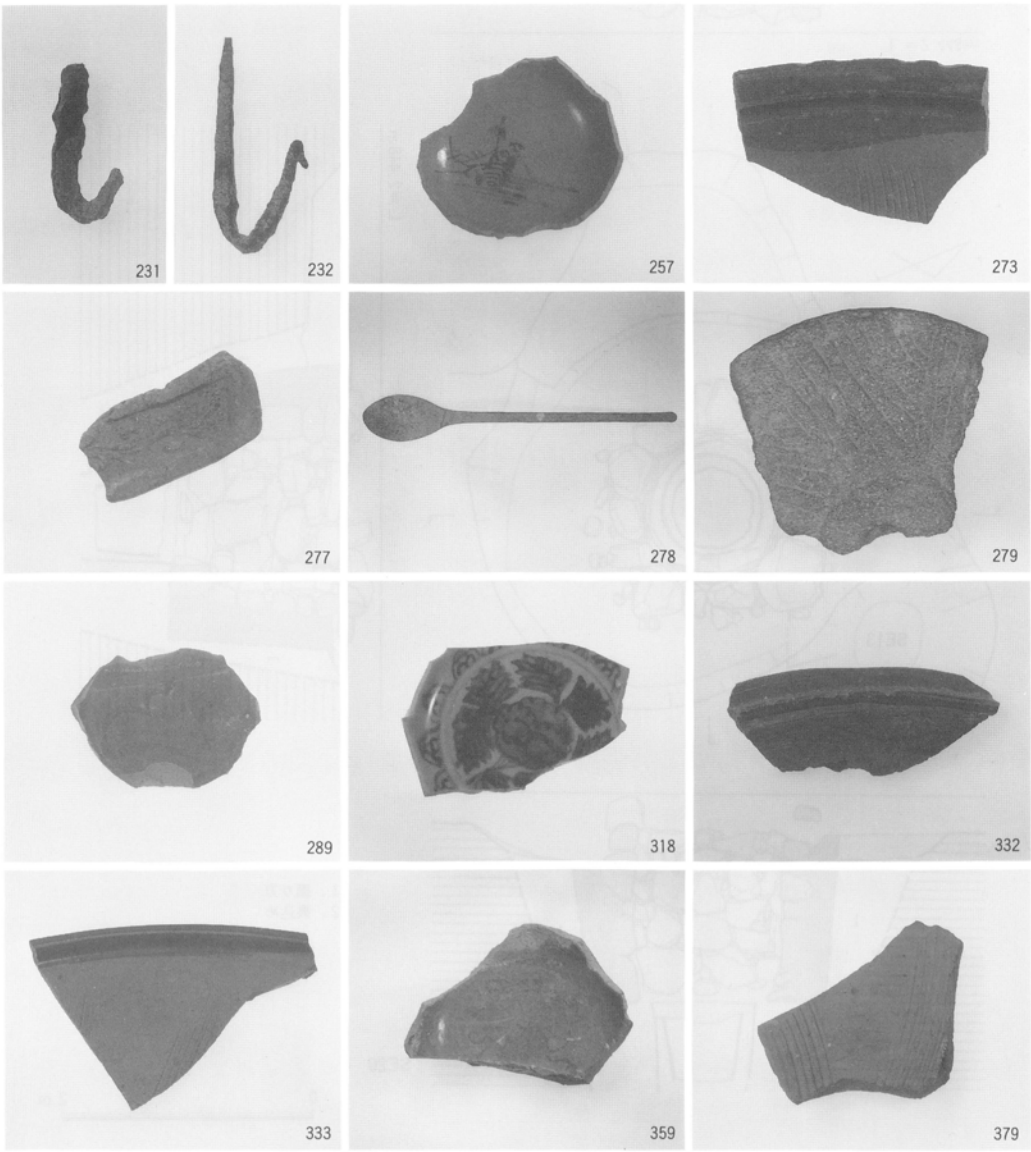


Fig.44　井戸 SE19出土遺物実測図（縮尺 1/3・1/4）

付、白磁、備前焼、常滑焼、瓦質土器、土師質土器、瓦類、石塔類等が出土した。298～350、382～408は井戸掘り方、又は石組みの裏込めから出土した遺物で、351～381は井筒内から出土した遺物である。298～301は糸切り底の土師器皿、302～311は糸切り底の土師器坏、312・313は瓦質の鉢である。312・313は手づくねの瓦質土器で、内面に指圧痕が残るが、外面はヘラミガキを施しており、平底である。321は龍泉窯系青磁碗、314・315は明の青磁で、314は皿、315は碗である。316は白磁碗、317・318は明の染付で、317は碗、318は皿である。319は陶器碗である。320は土師



井戸SE15・18～20出土遺物　※数字は実測図の番号と一致する。

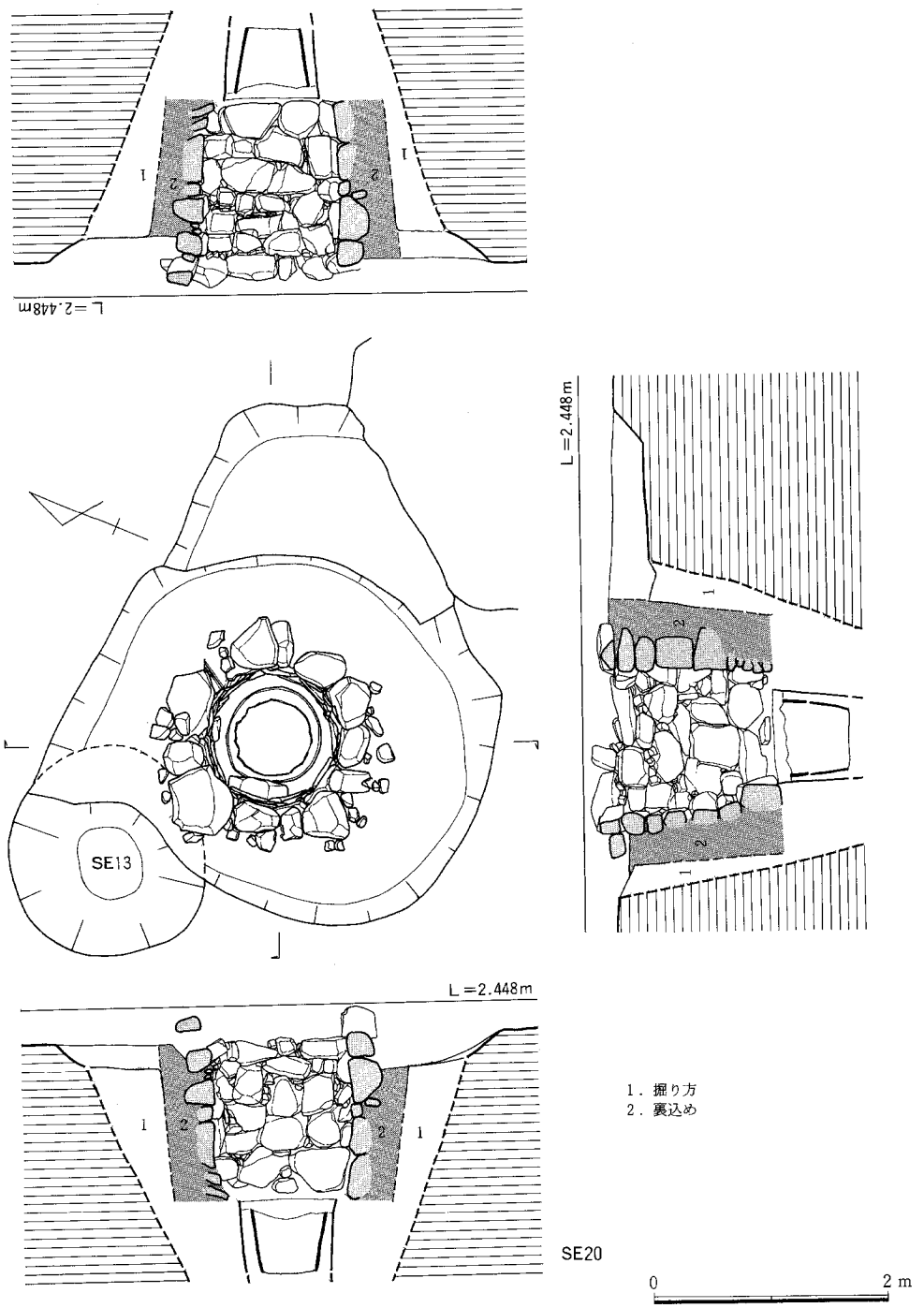
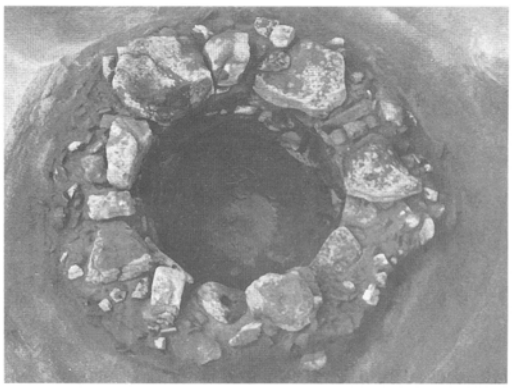


Fig.45　井戸 SE20実測図（縮尺 1/60）



井戸SE20（南から）

井戸SE20西側石組（東から）

井戸SE20底面（西から）

井戸SE20木桶状態（北から）

質土器で、焙烙であろう。322は瓦質土器鍋、323は瓦質土器火舎である。324・325は土師質土器の鍋であるが、324は畿内からの搬入品である。326は常滑焼のⅡ－2期である。327・330～334は陶器摺鉢で、330～332・334は備前焼、333は唐津系と考えられる。331・332は備前焼Ⅳ期である。334はⅤ期である。328・329は陶器壺で、328は筑前産である。337・338は瓦質土器鉢、339～348は土師質土器の摺鉢である。口縁端部を若干肥厚させている。下し目の単位は340が4本、344・347・348が5本単位である。349は瓦質土器の火舎で、完形に近い。外面に黒色研磨を施し、内面は刷毛目調整である。外面の上下位に2重の突帯を貼り付け、その間に印刻の文様を施す。脚は3脚である。350は板碑の頭部である。額以下を破損している。頭頂部は元来三角形を呈するものである。背面にはノミの成形痕がある。現存長17.8cm、幅15.2cm、厚さ6.5cmを測る。351は宝篋印塔の塔身に相当する。上下面の中央に、直径3.5cm、深さ0.5cmの突起が作り出されている。塔身の大きさは長さ15.5cm、幅15.6cm、高さ14.0cmを測り、大略正方形に近い。側面の4面には各々の中央に梵字を一字ずつ刻んでいる。金剛界四仏で、A面は「[illegible]ウーン（阿閦）」、B面は「[illegible]タラーク（宝生）」、C面は「[illegible]キリーク（阿弥陀如来）」、D面は「[illegible]アク（不空成就）」である。

平瓦は総数2,012点、丸瓦は総数449点出土した。この内、平瓦の672点、丸瓦の48点が二次的に焼けている。380～383は軒丸瓦である。381は鳥衾瓦で、瓦当面径18.5～20.0cmを測る。「卍」字の文様を施す。他に2点出土している。382・383の瓦当面には左巻きの三巴文を配している。三巴文の尾は別の巴文の尾に接しており、圏線状を呈する。頭部は左巻きであるが、382の頭部は尖っている。珠文は382・383は16個である。384～397は軒平瓦である。中心飾りは宝珠形で、左右に唐草文を配している。唐草文の回転や、配置から8種類に分類することが可能である。

A類（384・387～390）中心飾りは円形に近い宝珠形で、唐草の先端が上向きと下向きがあり、8回転する。唐草は4本派生する。

B－1類（385・386）中心飾りはA類と同形の宝珠形で、3回転の唐草文は中心飾りから独立して派生する。唐草の先端は上向きである。

B－2類（394）B－1類の文様を裏返した文様形状を示す。最後の唐草文は上向きである。

C類（391・395）中心飾りは宝珠形で、3回転の唐草文を派生させる。3回転目の唐草の上に独立した蔓草がある。

D類（392）中心飾りは不明である。3回転の唐草文を配するが、蔓草が2回転目の唐草から派生する。

E類（393）中心飾りは不明である。唐草文は3回転以上で、各々独立している。最後の唐草文は右巻きである。

F類（396）中心飾りは不明である。最後の唐草文の先端は左巻きで、上下に蔓草を派生する。

G類（397）中心飾りは不明である。唐草は独立しており2重になった唐草文が3回転する。唐草文の先端の巻きが弱い。

398～403は丸瓦である。背部に縄目の叩き痕がある。又、凹部には布目痕の他に縄紐痕がある。400には糸切り痕が残る。405は方形瓦塼、406は三角瓦塼である。404・407は平瓦で、407の凸面には糸切り痕が残り、404の凹面には同心円の叩き痕がある。408は道具瓦の伏間瓦である。

351～381は井筒内の出土遺物である。352は土師器糸切り皿、353～357は坏である。これらの坏は法量は小さく、皿との判別がつけ難い。358・359は龍泉窯系青磁碗、360は白磁碗Ⅳ類、363は明の白磁皿、361・365は明染付で、365は皿、361は碗である。366は唐津焼、又は李朝の皿、362は天目碗の底部である。367・368・370・371は土師質土器の摺鉢で、367・368・370の下し目は使用による磨滅が著しい。372～374は瓦質土器の火舎で、372・373の外面には雲形文、筋交いの三桝形文を施す。374は脚である。高さ5.3cm、最大径6.5cmを測る。376～379は備前焼で、376は壺、377は瓶、378・379は摺鉢である。

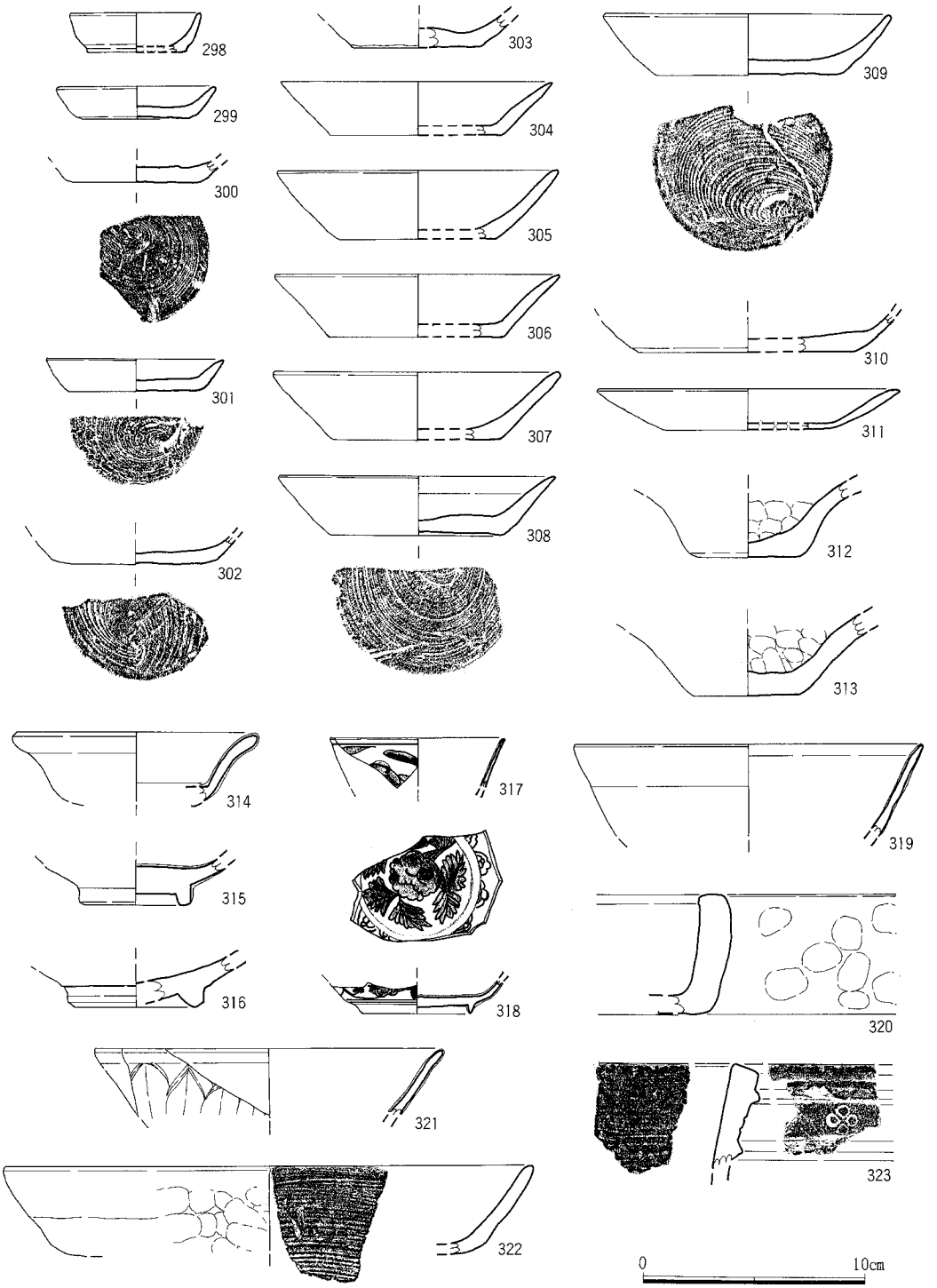


Fig.46　井戸 SE20掘り方出土遺物実測図 ①（縮尺 1/3）

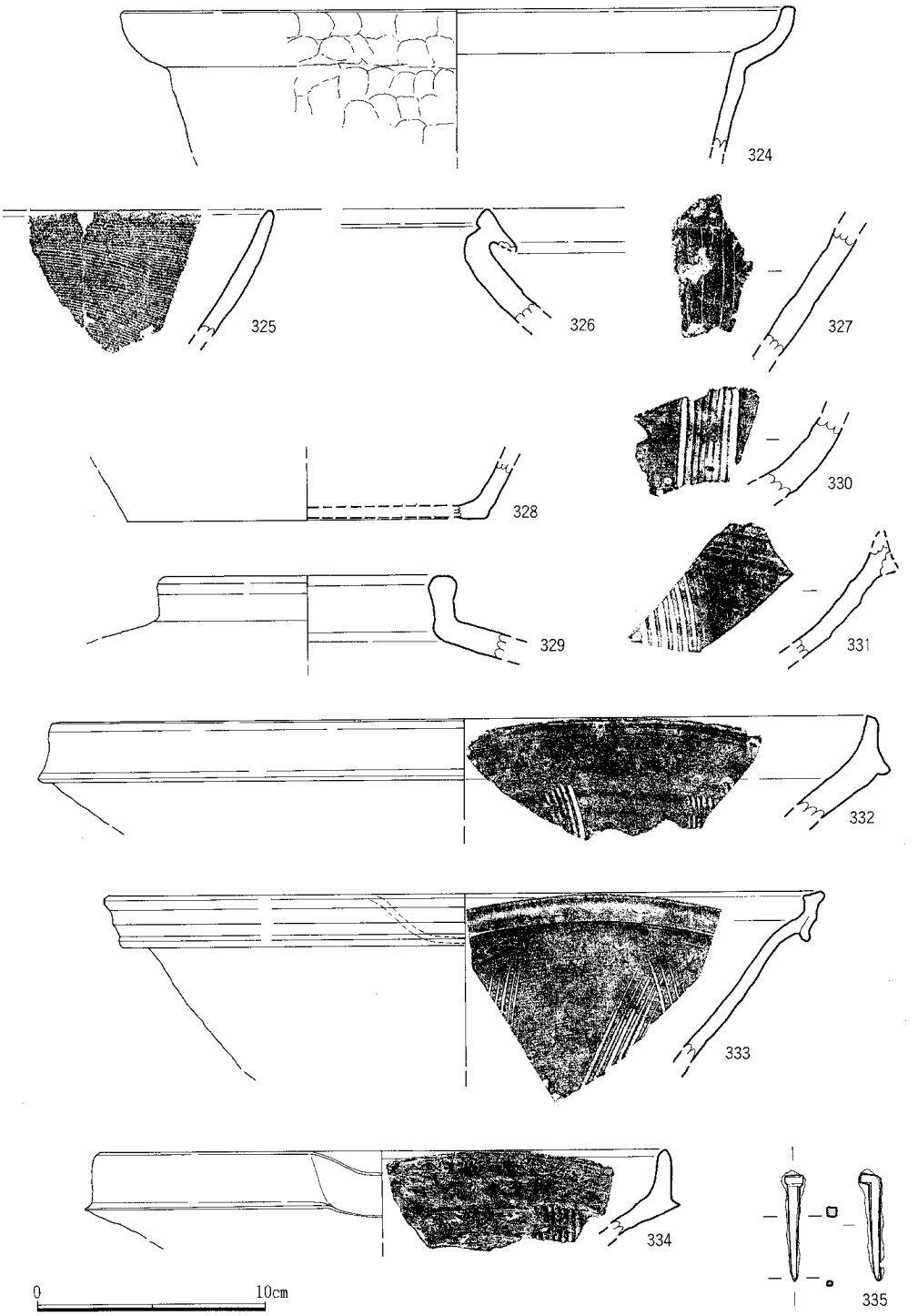


Fig.47　井戸 SE20掘り方出土遺物実測図 ②（縮尺 1/3）

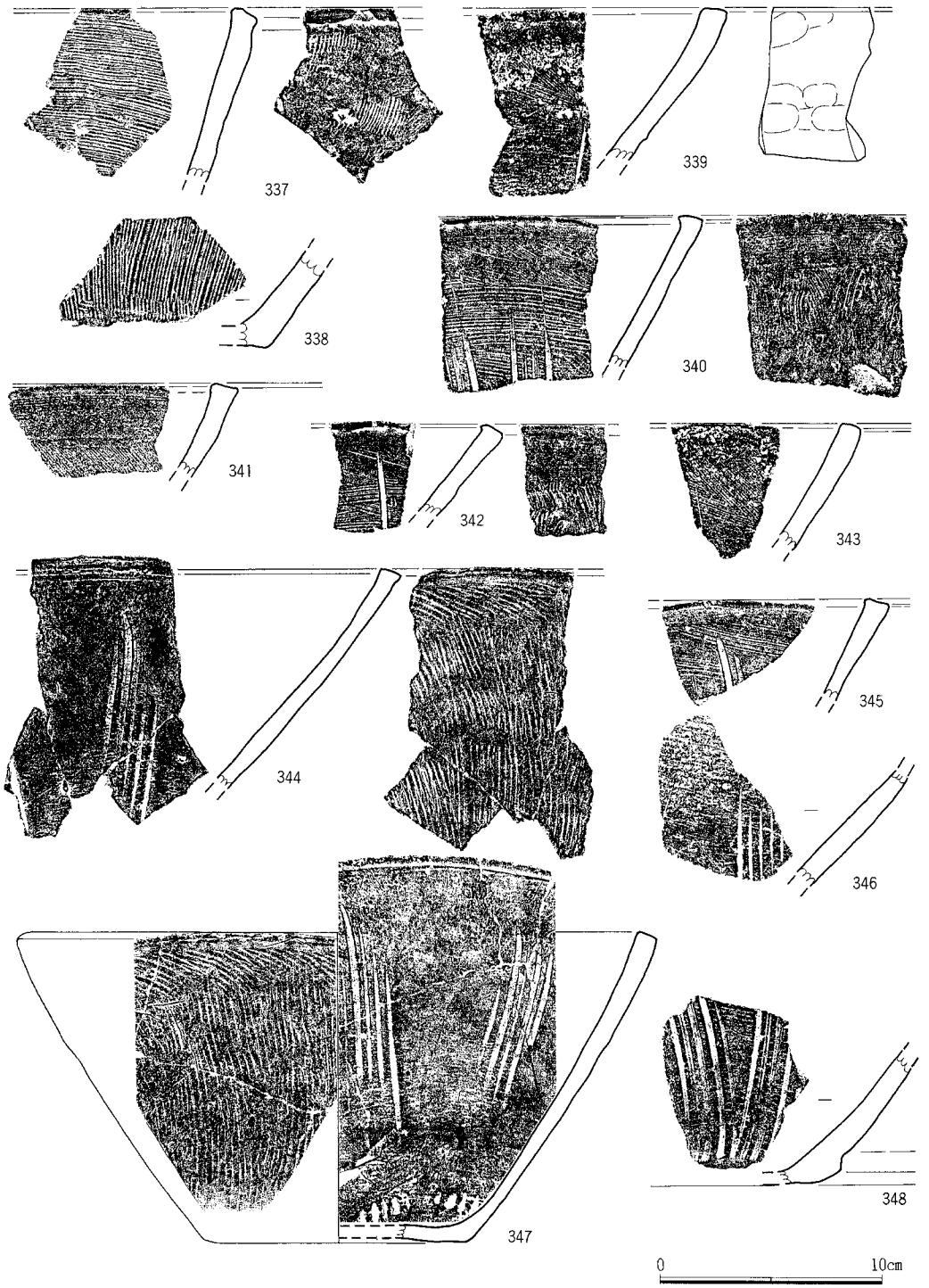


Fig.48　井戸 SE20掘り方出土遺物実測図 ③（縮尺 1/3）

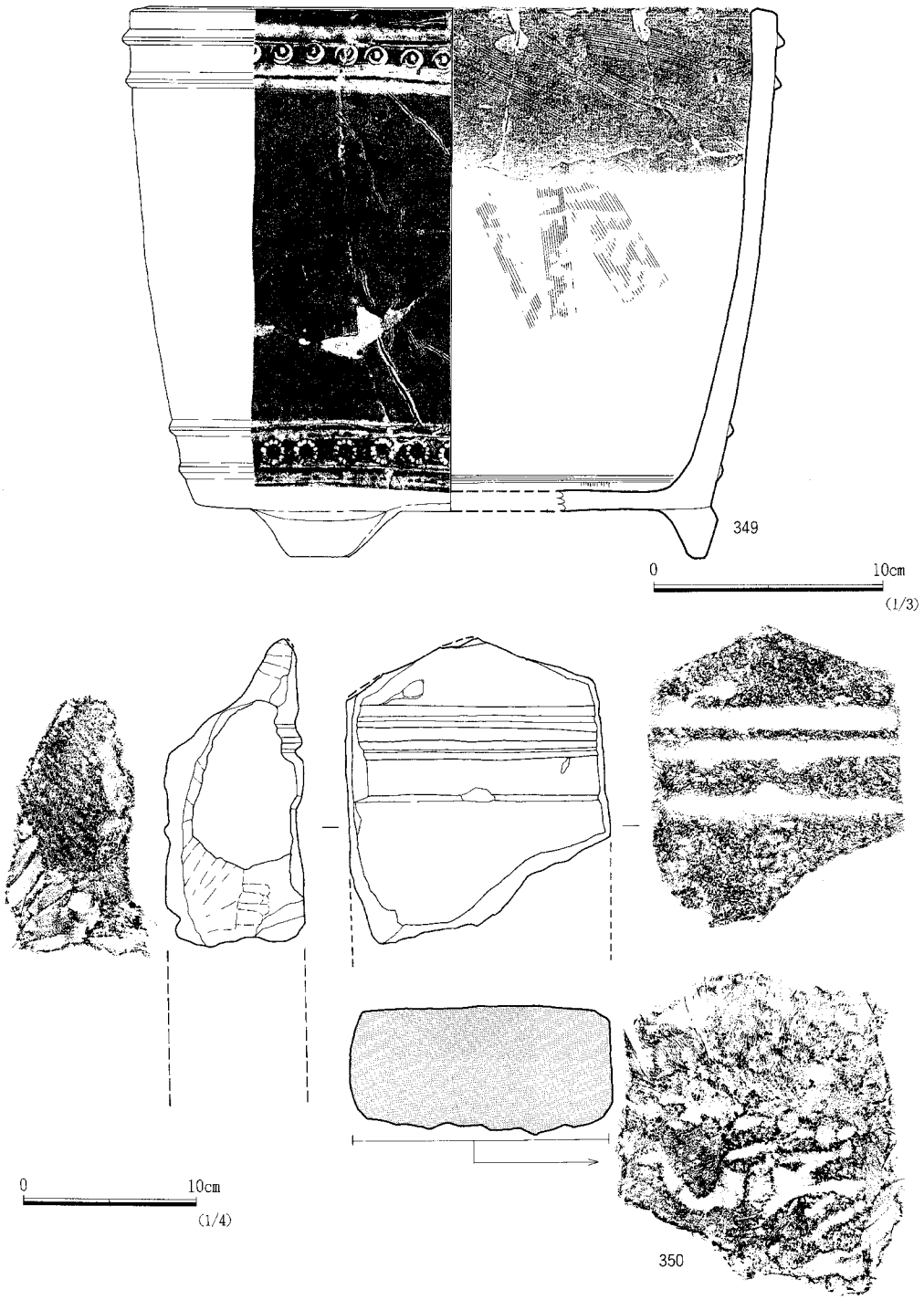


Fig.49　井戸 SE20掘り方出土遺物実測図 ④（縮尺 1/3・1/4）

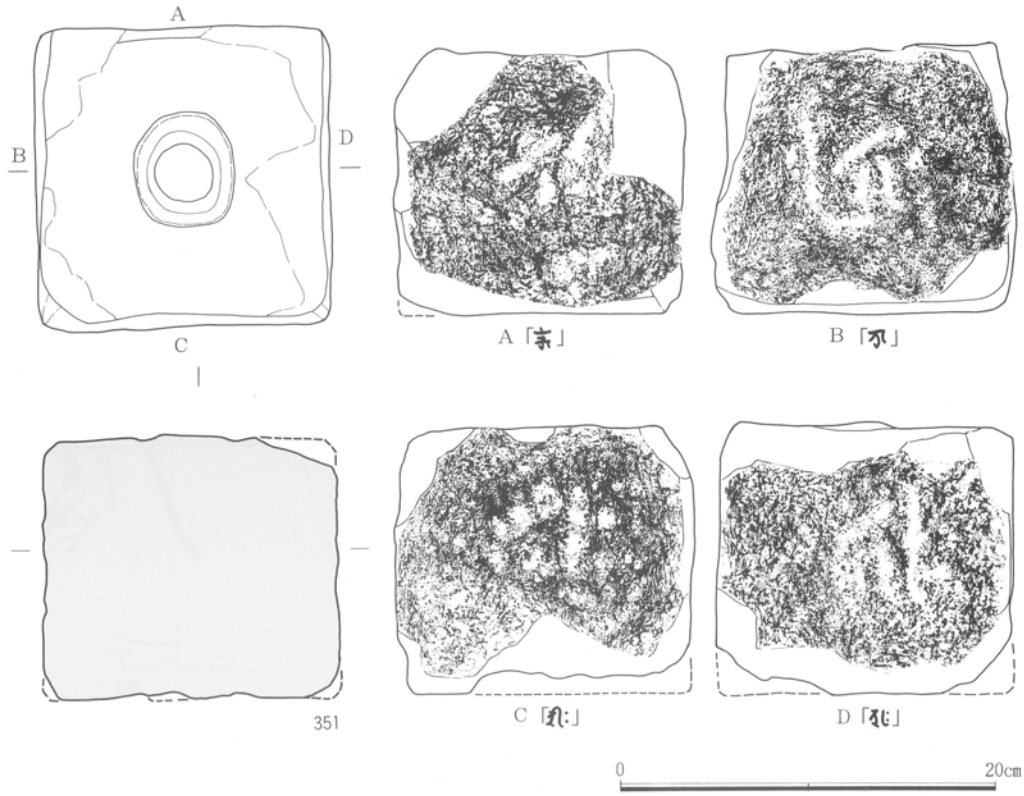
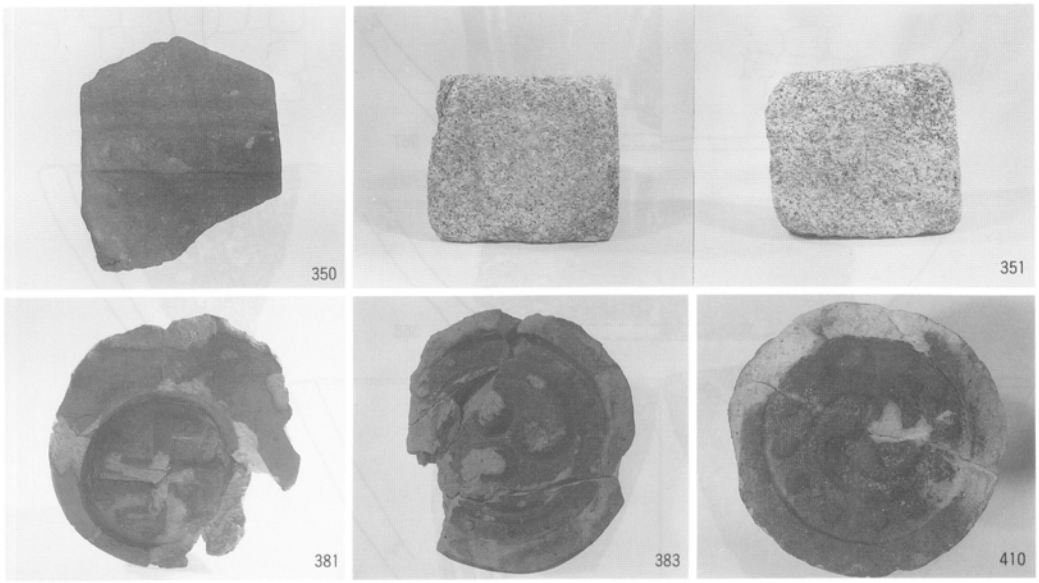


Fig.50　井戸SE20出土遺物実測図 ⑤（縮尺 1/4）



井戸SE20出土遺物

※数字は実測図の番号に一致する。
410はSE20出土

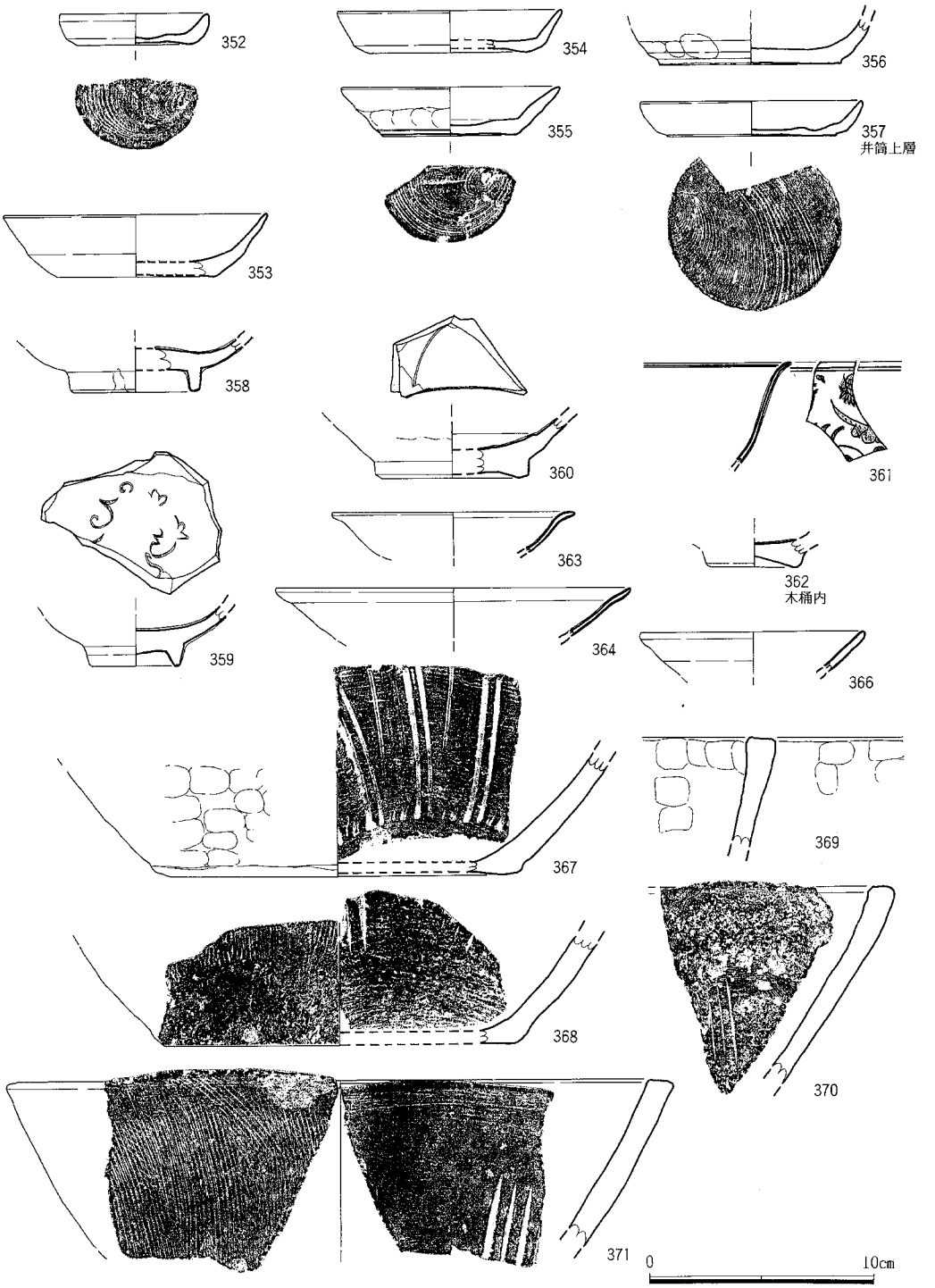


Fig.51　井戸SE20井筒出土遺物実測図 ⑥（縮尺 1/3）

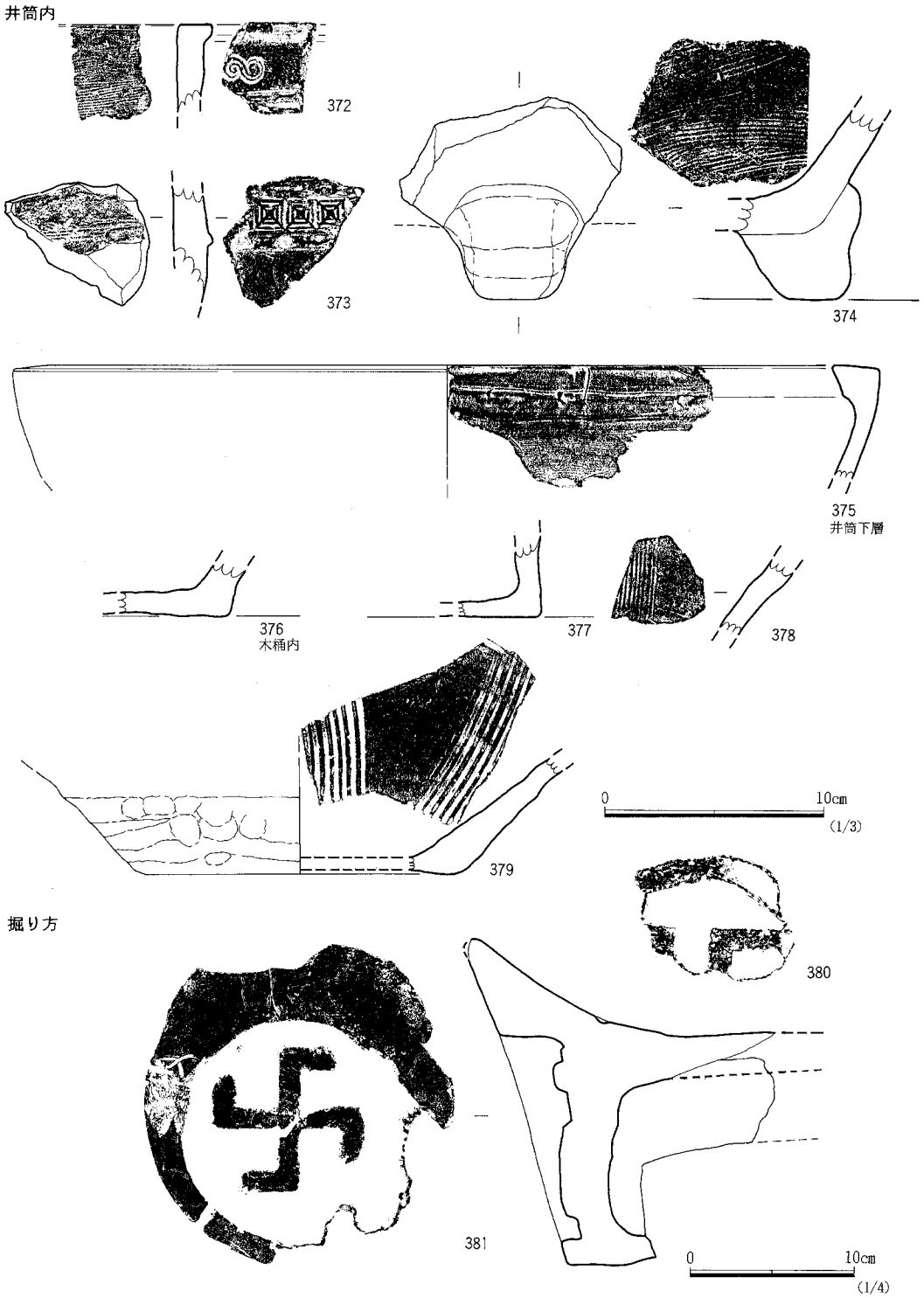


Fig.52　井戸SE20出土遺物実測図 ⑦（縮尺 1/3・1/4）

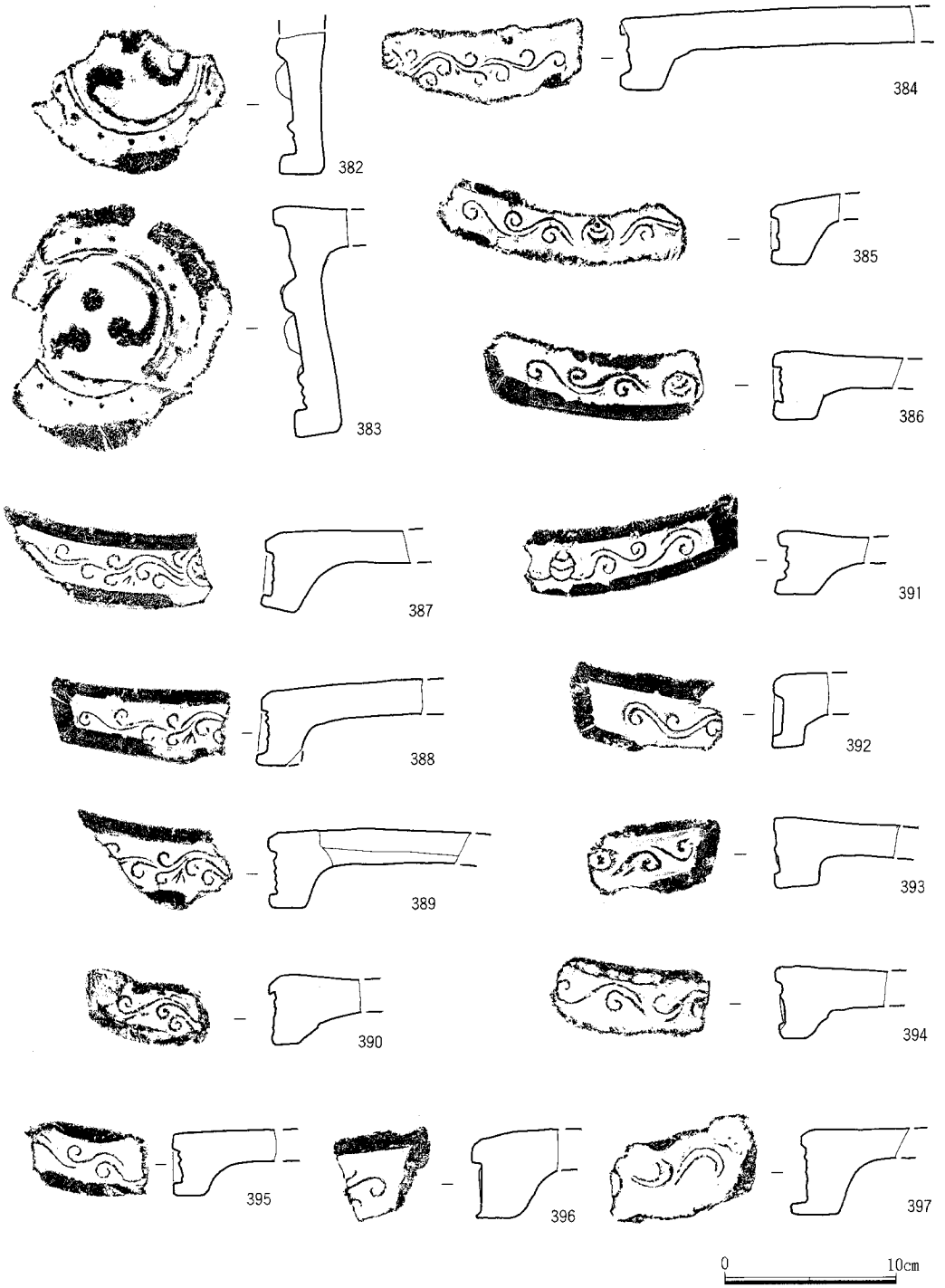


Fig.53　井戸 SE20掘り方出土遺物実測図 ⑧（縮尺 1/4）

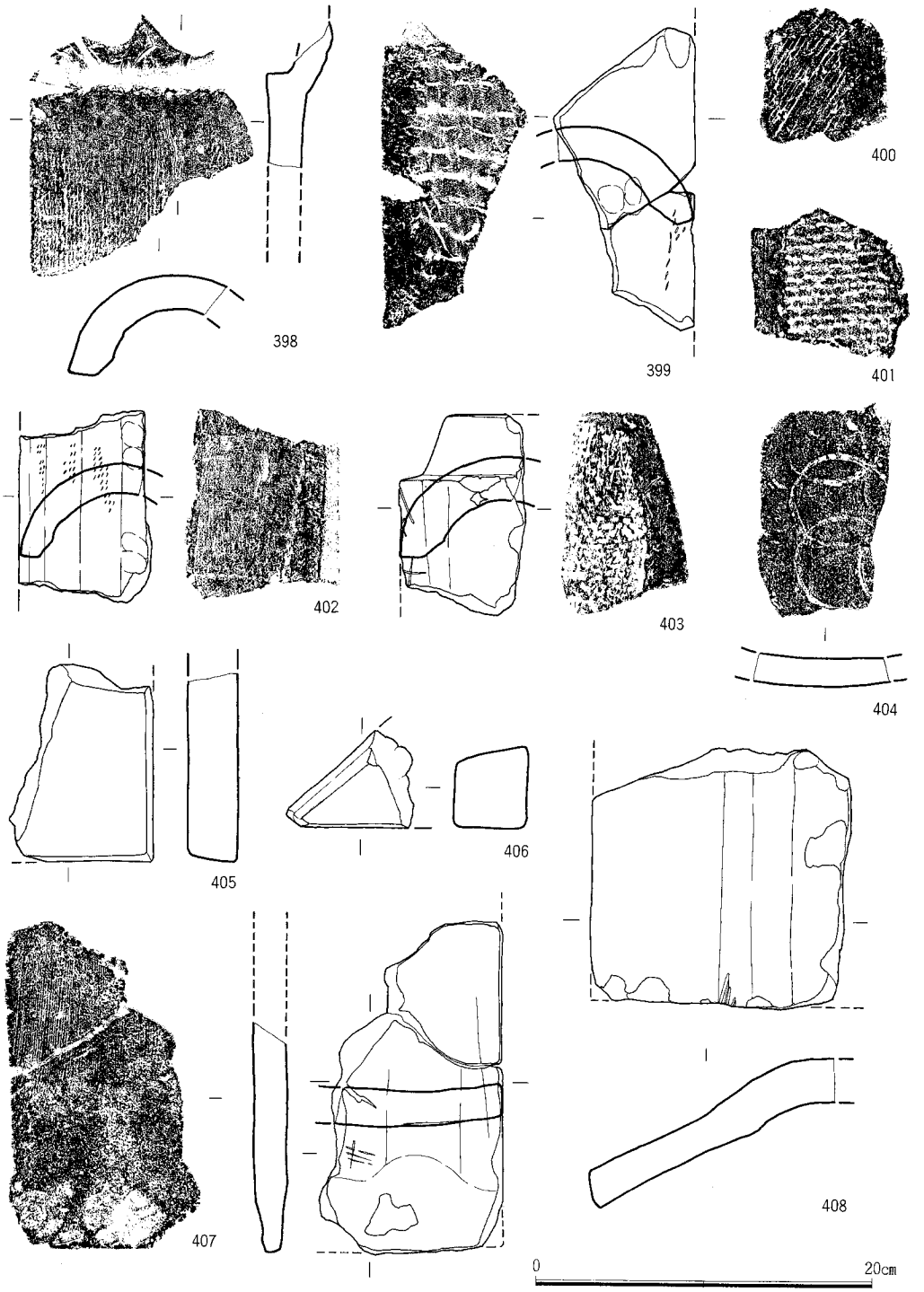
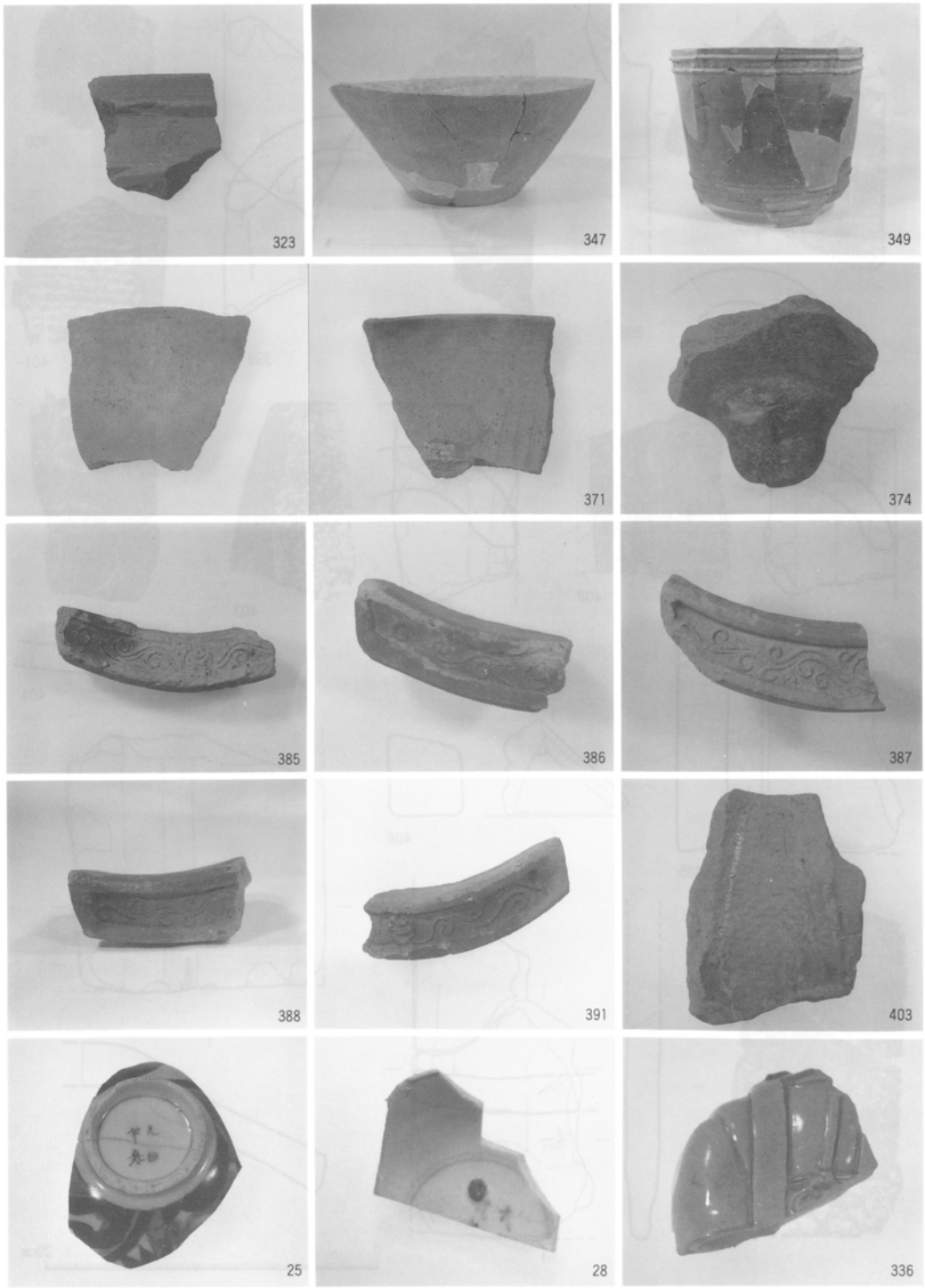


Fig.54　井戸 SE20掘り方出土遺物実測図 ⑨（縮尺 1/4）



井戸SE20・SX02出土遺物

※数字は実測図の番号に一致する。
25・28・336はSX02出土

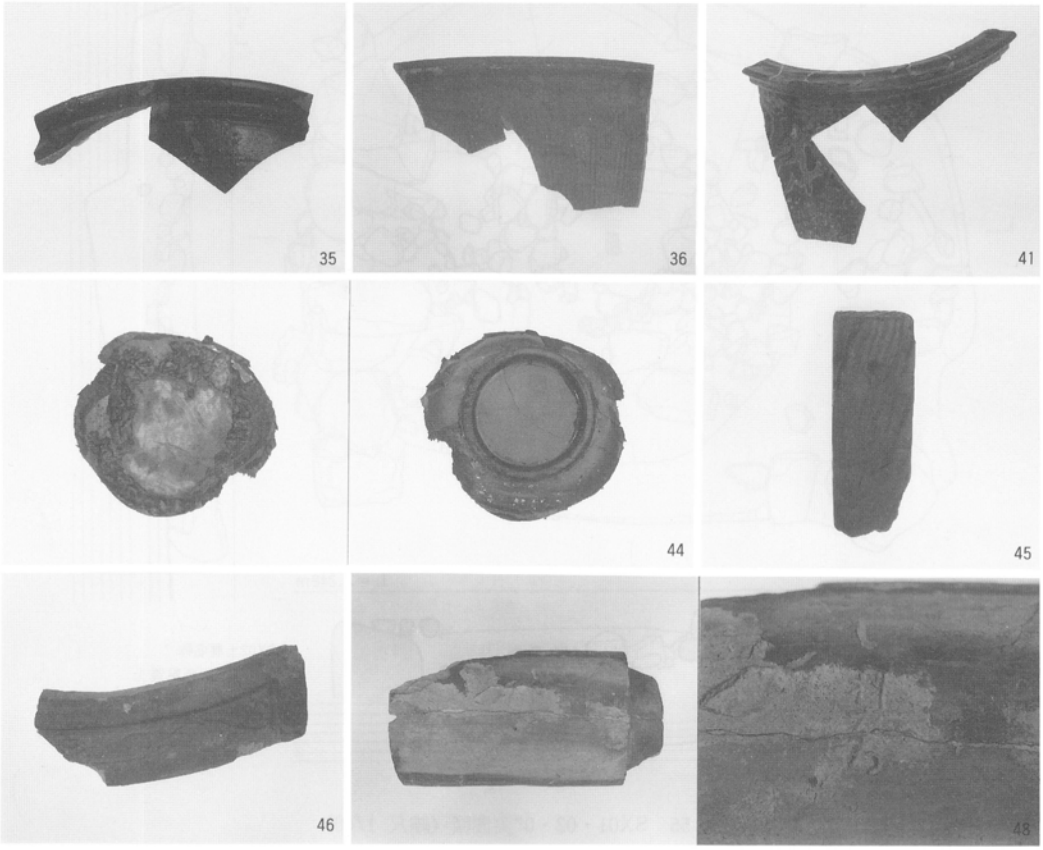
(3) 不定形土壙・墓・構築物（SX）及び出土遺物

用途が不明な遺構をSXと称したが、これらには墓、石積遺構、又は内部に石積みや配石を有している土壙、或いは室状の板囲いを有する土壙の他構築物が含まれる。

SX01（Fig.55） 平面形は不整楕円形を呈す。底面は不定で、特に壁は荒れている。土壙上部に長さ18～60cm大の石が環状に配置されている。土壙中央部は径60～70cmの空間があること、一部に炭化した木の根があることから、庭木の植栽跡と考えられる。覆土から唐津焼碗、伊万里染付碗、皿などが出土した。

遺物（Fig.56）の内、1は唐津焼碗で、内外面に細かい貫入がある。2は17世紀後半代所産の肥前系碗である。3はクロム青磁皿で、釉は厚い。4・5は肥前染付で、4の皿は内底に龍文を描く。5の碗の外面には唐草文、内面には飛龍文を施す。

SX02（Fig.55） 平面形は不整隅丸方形を呈し、断面形は2段掘りになっている。SX03に切られており、現存長362cm、深さ76cmを測る。土壙上部には大きさが10cm～22cm程度の礫、及び長さ56cmを測る大石が環状に2重に配置されている。内部の環状列石の内径は58cmを測る。当初はこの空間部分を井筒の痕跡とみて、これらの列石を充塡のための石と見做していたが、井筒を確認



SX02出土遺物

※数字は実測図の番号に一致する。

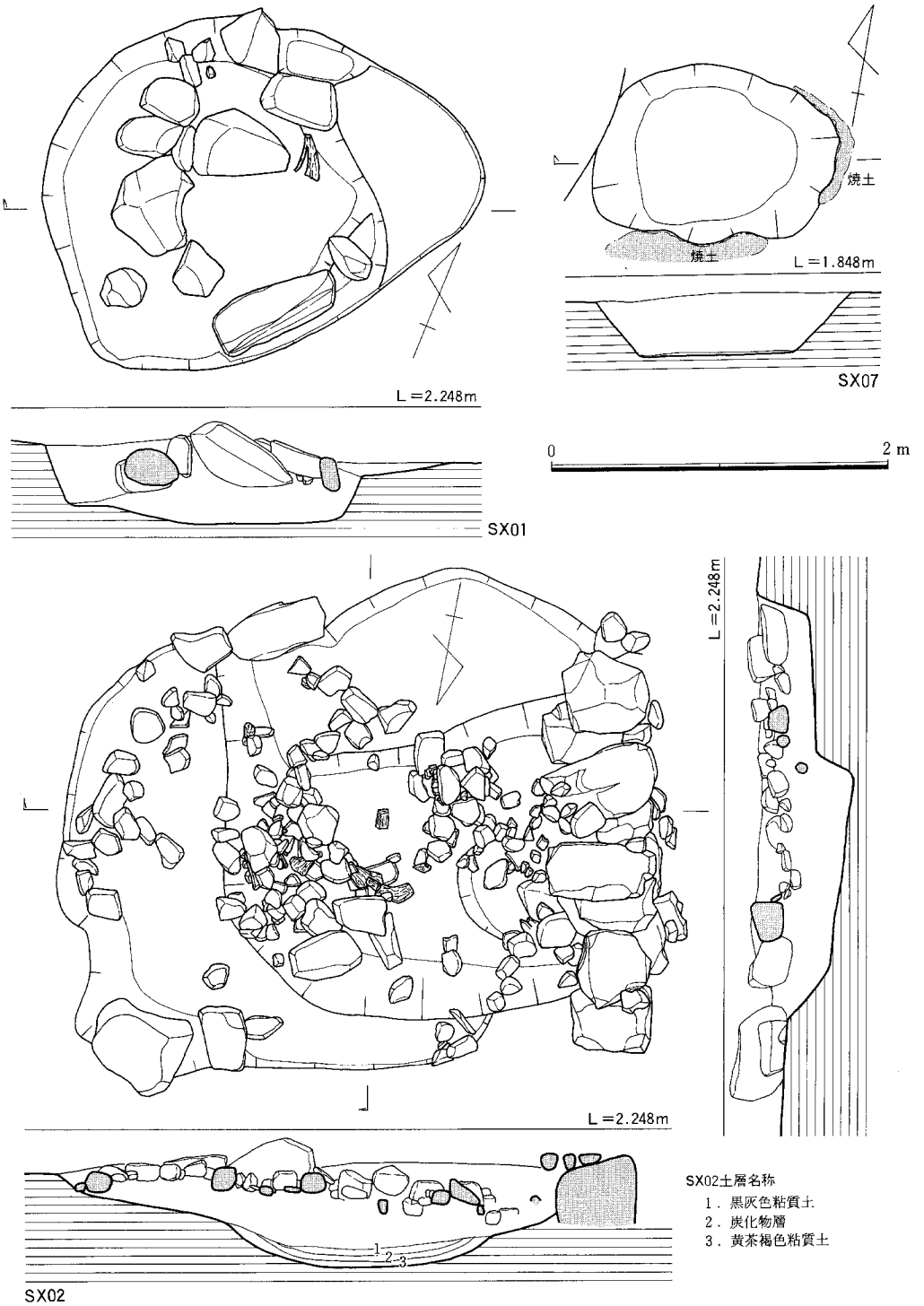


Fig.55　SX01・02・07実測図（縮尺 1/40）

SX01～03・21全景（東から）

SX02全景（東から）

SX02中央部の状態（東から）

することは出来なかった。

遺物（Fig.56・58・59）は江戸時代を中心としており、17～18世紀の肥前系陶磁器、土師質土器、瓦質土器、瓦類、漆器碗などが出土した。6～14は陶器碗である。9・12は唐津焼で、9の内底には胎土目痕がある。畳付は擦り消している。12は刷毛目碗、13は肥前系の碗で、内外面の釉は薄く、白色を呈する。高台畳付に目痕がある。李朝の系統を引いている。6・7・11・15・16は筑前産で、6・7の内底見込み、及び15の外底は輪状の釉ハギを行っている。胎土が良く似ている。18～22は白磁で、18・22は小坏である。19は糸切り底で、高台は貼付である。内面の文

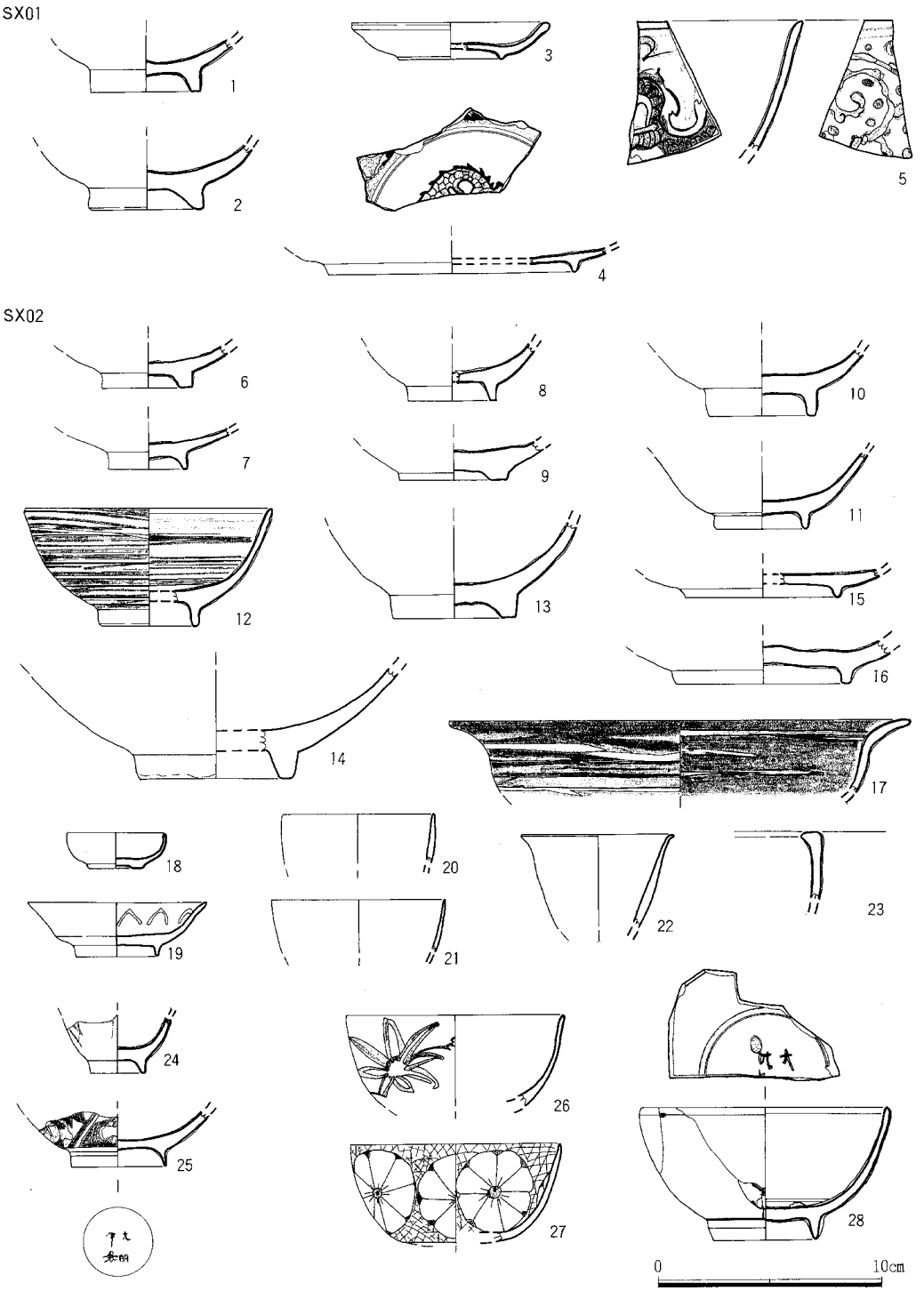
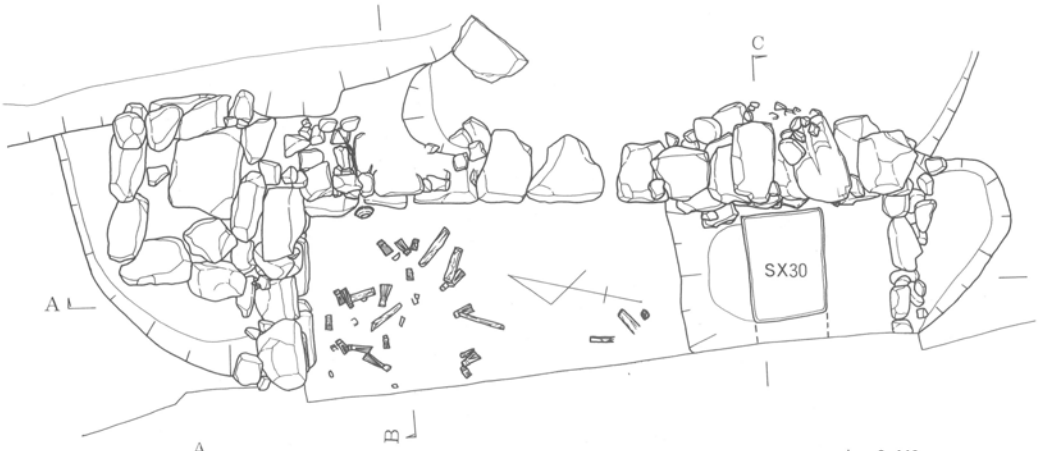
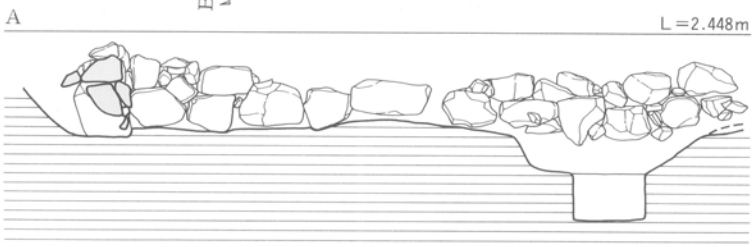
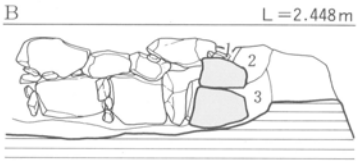


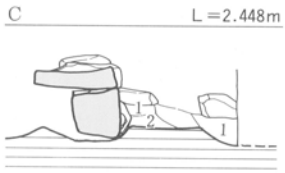
Fig.56　SX01・02出土遺物実測図（縮尺 1/3）



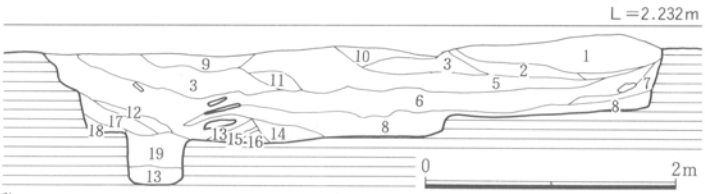




SX03土層名称
1. 黄青色粘土(固い)
2. 黄青色砂質土に1が混じる(しまりは固い)
3. 暗灰色粘質土



SX03土層名称
1. 暗灰色粘質土
2. 暗灰色粘質土と灰色砂層の互層



SX03土層名称
1. 炭化物層(木片を多く含む。黒色)
2. 暗茶灰色砂層(粗砂)
3. 黄白色砂層(微砂)
4. 黒褐色粘質土(鉄分含む)
5. 暗灰褐色砂層(粗砂)
6. 暗黒灰褐色粘質土(炭化物、瓦多く含む)
7. 6より青味を帯びる
8. 白色砂層(微砂)
9. 暗黒褐色砂質土(粗砂)
10. 炭化物層
11. 暗茶灰色粘質土
12. 灰白色砂層(微砂)
13. 暗黒灰色粘質土
14. 暗灰色砂層(粗砂)
15. 灰白色砂層(粗砂)
16. 明灰色砂層(微砂)
17. 暗灰色砂質土(同色粘質土の混入あり)
18. 暗灰色粘質土
19. 明黄色砂層(微砂)

Fig.57　溜桝SX03実測図・土層図（縮尺 1/60）

溜桝SX03土層状態（東から）

溜桝SX03・SX21完掘状態（東から）

溜桝SX03（西から）

SX03内遺物出土状態（西から）

SX03内筅出土状態（南から）

SX03内貝殻出土状態（西南から）

溜桝SX03裏込め状態（東から）

様は型紙摺りである。15～17は皿で、15・16は筑前産、17は唐津刷毛目皿である。23は青磁香炉である。これらは17世紀～18世紀後半の所産である。24～30は肥前染付で、24は小坏、25～29は碗、30は皿である。25の外底と28の内底には「太明年製」の文字がある。これらは、17世紀前半～18世紀後半の所産である。31・32は土師質土器で、31は小鉢、32は鍋又は、焙烙であろう。

33・34は瓦質土器で、33は摺鉢、34は捏鉢である。35・36・38～40は陶器の摺鉢で、35・38は高取系、36・39・40は唐津系である。37・43は陶器甕で、37は備前系、43は唐津焼である。42は唐津焼壺、41は筑前系の壺である。41の口縁平坦部には貝目痕がある。44・45は木製品で、44は漆器椀である。45の下位には釘穴がある。46・47は軒平瓦で、46の中心飾りは宝珠形である。48・49は丸瓦で、背部に刻印がある。48は「利右衛門」、49は「六郎右衛門」である。50は平瓦で、厚さは1.7cmを測る。51は「寛永通寶」である。

SX03（Fig.57）　江戸時代の溜桝である。西側境界地に位置しており、平面形は方形又は、長方形を呈するものと考えられる。壁面は石垣になっているが、遺存状態は悪く、1～2段しか残っていない。特に、南壁は石材が転落している。破損の大部分は調査前の鋤取り工事によるものである。溜桝の内法は長さ443cm、現存の深さ74cmを測る。底は平坦で、粘土を薄く貼っていた。南側の床には後出する土壙SK30が切り込んでいる。石垣は不整形に面取りした石を用いており、石の大きさは不揃いである。石の大きさは21～64cmを測る。掘り方は、石垣の面（つら）から幅60～100cm程度で、裏込め石を充填している。断面形は逆梯形である。石材は玄武岩、礫岩、変成岩を用いており、砂岩は少ない。SX03の北西側に接して、石組遺構SX21が構築されている。SX03に後出する時期の構築物である。

遺物（Fig.59～66）は溜桝内部に堆積していた黒色砂質土、又は泥炭質土から多量に出土した。特に泥炭質の土からは木製品、竹製品、獣骨、魚骨、貝類、漆器椀が出土した。他には土師器、肥前系陶磁器、瓦質土器、土師質土器、備前焼、土錘、貨幣、鉄製品、瓦類等が出土した。この内、52～75は層位的な取上げをしていない遺物である。52は土師器皿、53～62は肥前系の染付である。53～55は小碗、60～62は皿である。57は外面にコンニャク判、62の外底には文字がある。63は小石原焼碗、64は京焼風碗、66も同じく京焼風の皿、65は鉄釉碗である。以上、これらは17世紀後半～18世紀前半の遺物である。67は18世紀前半の唐津焼皿、68は唐津焼片口、69・70は陶器摺鉢で、69は17世紀代の備前焼、70は唐津焼である。71・72は唐津焼甕、73は備前焼、74・75は瓦質土器の火舎で、同一器形である。内面にはヨコ方向のカキ目を、外面上位には牡丹唐草文をスタンプする。

76～160は層位的に取り上げた遺物で、土層番号を遺物番号の側に付与している。76～78は土師器糸切り皿、79～81は坏、81は丸底坏である。82～88、90～102は染付で、82～88は皿、90～101は碗、102は蓋である。82～84は同一器形、同一文様のセット品で、内底にコンニャク判がある。87は17世紀後半の皿で、土壙SK12出土の皿と接合した。碗の内、98は京焼風を呈している。染付碗の年代は18世紀代である。102は八角形を呈した蓋である。105～108は伊万里系の白磁で、105は猪口、107・108は碗である。107の口縁部は菊花状である。89は陶器で、現川窯である。103・104・109は陶器碗で、103・104は京焼、109は小石原焼の天目碗である。110～112は瓦質土器の火舎で、脚は110・111が3脚、112は不明である。内面はナデ調整である。113～117は土師質土器

である。113は外耳の鍋で、焙烙かもしれない。114・115は焼塩壺の蓋、116・117も蓋である。118～121は陶器で、118・119・121は唐津系摺鉢、120は壺である。122は素焼きの七輪で、内面上位に鍋支えの突起がある。体部の壁は2重構造になっている。口縁部に孤形の抉込みが4ヶ所ある。123～126は鉄製品で、123は鋏、124は庖丁、126は釘であろう。

瓦類は多数出土したが、この内、127～129が軒丸瓦、130～137が丸瓦、138～142が平瓦、143が鬼瓦である。軒丸瓦の瓦当面には三巴文を配し、巴文はいずれも左転している。丸瓦の130～132の背部には刻印がある。130は「○○左衛門」、131は「○○右衛門」、132は「了三郎」、又は「一郎三郎」であろう。131は崇福寺山門の屋根瓦に同例の刻印瓦がある。133・137には釘穴がある。134の背部は縄目の叩き痕があり、他の瓦より年代的に古い様相をもっている。[註1] 135の内面はヘラケズリ痕がある。138の平瓦はいわゆる桟瓦である。139はヘラナデ痕、140は糸切り痕が認められる。142には釘穴が、141には「利右衛門」銘の刻印がある。143は鬼瓦の外縁裾に相当する部分である。その他には、144の土錘、145・146の「寛永通寶」がある。147～158の木製品の内、147～155は樽の木栓である。157は木栓か。158は漆器椀、156は面取りは丁寧であるが、半折しており、器形は不明。159・160は筆の柄で、尻骨部分である。柄の竹管の径は各々0.9cm、1.1cmである。竹製品は他に筅が19点出土している。その他に自然遺物として獣骨、魚骨、貝類がある。貝類にはサザエ1点、ツメタガイ37点、コロモガイ2点が出土している。

SX04（Fig. 5）　井戸SE02・04に切られている。平面形は不整円形を、断面形はレンズ状を呈する。最大の長さ152cm、深さ25cmを測る。

遺物（Fig.67）は中世後半期を主体にしており、土師器坏・皿、中国陶磁器、染付、備前焼、瓦質土器、軒丸瓦、硯等が出土した。161～164は土師器糸切り皿、165は糸切りの坏である。166は唐津焼碗で、内外面に鉄釉を施す。167は明代の青磁壺の脚であろう。168は青磁碗で、同安窯系と考えられる。169は明代末の染付小碗である。170・171は備前焼で、171は瓶、170は摺鉢である。170はⅣ期に属する。174は筑前系甕の胴部片である。172・173は瓦質土器で、172は摺鉢、173は湯釜で、外面に菊花文のスタンプがある。175は軒丸瓦で、瓦当面に簡略化した8弁の蓮華文を施している。瓦当面径は10cmである。176は長方硯で、裏面は一部がスリ上げされている。表面の海部と岡部の境は明瞭な区別がつかない。材質は砂岩である。

SX07（Fig. 55）　平面形は不整隅丸長方形を呈し、断面形は逆梯形である。長辺の長さ143cmを測る。壁面は粘土が貼付けられており、固く締まっている。緑灰色に汚染されている。

遺物（Fig.69）は江戸時代の陶磁器を主体としており、土師器坏・皿、肥前陶磁器、備前焼摺鉢、瓦質土器、土師質土器、瓦類が出土した。179・180は糸切り底の土師器皿、181は坏、182は染付の猪口である。183は瀬戸・美濃系の皿で、外底部に輪状の目痕がある。184は碁笥底の皿で、16世紀代の明染付である。内底は露胎である。185はヘラ描きの蓮弁文の青磁碗、187は白磁碗で、畳付と内底に砂目痕がある。釉は全体に施している。188・189は唐津系陶器で、189は溝

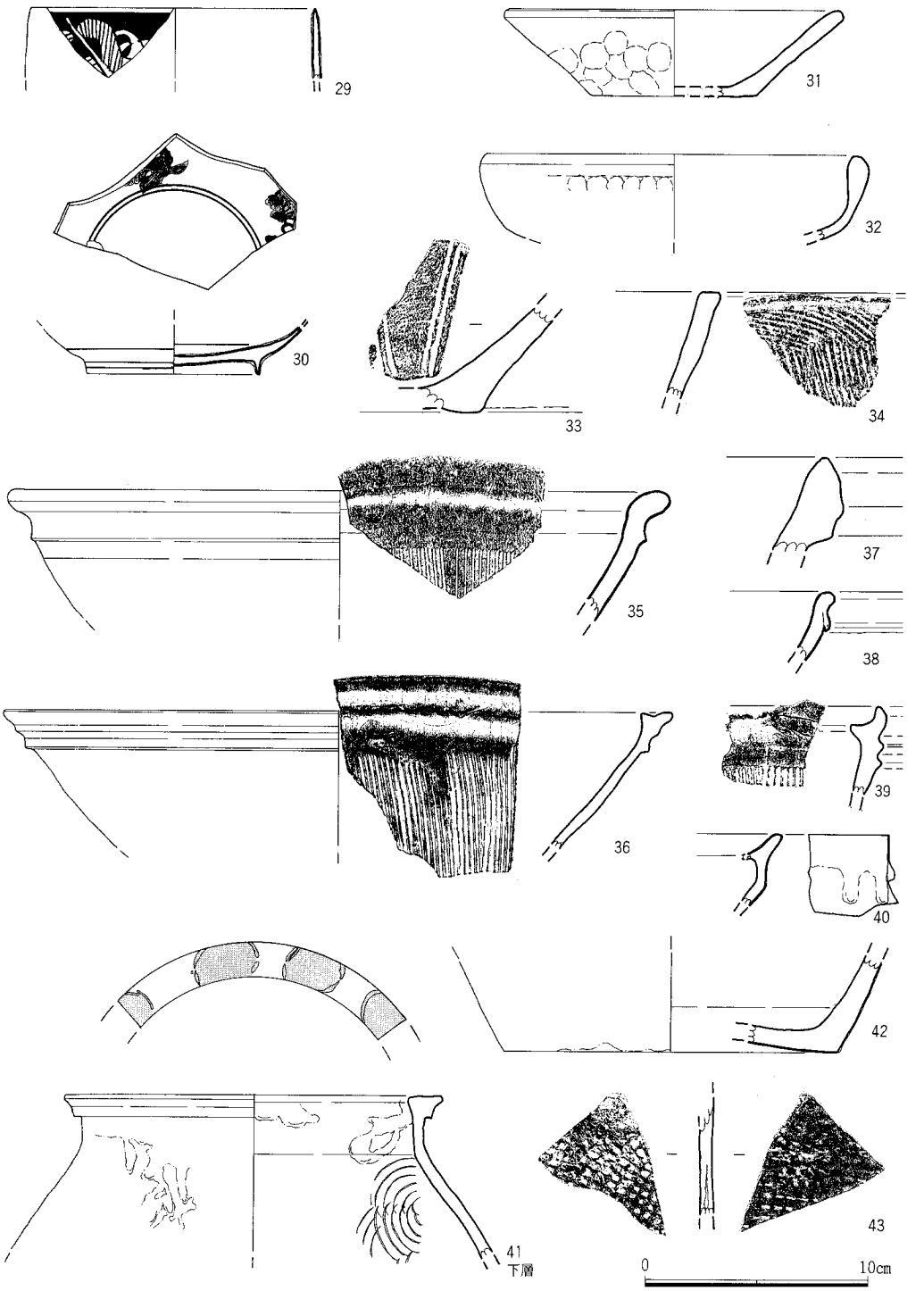


Fig.58　SX02出土遺物実測図（縮尺 1/3）

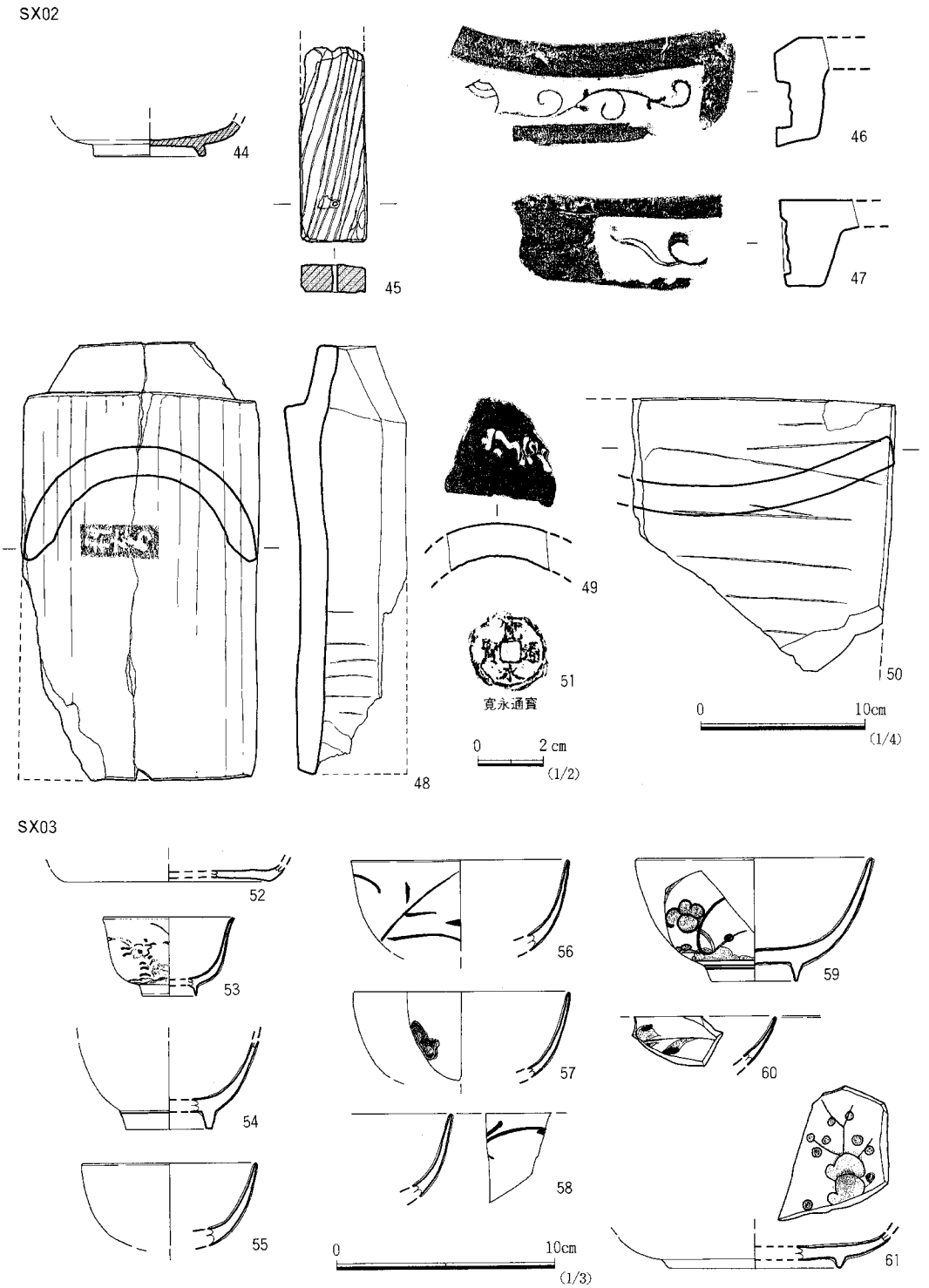


Fig.59　SX02・03出土遺物実測図（縮尺 1/2・1/3・1/4）

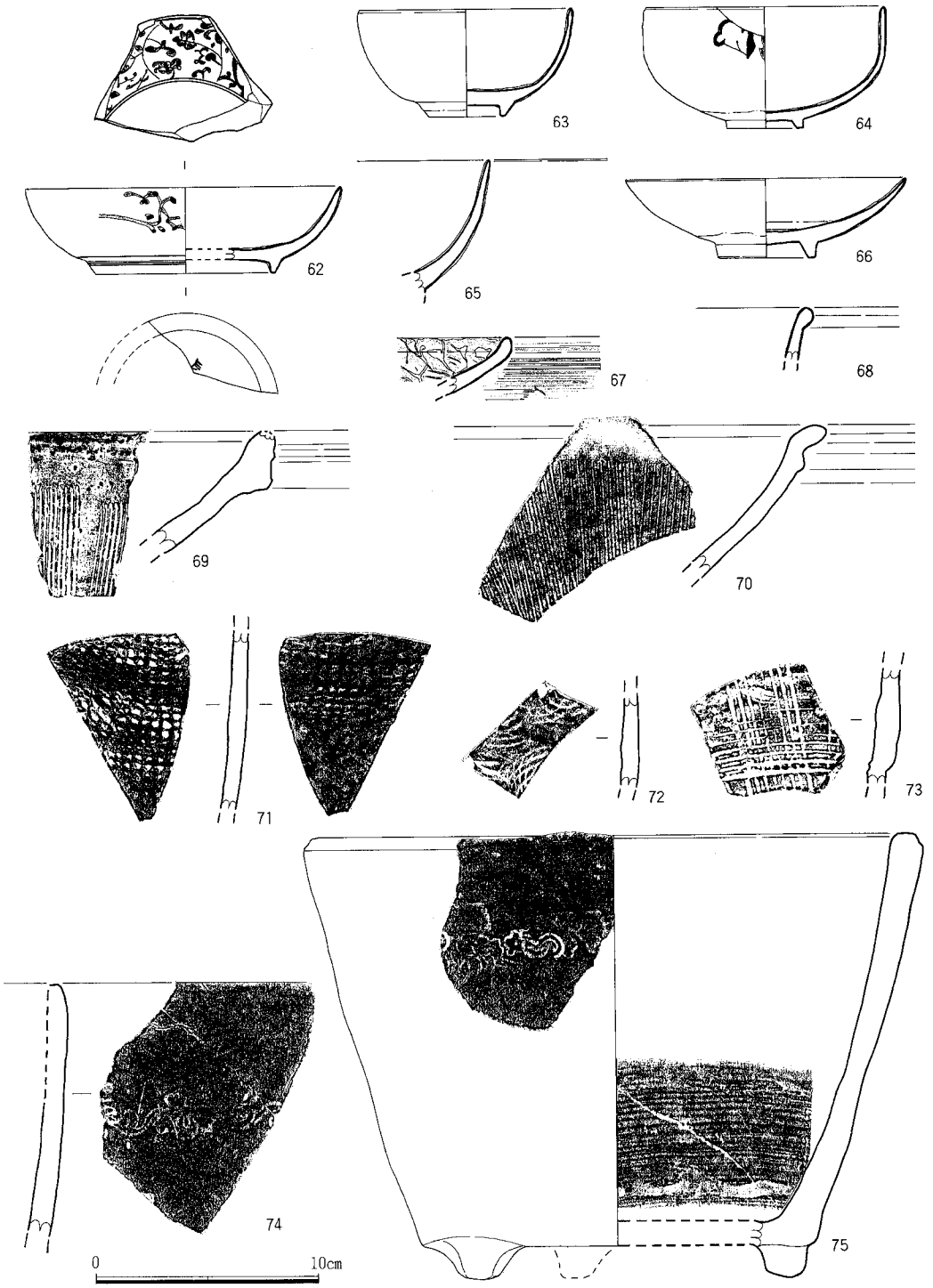


Fig.60　溜桝 SX03出土遺物実測図 ①（縮尺 1/3）

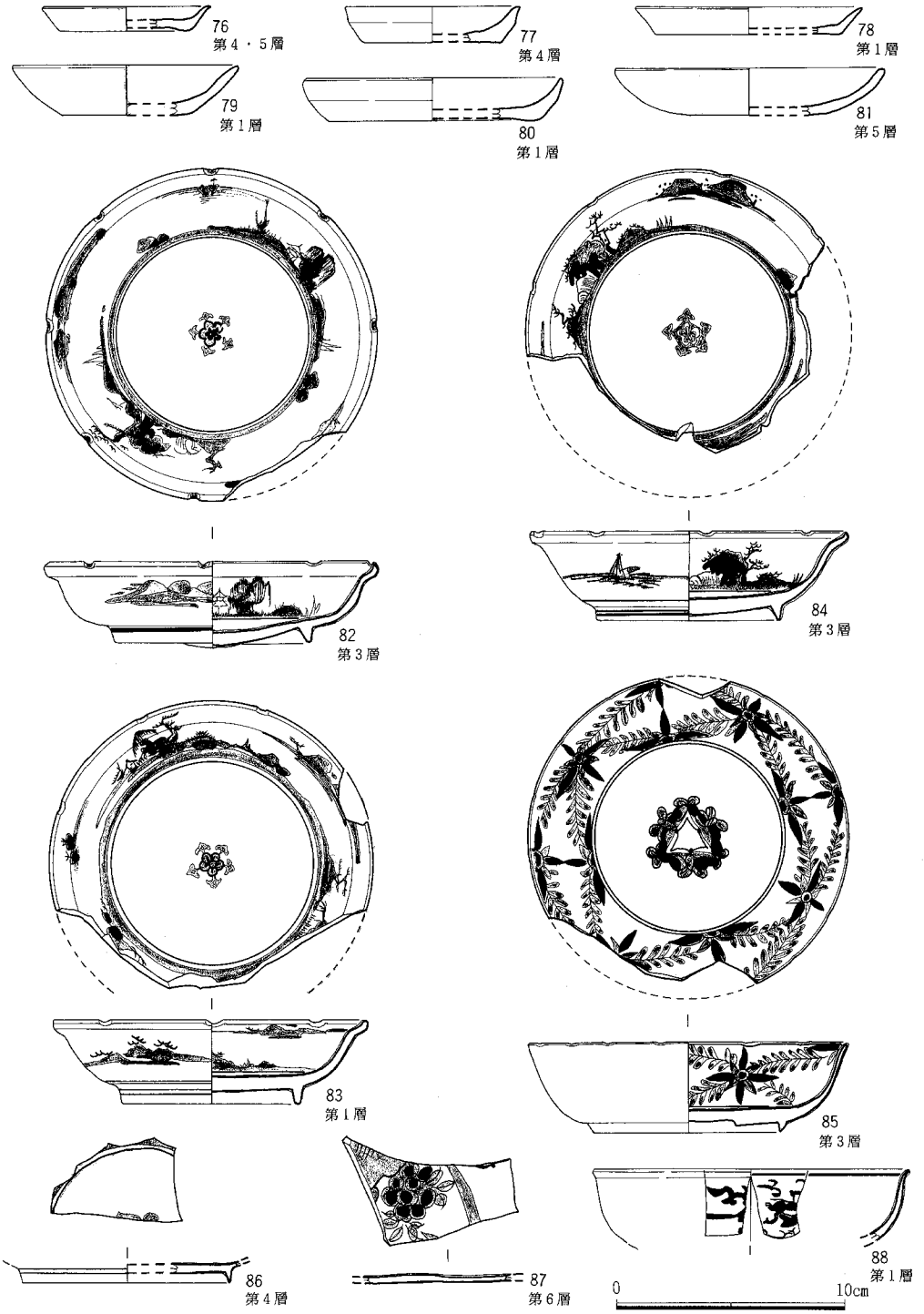


Fig.61　溜桝 SX03出土遺物実測図 ②（縮尺 1/3）

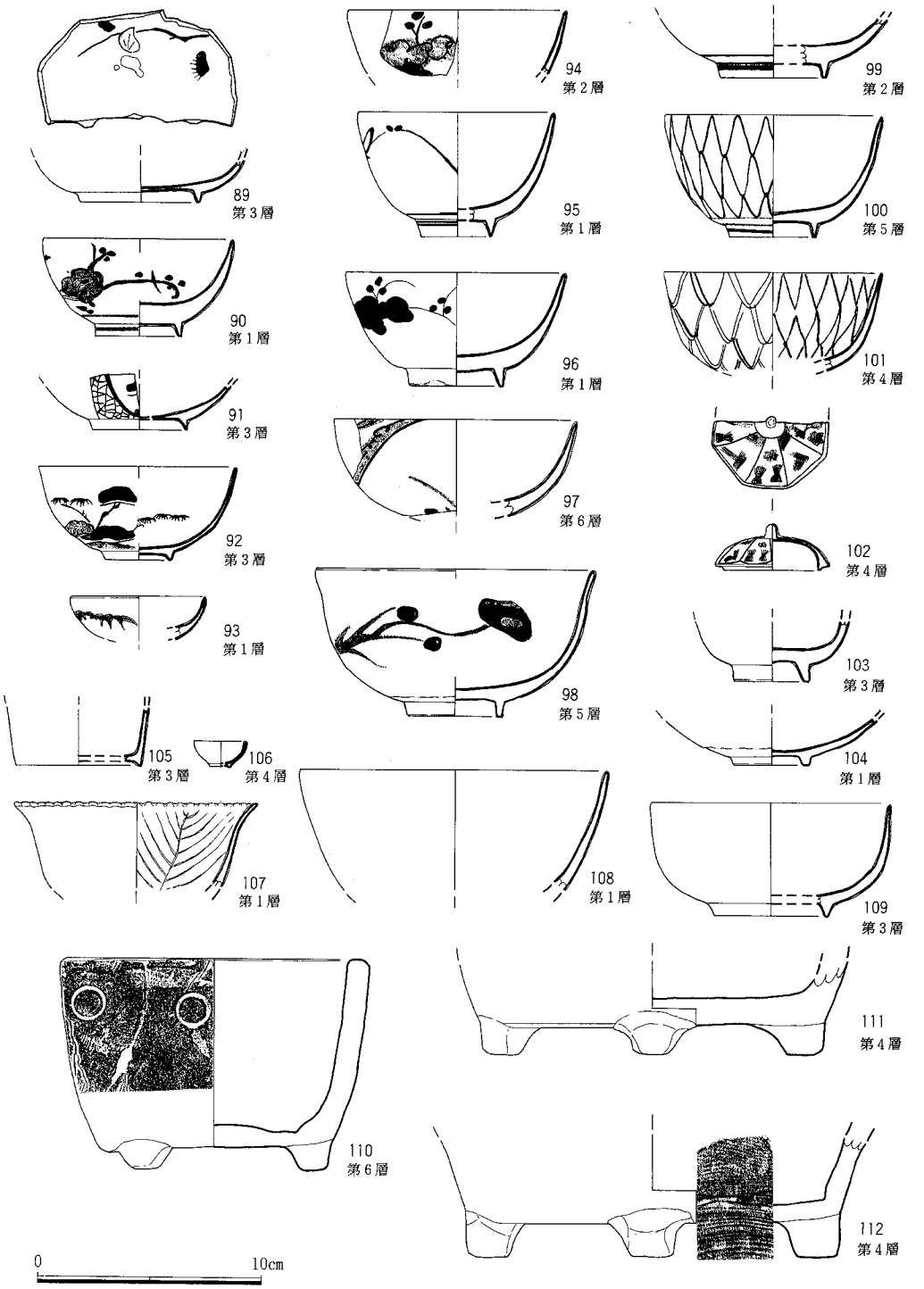


Fig.62　溜桝 SX03出土遺物実測図 ③（縮尺 1/3）

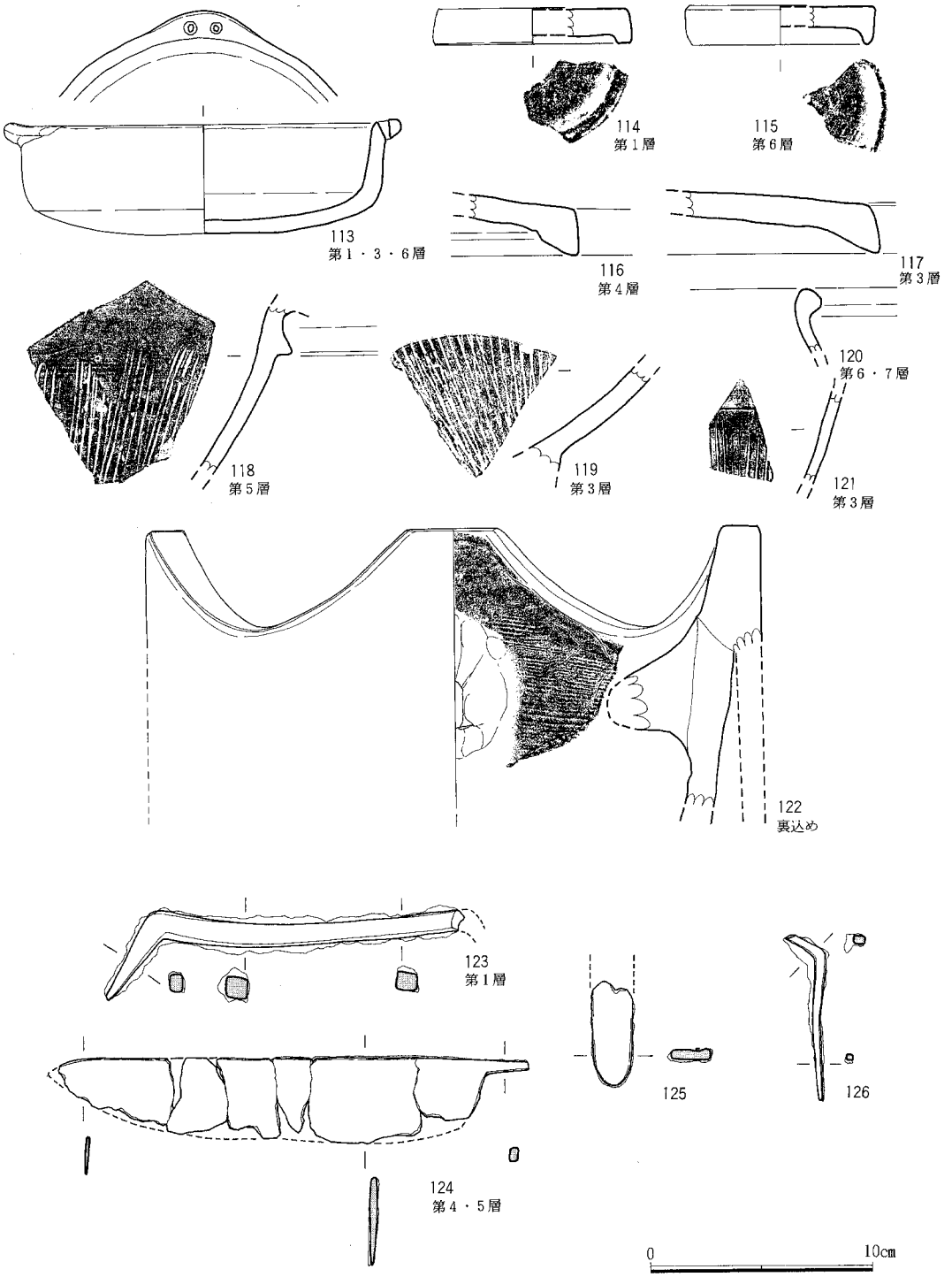
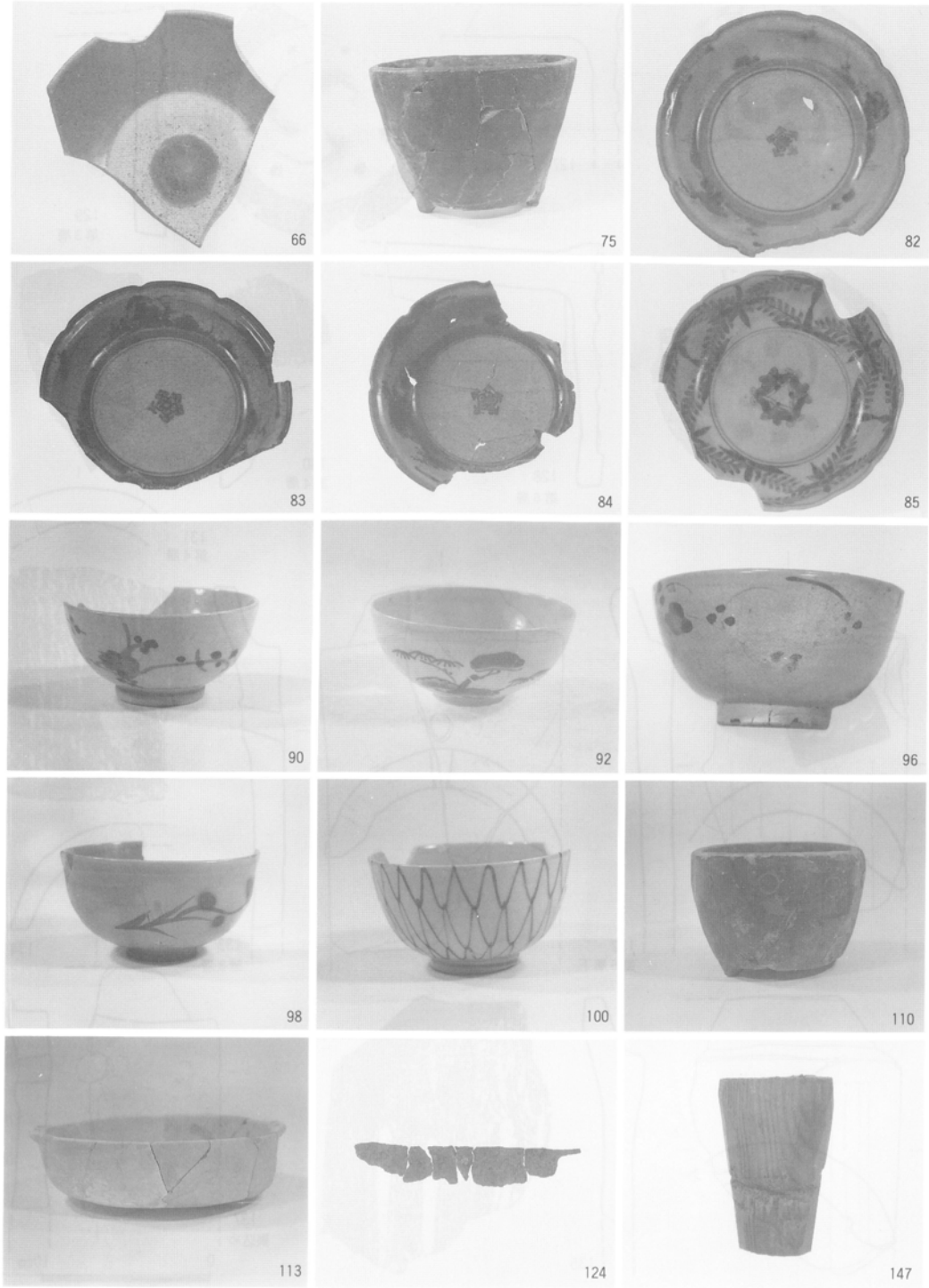


Fig.63　溜桝 SX03出土遺物実測図 ④（縮尺 1/3）



溜桝SX03出土遺物

※数字は実測図の番号に一致する。

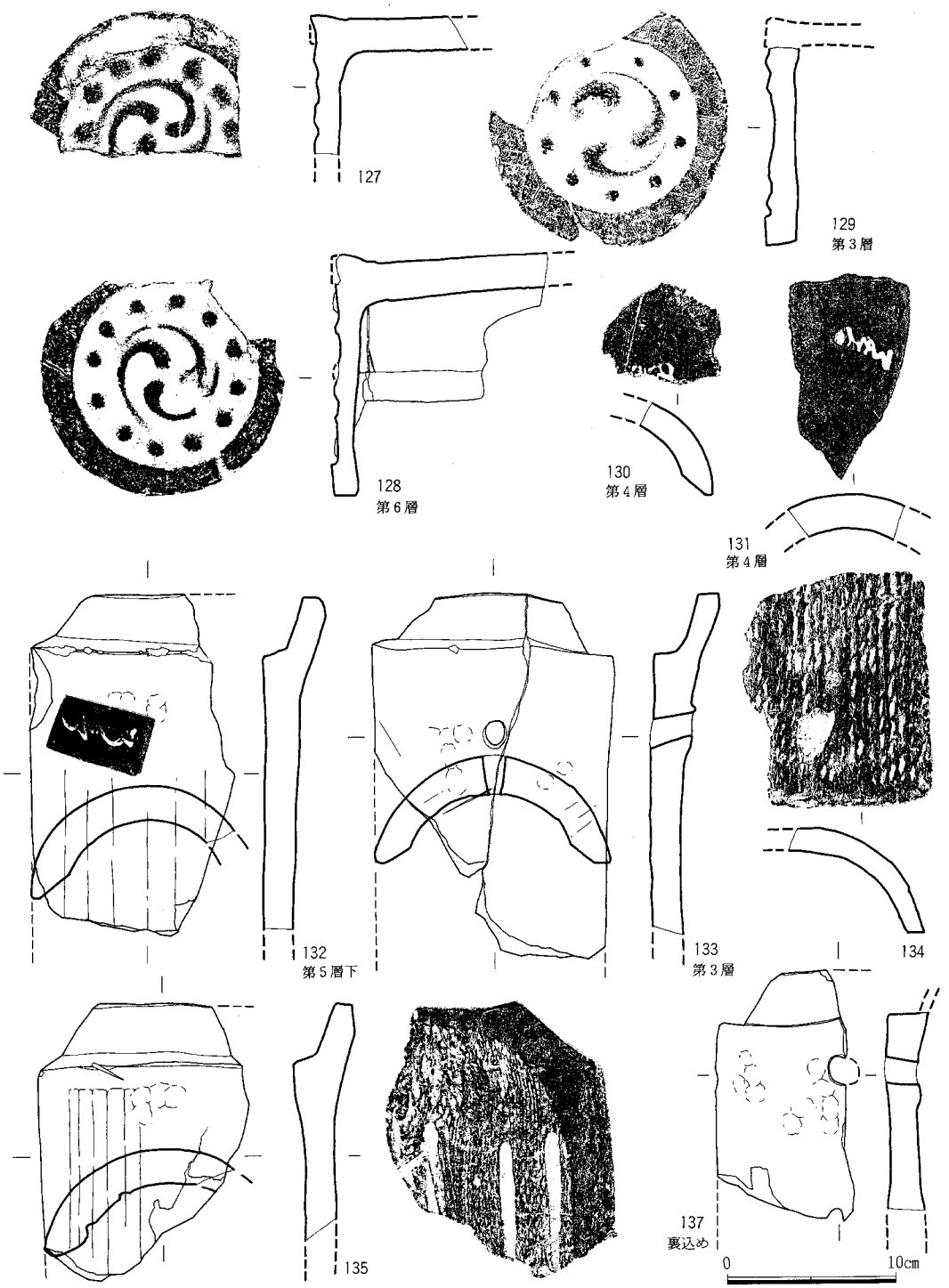


Fig.64　溜桝 SX03出土遺物実測図 ⑤（縮尺 1/4）

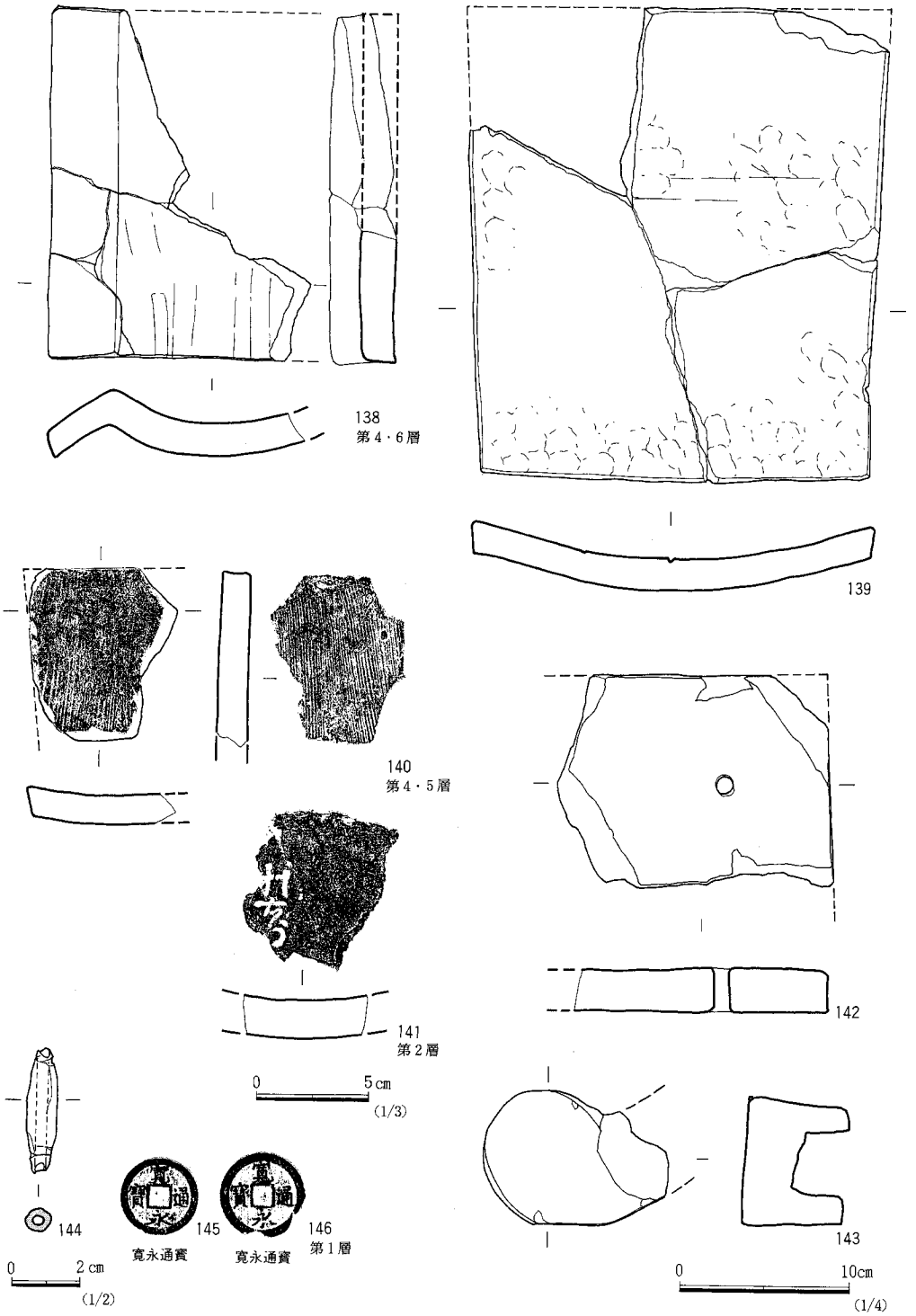
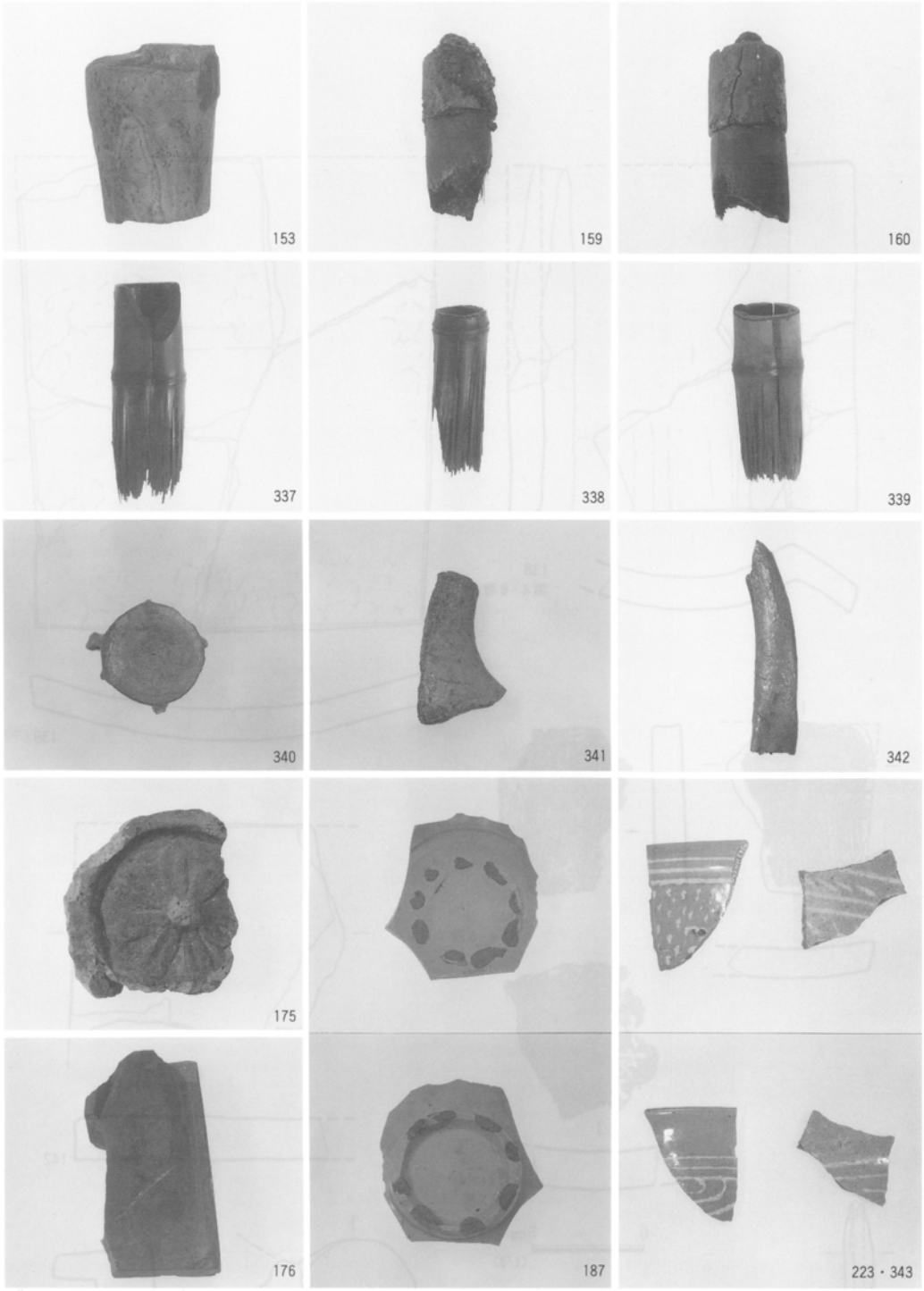


Fig.65　溜桝 SX03出土遺物実測図 ⑥（縮尺 1/2・1/3・1/4）



SX03・04・07・16出土遺物

※数字は実測図の番号に一致する。
337～342はSX03、175・176はSX04，187はSX07出土
223・343はSX16出土

縁の大皿である。内底に目痕がある。186は須恵質土器の瓶で、外面に格子目の叩き痕がある。朝鮮半島からの搬入品である。191・192は瓦質土器の火舎、190は土師質土器の鍋、193～196は摺鉢で、193は備前焼、194・196は肥前系、195は瓦質土器である。195は内外面に粗いカキ目状のヨコハケを施す。197は軒平瓦、198は道具瓦である。198には焼成前に穿孔した釘穴がある。

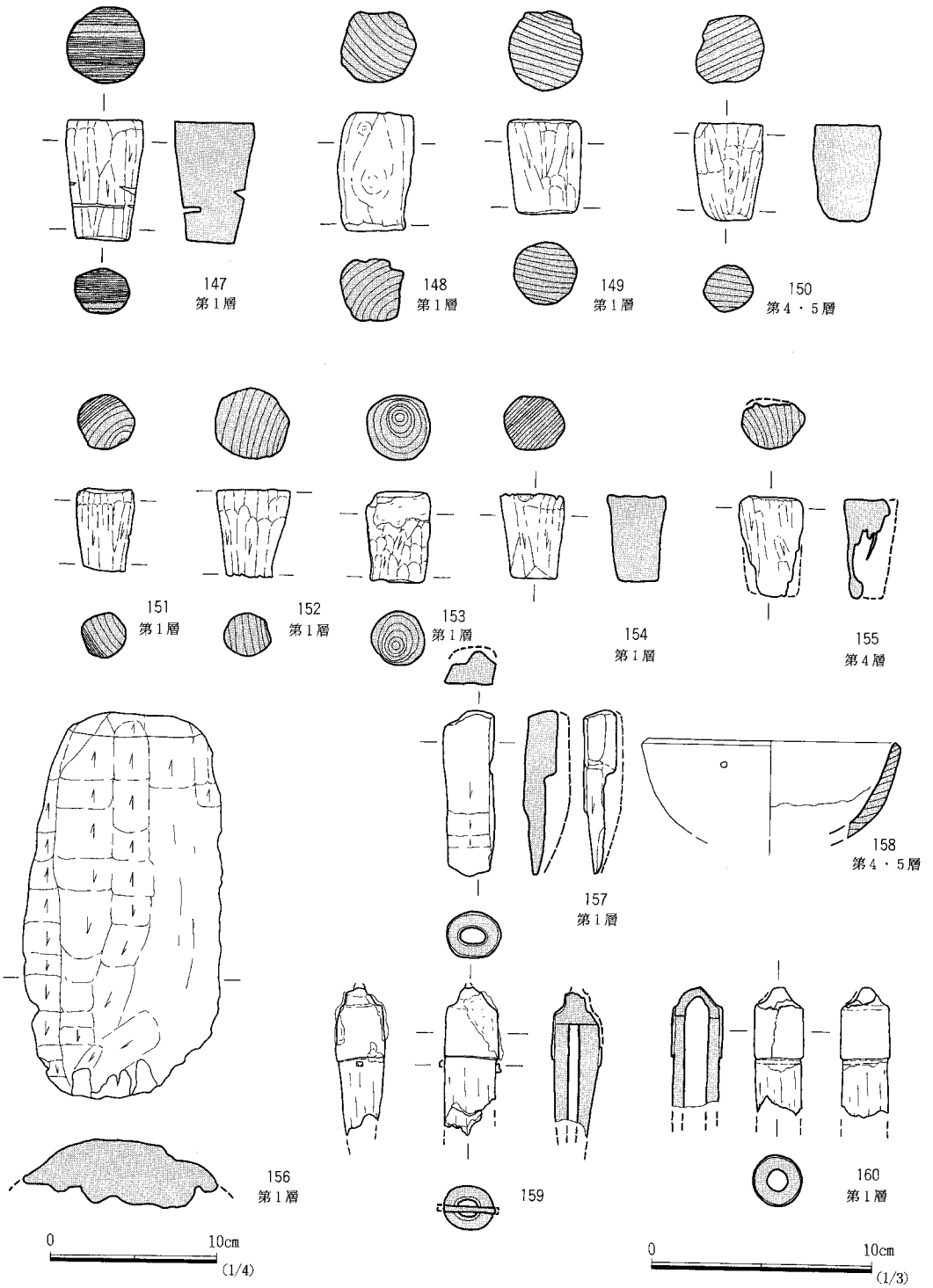


Fig.66　溜桝 SX03出土遺物実測図 ⑦（縮尺 1/3・1/4）

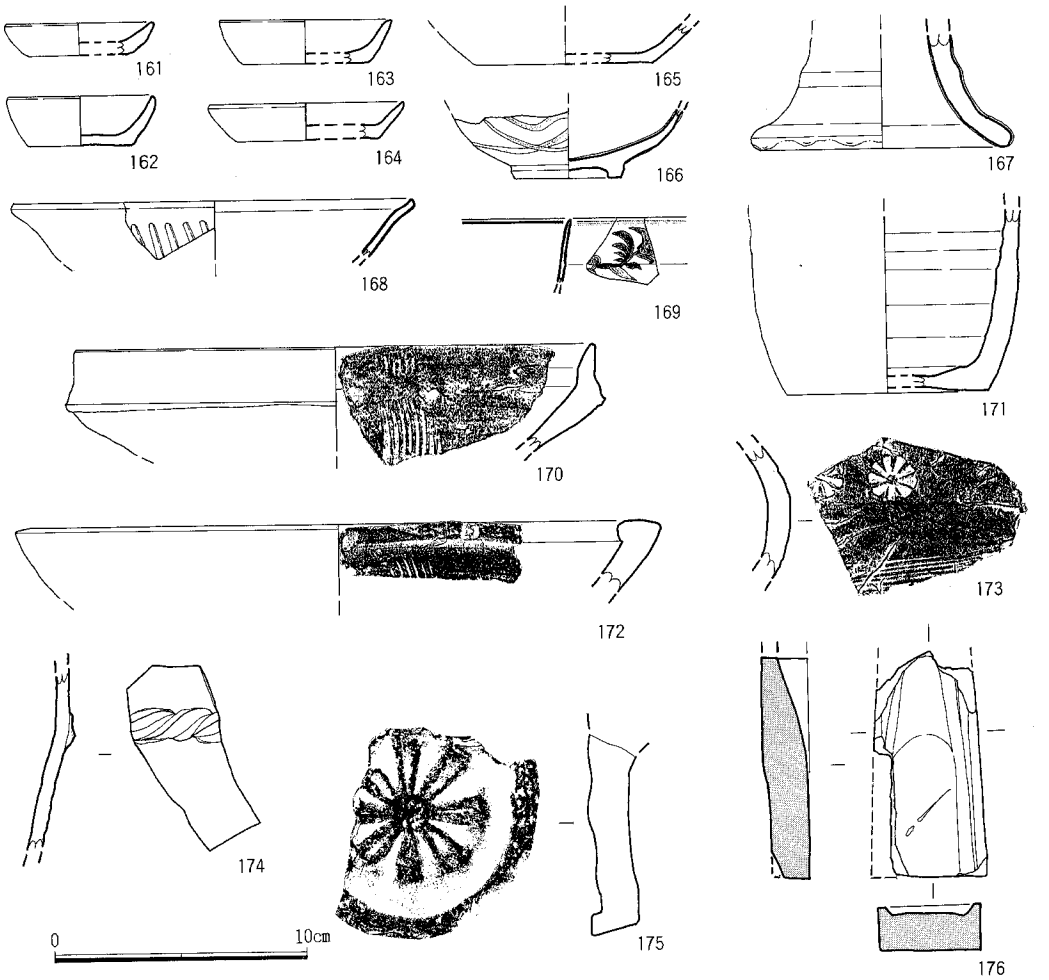


Fig.67　SX04出土遺物実測図（縮尺 1/3）

SX10（Fig. 5）　北側境界地にあるため全形は不明である。境界地の斜面が崩壊する危険があったため発掘は一部にとどめた。

遺物（Fig.70）は土師質土器、土師器皿片、舶載青磁碗が出土している。199は土師質土器の摺鉢で、内外面はナナメ方向のハケ調整である。下し目は磨滅している。

SX11（Fig. 5）　平面形は不整長方形を呈するが、底面は不定で、凸凹が著しい。SE12・19、SX07に切られる。壁面、及び床面は粘土質の土で固く締まっており、緑味を帯びた褐色を呈している。

遺物（Fig.70）は中世後半期を主体としている。200～202は土師器の糸切り皿、203～206は糸切り底の坏である。204の外底には板目痕がある。207は明染付碗、208は瓦質土器の摺鉢である。

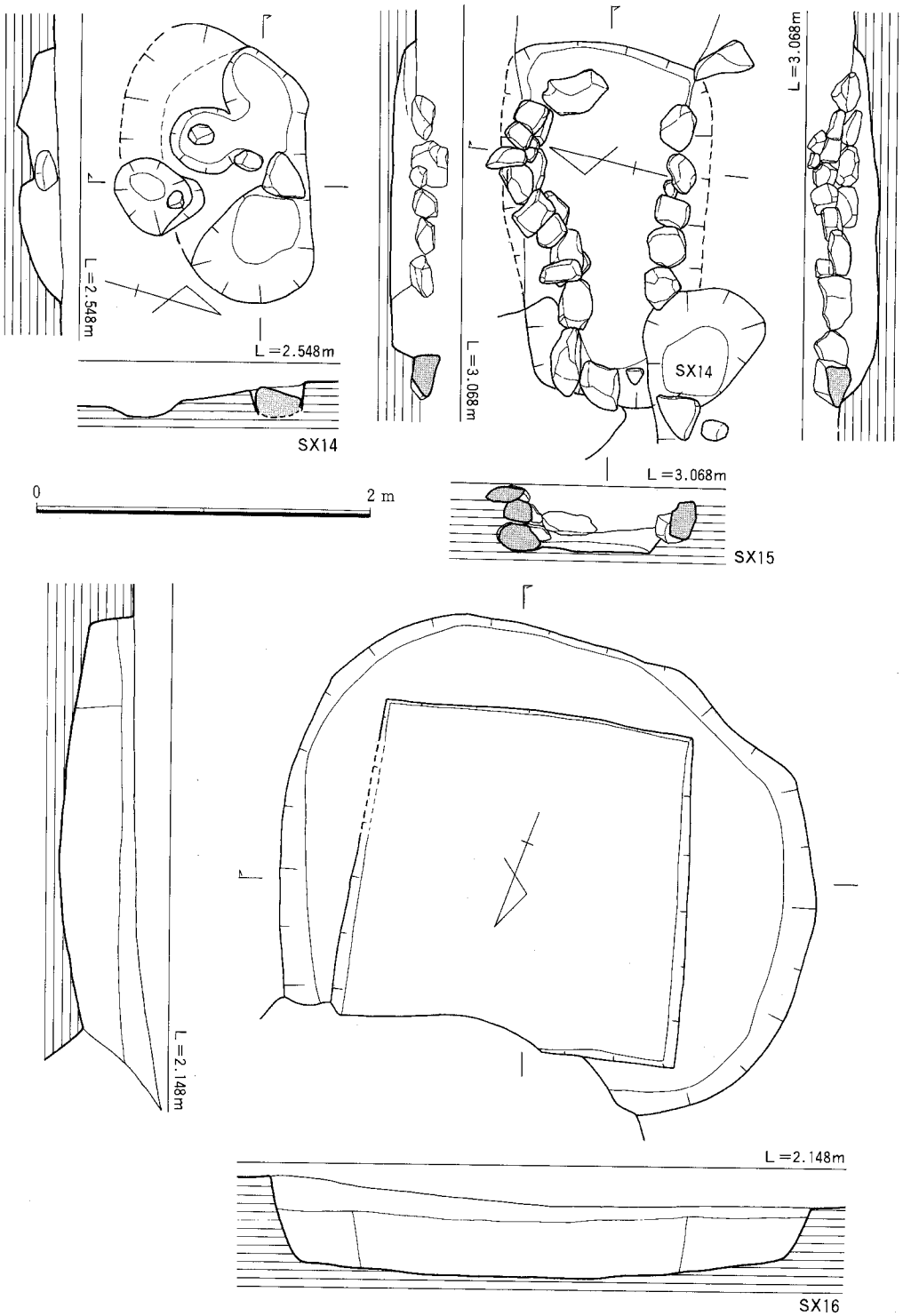


Fig.68　SX14・15・16実測図（縮尺 1/40）

SX15（南から）

SX16（東から）

SX19（南から）

SX20（南から）

209は備前焼Ⅴ期の摺鉢である。

SX14（Fig.68）　土壙の崩壊が著しいため形状をとどめていない。平面形は不整楕円形を呈しており、底は不定で、凸凹が著しい。礫が数個存在する。

遺物（Fig.70）は瓦質土器の鉢、瓦類が出土した。211・212は丸瓦で、内面に布目痕がある。210は瓦質土器の捏鉢で、内面はヨコハケ調整である。

SX15（Fig.68）　北側境界地に位置し、他の遺構と切り合うため、全形は遺存していない。掘り方の形状は不明。現存長218cmを測る。土壙の内側に、円礫、又は角礫を用いた石室状の石積みがみられる。この石積みは1～3段遺存しているが、土壙の小口部分は石積みの破損が著しい。この石室状遺構の内法は最大長190cm、最大幅65cmを測るが、東側の小口が広くなっている。底面は平坦であることなどから墓と考えられる。

遺物は土師器皿片、磁器片がある。

SX16（Fig.68）　井戸SE14に切られる。江戸時代の室と考えられる。掘り方は不整円形を呈し、最大長323cmを測る。内部に一辺187～198cmを測る板囲いがある。四隅に角材を打ち込んで、板材

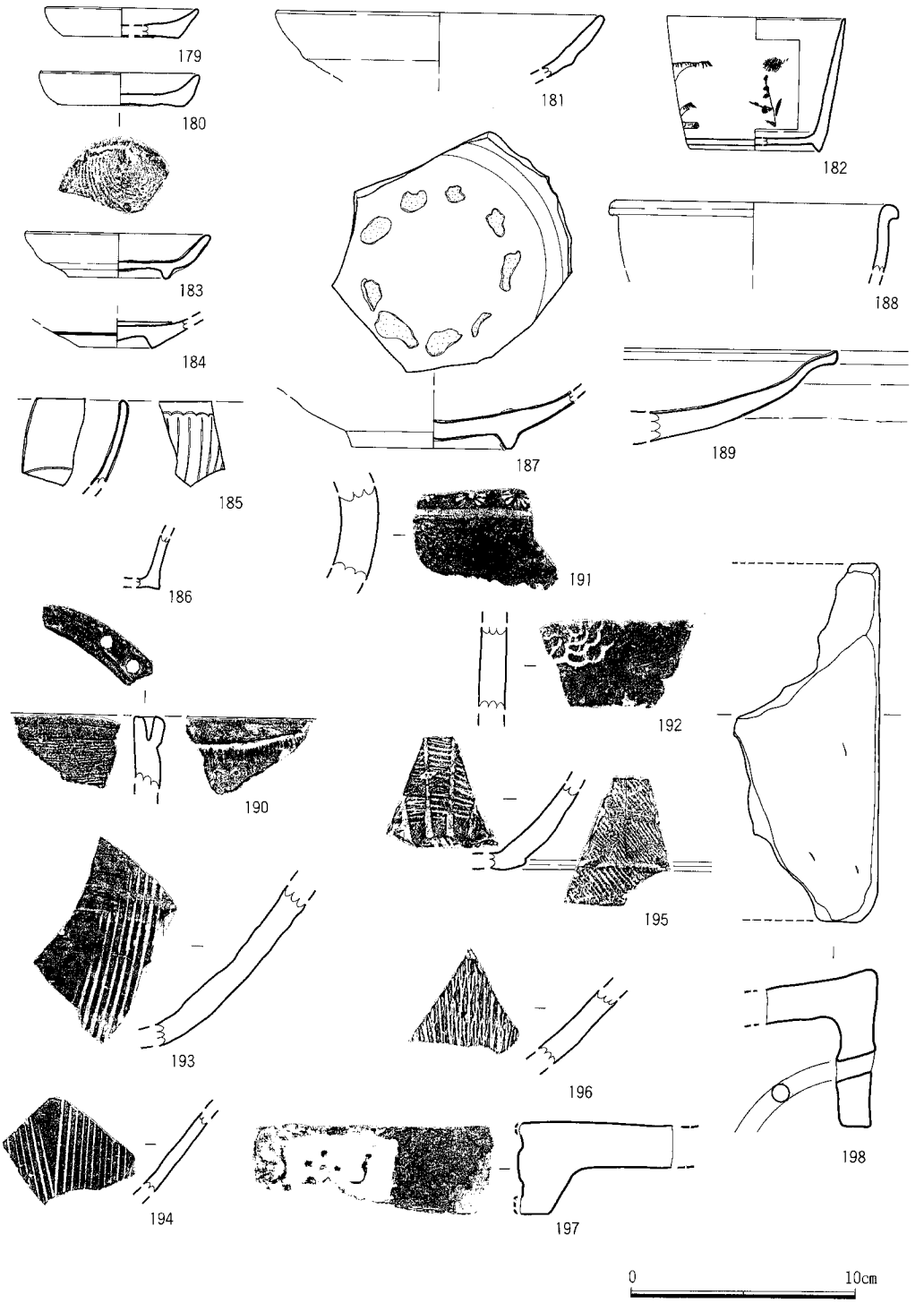


Fig.69　SX07出土遺物実測図（縮尺 1/3）

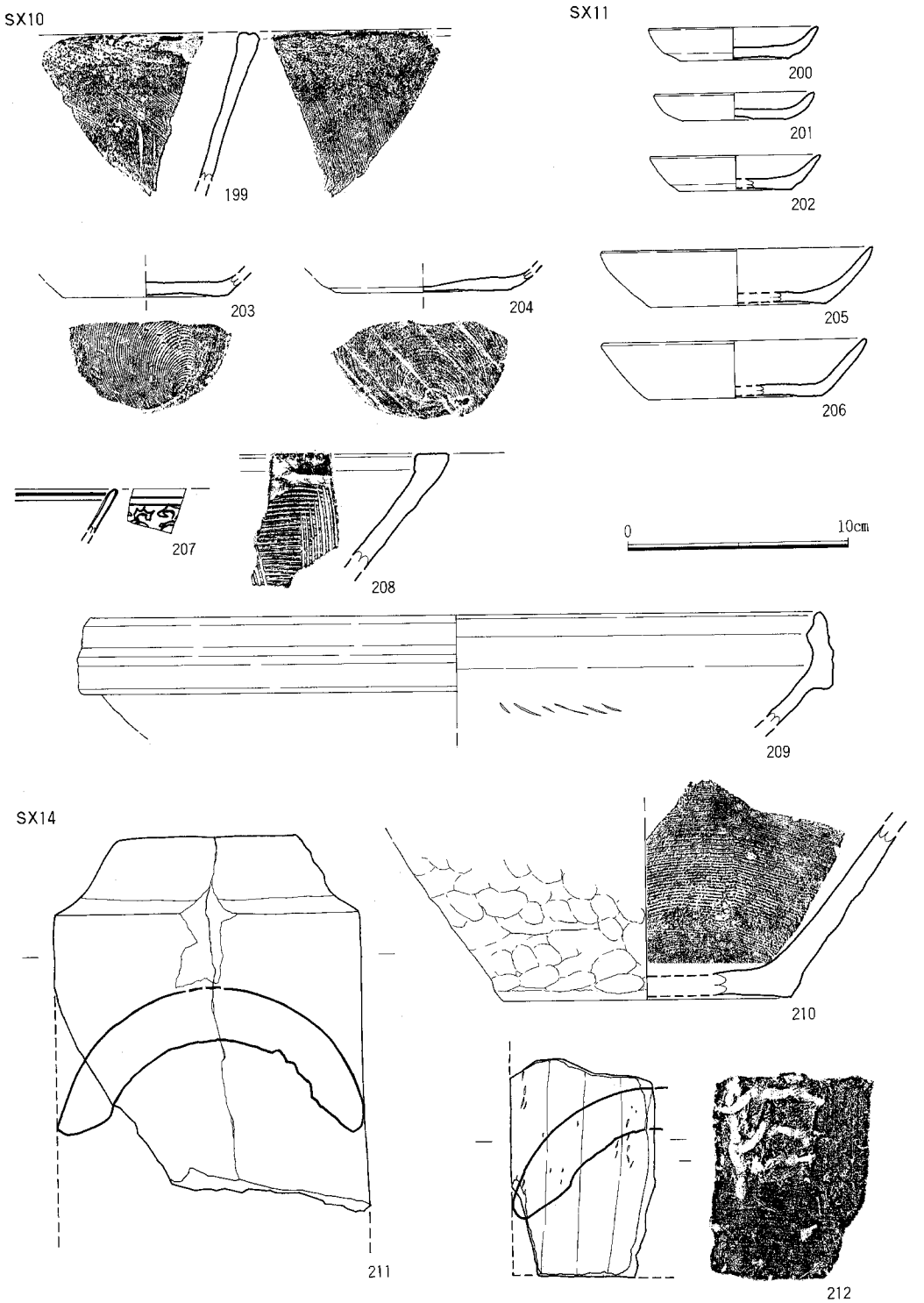


Fig.70　SX10・11・14出土遺物実測図（縮尺 1/3）

を横に用いたものと思われる。板材の厚さ、幅は不明である。

遺物（Fig.71・72）は土師器坏・皿、中国陶磁器、肥前系陶磁器、土師質土器、瓦質土器、備前焼、鉄製品、瓦類がある。214～216は土師器の糸切り皿、217～219は糸切りの坏である。220は明末の白磁皿で、内底は輪状の釉ハギがある。224は明染付皿で碁笥底である。225は白磁の輪花皿で、型作りである。内面に花文がある。肥前系の白磁である。227・229～234・239・240は唐津焼で、227・230～233は皿、229は碗、239は鉢である。230は鉄絵皿、231・232は溝縁皿である。229の内底には砂目痕がある。239は内面に刷毛目を施す。240は朝鮮唐津の瓶で、外面に藁灰鉄釉を施す。外底に砂礫が付着している。234は唐津片口鉢である。238は肥前系の刷毛目皿、237は瀬戸・美濃系の碗である。222は17世紀中頃の青磁碗、221・226は白磁碗、228は筑前産の陶器碗である。228は磁器手である。235・236は染付碗、223は高麗の象嵌青磁碗である。241は舶載陶器の壺である。242は土師質、243は瓦質土器の摺鉢で、243の下し目は７本単位である。244・245は土師質土器の鉢、247は土師質土器の鍋、248は東播系の須恵質土器鉢、250は二彩刷毛目の唐津焼鉢である。251は筑前産の甕で、口縁部平坦部に貝目痕がある。249・252～254は陶器摺鉢で、249・252は備前焼、254は唐津焼、253は高取系と考えられる。255は平瓦、256は丸瓦である。257は鉄製品である。現存長5.9cm、現存幅1.9cm、厚さ1.4cmを測る。中空になっており、内法は縦幅1.5cm、横幅0.3cmを測る。刀子類の鞘であろう。

SX18（Fig.５）　北側境界地に位置し、且つSK20に切られるため、土壙形状は不明。発掘は完了していない。現存長136cmを測る。

遺物（Fig.74）は土師器坏・皿、平瓦、鉄製品（釘）が出土している。258は土師器皿、259は坏で、いずれも糸切りである。

SX19（Fig.５）　井戸SE15・16と切り合っており、形状、深さ共に不明である。15世紀から16世紀の土壙である。

遺物（Fig.74）には土師器坏・皿、陶磁器碗、瓦質土器、瓦類、鉄製品などがある。260・261は土師器糸切り坏、262は須恵器蓋、263は同安窯系青磁碗、264は青磁瓶の口縁部片、265は瓦質土器の角火鉢である。外面には丁寧な燻研磨が施される。外面上位に四方襷文を刻印する。268も同じ火舎で、外面に菊花文を刻印する。内外面は丁寧な作りである。266・267は瓦質土器の鉢で、266は摺鉢である。269は道具瓦で、焼成前に穿孔した釘穴がある。形状は三角形を呈しており、隅瓦であろう。270は丸瓦で背部に縄目の叩き痕がある。271は鉄製釘である。

SX20（Fig.73）　平面形は不整楕円形を呈し、底面は舟底状を呈する。現存長177cm、最大の深さ45cmを測る。底面に長さ22～35cmの角礫が３個存在する。

遺物（Fig.74）は17～18世紀代の国産陶磁器、瓦類、鉄製品が出土した。272は肥前染付碗、273は焼成良好の陶器摺鉢で、小石原系である。18世紀前半代の遺物である。

SX21（Fig.73）　SX03の北東隅に接している。SX03の裏込めを損傷しており、SX03より後出す

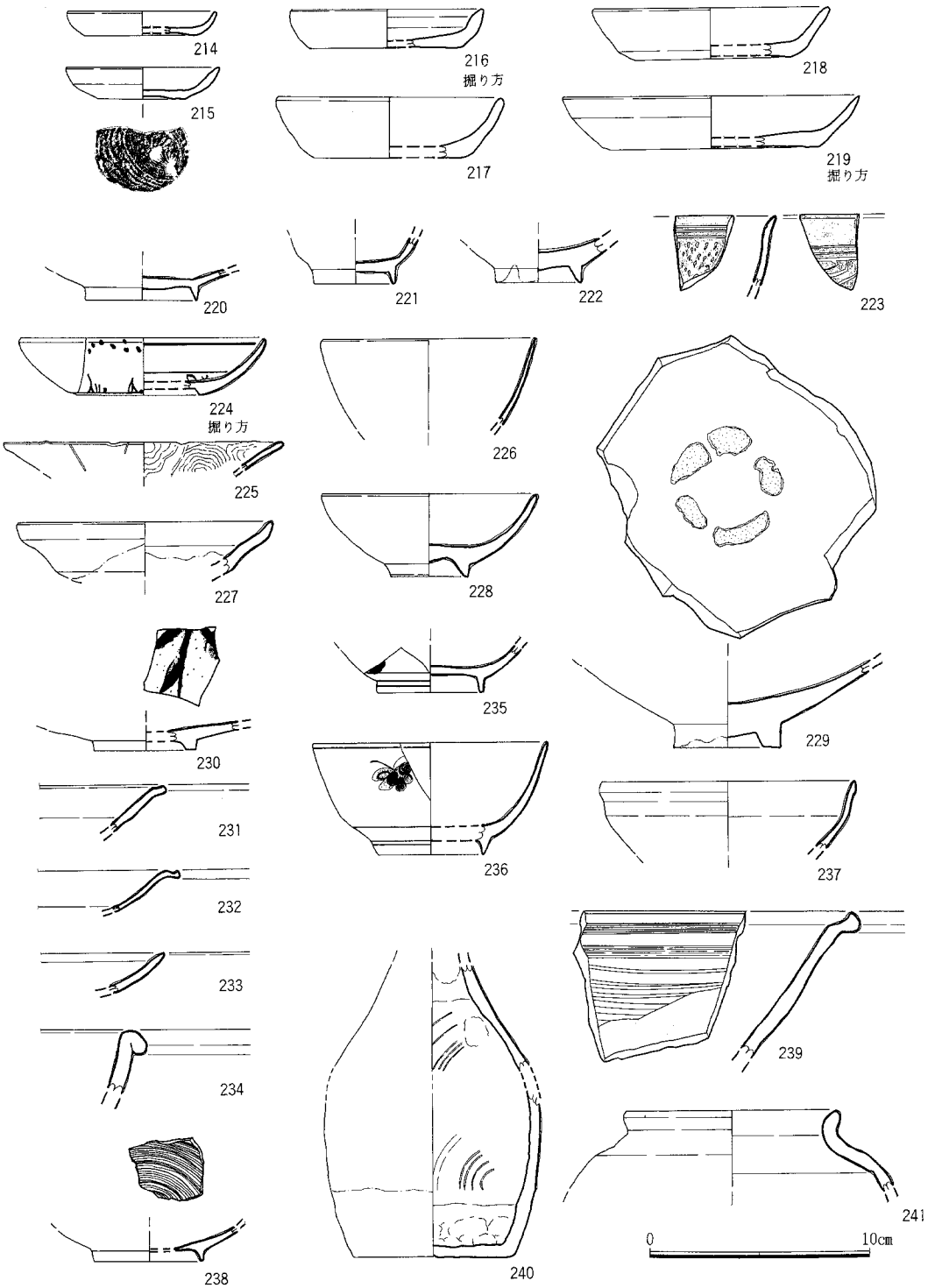


Fig.71　SX16出土遺物実測図 ①（縮尺 1/3）

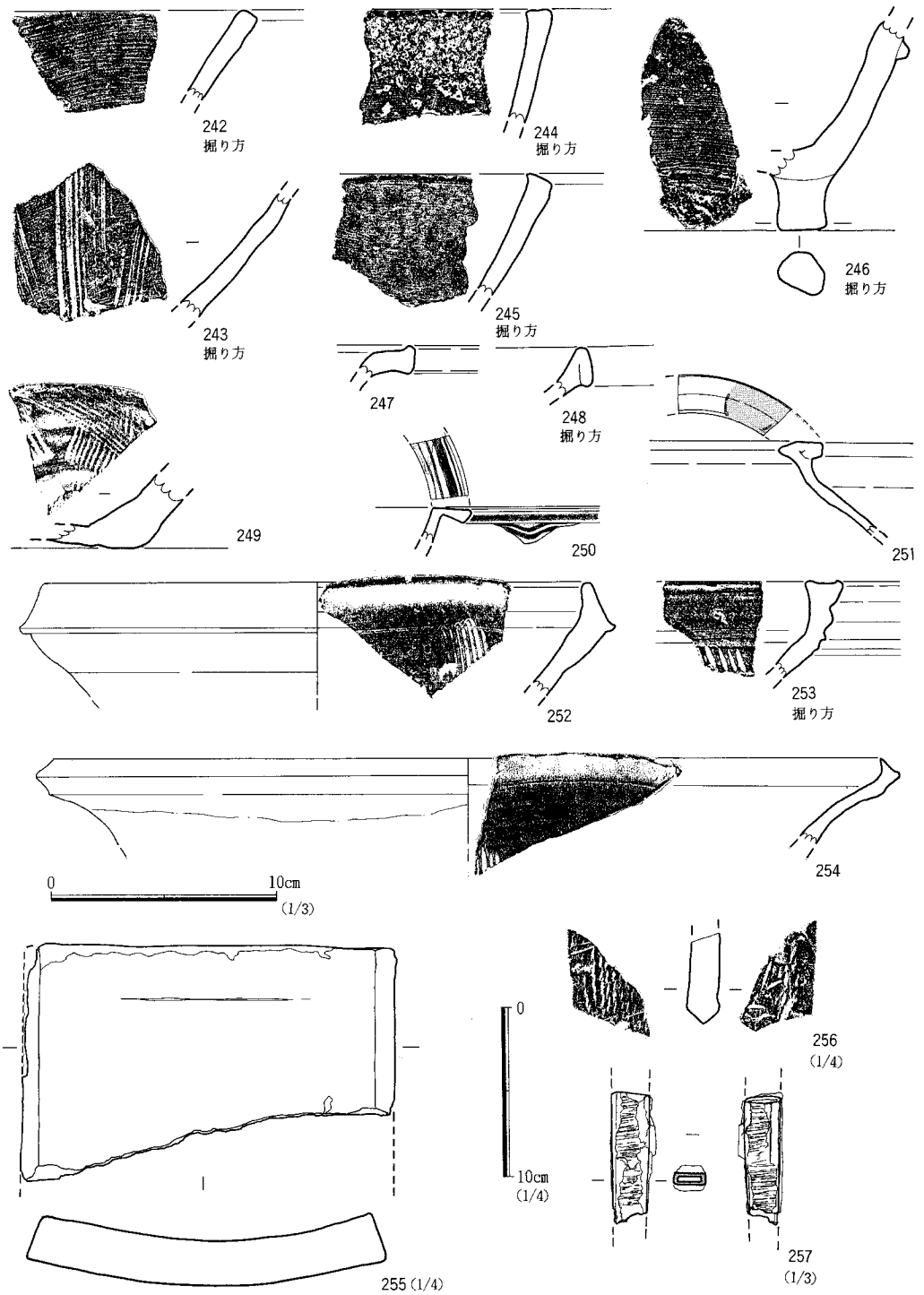


Fig.72　SX16出土遺物実測図 ②（縮尺 1/3・1/4）

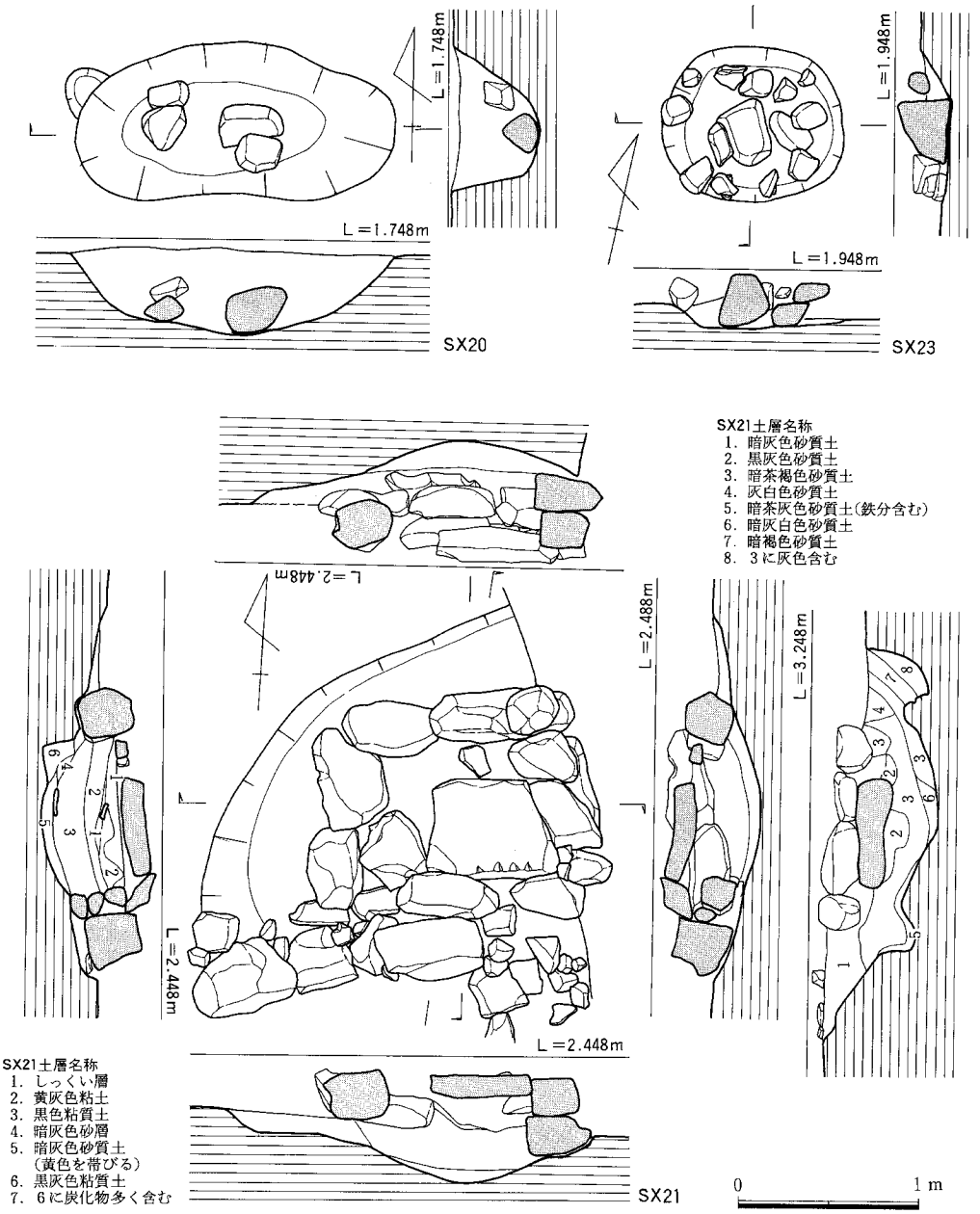


Fig.73　SX20・21・23実測図（縮尺 1/40）

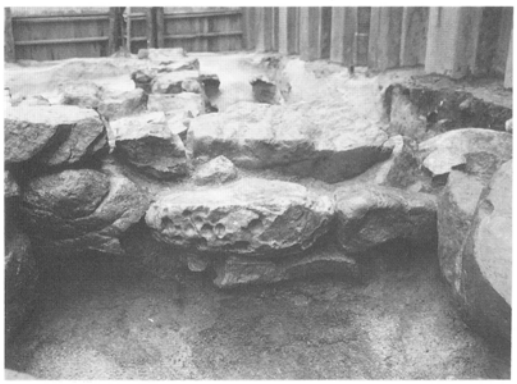
る遺構である。東側を攪乱に切られる。掘り方の形状は不明。壙底は2段掘りで、下部底面は摺鉢状である。掘り方内部には箱形の石室状の石組みがある。石組みは1段～3段で、長さ30～58cmの石を用いるが、SX03に接する南面のみは1段積みである。内法は東西83cm、南北74cm、石組みの高さ43cm、石組み最上段の上端から土壙の底面までは59cmを測る。この石室の天上部には長さ70cmを測る砂岩質の扁平な石が乗っており、旧位置をとどめるものと考えられる。石室内の土層には3層にヘドロ状堆積物があった。石材は礫岩、変成岩、砂岩を用いている。砂岩には虫穴を有するものがあり、又、上部の扁平石には矢穴が存在する。

遺物（Fig.75）は土師器皿、肥前系陶磁器、関西系陶器、瓦類が出土した。江戸時代の18～19世紀代である。274は土師器糸切り皿、275は肥前系白磁碗、276・278～281は肥前系染付で、281は薬合子の蓋である。282は関西系の土瓶蓋、284は唐津、又は筑前産の陶器摺鉢、285は国産の水甕、286は丸瓦片である。これらの遺物は、18世紀～19世紀代の幅をもった遺物である。

SX23（Fig.73）　平面形は隅丸長方形を呈する。長さ100cmを測る。壙底は平坦で、中央に長さ35cm大の角礫を置き、その周囲に円礫を配している。土壙形状からみて、建物の礎石の可能性を

石室状遺構SX21（西から）

石室状遺構SX21完掘状態（西から）



SX21南側壁（北から）

溜桝内土壙SX30（西から）

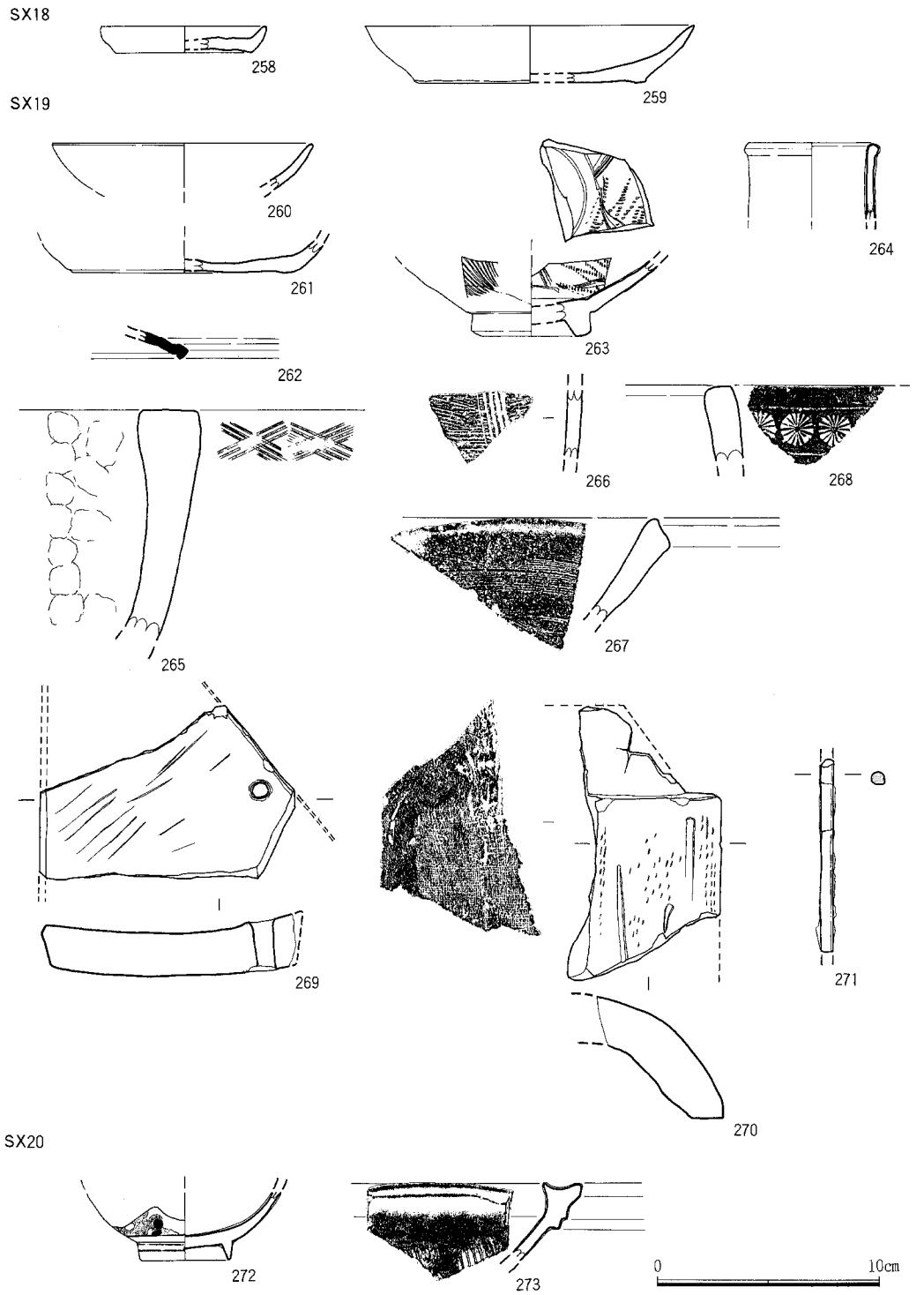


Fig.74　SX18～20出土遺物実測図（縮尺 1/3）

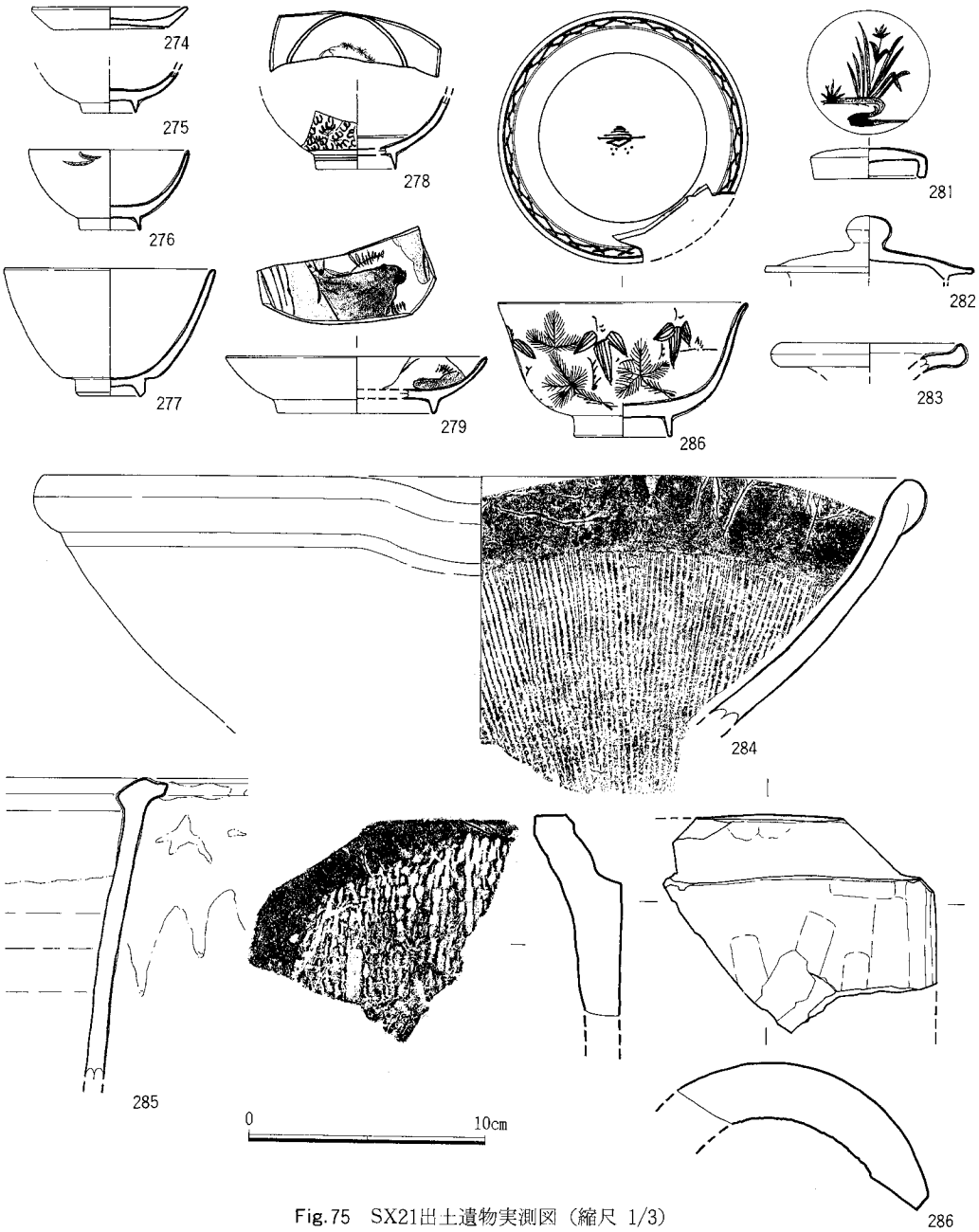


Fig.75　SX21出土遺物実測図（縮尺 1/3）

もっている。

遺物は木炭片が出土した。

SX30（Fig.57）　溜桝状遺構SX03の南側床面に掘り込まれた土壙で、SX03を切っている。境界

地に位置するため全形は不明だが、現存長87cm、現存の深さ38cmを測る。平面形は隅丸長方形を呈し、断面形は箱型である。周壁は褐色粘土を貼っている。

遺物（Fig.76）は江戸時代を主体としている。287・289は伊万里染付皿、288は唐津焼皿、290は肥前青磁の角皿、291は唐津焼甕である。292は素焼きの七輪で、内側下位に底受けの突帯を貼付けている。295は瓦当面に三巴文を配した軒丸瓦である。293は鉄製の釘で、幅3.1cmにタテ方向の木質が残っている。294は滑石製の石錘である。石錘の最大長は3.6cm、最大幅1.9cm、厚さ1.4cmを測る。長軸方向の中央に紐掛けの溝を施している。

土壙墓SX31（Fig.77）　遺構面としては第３面に相当する。第１・２面の中・近世面を撤去し、土層観察のために砂層を削平中に発見した。墓壙は平面形が隅丸長方形を呈する。長さ170cm、幅134cmを測る。墓壙内に木棺等の痕跡はなかった。墓壙内には南側に青磁碗が伏せた状態で１個と、墓壙上部より人骨片が出土した。

遺物（Fig.77）の青磁は龍泉窯系青磁碗Ⅰ－１類に相当する。口径16.6cm、器高7.4cmを測り、

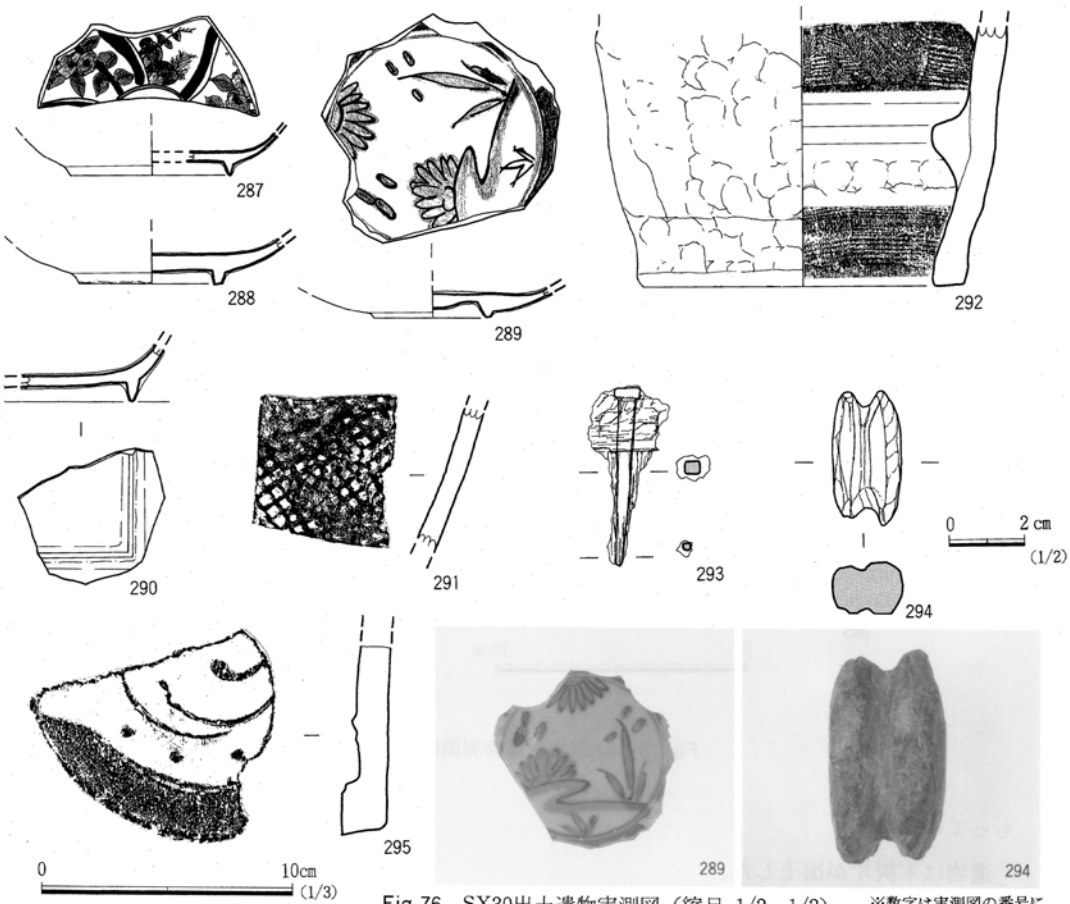


Fig.76　SX30出土遺物実測図（縮尺 1/2・1/3）　※数字は実測図の番号に一致する。

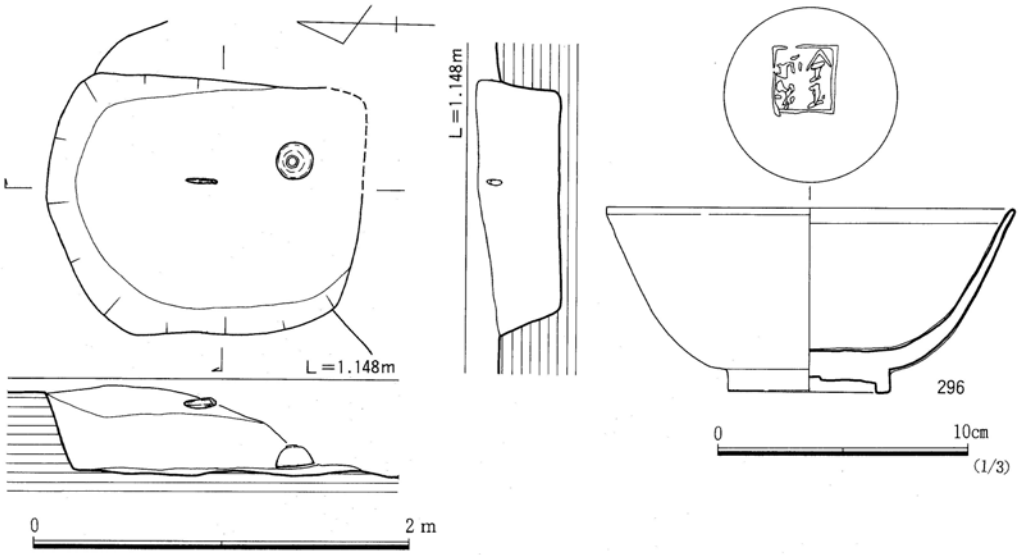


Fig.77　土壙墓SX31実測図・出土遺物実測図（縮尺 1/40・1/3）

土壙墓SX31（南から）

※数字は実測図の番号に一致する。

内外面に暗緑灰色の釉を施す。外底面は露胎である。内底見込みに「金玉満堂」の刻印がある。12世紀後半～13世紀代の所産であろう。

石積遺構SX32（Fig.78）　調査区の北側境界地に位置しており、全容は明らかではないが、東西方向に延びる。中世後半期、又は近世の遺構に切られ、更に上部の削平等を受けているため遺存状態は悪い。遺構の現存長は約20m、最大幅6.5mの規模である。この石積遺構は砂浜汀線部の傾斜面に形成されており、この傾斜角度は45°を測る。石積み（又は礫群）の最上端の高さは標高2.45m、最下部の標高は0.77mを測り、視覚的には強い落差を感じる。礫・岩の大きさは様々であるが、長さ13～65cmまでの幅がある。元来、角礫や切り石を用いたものと思われるが、斜面下半の礫群は丸味をもつものが多い。最上部の礫及び石は一部しか遺存していないが平坦面を形成

しており、長さ60～70cm大の角石が1.5mの間隔で、2列に配置された状況を示している。この2列の石の間には、小礫を充填しており、長さは5.1mまで確認した。この石列は1段しかない。石列の下には粘土等の整地事業の痕跡はなかったが、石列の上段には幅1.5m程度の堤防状の石塁があった可能性がある。傾斜面の礫・石の堆積の厚さは65cmを測る。用いられている石の種類は砂岩、玄武岩、礫岩、花崗岩などで、礫岩が最も多く、波に洗われたものが多い。これらの石は旧博多部には存在しないことから湾内の海岸部等から搬入したものであろう。砂岩は姪浜、玄武岩は能古島、今津等に産出する。石積遺構の北側の砂堆積の状況をFig.80の土層図で観察すると、下半は浜砂の堆積で、上部は約60cmまでの深さが風成層であることが判明した。又、石積遺構の南側（石積遺構の裏側に相当）に設けたB・Cトレンチ（Fig.81）では礫群の下部に堆積した第Ⅲ期の砂層中から、龍泉窯系青磁皿（314）、鎬蓮弁文青磁碗、同安窯系青磁碗（312・315・316）、口禿の白磁碗、土師器坏（311・318・319）・皿（309）、瓦器皿（310）、瓦質土器、土師質土器

石積遺構SX32（東から）

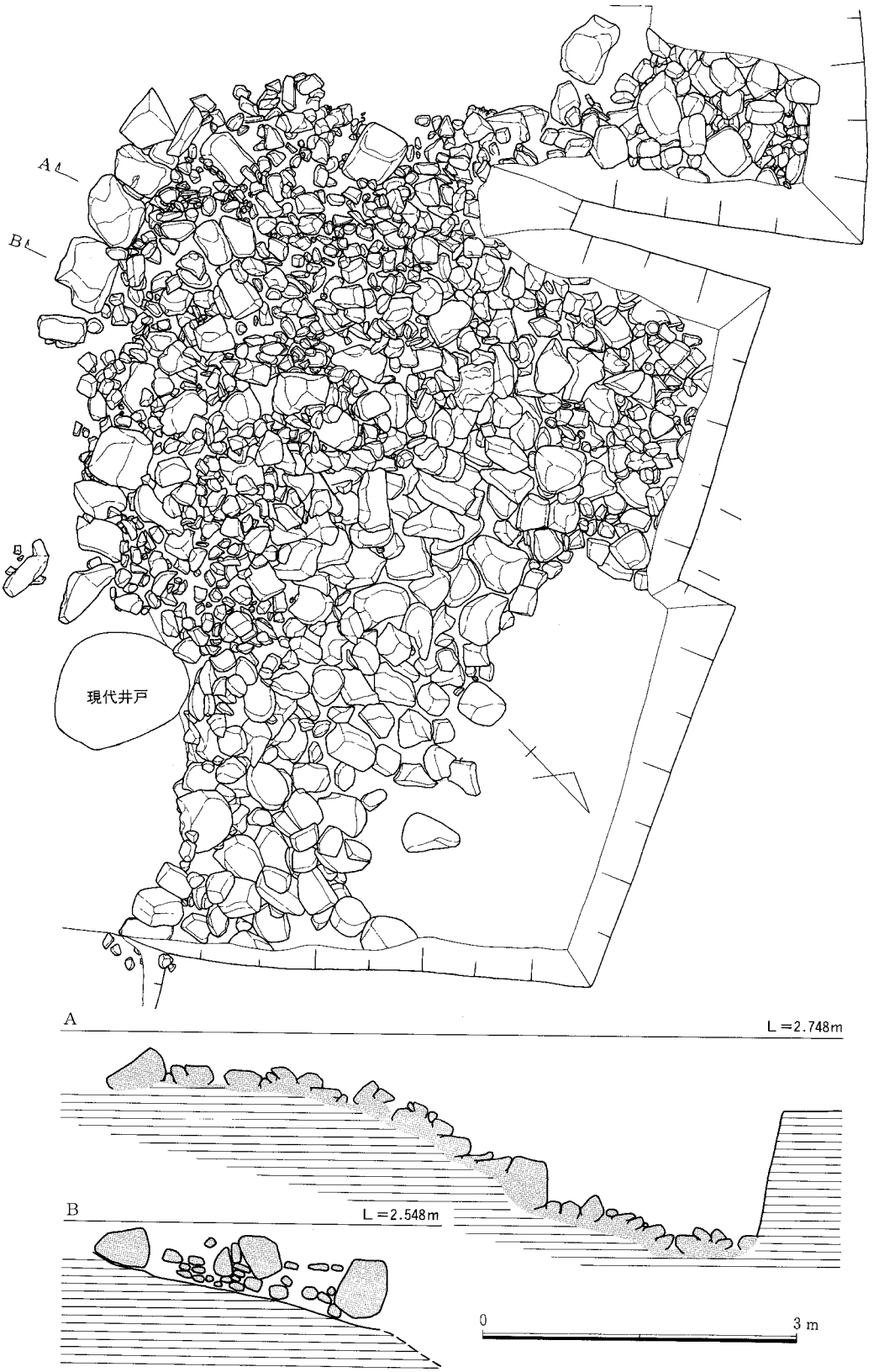


Fig.78　石積遺構SX32実測図（縮尺 1/60）

石積遺構SX32，及びBトレンチ（南から）

石積遺構SX32（東から）

石積遺構SX32南端部分（東から）

石積遺構SX32断面の状態（東から）

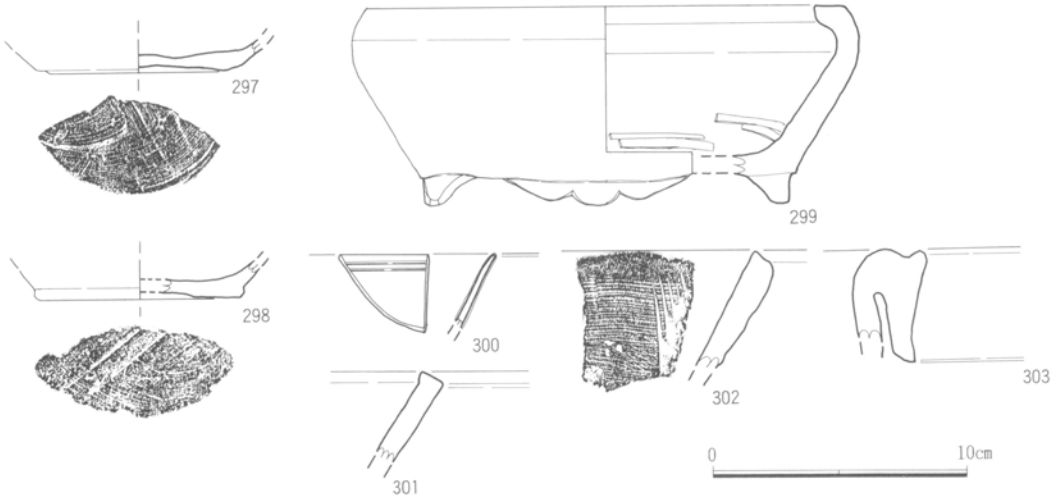


Fig.79　石積遺構SX32出土遺物実測図（縮尺 1/3）

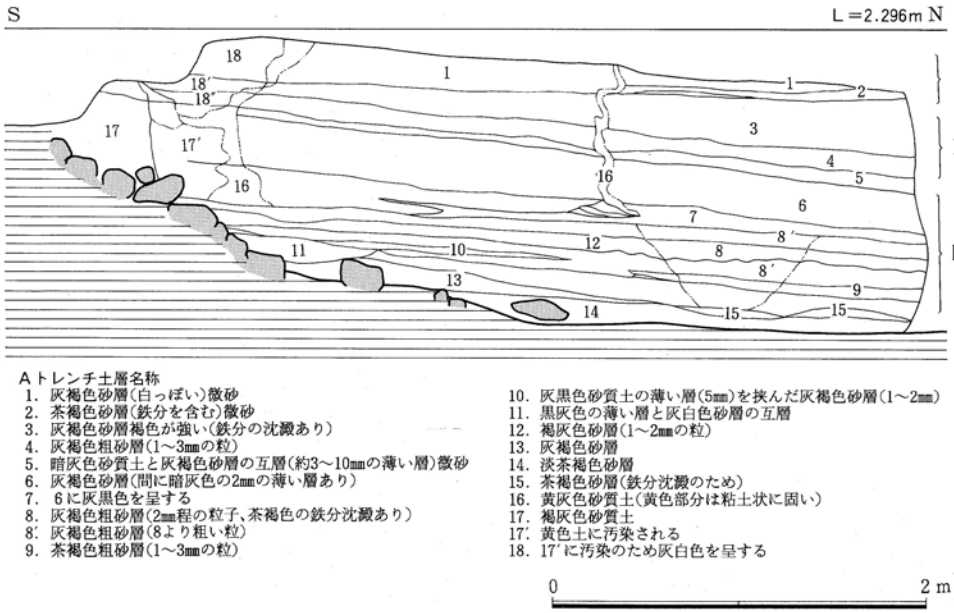


Fig.80　Aトレンチ西壁土層図（縮尺 1/40）

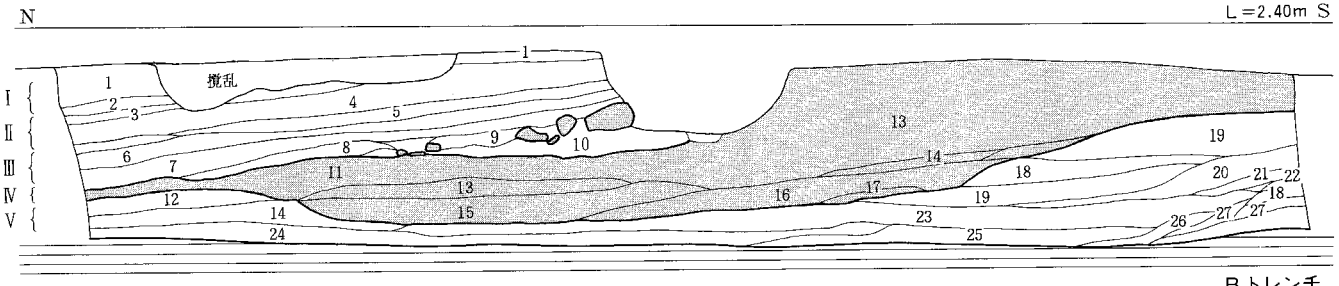
石積遺構SX32、及びAトレンチ（南から）

Aトレンチ西側壁土層状態（東から）

（313）の他貨幣等が出土した。又、礫群前面のAトレンチの砂層からは、白磁碗（304）・土師器皿（305）、瓦質土器（307・308）がある。299は火舎で、ほぼ完形品である。石積遺構の礫群上面に密着して出土しており、時期判断の手懸かりとなる。石積遺構内からは、土師器坏（297・298）、瓦質土器（299・302）、青磁碗片（300）、常滑焼片（303）がある。

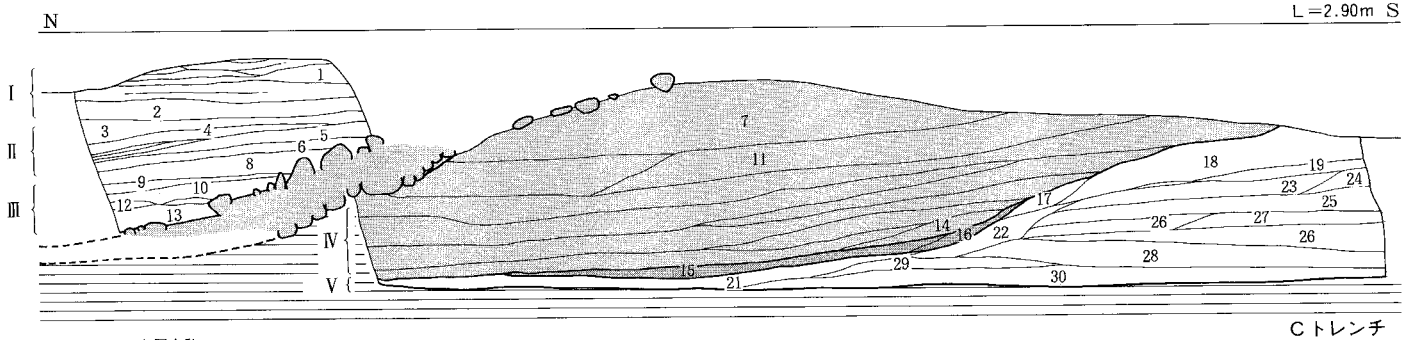
(4)　トレンチの調査

Aトレンチ（Fig.80）　石積遺構の北側に設けたトレンチで、ここに図示する土層図は、礫群前面の土層である。土層実測図では第1・2層は風成層、第3層以下は浜砂の堆積である。第3～



Bトレンチ土層名称

1. 淡黄灰色砂層(茶色の帯が縞状に入る)
2. 灰白色砂層(2mm粗砂)
3. 淡青灰色砂層(微砂。互層になっている)
4. 淡黄灰色砂層(1mmの細砂と微砂の互層)
5. 淡褐色砂層
6. 灰白色砂層(2～3mmの粗砂。微砂と互層)
7. 灰白色砂層(1mm程の細砂。微砂と互層)
8. 黄灰色砂層(微砂)
9. 灰白色砂層(細砂)
10. 灰白色砂層(細砂と微砂の互層)
11. 黄灰色砂層(3mm程の粗砂)
12. 淡黄灰色砂層(2mm程の粗砂と微砂の細かい互層)
13. 黄灰色砂層(粗砂)
14. 淡黄灰色砂層(1mm程の細粒)
15. 淡黄灰色砂層(細砂と粗砂が混じる)
16. 淡黄灰色砂層(2～3mmの粗砂と細砂混じる)
17. 淡黄灰色砂層(2～3mmの粗砂)
18. 黄灰色砂層(2～3mmの粗砂を1mm程の細砂が細かく互層)
19. 黄褐色砂層(2～3mmの粗砂、鉄分の沈着で固くしまっている)
20. 淡黄灰色砂層(粗砂混じりの細砂)
21. 淡黄灰色砂層(細砂)
22. 黄褐色砂層(粗砂)
23. 淡黄灰色砂層(5mm程の粗砂混じる)
24. 淡青灰色砂層(粗砂)
25. 黄灰色砂層(2～3mmの粗砂、鉄分沈着)
26. 黄褐色砂層(粗砂、鉄分沈着)
27. 茶褐色砂層(粗砂、鉄分沈着で固くしまっている)



Cトレンチ土層名称

1. 淡黄灰色砂層(1mm程の風成砂)
2. 淡黄灰色砂層(1mm程の細砂)
3. 灰白色砂層(1mm程の細砂)
4. 淡黄灰色砂層(2mm程の粗砂)
5. 灰白色砂層(細砂と微砂の互層)
6. 淡黄灰色砂層(細砂と微砂が混じる)
7. 淡黄灰色砂層(2mm程の粒と1mm以下の微砂混じる)
8. 3と微砂が互層になる
9. 淡黄灰色粗砂層
10. 灰白色砂層(粗砂混じりの細砂)
11. 7とほぼ同様
12. 黄灰色砂層(2mm程の粗砂)
13. 灰白色砂層(細砂)
14. やや暗い灰白色砂層(2mm程の砂粒混じる)
15. 暗灰色砂層(細砂混じりの粗砂)
16. やや暗い灰白色砂層
17. 淡褐色砂層(2mm程の砂粒、鉄分沈着)
18. やや暗い黄灰色砂層(2mm程の砂粒多く含む)
19. 黄灰色砂層(2mm程の砂粒多く含む)
20. 淡黄灰色砂層(1mm以下の細砂)
21. 暗黄灰色砂層(粗砂)
22. 暗灰色砂層(2mm程の砂粒)
23. やや暗い黄灰色砂層(2mm程の砂粒)
24. 黄灰色砂層
25. 24(5mm程の砂粒を多く含む)
26. やや暗い黄灰色砂層(粗砂混じり)
27. 黄灰色砂層(粗砂混じり)
28. 黄灰色砂層(褐色を帯びている。鉄分沈着)
29. 淡褐色砂層(2mm程の砂粒。鉄分沈着、15cm程の厚さ)
30. 灰白色砂層(2mm程の砂粒)

0　　4 m

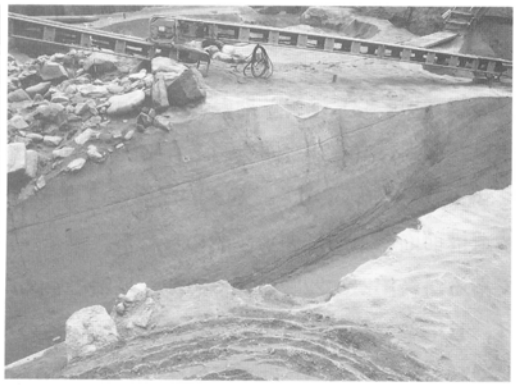
Fig.81　B・Cトレンチ土層図(縮尺 1/80)

B・Cトレンチの状態（南から）

Bトレンチ土層状態（西南から）

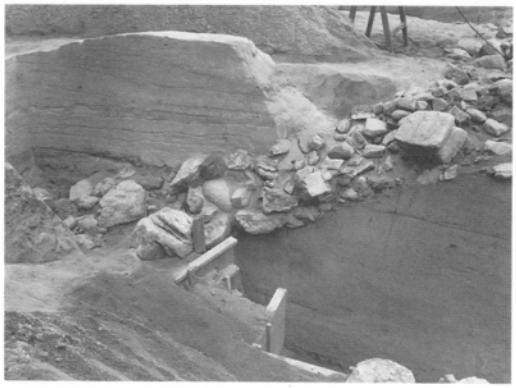
Bトレンチ土層状態（西南から）

Cトレンチ全景（南から）



Cトレンチ土層状態（西北から）

7層は漸移層で、この砂層には、暗灰色砂質土の薄い層が互層を形成している。第8層以下は2～5㎜大の粗砂層の堆積状況を示しているが、この内にも第10・11層のように黒灰色砂質土と灰白砂層が互層を成している層も存在している。第14・15層は茶褐色又は、淡い茶褐色砂層であるが、鉄分の沈殿が認められる。第17～20層の砂層には黄色土又は、鉄分が沈殿しており、非常に締まりが良い。遺物は石積み礫群の表面から瓦質土器の鉢(307・308）が出土している。



Cトレンチ土層北側の状態（西から）

Bトレンチ（Fig.81）　石積遺構SX32前面のAトレンチを石積遺構の南側に延長したトレンチで、長さ約10mを測る。ここでは石積遺構SX32の前面と裏側の砂層の堆積状況及び、相関関係を確認できた。大きくはⅠ～Ⅴ期の砂層に分けることが可能である。SX32の前面の上層には第Ⅴ期の風成層第1層が堆積しているが、第3～5層は第Ⅰ期への漸移層で、第Ⅱ期砂層である。鉄分含有層を挟んだ下層の第6～9層は第Ⅲ期の浜砂堆積層で、1～3㎜大の灰白色粗砂層を形成している。第11～17層はSX32の裏側（南側）につづく層で、第Ⅱ期の砂層を形成する。この第Ⅳ期砂層は3㎜大の黄灰色を呈する粗砂層によって形成されている。又、この層は第13・15・18～20、24～26層を著しく浸食・削平しているところから波による浸食後に堆積した砂層と考えられる。第13・15・18～29層は第Ⅳ期の砂層形成以前に海浜に継続的に形成された浜砂層である。これらの層は粗砂によって形成されているが、第24～28層は鉄分の沈殿が認められ、第28層は固く締まっている。これを第Ⅴ期砂層とする。この層中には薄い灰黒色砂質土と風化土の層が互層になって入っており、海浜の漸移的な堆積状況を示している。この第Ⅰ期層には幾つかの文化面があるものと考えられるが、その一面より、土壙墓SX31を検出した。堆積層の下層からは白磁、土師器等が出土した。

遺物（Fig.82）は第Ⅴ期の砂堆層から土師器Ⅲ(309)、第Ⅳ期層からは坏(311)、瓦器Ⅲ(310)、龍泉窯系鎬蓮弁文碗、同安窯系青磁碗(312)、口禿白磁碗、土師質土器鍋(313)が出土している。

Cトレンチ（Fig.81）　基本的な層序はBトレンチと大略変化は無いが、第Ⅴ期の風成砂層が石積遺構前面の上層に顕著に認められる。第7～14層は第Ⅰ期の砂堆層を浸食した後に堆積した層であるが、第21・22層の様に急激な堆積のために圧力のかかった層が存在する。第Ⅰ期の形成層は、Bトレンチに比べると水平堆積しているのが特徴である。

遺物（Fig.82・83）は土師器坏（318・319)、瓦器碗（320)、同安窯系青磁碗（315・316）などが出土している。

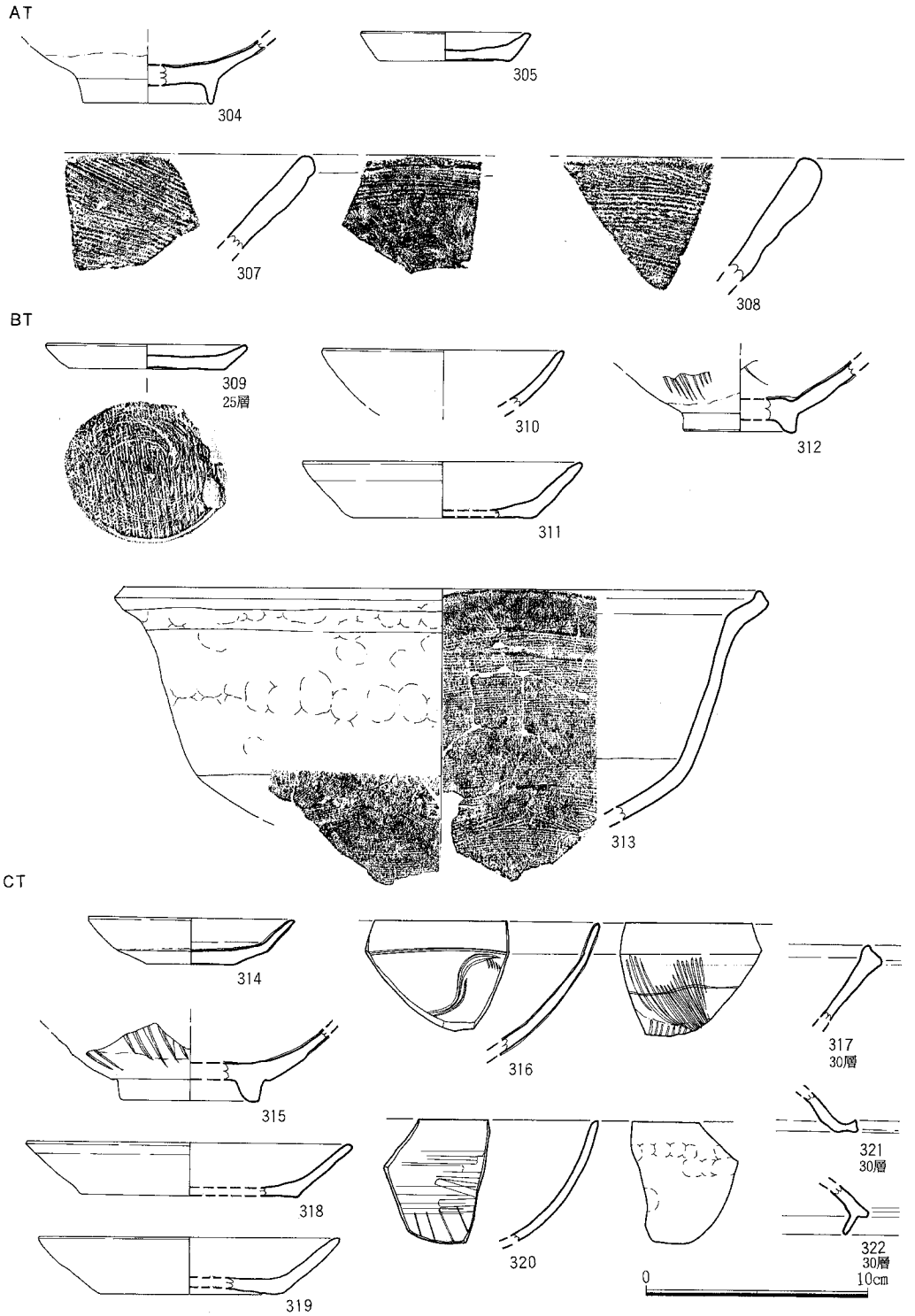


Fig.82　A・B・Cトレンチ出土遺物実測図（縮尺 1/3）

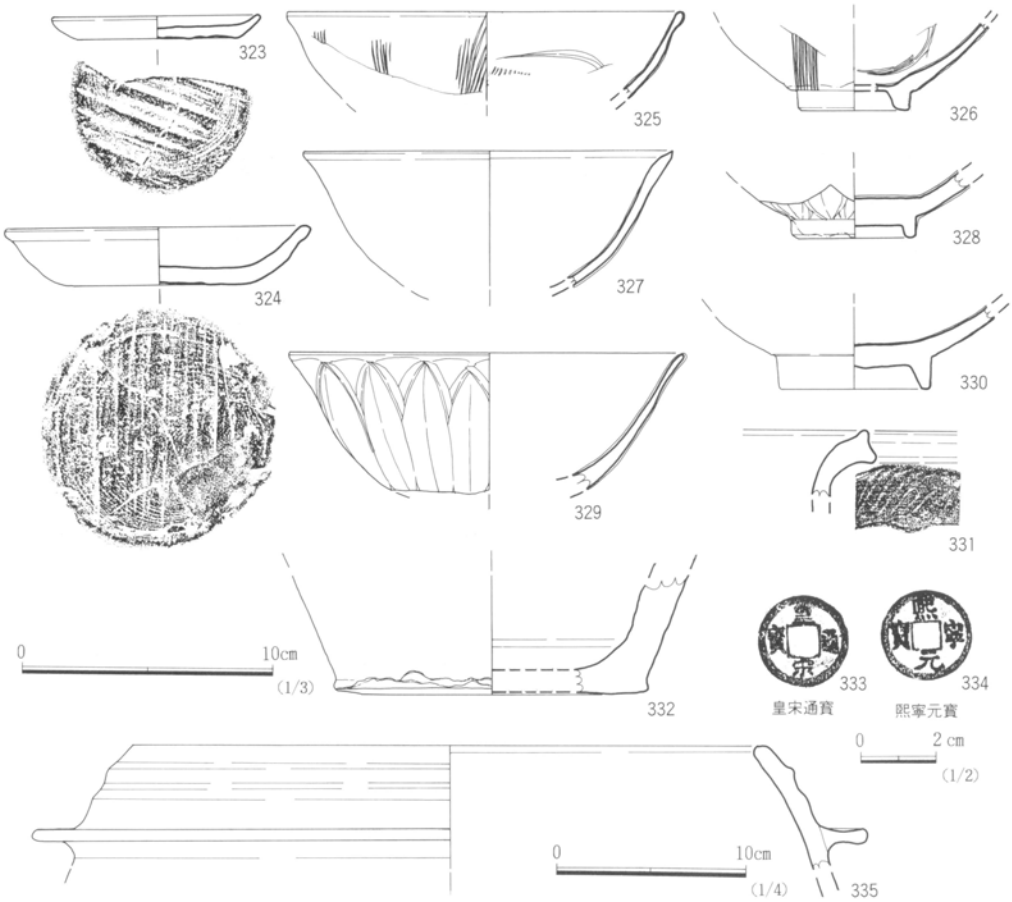
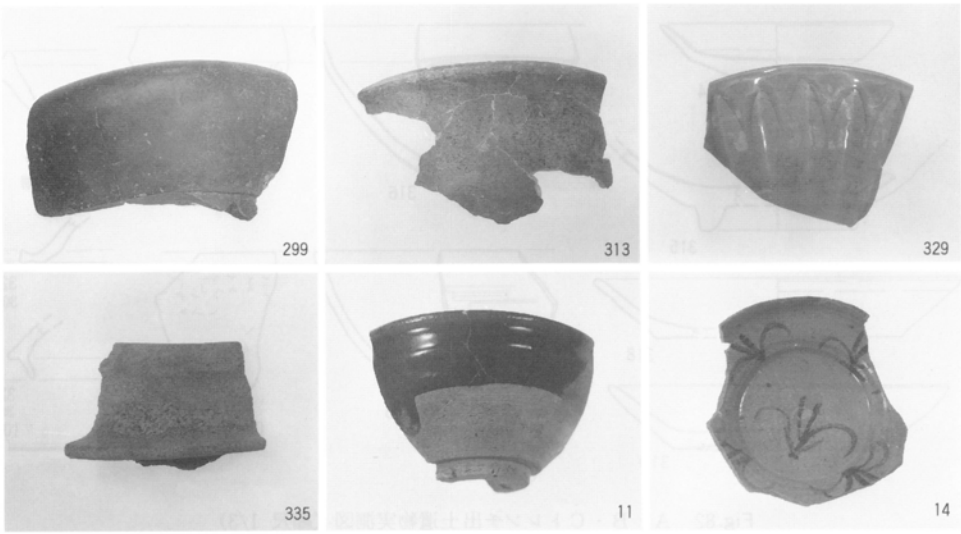


Fig.83　第Ⅳ期砂堆層出土遺物実測図（縮尺 1/2・1/3・1/4）



石積遺構SX32、Bトレンチ、第Ⅳ期砂層、遺構面出土遺物

※数字は実測図の番号に一致する。
11・14は遺構面出土

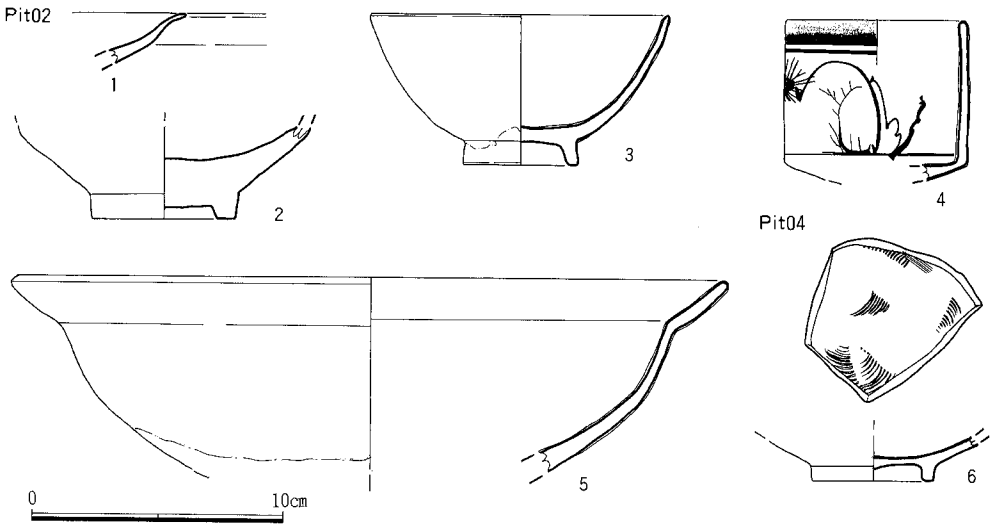


Fig.84　Pit02・04出土遺物実測図（縮尺 1/3）

第Ⅳ期の形成層出土遺物（Fig.83）　出土した層を確認出来なかったが、石積遺構南側の第Ⅴ期を浸食した後に堆積した層より出土している。324は土師器坏、323は皿、325・326は同安窯系青磁碗、327は口禿の白磁碗、328・329は鎬蓮弁文碗、330は白磁碗である。332は炻器質の甕で、備前焼と思われる。335は土師質土器の羽釜で、畿内より搬入した土器である。331は瓦質土器、333・334は貨幣の「皇宋通寳」、「熙寧元寳」である。

(5)　Pit 出土遺物

Pit02出土遺物（Fig.84）　1・2・5は唐津焼である。1は皿、2は碗、5は二彩の鉢である。3は小石原焼の碗で、口径12cm、器高6.1cmを測る。釉は飴色を呈し、体部内外面に施す。4は絵唐津の碗である。

Pit04出土遺物（Fig.84）　6は舶載の白磁碗である。内側に櫛描文が施されている。

(6)　遺構面出土遺物（Fig.85～87）

1～8は土師器皿で、8を除いて、糸切り底である。板目痕はない。8は口縁部を外反させており、復原口径14.0cmを測る。10・11は天目碗、12は白磁碗、19は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類である。13・14は鉄絵の唐津皿で、13の内底には目痕がある。16・17・20・21は唐津焼の皿であるが、17・21は古唐津で、砂目痕がある。16・20の内底には細かい胎土目がある。18は唐津焼碗で、外面に鉄絵がある。22は肥前磁器の皿である。内底に呉須による唐草状の文様がある。17世紀前半代である。23は備前焼の鉢で、赤褐色を帯びる。24は舶載陶器の壺である。26・29は李朝の雑釉壺で、29の内面には叩き痕がある。25は土師質土器の鉢、27・28・30・31は瓦質土器の火舎である。32は瓦質土器の摺鉢で、下し目は5本単位である。33～35は軒丸瓦で、33の瓦当面には三巴文、34には帆掛け舟、35には扇文を施す。36・37は軒平瓦である。36の中心飾りには宝珠形を施

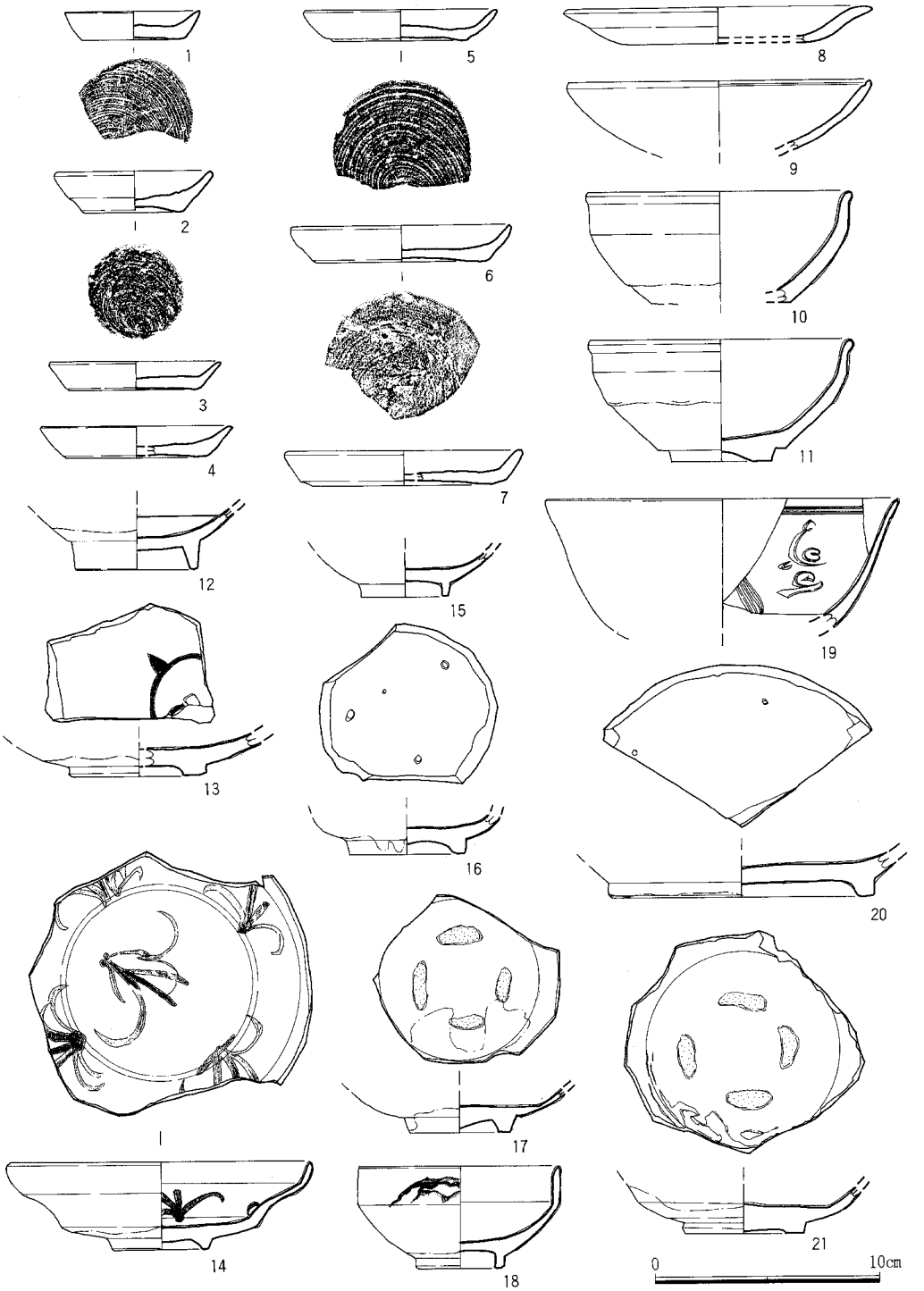


Fig.85　遺構面出土遺物実測図 ①（縮尺 1/3）

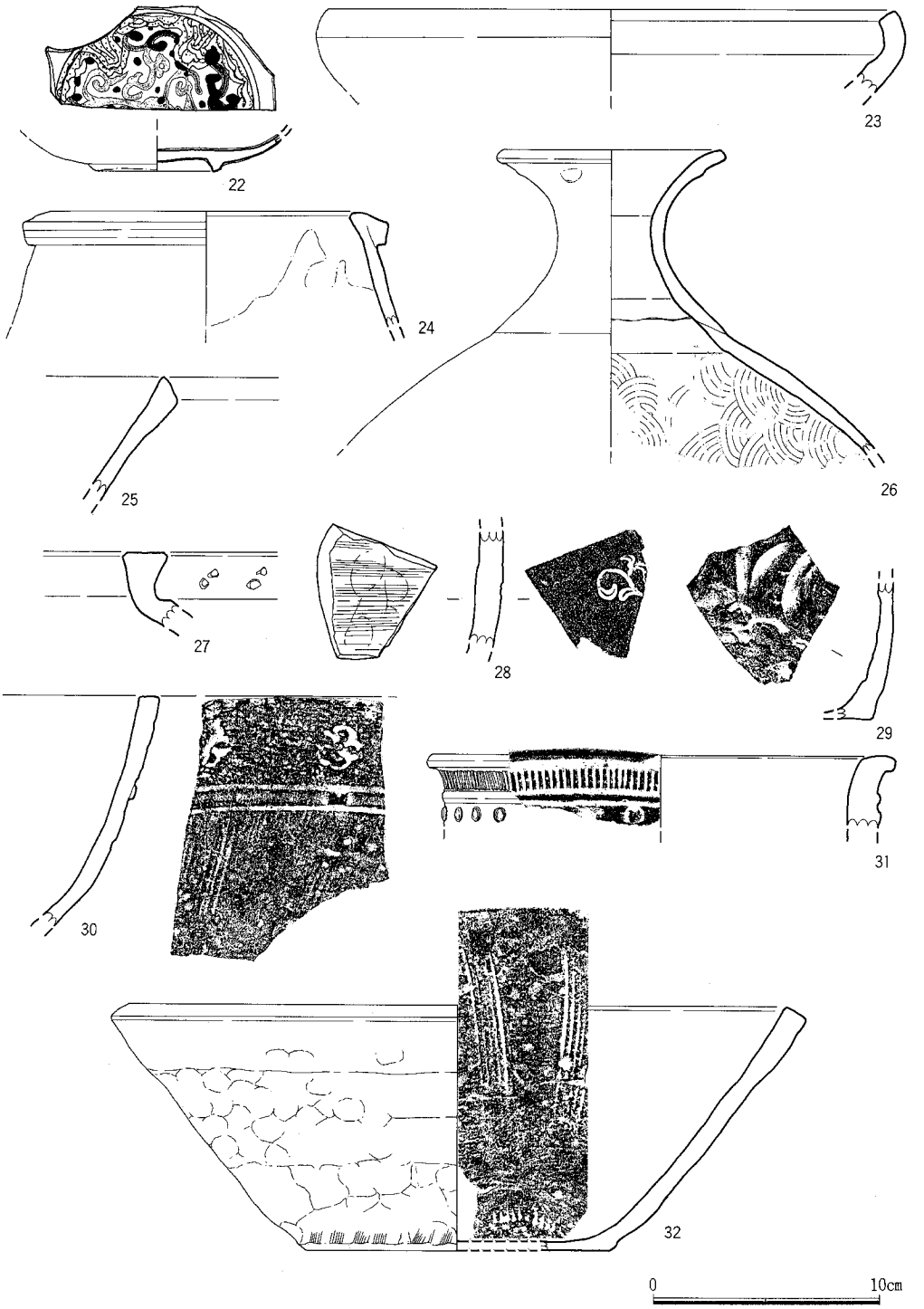


Fig.86　遺構面出土遺物実測図 ②（縮尺 1/3）

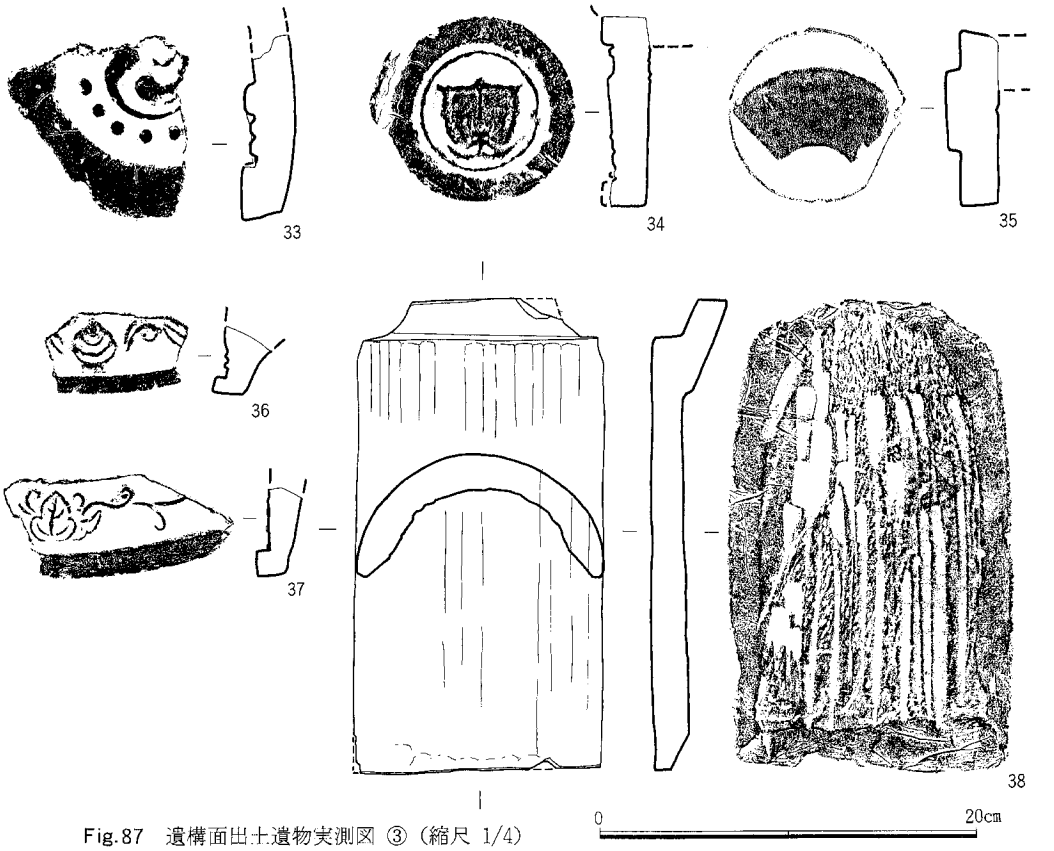
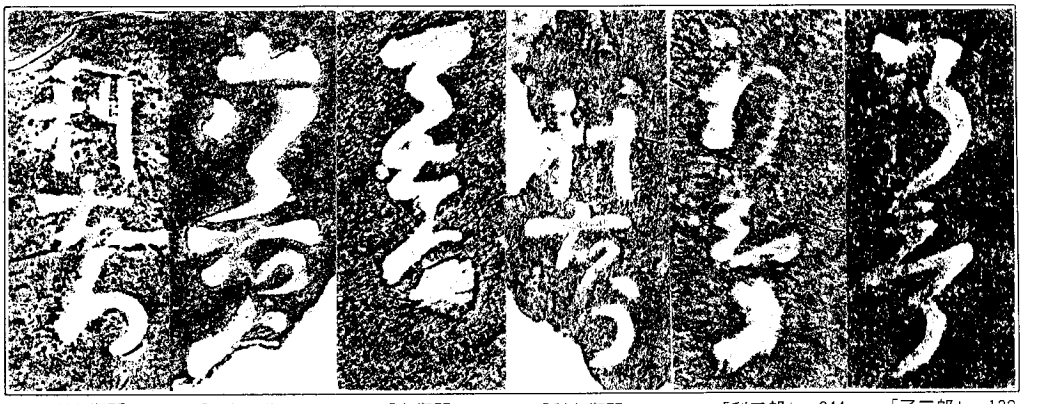


Fig.87　遺構面出土遺物実測図 ③（縮尺 1/4）

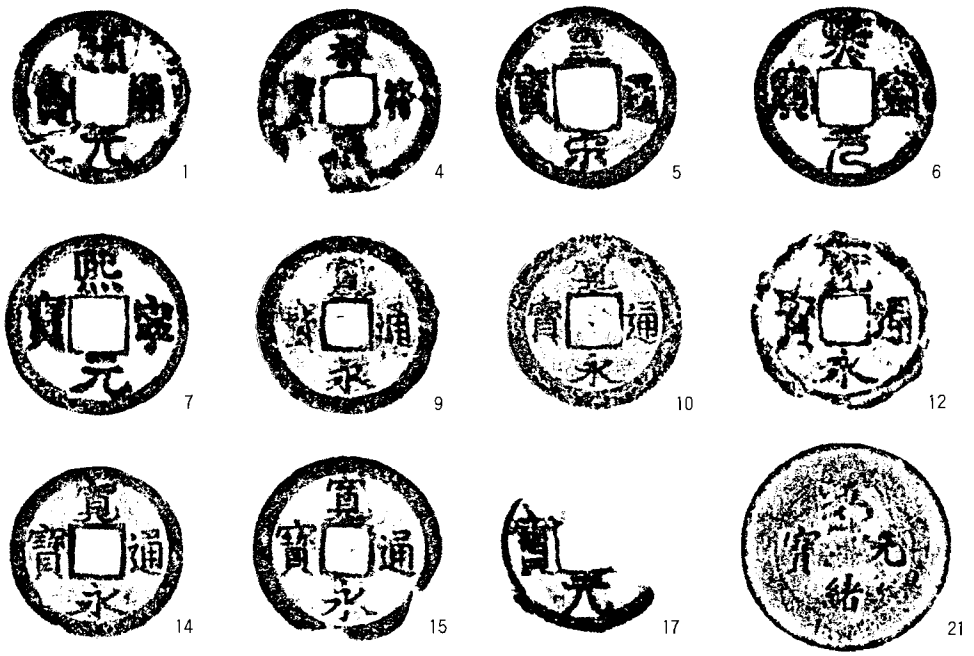
し、左右に唐草文を配する。37は高麗瓦の一部で、中心飾りに三葉文（柏葉文）を、左右に唐草文を施す。38は丸瓦で、江戸時代の所産である。背部は丁寧なヘラナデを行う。内側は布目痕を粗くヘラケズリしている。燻が顕著である。



「利右衛門」 48　「六郎右衛門」49　「右衛門」 131　「利右衛門」141　「利三郎」 344　「了三郎」 132

Fig.88　文 字 瓦 拓 影（縮尺 1/1）

※数字は実測図の番号に一致する。
344はSX03出土



※数字は貨幣一覧表の番号に一致する。

Fig.89　第68次調査出土の貨幣（縮尺 1/1）

第68次調査貨幣一覧表

登録番号	挿図番号	遺物番号	出土地点	銭貨名	外径(cm) 水平	外径(cm) 垂直	外縁厚(cm)	初鋳年	時代	備考
1	33	162	SE12	開元通寶	2.35	2.32	0.11	621(武徳4年)	唐	
2			SE04	大唐通寶	2.42	2.32	0.12	959(中興元年)	後晋	銹化のため実測不可
3			SE04	淳化元寶	2.38	2.36	0.15	990(淳化元年)	北宋	
4	37	209	SE14井筒	祥符通寶	2.48	2.45	0.09	1008(大中祥符元年)	北宋	
5	83	333	Ⅳ期砂層	皇宋通寶	2.52	2.42	0.09	1039(宝元2年)	北宋	
6	11	69	SK12	熙寧元寶	2.42	2.39	0.11	1068(熙寧元年)	北宋	
7	83	334	Ⅳ期砂層	熙寧元寶	2.44	2.42	0.12	1068(熙寧元年)	北宋	
8			SE02掘り方	元豊通寶カ	計測不可	計測不可	0.13	1078(元豊元年)	北宋	
9	13	73	SK15	不明	計測不可	計測不可	0.17	不明	不明	
10	20	6	SE01	寛永通寶	2.43	2.43	0.13	1636(寛永13年)	江戸	
11	37	210	SE14井筒	寛永通寶	2.43	2.41	0.11	1636(寛永13年)	江戸	
12			SE18	寛永通寶	2.42	2.44	0.10	1636(寛永13年)	江戸	
13	59	51	SX02裏込め	寛永通寶	計測不可	2.37	0.13	1636(寛永13年)	江戸	外縁一部欠損
14	65	145	SX03	寛永通寶	2.32	2.32	0.09	1636(寛永13年)	江戸	
15	65	146	SX03 1層	寛永通寶	2.50	2.52	0.12	1636(寛永13年)	江戸	
16			SK10	不明	2.46	計測不可	0.09	不明	不明	破片
17	14	92	SK19	開元通寶カ	計測不可	計測不可	0.10	621(武徳4年)	唐	
18			SX03 1層	祥符通寶カ	計測不可	計測不可	0.09	1008(大中祥符元年)	北宋	
19			SX04	不明	計測不可	計測不可	0.12	不明	不明	破片
20			Pit 01	不明	計測不可	2.46	0.12	不明	不明	破片
21			攪乱	□緒元寶	2.82	2.82	0.18	不明	不明	

第4章　ま　と　め

1．遺構・遺物の時代・時期について

当該地は「筑前国続風土記」[註2]に於いては土居流・濱小路町に相当している。昭和初めの旧町名・町界では濱小路町に属し、西側に妙楽寺町、妙楽寺新町、北側に西方寺前町、南は行町に接している。

本文中に述べた通り、発掘調査に先立って地表面から深さ2.3mまで鋤取り工事が行われたことや、山留工事によって土層観察が不可能であったため、時代毎の遺構面を把握することはできなかった。しかし、出土した遺物の時期により、少なくとも3面以上の文化層が存在したことが推定できる。すなわち、大略では4期―江戸時代、3期―室町時代後半～戦国時代、2期―鎌倉時代～室町時代、1期―鎌倉時代である。今回、検出した遺構を時代毎に列挙すると以下の通りとなる。

1期　鎌倉時代……土壙墓SX31、石積遺構SX32

2期　鎌倉時代～室町時代……SE15・16、SX18

3期　室町時代後半～戦国時代……SK01・04・06・16・17・20・21・22・24
SE19・20、SX10・14・15・19

4期　江戸時代……SK02・05・07～13・18・19、SE01～03・12・13・18
SX01～07・16・20・21・30

2～4期の遺構は鋤取り工事の関係により、同一面調査で検出したことは調査概要の項で述べた通りである。現地表面は標高約4.6mを測る。4期の江戸時代の遺構面は一部に遺存した土層観察では、現地表面から－1.3m（標高3.5m）の深さに位置するものと考えられ、上部には近代の客土層などが存在する。3期の戦国時代の生活面の推定にはSX15が参考になる。この遺構は標高2.3mを測る位置にあり、石室状の石積みを有しており、配石墓と考えられる遺構である。この石室状遺構の遺存状態が悪いことや標高2.15mに位置するSE20の遺存状態からみて、3期の生活面は少なくとも標高3.0mの高さが想定できる。2期の生活面は井戸SE15・16が参考となる。SE15・16はSX19と切り合い関係にあるが、SX19の土層観察では、SE15の掘り方が標高2.0mの位置まで遺存していることが判明しており、この高さよりも上位に生活面があることが伺える。1期の鎌倉時代は更に2小期に細分できる。第1小期は石積遺構SX32が構築された面である。SX32の天場石は標高2.4mの高さに位置しており、又最下部は標高0.8mを測る。この遺構は浸食を受けた海岸傾斜面に構築されたもので、護岸状に捨石されたものである。この遺構の下層の砂層からは12～13世紀後半までの遺物が、又、遺構北側の浜砂堆積層中からは14世紀後半までの遺

物が出土しており、１期第１小期の時期については13世紀後半～14世紀前半までが考えられる。第２小期は土壙墓SX31を検出した面である。標高1.5m前後を測るもので、第Ⅰ期の砂堆層に相当する。この面の北側は波の浸食を受けており、第Ⅳ期の砂堆層が形成されていることは先述の通りである。土壙墓には副葬品として龍泉窯系青磁碗Ⅰ－１類が１個出土している。内外面は無文であるが、内底部分に「金玉満堂」の印刻が施されている。一般的にこの印刻は13世紀代に認められるが、無文の青磁碗が12世紀後半から出現する状況からみて、この土壙墓については12世紀後半～13世紀前半までの時期幅を考えたい。よって、この期の生活面は土壙墓の時期を前後するものと考えたい。第２小期の文化層の下では残念ながら遺構を検出することは出来なかったが、Ｂ・Ｃトレンチの最下層からは白磁碗や土師器が出土している。この層はⅣ期砂層が形成されている以前の層で、つまり、全く浸食を受けていない浜砂堆積層である。Ｂトレンチ25層出土の土師器糸切り皿（309）は、口径が9.2cm、器高1.1cmを測るが、この土師器皿の法量は大宰府編年ではSK1204、SE225に相当するもので、12世紀前半代が比定できる。又、遺構からの出土ではないが、楠葉型の瓦器碗も出土していることから、少なくとも11世紀後半代にはこの調査地点南側周辺に於いて町屋が形成されていたことを物語っている。しかしながら、集落や町屋が繁栄を始めるのは少なくとも12世紀後半期と云える。

江戸時代に属する遺構には土壙・井戸・溜桝状石組遺構・室状遺構・配石遺構等がある。これらの遺構の時期は遺物により、17世紀前半～幕末までの幅をもっている。土壙は平面形状が不整円形・隅丸長方形等を呈するが、形状や深さなどに規則性は認められない。いずれも廃棄物処理用の土壙と考えられるが、その下限は18世紀中頃までである。

井戸は全てが、井筒に平瓦を用いる瓦井戸である。井筒の瓦は再使用のため抜き取られているものが多く、遺存状態が良いのはSE01・05～07など新しい時期の井戸であった。井戸の掘り方や井筒内より、17世紀前半から19世紀前半までの土師器、陶磁器、瓦類などが出土している。井戸の掘り方平面形は不整円形を呈し、直径は140cm～362cmを測る。SE02～04・12の掘り方は、井筒に対して掘り方規模が大きく、径250～336cmを測る。SE01・05～07の掘り方は井筒の直径に対して約２倍の大きさで、径120～166cmを測る。SE14・18の掘り方は前二者の中間の規模をもち、井筒の直径に対して３～3.5倍の大きさで、径220･240cmを測る。井筒の直径は外径で、68～95cmを測る。SE01・05～07は68～84cm、SE02～04・12は80～95cm、SE14は75cm、SE18は110cmを測る。井戸瓦を用いた井筒の下部には木桶を据えていることが、SE02～04・14・19で判明した。井戸瓦は木桶の外側を巻く様に築かれている。井戸の深さは現存値で、110～187cmを測るが、基底面の標高は0.19m前後を測る。又、井筒に用いられた平瓦は厚さが2.8～3.2cmを測り、屋根瓦よりも厚みをもっている。長さは28.8～30.1cm、幅は24～25.5cmまでの幅がある。井戸瓦の長さ、幅、反りなどの規格には時期的な変化が認められるが、これは井筒の直径や、一巡りに用いられる枚数に影響されるものと考えられる。１段に用いられる瓦の枚数は10～16枚で、SE01・05・07は11

・13枚、SE02・12は10枚、SE18は16枚である。以上について、整理すると3グループに分けられ、時期的な変遷の状況を把握することができる。井戸の掘り方径や井筒径はⅠ類ほど大きく、Ⅲ類は減少する傾向があり、又、瓦の規格も同様に大から小へ変化していることが読みとれる。

分類名	井戸名	時期	掘り方径(cm)	井筒径(cm)	瓦枚数	瓦規格(cm)
Ⅰ類	SE02～04・12	17C前～後	250～336	80～95	10	30.1×24.8
Ⅱ類	SE14・18	18C前	220・240	75・110	15～16	27.8～25.1×23.2～20.5
Ⅲ類	SE01・05～07	19C前	120～166	68～84	11、13	24.7～25.1×20.5

瓦井戸については、最も古い時期を17世紀前半に位置づけることができたが、SE03・04などの出土遺物については初期唐津、備前焼Ⅴ・Ⅵ期、瓦質土器鉢、16世紀末の内ケ磯窯、或いは17世紀初頭を示す陶磁器類が多量に出土しており、瓦井戸の出現時期を16世紀末までさかのぼらせることが可能である。近世瓦の出現は云うまでもなく、1581年（天正15）秀吉の九州平定に起因するもので、博多復興を町割りの整備等の事業や、1588（天正16）から始まった小早川隆景の名島城や黒田長政による福岡城の普請によって近世瓦の導入及び瓦職人の移住があったものと考えられる。よって井戸瓦の初現は、16世紀末に出現するもので中世的名残りである石組井戸とは時代を画すものである。

溜桝遺構SX03は現存長4.5mを測り、方形又は長方形状を示すものと考えられる。石垣上部は削平を受けているが、少なくとも1m以上の深さを有していたと考えられる。この溜桝内には多量の遺物が投棄されており、堆積物には当時の生活用品、しいていえば、この地点の居住者の生業や食生活を示す遺物が存在した。例えば、木栓や筅などは数多くの木樽を必要とした酒又は醤油等の産業・商売であること、又、筆・漆椀或いは鬼瓦を含む多量の瓦の出土は、豪商の存在が想像できる。又、食用にした貝類や動物の骨、或いは庖丁・七輪・陶磁器などは18世紀中頃にこの土地に居住した博多商人の生活ぶりを示す好資料である。寛政11年（1799）に福岡藩が長政の入国200年を記念して、藩に功労のあった町人を表彰した時に、浜小路に練酒の石橋次右ェ門（鳥羽屋）とある。又、明治18年発行の「筑前国名所豪商案内記」には、清酒醸造所の石橋源治郎とある。戦前迄、石橋家は造り醤油屋として全盛を極め、その敷地は西側の博多川の岸辺まで達していたと云われることから、江戸時代の状況が推測出来る。[註3]

中世の遺構には土壙・土壙墓・配石墓・石積遺構・井戸等がある。これらは12世紀後半～17世紀初頭の遺構が多く、遺物においても備前Ⅳ・Ⅴ期、或いは明代の白磁皿などが多量に出土する。この時期には海岸線が後退し、砂丘の形成によって大規模な町屋が整備されていたことが考えられる。

井戸は3基検出した。井戸SE15・16は井筒に木桶を用いており、SE20は石組井戸である。SE15出土の遺物には高麗青磁などが出土しているが、土師器皿は、Ⅰ類（213、214）のグループとⅡ

類（215～217）のグループに分かれる。Ⅱ類の法量は口径9.2～10.0（9.3）cm、器高0.9～1.3cmの間にあり、この法量は12世紀代に比定できる。Ⅰ類は口径に対して器高が高く、口径は8.7、器高1.7cmを測る。SK641に同じく14世紀前半～中頃である。坏はⅠ類（218～220、222～224）とⅡ類（221・225）に分けられる。Ⅰ類の口径は11.0～13.6cm、器高は2.6～3.0cm、Ⅱ類の口径は12.8～14.0cm、器高は3.2cmである。いずれも明瞭な板目がない。坏の法量は大宰府史跡のSK735、SD605（SX1200新）に相当するが、皿Ⅰ類はSK641よりも口径が大きい。よってSE15は13世紀後半～14世紀中頃の間に位置するものと考えたい。SE16はSE15に先行する井戸で、遺物が少ないが、土師器の法量が大きく、糸切りであることから13世紀後半までに位置づけられる。

井戸SE20は上部の削平を受け遺存状態は悪い。石組みは裏込めがしっかりしており、この裏込めより多量の遺物が出土した。土師器の法量は皿が口径7.3～8.0cm、器高1.5cm、坏は口径12.4～14.0（12.8）cm、器高2.4～3.1（2.8）cmを測る。明染付は318が皿E群、317は碗E群で、16世紀中頃～後半に位置づけられる。その他に16世紀末の国産陶器摺鉢、備前焼のⅣ期後半からⅤ期初頭の摺鉢が出土している。

井筒内出土の土師器は坏の口径10～11.8（10.5）cm、器高1.6～2.8（2.0）cm、皿は口径6.6cm、器高1.4cmを測る。この法量は裏込め出土の土師器よりも口径、器高とも減じている。白磁皿（C群）（363、364）は15世紀後半～16世紀後半の幅をもっている。又、366の陶器皿は李朝又は唐津である。土師器の法量等から、16世紀末～17世紀初頭が考えられる。この石組井戸は先述した通り、秀吉による博多の復興に伴って、博多の近世町割りの基準となった井戸と考えられる。焼失前の博多の屋敷にあったのであるが、瓦井戸の出現によって淘汰されてゆく中世的遺構である。特筆すべき事は、この井戸の裏込めより多量の瓦類が出土した事である。これらの瓦類は軒丸瓦、軒平瓦、平瓦、丸瓦等が出土したが、いずれも火を受けている。軒平瓦の文様は中心飾りに宝珠形を用いており、軒丸瓦の瓦当面の三巴文は尾が長く、珠文の数が多い。又、丸瓦の背には縄目の叩き痕を残しており、整形手法又は燻手法等に中世後半期の特徴を残している。軒丸瓦の内、瓦当面に「卍」形の文様を施す瓦が出土していることから、今回の調査地点が中世後半期に於いて寺院境内に相当したことが推測できる。昭和初めの地名では、当該地点は浜小路に相当し、北に西方寺前町、北西側に妙楽寺町、妙楽寺新町が所在する。妙楽寺は現在、御供所町の聖福寺の南側に移転しているが、妙楽寺町にあったと伝えられる。筑前國続風土記によれば「此所にむかし異賊襲来の防ぎのため、石垣を築けり。此寺基所にありし故に、石城山と號す。外門を潮音閣と云。三門を呑碧樓と云うと、日華が人境録に見えたり。是皆海濱にのそめる寺なる故、名付るならし。」又、天文７年（1538）には博多の火災にて、焼失していることを記している。石城志（巻之四）では「天正14年、薩摩の軍兵博多を焼亡せし時、當寺一字も残らず炎上せり。其後十六、七年が間は、假に庵を結びて居住す。」とあって、1586年の兵火による焼失後、黒田長政によって慶長５年頃に今の場所に移されたことが記されている。

Fig.90　石積遺構SX32（点線部分）と調査地点位置図（縮尺 1/8,000）

井戸SE20から出土した遺物の時期は16世紀中頃から17世紀初頭までの幅があり、これは上記の天文７年から慶長５年頃までの状況に合致するものと考えられる。よって、当該地は旧字名の「妙楽寺町」に接していることや、13～14世紀頃の井戸や、15～16世紀末の遺構を中心とすること、或いは高麗・李朝陶磁器片の出土や寺院を示す卍文様の瓦当瓦他多量の軒瓦の出土などから、石城山妙楽寺の境内一隅に位置するものと考えられる。

２．石積遺構（SX32）について

SX32は45度の傾斜をもつ浸食された砂丘斜面に築かれており、最高所の標高は2.45m、北側の下部は標高0.77mを測る。この遺構の南側の砂堆状況はＢ・Ｃトレンチの結果、長さ13～15mに亘って浸食を受け、約30度の傾きをもった地形に、一過性の急激な砂堆があったことが判明した。又、SX32の前面の砂堆は下部に引き波による堆積層、上層部に風成層を形成している。Ａ～Ｃトレンチによって、SX32の南側の急激な砂堆層（Ⅳ期層）からは12世紀後半から13世紀後半までの遺物が、最下層の第25層、或いは浸食を受けた層からは11世紀後半の遺物や、12世紀後半の土壙墓SX31が存在している。SX32の前面からは13世紀から14世紀前半までの遺物が出土したことから、石積遺構SX32は13世紀後半から14世紀前半までの時期が推定される。

この遺構は東西方向に築かれており、最大幅6.5m、現存長20mを測る。当該調査（Ａ地点）か

ら西側約100mの地点（B地点）に於いても工事中に同様な礫群を検出しているので、現状では総延長約160mを測ることになる。このA地点は旧町名の対馬小路町と妙楽寺町の境に位置している。又、これらの地点の南側には11世紀の汀線が、又、北側260mには1646年（正保3）の絵図に描かれた汀線が推定されている。この石積遺構SX32については単に13世紀後半頃の護岸とする評価もあるが、ここでは元寇の役の時期に相当することから、元寇防塁との関連をも考え合わせて検討してみる。

(1) 木下讃太郎は1915年（大正4）「元寇史蹟の新研究」に於いて、『博多に於いては往時沖ノ濱の外方海岸と認むべき横町筋の少しく上方を通過したものと思はるる』と述べる。今回の調査地点の北側の東西方向の道路を横町通りといい、これを沖ノ濱の海岸線と見なしている。又、川上市太郎は「元寇史蹟」（地之巻）の中で、『もと石城山妙楽寺の所在現今妙楽寺前町を根基として千代松原所在防塁線の位置との連絡関係より考定し妙楽寺前町の道路所謂横町筋を防塁線の所在とす長さ約五百間に達す。』と述べ木下讃太郎と同様な見解を示している。

(2) SX32の西側延長線上には妙楽寺の推定地であるところの妙楽寺町が位置する。妙楽寺は石築地の付近に在ったため、石城山と号した。海辺に望める寺のため、外門を潮音閣、山門を呑碧楼と称した。この寺は正和5年（1316）に創建され、貞和2年（1346）に仏殿が完成しており[註2]、1316～1346年頃の寺は海辺に近いところに立地していたことになる。

(3) 石築地は建治2年(1276)の構築後、弘安9年(1288)8月27日、筑後守護武藤貞経、筑後国の住人友清又次郎入道に、博多庄浜石築地の勤任を命じている他、文献上では康永元年（1342）に足利尊氏が大友氏泰を促して大宰小弐武藤頼尚とともに、鎮西要害の石築地を修理させており[註4]、石築地の修理及び異国警固番役が継続的に行われている状況に於いては、石築地の前面に妙楽寺が築かれる事は考えられない。妙楽寺は1316年の創建当時に於いては石築地の南側に位置していたと思われる。

(4) SX32の北側の砂堆に於いては、上層部には15～16世紀の遺構が存在することや、砂堆下層内から13～14世紀代の遺物が出土することなどから、SX32の前面の砂堆は急速に進み、汀線が後退するところから少なくともSX32の捨石状の礫群は14世紀には浜砂堆積層内に埋没すると共に15世紀にはSX32の上端部も埋まっていたと考えられる。

(5) 沖ノ濱の海岸線の前進速度は市小路付近に於いては11世紀～13世紀中頃までは1年間に約40cm、13世紀中頃～1699年迄は1年間に約60cm進んでいると云われる（Fig.90）。(4)項で述べたようにSX32の北側の汀線は比較的早く後退したことが云える。聖福寺古図には永禄元年（1558）以前の境内の様子を描いたものとさせているが、この図には海岸汀線よりずっと浜側に防塁らしき石築地があり、浜では大工達が仕事をしている様子が描かれている。道具小家様の建物以外には恒久的建物はみられない[註5]。制作年は不明であるが、石築地と砂浜の様子は、まだ外寇に対する緊張感のある時期の状況を示すものであろう。

(6) SX32の石積みの状態は浸食を受けた急傾斜に構築されており、大規模な浸食や砂堆を繰り返す不安定な海岸線に護岸を施工したものと考えられるが、この急激な浸食・砂堆がどのような気候或いは海流や地下水等の状況下で起こったのかが注目される。又、護岸工事は部分的な施工では新たな海流による浸食を招くことになるから、当然のこととして博多川の河口右岸から現石堂川の河口左岸（古くは入江状）まで施工されたものと考えなければならない。

(7) 石積遺構の構造は砂丘汀線の急斜面に捨て石を行い、最上端部には大きな切り石が1.6mの幅で2列に配石されている。この列石の間には10～30cm大の石が充塡されており、このことはSX32の上端部に堤防状の石塁があった可能性が考えられる。早良区や西区で発掘されている元寇防塁には構築方法や使用した石材の種類、或いは規模に各々に違いがあることが報告されているが、[註6]これらの石塁とSX32を比べると類似する点もある。

- 今津地区では海側に傾斜する砂丘上の自然砂丘上にそのまま石積みが行われ、基底面の幅3～4.3m、上面幅2.5m、前面の高さ3m、後面の高さ2.5mを測る。石材は花崗岩と玄武岩を用い、使い分けを行っている。玄武岩を用いた地区は、完全に石積みであるが花崗岩の構築区は前面と後面に石積みを行い、内面には砂を充塡するという工法をとっており、「石材の種類に応じた築造工法の相違は今津地区の一つの特徴と言える。」と云われる。
- 生の松原地区の防塁は東側を砂岩、西側はペグマタイト(巨晶花崗岩)を主な石材として構築している。A・B区では石積みが砂丘上に直接行われ、幅は1.2～1.3mを測り、後面から1～3.7m幅を粘土で補強している。基底部の高さは同一ではない。又、後背面には砂堤を盛った構造が遺存しており、その幅はA－6～B区までは3.4mある。D区では石積みの幅1.5～2mで、前面・後面に大石を用い、内側には小礫を詰め込んでいる。裏側は茶褐色粘質土で補強している。石積み後方の構造は確認出来ていない。又、A・B両区の前面には1～2段の石積みがあり、修理・補強するための構造と考えられている。
- 西新地区の防塁は基底部の幅3.5mを測り、前面から1.1mの間は砂層上に直接石を積み上げるが、この石積みの内側には砂を充塡している。後背には砂まじり粘土や粘土まじりの砂を厚さ20～40cmに整地した後に、後面の石積みを行う。前面の石積みとの間には砂まじりの粘質土、砂を互層に充塡している。
- 姪浜脇地区は砂岩を用い、全体を石積みしている。基底部の幅4.0mである。石材は砂岩が多く、礫岩・玄武岩・変成岩が少量見られる。姪浜向浜は石土混築の構造であると云われる。

以上のように防塁には高さに対しては一定の基準があったものと考えられるが、構築方法には多様性があり、「防塁の負担した分担囲ごとに独自の築造法が採用された」と考えられる。又、これらは海岸汀線から50m内陸の標高3m前後を測る砂丘傾斜面の上位に立地する特徴をもっていると云われる。当該調査地点を13世紀後半の海岸線とするならば、南側約50mの位置に防塁が存在することになるが、この推定線上に位置する第55次調査では、[註7]石塁に関係する遺

構は検出されていない。

(8) SX32に用いられた石材は礫岩が最も多く、次に変成岩・花崗岩・玄武岩・砂岩の順である。これらの石材は博多湾岸で採集できるものと云われるが、特に能古島では一括して集めることが可能と云われる。護岸とすれば最大の延長80～900mに及ぶもので、一豪商や有力な官人の力量では無理な事業であることから、国家的事業と考えるのが妥当である。

(9) SX32を13世紀の護岸遺構と考えた場合、沖ノ濱の砂堆は年々進んでいることや、或いは地下水による海岸浸食に対応した護岸であるとみれば、海岸線の後退に付随して、各年代、時期毎に護岸状遺構が発見されねばならないが、推定される11世紀の護岸、或いは1646年の護岸も現在までに検出していない。

(10) 元禄16年（1703）の貝原益軒「筑前国続風土記」（博多石塁）には『いにしえより此地は唐船来着の要津なれば、民家多し、繁栄の地にして、殊に異賊襲来の防御のため、屯兵を多くをかせしとかや。されば基に要害の備厳重にして、北一面は皆石垣なり。是上古より有し石壁にて、弘安異賊の来りし時、再補修せるなり、此石壁ありし故に、博多を名はて、石城府と云。』とある。石城府については「世宗実録」応永26年（1419）や「海東諸国紀」文明3年（1471）にも記されている。当該調査地点は著しい浸食を受けており、市街地のために他の地域とは地形の環境が異なることから防塁線は町屋の外側に設置しなければならず、工事は非常な難工事であったと考えられる。第46次調査では12世紀後半から15世紀まで、第55次調査では14世紀を中心とした12～15世紀の遺構・遺物を検出している。又、町屋の広がりが海岸線間近におよんでいたことは土壙墓SX31，井戸SE15・16の検出によっても推測できる。石築地の大部分は「筑前国続風土記」の「博多古塁」の中で、『…博多・箱崎・福岡の海辺に石塁所々残りて有しが、慶長六年福岡城の石塁を築くために取用て、今はなし。』とあり、福岡城築城の際に石垣の用材として利用されたため、砂堆内に埋没していた部分のみが遺存したものと考えられる。

(11) 博多の石築地役に関しては、建治3年から弘安3年にかけて、肥前守護武藤経資が出した博多勤番の異国警固番役覆勘状が三通残っており、相田二郎は「蒙古襲来の研究」（昭和33年）の中で『石築地の築造が始まってからは、その分担場所が異国警固番役の分担場所である。』として異国警固番役は石築地役と表裏一体のものと考えた。川添昭二氏は『歴代鎮西要略』の記事から、「弘安3年（1280）9月、筑前国の住人某が博多袖浜の石築地二丈五尺を築造している。築造開始から弘安3年末までは、筑前・肥前がともに博多の石築地築造・修理にあたっていた……」と述べている。[註8]

(12) 石築地築造は建治2・3年で終了したのではなく、修理と新たな構築を併行して行っている。[註9] 例をあげると

- 弘安9年（1286）8月には友清又次郎入道が筑後国役所としての博多庄浜に石築地を築造。

- 比志島文書　正応6年（1293）4月12日筥崎石築地破損検見注文では、筥崎地域の石築地の破損箇所の修理を薩摩国に命じている。
- 広瀬文書　乾元2年（1303）4月17日筑前守護武藤盛経施行状に於いて末弘名中村弥二郎（続）に対して、博多前浜石築地加佐並びに修理を命じている。
- 榊文書　正和5年（1316）2月12日筑前国守護武藤貞経施行状では、早良郡地頭榊定禪に対して、博多前浜石築地と加佐の修理を命じている。

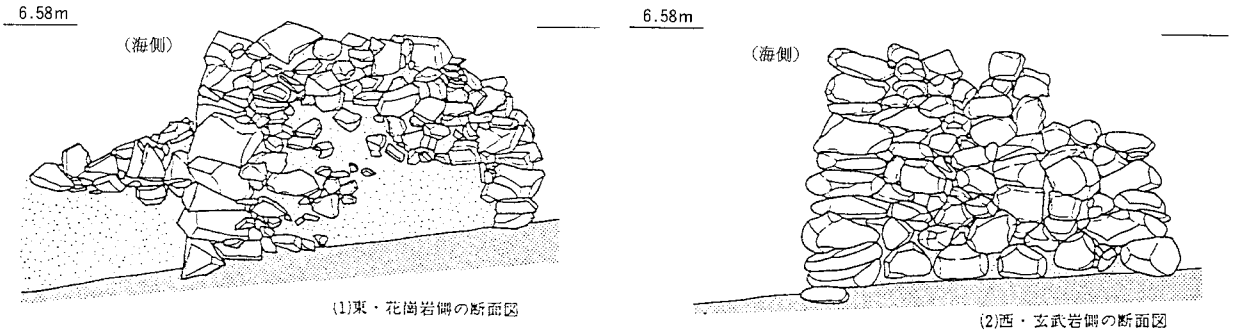
以上のことから、急造の石築地であったために、加佐、高、裏芝の追加工事の必要性及び補修工事が断続的に行われている。当該地に於いても、斜面上位には20～30cmの礫岩が捨石の上部に被った状態で散乱していることや、これらの礫中に14世紀代の遺物が存在したことの事実は、満潮時、嵐等に護岸が波の浸食を受け、その損傷などから度々の補修がなされているものと考えたい。

(13) 石築地の築造についての史料の初見は建治2年3月に肥前守護武藤経資が肥前国高来東郷深江村の地頭安富氏（深江氏）に宛たもので「異国警固の間、要害石築地の事、高麗発向の輩の外、奉行に課し、国中平均に沙汰を致し候所也、今月20日以前に、人夫を相具し、博多津に向かい、役所を請け取り、沙汰を致さるべき候、恐々謹言」とあり、『同年8月に鎌倉幕府の命令と武藤経資の同命令の下達を受けて、大隅国の国衙と守護とが、大隅国中に石築地築造の課役を分配し、同月中に完成せることを命じている』ところから、石築地は建治2年8月中に完成させることを目標にしていたことが知られる。

(14) 石築地役賦課の基準は所領一段（991.7㎡）[註10]について石築地一寸（3.0cm）の割合であったと云われる。この異国警固番役の課役を御家人層は惣領の統制のもとに所領の分限に応じて庶子も含めて分担（寄合勤仕）しており、石築地役の賦課を、庶子の中には割り当てを拒むものもでてきた。（比志島文書　嘉元4年－1306）

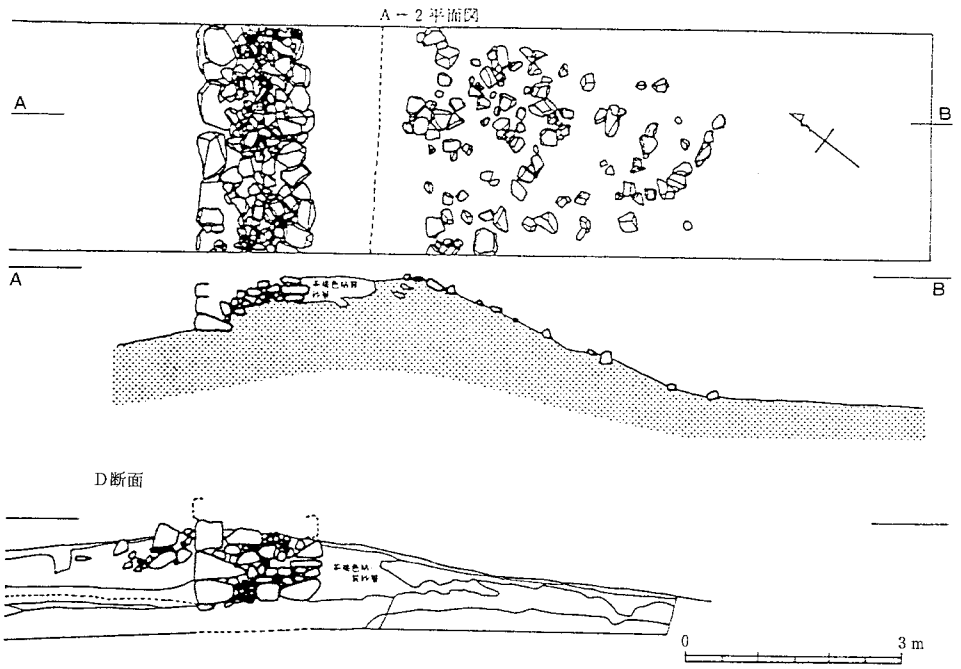
又、補修、或いは裏加佐、加佐等の追加工事は断続的に行われており、当時の工事が、御家人の負担の上に成り立つものであって一元的に行われていないことから、町屋を撤去して防塁を築くことは築造期間や費用負担（御家人在家民の滞在費、旅費、材料費）から考えて、物理的に無理がある。海岸汀線に捨石を行い、舟と人馬の上陸を不可能にすることが優先したであろう。

以上の(1)～(14)により、石積遺構SX32は13世紀後半から14世紀の海岸汀線を示すものであり、護岸としての機能があったものと考えられる。捨て石の上端部には石塁状の堤防があったものと推定したい。石築地の側にあったといわれる石城山妙楽寺は貞和3年（1346）に仏殿が完成しているが、この頃までは異国警固番役が行われていることから妙楽寺はまだ石築地の南側にあったものと考えられ、後世には海岸線の後退に伴う砂堆の進行によって北側に伽藍の展開を計ったものと推測できる。当該地が旧妙楽寺町に接して位置すること、更にはこの地点から西側約80mの地

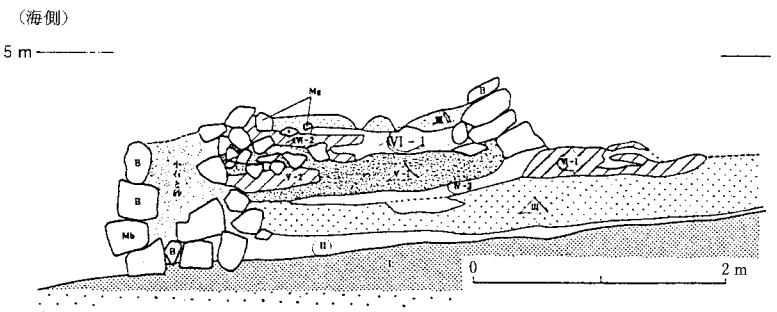


(1)東・花崗岩側の断面図　　(2)西・玄武岩側の断面図

今津・長浜の防塁実測図

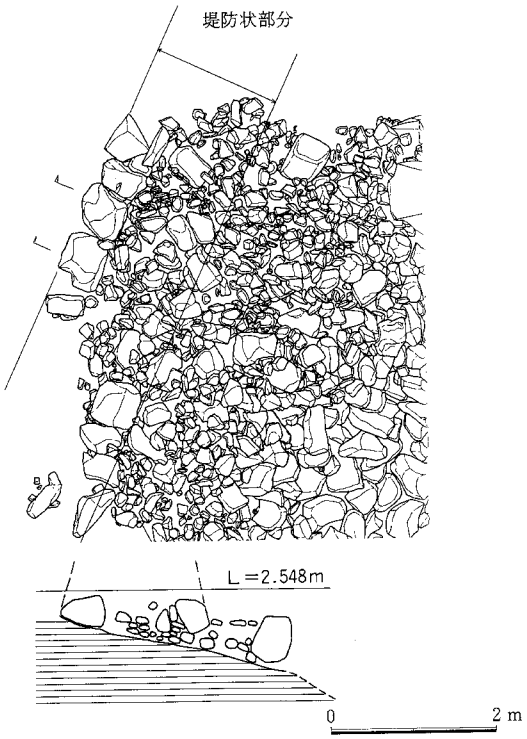


生の松原地区元寇防塁実測図（上A－2区・下D区）



西新地区元寇防塁実測図(石材；B-玄武岩，Mb-黒色変成岩，　Mg-緑色変成岩，　無記名は砂岩，層位；I-基盤砂丘，II・IV-2・VI-1　砂まじり粘土，III・V-1・VIII　粘土まじり砂，IV-1・V-2・VI-2粘土)

Fig.91　西区・早良区の元寇防塁実測図



国別分担地区一覧表

9	8	7	6	5	4	3	2	1
大隅国	日向国	豊前国	肥後国	肥前国	筑後国	筑前国	薩摩国	豊後国
今津（後浜）		今宿（青木・横浜）	生の松原	姪浜（向浜・脇）	西新（百道原）	博多（前浜・袖浜・庄浜）	箱崎（小松原・洲崎）	香椎（前浜・浜男）
三・〇km		二・二km	一・七km	二・〇km	二・三km	三・〇km	三・〇km	二・〇km

Fig.92　石積遺構SX32上端部の状態（縮尺 1/90）

点でも同様の遺構が見つかっていることから海岸線に沿ってこれらの護岸状の捨て石が施工されたことは疑いがないことである。立地条件が西区・早良区所在の元寇防塁とは異なることは先に述べた通りであるが、防塁構造や築造方法が分担国の裁量の中で行われており、一定の築造基準が認められない以上、従来の元寇防塁の構造上の所見をもってSX32が石築地ではないことを否定できるものではなく、むしろ可能性が充分にあると思える。早良区・西区所在の防塁との立地条件の違いでいえば、当該地に於いては汀線から約50m内陸の位置に防塁を設置することは、第46・55次調査でも明らかなように既に12世紀代から展開した町屋を撤去しなければならない。更には、政治・経済の中心地であるところの博多の市街地と周辺郡部に於ける石築地の立地的環境・条件を同一視することはできない。又、半年間という短期間で石築地を完成することを至上命令としていたことや、石築地役を含めて異国警固役が、御家人の所領分担に応じて行われたことは、結果的に後家人役に於ける勤仕の負担が、これを命じた鎌倉幕府の支配体制をゆるがすほどの影響をもつに至ったことから、財源的にも町屋の撤去を行うことは到底できる状況ではなかったと考えられる。元寇防塁の構造・構築方法については、博多地区の分担国が筑前・筑後国と考えられており、且つ、これらの国々の分担を知り得る史料では弘安9年（1286）以降に博多を分

担していることが知られる。石築地の築造当初から弘安3年（1280）までは肥前国が博多地区の前浜を分担していたと考えられているが、姪浜脇・向浜地区も同じく肥前国の分担であり、SX32の後背地が削平を受けている現状では定かではないが、SX32の上部の石塁構造は姪浜向浜地区と同様の石土混合築造か、もしくは1.6m幅の石塁を想定すれば脇地区の防塁と同様の構造が考えられる。

博多地区の元寇防塁の考古学的資料はこれまで全くと云っていい程、出土しておらず、今回の調査によって結論が得られた訳ではない。今後の資料の増加を待つと共に、防塁研究の一助となれば幸いである。

註1　福岡市教育委員会崇福寺山門修理に伴うもので屋根瓦の調査を行った。三木隆行氏教示
註2　貝原益軒「筑前国続風土記」　元禄16年（1703）
註3　「長政公御入國から二百年町家由緒記」　寛政12年（1800）
　　井上精三「福岡町名散歩」　葦書房有限会社　1983年
註4　川添昭二「注解 元寇防塁編年資料―異国警国番役史料の研究」　福岡市教育委員会
註5　福岡市博物館「よみがえる黄金の日々」　堺と博多展図録所収　1992年
　　聖福寺古図は永禄元年（1558）以前の境内を描いたものである。
註6　福岡市教育委員会「生の松原元寇防塁発掘調査概報」　1968年
　　福岡市教育委員会「今津元寇防塁発掘調査概報」　1969年
　　福岡市教育委員会「西新元寇防塁発掘調査概報」　1970年
　　九州大学出版会「古代乃博多」　1984年
註7　福岡市教育委員会発掘調査、現在整理中。小林義彦氏教示
註8　川添昭二「蒙古襲来研究史論」　雄山閣　1977年
註9　阿部征寛「蒙古襲来」　教育社歴史新書　1980年
註10　川添昭二

（付編１）

調査地点の地形および地質

西南学院大学　磯　　望
九州大学　下山正一

調査地の地形

博多遺跡群は、福岡平野を流れる那珂川河口部の低地に位置する。この低地は、縄文海進期以後に形成された沿岸州と、これと核として成立した砂丘列、および、砂丘間低地などの地形要素から構成され、那珂川の流路変遷の影響も受けた、多成因的地形を示す。現在の博多の地表は、自然状態で形成された地表面を２ｍ前後の厚さで人工的に盛り土して形成されたものであるが、その起伏は、自然堆積で形成された原地表の起伏形状を比較的よく反映していることが確認されている（磯ほか、1991）。

調査地点周辺の現在の地表の起伏を、図１に示す。調査地点は、昭和通り付近を頂点とする微高地（微高地Ⅲ）から、北西の海側方向に緩やかに下った海抜４ｍ前後の高度にある。この図から、調査地点の近傍にみられる微高地Ⅲの高まりは、昭和通り方向（北東－南西方向）よりも須崎方向（東西方向）に曲げられていることがわかる。微高地Ⅲの高まりは11世紀の末頃には陸化し、「息浜」（おきのはま）の主部を形成するようになった（福岡市教育委員会，1992，博多30）。調査地点はこれより海側にあたり、その陸化は11世紀末より少し遅れたと推定されるが、今回の調査によって、その年代がほぼ特定された。

「息浜」の北西側の箱崎砂層（地山層）の上限高度の分布については、従来確実な資料が得られていなかった。しかし、博多遺跡群第46次・第55次・第68次・第69次の調査が実施された結果、埋没地形の上面の形態の詳細が明らかになりつつある。図２は、息浜北西側の砂層の高まりを２ｍの等高線で示している。なお、第46次調査地点付近は、その断面から低地が湾入していたものと判断された。さらに、第５次・第46次・第60次の発掘調査結果などを総合し、11世紀末の海岸線の位置を推定した。また、今回の調査で明らかになった石積みの位置から、13世紀末の汀線の位置が特定された。近世では正保図（1646年）などの絵図から、海岸線の位置が特定できる。これらの旧汀線の推定位置を図３としてまとめた。石積みの位置と年代は磯ほか（1991）の推定結果とよく一致していたことになる。

調査地の地質断面

図４はほぼ大博通りにそって引かれた線に沿う地質断面である。本遺跡の地質の概要をこの図

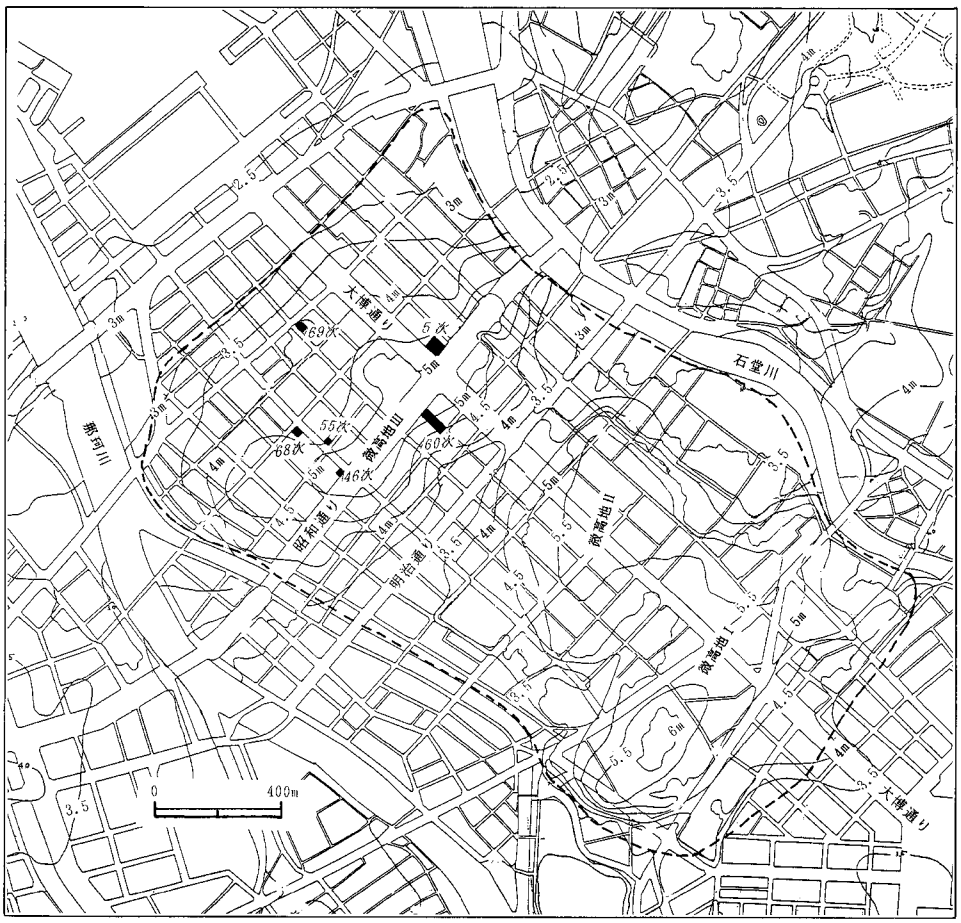


図1　博多遺跡群関連等高線および息浜周辺調査関係遺跡位置図

を用いて説明する。石積みの地山の砂層と石積み本体を海側から覆っている砂層は共に箱崎砂層（下山、1989）である。図4の地質断面図を見ると、試錐番号13、14付近で箱崎砂層の上限が大潮低潮線付近までせり上がっている。博多遺跡周辺の海岸線は海岸砂の堆積により、時代と共に、断続的ながら博多湾方向に前進している。本遺跡は11世紀の推定海岸線よりわずかに北側にある。

本遺跡の自然層（文化層の地山）は標高2.1m付近以下にみられる。その最上部には海岸砂丘砂層が見られ、15世紀の遺物が混入している。砂丘砂層には海岸砂と風成塵が交互に重なる、チリメンジワ状の堆積構造がみられる。これは、磯ほか（1991）によって、「トラ縞」と呼ばれているもので、風成層の季節的な堆積速度の変化と考えられる。トラ縞の発達する部分は、かつての砂丘表層部を占めていたと考えられ、その下にある砂丘砂層主部を覆って発達している。砂丘砂層主部は石積みの北側の、海抜0.5mから2.1m付近にみられる中粒砂層で、15ないし30cm単位の平行葉理が発達している。この平行葉理は単斜構造をなしており、その走向傾斜は、ほぼ東西方

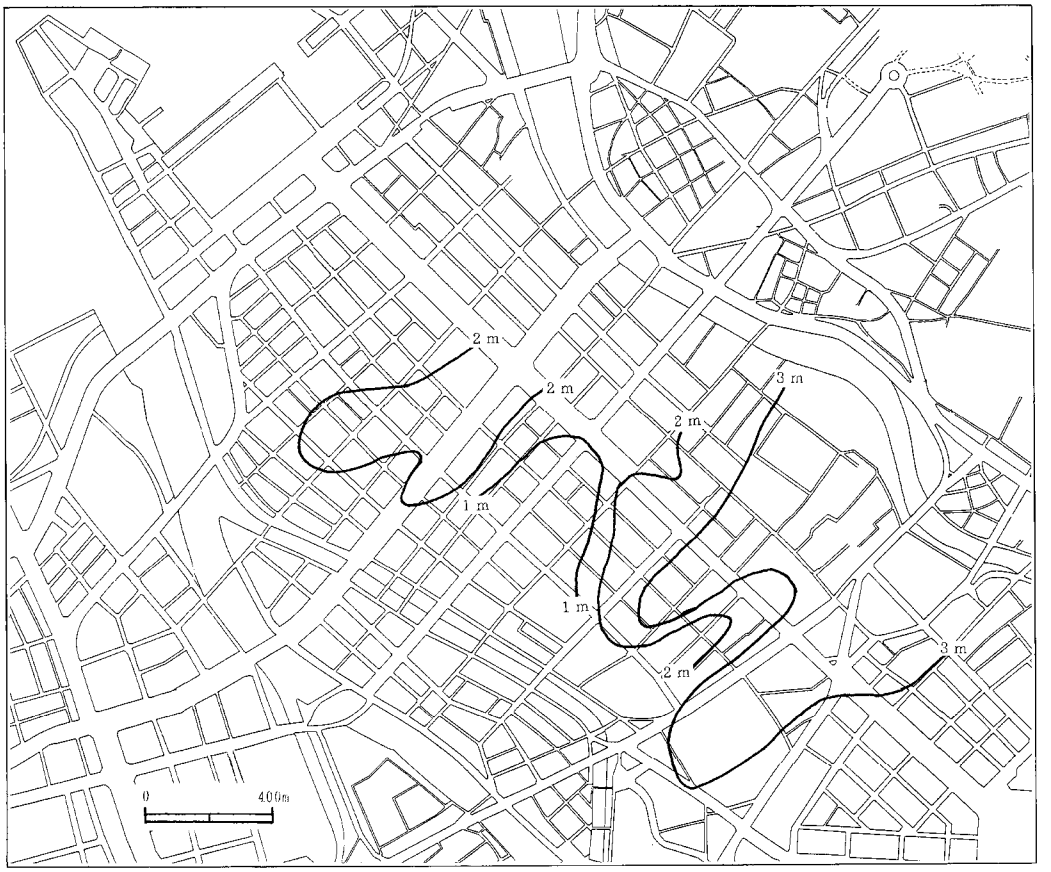


図2　息浜と博多浜の埋没自然地形等高線図

向、12°北落ちである。砂層の淘汰はよく、この砂層の上限と石積みの上限は一致している。砂丘層主部の中粒砂層は海浜の砂が波浪と冬季の卓越風によって吹き上げられて運ばれ、石積みの前面に急速に堆積したと考えられる。この砂層の上には妙楽寺が1316年に建立されており、このころには既に陸化していたことが確実である。海抜1m付近の石積みの基部以下には砂鉄の多い薄層が認められる。砂鉄薄層の存在は、波浪による砂層の侵食と砂鉄の残留堆積を示唆している。この付近が大潮高潮線付近と見られ、海浜砂が波の作用で後浜部までおしあげられ、堆積したことを示している。

石積みの背後の砂層は2つの部分に区分される（図5）。石積みのすぐ南側かつ下側には細礫混じりで淘汰の悪い粗粒砂層が発達している。堆積構造が消されていることから、この粗粒砂の堆積後に何等かの攪乱が生じたと考えられる。砂層同士の境界には、しばしば馬蹄形の削り込み構造が認められることから、石積みの背後では高潮時と低潮時における間隙水圧の変化による部分的な液状化や地下水のしみ出しによる侵食がしばしば生じていたと考えられる。石積みの一つ

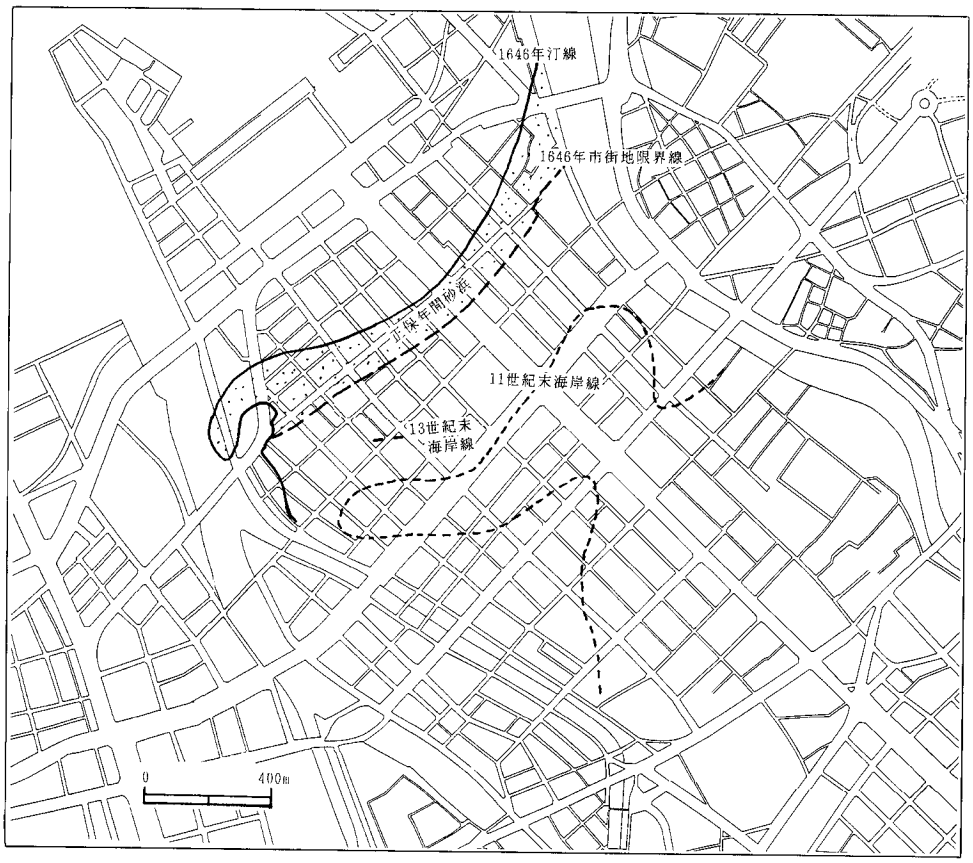
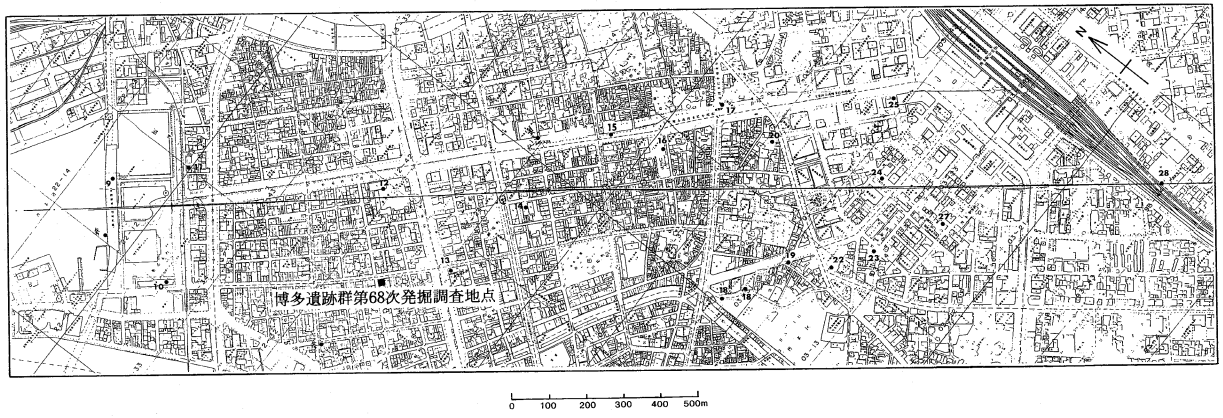


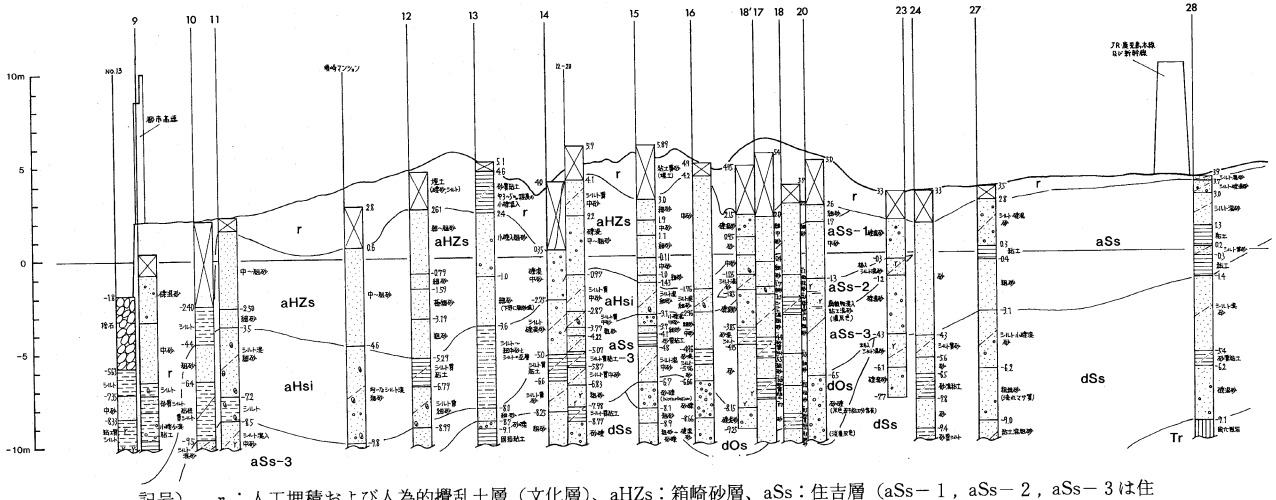
図3　息浜（おきのはま）の海岸線の年代別推定位置図

の効果として、このような海岸砂層の崩壊を抑え、砂の堆積を促進する効果が期待できる。石積み背後の地層中には、13世紀中頃の遺物が自然堆積している。石積みの築造年代は13世紀後半と判断されるので、この時期までには陸化していたものとみられる。

石積みの背後の砂層よりさらに陸側部分の箱崎砂層はN70°E，12°Nの面を境に一部斜交して接している（図5）。この部分には井戸が開削されており、その年代は、井戸中の遺物から13世紀中頃であると判断されている。このため、この部分の陸化は13世紀中頃までには完成していたことになる。同様の層相を示す箱崎砂層は、博多46次調査で海抜0.5～1.8mの範囲で観察されている。この部分の下部では、12世紀前半期以前の白磁片などが、自然堆積した砂層中に混入している。したがってこの砂層は、12世紀前半以前までは陸化せず、海浜砂を構成していたが、13世紀中頃以前には陸化していたことになる。

石積みの岩石は角のとれた亜角礫から亜円礫の巨礫を主体としている。礫の種類は古第三紀層の砂岩、礫岩を主体に、玄武岩と花崗岩類をともなっている。石積みに使われているこれらの巨礫





記号）　r：人工埋積および人為的攪乱土層（文化層）、aHZs：箱崎砂層、aSs：住吉層（aSs－１，aSs－２，aSs－３は住吉層の上部、中部、下部層にあたる）、aHsi：博多湾シルト層、dOs：大坪砂礫層、dSs：須崎層

図４　博多遺跡群周辺の地質柱状図とボーリング資料の位置

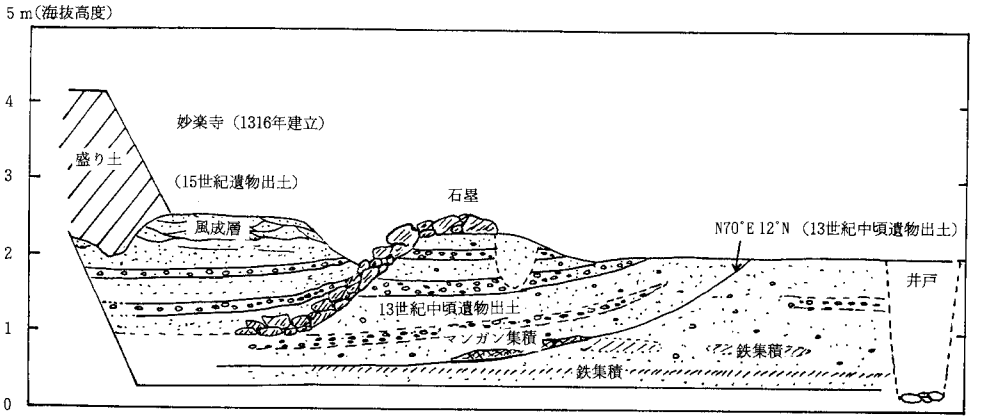


図５　博多遺跡群第68次発掘調査地点地質断面図

のうち、砂岩の礫にはまれに穿孔貝の開けた浅い穴が認められる。これらの状況から石積みの材料に使われた岩石の少なくとも一部は、どこかの海岸の汀線付近にあった転石が採集されて運ばれたものと思われる。これらの礫種は博多湾岸の岩石海岸に普遍的にみられるが、仮に、これらの転石が一ヵ所の海岸で採石されたとすると、上記の全ての岩石種を採石しうる最寄りの海岸は能古島の周囲に限られる。これらの岩石が波打ち際に護岸状に積まれていること、海岸の石が運ばれてきたと考えられることから、これらの石は陸路よりは海路を船で運搬されてきたと考えるのが合理的である。

参　考　文　献

磯　望・下山正一・大庭康時・池崎譲二・小林　茂・佐伯弘次（1991）：博多遺跡群周辺における遺跡形成環境の変遷.横山浩一先生退官記念事業会「日本における初期弥生文化の形成Ⅱ」、文献出版㈱、506－552頁.

福岡市教育委員会（1992）：博多26－博多遺跡群第46次調査報告－.　福岡市埋蔵文化財調査報告書第281集、60pp.

福岡市教育委員会（1992）：博多30－博多遺跡群第60次調査報告－.　福岡市埋蔵文化財調査報告書第285集、144pp.

福岡市教育委員会（1992）：博多33－博多遺跡群第69次調査報告－.　福岡市埋蔵文化財調査報告書第288集、21pp.

（付編２）

博多第68次調査出土遺物岩石薄片作製鑑定報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

博多遺跡群は、福岡平野の博多湾岸に形成された砂丘上に立地する。これまでの発掘調査により弥生時代から近世にわたる遺構・遺物が検出されている。

今回、第68次調査（博多区古門町98－１内所在）が実施され、鎌倉時代（13世紀後半～14世紀前半）に構築された護岸状の石積みが検出された。この護岸状石積みは調査区の北側で確認され、規模は東西方向に最大幅6.5m、長さ約20mを測る。石積みは調査区西側に約50m離れた地点でも確認されており、その規模はさらに拡大するものと推測されている。この護岸状石積みは、元寇防塁の推定線に一致することから、当初は元寇防塁のために構築された可能性が強いと判断されたが、遺構の構造や立地などから汀線護岸のために形成された石積みと考えられている。

1. 試　　料

薄片作製鑑定試料は、福岡市教育委員会埋蔵文化財課により選択された合計17点（試料番号１～17）である。SX13から検出された試料番号13は15世紀～16世紀に属し、SE14から検出された試料番号15が江戸時代に属するほかは、全て14世紀～15世紀に属するものである。各試料は福岡市教育委員会埋蔵文化財課により岩石の肉眼観察を行った結果、それぞれ岩石名が異なると思われるものを中心に選択されたものである。岩石薄片作製鑑定試料の一覧表を表１に示す。

2. 方　　法

試料をダイヤモンドカッターで切断し、研磨機で研磨し、薄片を作製した。これを偏光顕微鏡下で鉱物組織を観察し、岩石名を決定した。

3. 能古島・福岡県周辺の地質と岩石試料の関係

(1) 変成岩類

北九州地方は中国地方の三郡帯の西方延長に当たり、広い面積にわたって各所に三郡変成岩類が露出している。能古島中部には三郡帯に属する各種変成岩類と角閃岩（変斑れい岩）の露出が知られている。試料番号７（砂岩）・試料番号８（黒雲母緑泥石曹長石石英片岩）・試料番号13（粘板岩）・試料番号16（角閃岩）・試料番号17（角閃岩）は、いずれも三郡帯に

属する岩石である。試料番号4（黒雲母角閃石ホルンフェルス）は、三郡帯の斑れい岩が花崗岩の貫入により熱変成作用を受けて、ホルンフェルスした岩石である。

(2) 花　崗　岩　類

北九州地方には広く花崗岩類が露出しており、15以上の多数の岩体に区分されているため、試料番号3（両雲母花崗岩）の1点で産地を推定することは困難である。糸島半島・能古島・志賀島・新宮・福間などに分布する花崗閃緑岩類は、糸島型または北崎型に区分され、片状組織を有する含輝石－角閃石黒雲母花崗閃緑岩であるが、試料番号3は両雲母花崗岩で弱い片理を有する特徴があり、岩相的には典型的な糸島－北崎型と異なっている。糸島半島では糸島型花崗閃緑岩体を貫いて小規模な岩体を作る深江型花崗岩と呼ばれているものがあり、鉱物組成と岩相は類似するようである。能古島においても同様の岩体が存在する可能性について検討の余地がある。

(3) 赤　　色　　岩

北九州地方の赤色岩は、夾炭層となる古第三系の下部に産出し、分布範囲は広い。試料番号15（赤色泥岩）もそのひとつである。

能古島南部に分布する古第三系福岡層群残島層（臼井層）の基底礫岩の上方約40mには、紫赤色岩層が存在する。また、月隈丘陵北端の粕屋地区臼井の同層では、最下底の基底礫岩の直上と約15m上方に、2層の紫赤色岩層が存在することが知られている。

残島層の上部層となる野間層の下部層にも、1～2層の紫色頁岩層が含まれている。同層の分布は、香椎丘陵（粕屋地区海岸部）の南部や宇美盆地である。したがって、赤色砂岩や赤色頁岩はその起源を必ずしも遠隔地に求める必要はないと思われる。

(4) 堆　積　岩　類

試料番号1（ガラス質凝灰岩）・試料番号2（凝灰岩）・試料番号14（火山礫凝灰岩）は、いずれも火山岩起源の砕屑岩である。古第三系福岡層群残島層は、火山岩起源の砕屑物を多く含むことが知られている。また、広域的には津屋崎町に分布する古第三系津屋崎層が多量の火砕岩を著しく伴うことで知られる。おそらく試料番号10（砂岩）・試料番号12（シルト岩）とともに、古第三系として堆積したものであろう。試料番号9（黒雲母デイサイト）も一連の火山作用で生成されたものであろう。

(5) 玄　　武　　岩

北九州地方北部地区には、後期中新世～鮮新世にわたる玄武岩の活動がみられ、糸島郡芥屋大戸・姫島・可也山・福岡市今山・毘舎門岳・能古島・宗像郡津屋崎などに分布する。いずれもアルカリ岩系の玄武岩とされている。今回の試料では、試料番号5（変質玄武岩）・試料番号6（単斜輝岩かんらん石玄武岩）・試料番号11（玄武岩）がこれに属すると考えられる。

表1. 岩石薄片作製鑑定試料および鑑定結果

試料番号	遺　構	時　代	岩　石　名
1	SX32 石積み	13～14世紀	ガラス質凝灰岩
2	SX32 石積み	〃	凝灰岩
3	SX32 石積み	〃	両雲母花崗岩
4	SX32 石積み	〃	黒雲母角閃石ホルンフェルス
5	SX32 石積み	〃	変質玄武岩
6	SX32 石積み	〃	単斜輝石かんらん石玄武岩
7	SX32 石積み	〃	砂　岩
8	SX32 石積み	〃	黒雲母緑簾石緑泥石曹長石石英片岩（緑色片石）
9	SX32 石積み	〃	黒雲母デイサイト
10	SX32 石積み	〃	砂　岩
11	SX32 石積み	〃	玄武岩
12	SX32 石積み	〃	シルト岩
13	SX13	15～16世紀	粘板岩
14	SX32 石積み	13～14世紀	火山礫凝灰岩
15	SE14	江戸時代	赤色泥岩
16	SX32 石積み	13～14世紀	角閃石
17	SX32 石積み	〃	角閃石

4. ま と め

福岡市教育委員会埋蔵文化財課によれば、今回岩石薄片作製鑑定を行った試料は、能古島産と福岡市内産（香椎または今津）と推測されている。今回の鑑定結果では、いずれの試料とも能古島あるいは福岡市内に分布する岩類であり、調査所見と調和的な結果と言える。

今回の分析調査目的は、石積みの各岩石の産地を推定することにあった。今後は、今回の鑑定結果を基礎資料として、1）推定産地の岩石試料について鑑定し、比較検討を行うこと，2）データを蓄積し、周辺地域の地質図を用いて岩石の産地の分布図を作成すること，3）推定産地の露頭調査などが必要と考えられる。また、試料の大きさ・重量および石積みの構築技法などを考慮して、岩石の特徴を意識して石積みに用いられているのか否かを検討することが重要と思われる。さらに、岩石の元素組成を知るために、X線回析による分析方法も岩石の産地を調査するひとつの手法と考えられる。

Tab. 1　第68次調査遺構一覧表 ①

遺構名	旧遺構名	遺構種類	形態 平面形	形態 断面形	規模（cm） 長	規模（cm） 巾	規模（cm） 深	出土遺物	時期	備考
SK01		土　壙	隅丸長方形	逆梯形	194+α	158	18	土師器（Ⅲ・坏）、土師質土器（火舎）、中国青磁（碗）、瓦（軒丸瓦）、鉄製品（釘）、木炭	16C後（15C～16C）	SX02に切られる
SK02			不整円形	摺鉢形	128	118	73	土師器（Ⅲ）、須恵器（Ⅲ）、土師質土器（消炭壺の蓋）、瓦質土器（火舎・摺鉢）、七輪、中国青磁（碗・盤）、明（碗）、肥前白磁（碗）、有田（蓋物）、唐津（碗）、人形の鋳型、石製品（硯）、瓦（平瓦・丸瓦・軒平瓦・軒丸瓦・桟瓦）、鉄製品（釘）	18C前	
SK03			不整円形	逆梯形	150+α	73−α	17	土師器（鉢）、土師質土器（捏鉢）、舶載陶器（甕）、国産陶器（甕）、唐津（碗）、備前（摺鉢）、肥前染付（瓶）、瓦（平瓦）	中　世	境界地にあるSK18に切られる
SK04	SK04A		不整円形	逆梯形	152+α	94+α	25	土師器（Ⅲ・坏）、土師質土器（甕）、国産陶器（甕）	16C末～17C初	遺物の区別なし境界地にある
SK05			不整形	逆梯形	188	122	64	土師器（Ⅲ・坏）、土師質土器（鉢）、国産陶器片、染付（Ⅲ・碗）、瓦（平瓦・軒丸瓦）	18C後～19C初	
SK06			不整円形	逆梯形	111	97	42	土師器（Ⅲ）、瓦質土器（火舎）、国産陶器（鉢）、李朝陶器（摺鉢）、明青磁（碗）、瓦（平瓦・丸瓦）	15C～16C	
SK07			隅丸長方形	逆梯形	155	137+α	41	唐津（鉢・甕）、中国白磁（Ⅲ）、土管、瓦（軒平瓦）	17C前～18C	SK08に切られる
SK08			不整形	逆梯形	163	60+α	33	土師器（Ⅲ・坏）、国産陶器（甕）、伊万里（碗）、肥前系白磁（Ⅲ）、染付（碗・Ⅲ）、瓦（平瓦）	1800年代？	他の土壙に切られる
SK09			不整楕円形	逆梯形	118	92	52	土師器（Ⅲ・坏）、備前（甕）、唐津系（甕）、大内系（坏）、瓦（平瓦）	江　戸 18C	中にPitを有する
SK10		廃棄物土壙	不整隅丸長方形	—	210	140	—	土師器（高坏脚部）、国産陶器（碗・摺鉢）、唐津（Ⅲ・碗）、古銭	17C初	
SK11	欠									
SK12			不整方形	逆梯形	132	113	35.5	土師器（Ⅲ）、国産陶器（碗・摺鉢）、唐津（Ⅲ・碗・摺鉢）、高取系（碗・摺鉢）、有田（Ⅲ）、国産染付（碗・瓶）、肥前青磁（Ⅲ・香炉）、高取系半磁器（壺）、明染付（碗）、中国青磁（碗・壺）、李朝白磁（Ⅲ）、白磁（碗・猪口）、古銭（熙寧元寶）	17C～18C中頃まで	
SK13			不整円形	逆梯形	138	92+α	12	土師器（Ⅲ）、中国青磁（碗）、舶載陶器（甕）、唐津（碗）、国産陶器（甕）	江　戸	境界地にある
SK14			不整形	逆梯形	45+α	90	35	土師器（Ⅲ）、土師質土器（鍋）、瓦（平瓦・丸瓦）、鉄製品（釘）、鉄滓		境界地にある
SK15			不整円形	逆梯形	127+α	83+α	17	中国陶器（甕）、中国青磁（碗）、中国白磁（碗）、瓦（平瓦）、青銅製品片、古銭	中　世	境界地にあるSK24に切られる
SK16	SK16B		不　明	逆梯形	183+α	57+α	37	土師器（Ⅲ・坏）、須恵質土器（Ⅲ）、瓦（平瓦）	15C～16C	境界地にある
SK17			不整楕円形	逆梯形	225+α	130+α	35	土師器（Ⅲ・坏・鍋）、須恵器（坏蓋）、土師質土器（捏鉢）、瓦質土器片、明染付（Ⅲ）、舶載陶器（甕）、備前（甕）、国産陶器（鉢）、瓦（平瓦）	16C末～17C	SE18・20に切られる
SK18	SX05		不整楕円形	逆梯形	203+α	148	29	土師器（Ⅲ・坏）、備前（摺鉢）、唐津（Ⅲ・碗）、伊万里染付（Ⅲ）、中国青磁（碗）、瓦（軒丸瓦）	江　戸	境界地にある
SK19	SX06		不整円形	レンズ状	232	126+α	38	土師器（Ⅲ）、瓦質土器（火舎）、唐津（壺）、鉄製品（釘）、古銭（開元通寶）、自然遺物（馬の歯・骨）	17C初～前	境界地にある
SK20	SX08		不整楕円形	レンズ状	192−α	187	42.5	土師器（Ⅲ・坏）、土師質土器（鉢・摺鉢）、備前（摺鉢・甕）、国産陶器（碗）、舶載陶器（甕）、李朝白磁（小坏）、高麗青磁（碗・瓶）、明青磁（碗）、明染付（碗）、伊万里白磁（紅Ⅲ）、七輪、瓦（丸瓦・軒丸瓦）、鉄製品（釘・刀子・鎹）、鉄滓、自然遺物（骨）	15C～16C前	SE12に切られる

Tab. 1　第68次調査遺構一覧表 ②

遺構名	旧遺構名	遺構種類	形態		規模（cm）			出土遺物	時期	備考
			平面形	断面形	長	巾	深			
SK21	SX12	井戸？	隅丸長方形	逆梯形	188	$165^{+\alpha}$	$21.5^{+\alpha}$	土師器（皿・坏）、須恵器（甕）、土師質土器（鍋）、瓦質土器（鉢・火舎）、唐津（皿・碗・甕）、上野（片口）、瀬戸・美濃系（碗）、備前（甕）、舶載陶器（碗・甕）、国産白磁（碗）、中国青磁（碗）、福建染付（碗）、朝鮮白磁（碗）、李朝陶器（壺）、瓦（平瓦・丸瓦）、鉄製品（釘）	16C後〜17C初	SK24，SE19に切られる SX11と混合の遺物がある
SK22	SX13A		不整隅丸方形	逆梯形	200	$91^{+\alpha}$	53	土師器（皿）、土師質土器（甕）、瓦質土器（鉢・摺鉢）、高取系（摺鉢）、染付（皿）、中国青磁（碗）、中国白磁（碗）、李朝三島手（瓶）、瓦（平瓦・丸瓦・軒平瓦）、鉄製品（釘）、青銅製品、自然遺物（骨）	16C〜17C初	SX12と混合の遺物がある
SK23	SX16		不整円形	逆梯形	$162^{+\alpha}$	$127^{+\alpha}$	41.5	土師器片	中世	
SK24	SX13B	井戸	不整円形	摺鉢形	$183^{+\alpha}$	155	83.5	土師器（皿）、瓦質土器（摺鉢）、唐津（碗）、国産陶器（水注の把手）、瀬戸天目（碗）、備前（摺鉢）、中国青磁（碗）、瓦（平瓦）、鉄製品（釘）、焼土塊	15C後〜16C前	SX23・SK14に切られる 中にPitを有する
SK25	SK04B		不整形	逆梯形	$99^{+\alpha}$	66	10.5			境界地にあるSX24に切られる
SE01		瓦井戸	不整円形	円筒形	140 井筒73	120 井筒73	$66^{+\alpha}$	土師質土器（甕）、国産陶器（鉢）、高取系（壺）、鉄製品（釘）、瓦（平瓦）、古銭（寛永通寶） 〈井筒〉土師器（皿・坏）、唐津（甕）、小石原（摺鉢）、国産陶器（鉢・壺・片口）、肥前染付（碗・猪口）、鉄製品（釘）、自然遺物（骨）	18C前〜19C前	井戸瓦は遺物より除外する
SE02		瓦井戸	不整円形	摺鉢形	260 井筒90 桶　74	$240^{+\alpha}$ 井筒95 桶　74	$143^{+\alpha}$	〈掘り方〉土師器（皿・坏・甕）、須恵器（坏・甕）、東播系（鉢）、土師質土器（鉢）、瓦質土器（鉢・甕・摺鉢・火鉢）、唐津（皿・碗・片口）、上野（碗・甕）、小石原（碗）、瀬戸・美濃系（碗・甕）、備前（壺・甕・摺鉢）、内山（鉢）、有田（皿）、肥前青磁（皿）、肥前染付（皿・碗）、半磁器（碗）、中国青磁（碗・香炉）、白磁（皿・碗）、石製品（砥石・碁石・硯）、瓦（平瓦・丸瓦）、鉄製品（釘・鎹）、青銅製品、古銭、木炭、焼土塊、自然遺物（骨） 〈井筒〉土師器（皿・坏）、須恵器（坏）、土師質土器（鉢・火鉢）、瓦質土器（鍋・甕・摺鉢）、唐津（小坏・碗・摺鉢）、上野（碗・瓶）、小石原（鉢）、京焼（碗）、瀬戸・美濃系（碗）、備前（甕）、福岡系（甕・摺鉢）、肥前染付（小坏・皿）、中国青磁（皿・碗）、中国陶器（碗・鉢）、瓦（平瓦・丸瓦・桟瓦）、鉄製品（釘）、焼土塊	16C末〜17C後	桶を有する
SE03		瓦井戸	不整円形	截頭円錐形	250 井筒75 桶　70	245 井筒75 桶　70	$287^{+\alpha}$	上野（碗） 〈掘り方〉土師器（皿）、土師質土器（摺鉢）、瓦質土器（鍋・摺鉢・火鉢）、唐津（皿・碗・摺鉢）、上野系（甕）、備前（甕）、肥前染付（碗）、中国青磁（碗）、白磁（皿）、中国陶器（鉢）、瓦（平瓦）、鉄製品、鞴の羽口 〈井筒〉土師器（皿・坏）、瓦質土器（摺鉢）、唐津（碗・壺）、肥前染付（皿・碗）、李朝白磁（碗）、中国陶器（茶壺）、鉄製品（釘）、青銅製品	17C前	
SE04		瓦井戸	不整隅丸長方形	逆梯形	336 井筒80 桶　74	324 井筒80 桶　74	176	土師器（皿・坏）、土師質土器（鉢）、瓦質土器（火鉢）、唐津（皿・碗）、福岡系（壺）、備前（甕）、国産陶器（碗・鉢・急須）、中国青磁（碗）、白磁（碗）、明染付（皿）、瓦（平瓦・丸瓦・軒平瓦）、鉄製品（釘・鎹）、鉄塊、古銭（淳化元寶・大唐通寶）、青銅製品、石製品（硯・挽臼の下臼）、自然遺物（骨） 〈掘り方〉土師器（皿・坏）、土師質土器（鉢）、瓦質土器（鉢・火鉢）、唐津（皿・碗・甕）、上野・高取系（碗）、備前（甕）、坩堝、中国青磁（碗）、中国陶器（壺）、中国白磁（碗）、李朝白磁（皿）、瓦（丸瓦）、鉄製品（釘）、青銅製品、自然遺物（骨） 〈井筒〉土師器（皿・坏・鉢）、須恵器（甕）、土師質土器（摺鉢）、瓦質土器（火舎・摺鉢）、唐津（碗・片口）、福岡系（鉢）、備前（甕）、中国青磁（皿・碗）、中国白磁（碗）、高麗青磁（甕）、李朝陶器（壺）、瓦（平瓦・丸瓦）、鉄製品（釘・鑿）、鉄滓、鞴	16C末〜17C前	SE02に切られる

Tab. 1　第68次調査遺構一覧表 ③

遺構名	旧遺構名	遺構種類	形態		規模（cm）			出土遺物	時期	備考
			平面形	断面形	長	巾	深			
SE05		瓦井戸	不整円形	円筒形	134 井筒68	110 井筒65	$98^{+\alpha}$	土師器（皿・坏）、瓦（平瓦）	近世	
SE06		瓦井戸	不整円形	円筒形	125 井筒75	120 井筒75	$65^{+\alpha}$			
SE07		瓦井戸	不整円形	円筒形	197 井筒84	168 井筒84	$83^{+\alpha}$	陶磁器片		
SE08 〜 SE11		欠 〜 〃								
SE12		瓦井戸	不整円形	截頭円錐形	242 井筒85	$232^{+\alpha}$ 井筒80	$87^{+\alpha}$	土師器（皿・坏）、瓦質土器（鉢・甕・摺鉢）、高取系（片口・摺鉢・壺）、上野（皿）、福岡系（壺）、瀬戸（皿）、備前（壺）、李朝陶器（皿）、瓦（丸瓦・軒平瓦）、鉄製品（釘・鎹）、古銭（「開元通寶」）、青銅製品（針金か）、土製品（土錘）、自然遺物（骨） 〈掘り方〉土師器（皿・坏）、須恵器（甕）、瓦質土器（鉢・甕・摺鉢・火舎）、唐津（碗・鉢）、国産陶器（鉢・甕）、中国青磁（碗）、石製品（石臼）、瓦（平瓦・丸瓦） 〈井筒〉土師器（皿）、唐津（碗）、青白磁（香炉）、瓦（平瓦）、鉄製品（釘）	16C末 〜 17C後	SE05に切られる
SE13		素掘り井戸	不整円形	逆梯形	180	160	26	土師器（皿・坏）、土師質土器（摺鉢）、瓦質土器（鉢）、国産陶器（碗）、肥前（甕）、肥前染付（皿・碗）、中国青磁（碗）、白磁（碗）、瓦（丸瓦）、鉄滓	17C〜 18C前	SE20に切られる
SE14		瓦井戸	不整円形	円筒形	$220^{+\alpha}$ 井筒92	220 井筒75	$115^{+\alpha}$	土師器（皿・甕）、赤焼土器（蓋）、瓦質土器（鉢）、唐津（鉢・甕・摺鉢）、内山（碗）、福岡系（秉燭）、京焼系肥前（碗）、染付（碗・蓋鉢）、国産白磁（碗）、中国青磁（碗・鉢）、中国白磁（碗）、明染付（碗）、七輪、土製品（人形）、瓦（軒平瓦）、鉄製品（釘・鑿）、青銅製品（煙管）、自然遺物（骨）、滑石 〈掘り方〉土師器（皿）、瓦質土器（鉢・摺鉢）、唐津（摺鉢・瓶）、内山（碗）、京焼（碗）、肥前（碗）、福岡系（甕）、肥前染付（皿・碗）、中国青磁（皿）、中国白磁（碗）、七輪、焙烙、瓦（丸瓦） 〈井筒〉土師器（皿）、土師質土器（甕）、瓦質土器（鉢）、肥前染付（皿・碗）、七輪、瓦（平瓦・丸瓦）、古銭（祥符通寶・寛永通寶）、焼土塊	17C後 〜 18C中	SE07に切られる 他の瓦井戸に切られる
SE15		木桶井戸	不整円形	逆梯形	$344^{-\alpha}$ 井筒82	$240^{+\alpha}$ 井筒82	190.5	土師器（皿）、備前（壺）、染付（碗）、高麗青磁（皿）、石製品（碁石）、瓦（丸瓦・伏間瓦）、鉄製品（釘） 〈掘り方〉土師器（皿・坏）、土師質土器（器台・摺鉢・鉢）、瓦質土器（火舎）、中国青磁（皿）、中国白磁（皿）、李朝陶器（壺）、瓦（丸瓦）、鉄製品（釘・釣針）、木炭 〈井筒〉弥生土器（高坏脚部）、土師器（皿・坏）、李朝陶器（壺）、瓦（丸瓦・桟瓦）、鉄製品（釘・釣針）	14C後 〜15C	SE16と共通の上端を有する
SE16		木桶井戸	不整円形	逆梯形	$344^{+\alpha}$ 井筒83	240 井筒80	168.5	土師器（坏）、石製品（碁石） 〈井筒〉土師器（皿・坏）、中国青磁（碗）、中国白磁（碗）	13C代	SE15と共通の上端を有する SE02・15に切られる
SE17	欠									
SE18		瓦井戸	不整円形	円筒形	$240^{-\alpha}$ 井筒 110	$168^{+\alpha}$ 井筒 110	$94^{+\alpha}$	土師器（皿・坏・鉢）、土師質土器（鉢・甕）、瓦質土器（鉢・火鉢・摺鉢）、唐津（皿・碗・壺）、上野（壺）、高取系（摺鉢）、福岡系（壺）、瀬戸・美濃系（碗・鉢）、内山（皿）、現川（碗）、京焼（碗）、備前（甕・摺鉢）、肥前染付（皿・碗・猪口）、クロム青磁（皿）、中国白磁（碗）、中国陶器（壺）、明染付（皿・碗）、李朝白磁（碗）、安平（瓶）、福建（碗）、坩堝、瓦（平瓦・丸瓦・軒平瓦・軒丸瓦・瓦塼）、鉄製品（釘）、鉄滓、古銭（寛永通寶）、青銅製品（匙）、石製品（砥石・挽臼の上臼）、木炭、自然遺物（貝） 〈井筒〉福岡系（甕）、瀬戸・美濃系（碗）	17C後 〜 18C前	境界地にある SE20に切られる 16C後〜17C前の遺物も含む

Tab. 1　第68次調査遺構一覧表 ④

遺構名	旧遺構名	遺構種類	形態		規模（cm）			出土遺物	時期	備考
			平面形	断面形	長	巾	深			
SE19	SX09	瓦井戸	不整円形	逆梯形	290$^{-\alpha}$ 井筒69	296	195$^{+\alpha}$	土師器（皿・甕）、東播系（鉢）、土師質土器（鉢・摺鉢）、瓦質土器（火舎）、唐津（碗）、肥前（碗）、備前（甕）、伊万里（皿）、明青磁（皿・碗）、李朝陶器（甕）、瓦（平瓦・丸瓦）、鉄製品（釘） 〈井筒〉唐津（小坏）	16C末 ～17C	境界地にある 木桶を有する
SE20	SX17	石組井戸	不整円形	円筒形	431 井筒 120 桶　60	332 井筒 120 桶　60	228$^{+\alpha}$	土師器（皿・坏）、瓦質土器（鉢・摺鉢）、唐津（碗・摺鉢）、中国白磁（碗）、瓦（丸瓦・軒平瓦） 〈掘り方〉土師質土器（鍋・鉢・摺鉢）、瓦質土器（鉢）、唐津（片口）、国産陶器（壺・摺鉢）、福岡系（瓶）、備前（甕・摺鉢）、肥前染付（皿）、明青磁（碗）、明染付（碗）、瓦（平瓦・丸瓦・軒平瓦・軒丸瓦）、鉄製品（釘）、自然遺物（骨） 〈裏込め〉土師器（皿・坏）、土師質土器（鉢・摺鉢）、瓦質土器（甕・鉢・摺鉢・火舎）、唐津（甕・壺）、明染付（皿・碗）、瓦（平瓦・丸瓦・軒平瓦・軒丸瓦・伏間瓦・瓦塼）、鉄製品（釘・鑿）、鉄滓、石製品（板碑）、自然遺物（骨） 〈井筒〉土師器（皿・坏）、土師質土器（鉢・摺鉢）、瓦質土器（鉢・摺鉢・火舎）、唐津（皿）、備前（鉢・甕・摺鉢）、中国青磁（碗）、中国白磁（皿）、明染付（皿・碗）、瓦（軒平瓦・軒丸瓦・熨斗瓦・特殊瓦）、鉄製品（釘）、石製品（砥石） 〈井筒下層〉瓦質土器（鉢）、国産陶器（鉢）、七輪、瓦（丸瓦・軒平瓦）、鉄製品（釘）、石製品（石塔） 〈桶内〉土師器（皿）、瓦質土器（鉢）、瀬戸天目（碗）、備前（甕）	16C末 ～ 17C前	SE13に切られる 主体は16C末
SX01		植栽跡？	不整楕円形	摺鉢形	263	206	60	土師器（皿）、瓦質土器（摺鉢）、唐津（碗）、高取系（甕）、肥前陶器（碗）、肥前染付（皿・碗）、クロム青磁（皿）、瓦（平瓦・丸瓦）、鉄製品（釘）、鉄滓、自然遺物（貝）	17C後	
SX02			不整隅丸方形	逆梯形 2段	362$^{+\alpha}$	280	76	唐津（摺鉢）、高取系（甕）、国産陶器（碗・鉢）、福岡系（摺鉢）、陶胎染付（皿）、中国青磁（碗）、瓦（平瓦・丸瓦・軒平瓦）、漆剝、木炭 〈掘り方〉土師器（坏）、土師質土器（鍋・鉢）、瓦質土器（鉢・摺鉢）、唐津（皿・碗・壺・片口・摺鉢）、上野・高取系（碗・鉢・甕・摺鉢）、福岡系（碗）、備前（鉢）、京焼（人形）、肥前陶器（碗）、肥前染付（皿・碗・小坏・瓶）、瀬戸・美濃系（火鉢）、中国青磁（香炉）、白磁（碗・小坏）、七輪、瓦（丸瓦・軒平瓦・軒丸瓦）、鉄製品片、鉄滓、古銭（寛永通寶）、焼土塊、漆器（椀） 〈下層〉土師器（皿）、瓦質土器（鉢）、唐津（碗）、高取系（甕）、備前（甕・摺鉢）、福岡系（甕）、染付（碗）、青磁（碗）、瓦（丸瓦）、鉄製品（釘）	17C前 ～ 18C後	SX03に切られる
SX03		溜　桝	方形又は長方形	逆梯形	555$^{+\alpha}$ 内法 443	175$^{+\alpha}$ 内法 124	74$^{+\alpha}$	土師器（皿・坏）、土師質土器（甕・鍋の把手・脚部・七輪・焙烙）、瓦質土器（摺鉢・火舎）、唐津（皿・碗・鉢・甕・片口）、京焼風肥前（碗）、小石原（碗）、備前（摺鉢）、嬉野系（瓶）、染付（皿・碗・小坏）、有田（皿）、青磁（碗）、白磁（碗）、陶製品（人形）、土製品（土錘・土鈴・人形）、瓦（平瓦・丸瓦・軒丸瓦・鬼瓦）、鉄製品（釘・小刀）、古銭（寛永通寶）、自然遺物（貝・骨）、木製品（笄） 〈1層〉土師器（皿）、須恵器（甕）、土師質土器（焼塩壺の蓋・七輪）、唐津（碗・甕・壺）、高取系（碗・壺）、上野（鉢）、京焼（碗）、伊万里（皿）、肥前染付（碗・小坏）、有田白磁（碗）、中国青磁（碗）、明染付（皿・小碗）、明赤絵（皿）、土製品（魚形）、瓦（平瓦・丸瓦・伏間瓦）、鉄製品（釘・鏃）、古銭（寛永通寶・祥符通寶）、自然遺物（魚骨・貝―ワタゾコモシオガイ）、木炭、木製品（栓・筆柄） 〈2層〉土師器（皿）、唐津（皿・鉢）、高取系（摺鉢）、染付（碗）、瓦（平瓦・丸瓦）、鉄製品、自然遺物（骨）	18C前 ～ 18C中	境界地にある SX21に切られる 壙底は土壙（SX30）に切られる

Tab. 1　第68次調査遺構一覧表 ⑤

遺構名	旧遺構名	遺構種類	形態		規模（cm）			出土遺物	時期	備考
			平面形	断面形	長	巾	深			
SX03								〈3層〉土師器（皿）、土師質土器（消炭壺の蓋）、瓦質土器（火舎）、唐津（壺・甕・瓶・摺鉢）、小石原（碗）、現川（皿）、備前（甕）、伊万里（皿）、肥前染付（碗）、陶胎染付（皿）、青磁染付（皿）、白磁（猪口）、瓦（平瓦・丸瓦）、鉄製品（釘）、青銅製品片、自然遺物（貝） 〈4層〉土師器（皿）、唐津（碗・甕・摺鉢）、上野系（甕）、信楽（茶壺）、備前（甕）、有田白磁（碗）、肥前染付（碗・小坏）、有田（皿）、中国青磁（碗）、青白磁（ミニチュア坏）、瓦（平瓦・丸瓦・軒平瓦・軒丸瓦・伏間瓦）、鉄製品（釘・庖丁）、鉄滓、自然遺物（骨・貝―ツメタガイ）、木炭、木製品（栓・漆椀） 〈5層〉土師器（皿）、唐津（摺鉢）、京焼風肥前（碗）、肥前染付（碗）、土製品（鈴）、瓦（平瓦・丸瓦）、自然遺物（貝―ツメタガイ・コロモガイ） 〈6層〉土師質土器（焙烙・焼塩壺の蓋）、瓦質土器（鉢・火舎）、唐津（摺鉢）、信楽（壺）、備前（甕）、染付（碗・八角把手付蓋物）、中国陶器（壺）、瓦（平瓦・丸瓦・軒丸瓦・伏間瓦）、自然遺物（貝） 〈7層〉唐津（碗・甕）、肥前染付（碗）、瓦（平瓦・丸瓦） 〈8層〉中国青磁（碗） 〈裏込め〉国産陶器（碗）、七輪、瓦（丸瓦）		
SX04			不整円形	レンズ状	$152^{+\alpha}$	$93^{+\alpha}$	$25^{+\alpha}$	土師器（皿・坏・甕）、瓦質土器（鉢・摺鉢・火舎・湯釜）、唐津（皿・碗）、福岡系（甕）、高取系（甕）、上野（大皿）、瀬戸・美濃系（碗）、備前（甕・瓶・摺鉢）、舶載陶器（碗）、中国青磁（碗・壺）、明染付（碗）、高麗青磁（碗）、瓦（平瓦・丸瓦・軒丸瓦）、鉄製品（釘）、古銭、青銅製品片、石製品（硯） 〈掘り方〉土師器（皿）、瓦質土器（鉢）、大内系（摺鉢）、備前（甕）、国産陶器（水指）、瓦（丸瓦・軒丸瓦）、鉄滓	17C前	SE02・04に切られる
SX05	欠									
SX06	欠									
SX07			不整隅丸長方形	逆梯形	143	106	35.5	土師器（皿・坏・鍋）、須恵器（甕）、瓦質土器（鉢・火舎）、唐津（碗・鉢・甕・摺鉢）、肥前（碗）、瀬戸・美濃系（甕）、舶載陶器（甕）、肥前染付（碗）、明青磁（碗）、朝鮮陶器（瓶）、瓦（平瓦・丸瓦・軒平瓦・道具瓦）、鉄製品（釘）、鉄滓、木炭、石製品（碁石）、自然遺物（貝）	17C前～18C	SE12に切られる 焼土がある
SX08	欠									
SX09	欠									
SX10			——	—	$73^{+\alpha}$	$24^{+\alpha}$	16	土師器（皿）、土師質土器（鉢・摺鉢）、中国青磁（碗）、瓦（平瓦）、鉄製品（釘・鋏）、鉄滓	16C後（15C～16C）	境界地にある SX18に切られる
SX11			不整長方形	逆梯形	$324^{+\alpha}$	$305^{+\alpha}$	57	土師器（皿・坏）、瓦質土器（摺鉢・湯釜）、唐津（甕）、備前（摺鉢）、明染付（碗）、瓦（平瓦・丸瓦）、鉄製品（釘）	中世	SX07・SE12・19に切られる
SX14			不整楕円形	逆梯形	153	117	32	土師器（皿）、瓦質土器（鉢）、高取系（甕）、肥前陶器（碗）、福岡系磁器（碗）、中国白磁（碗）、瓦（丸瓦）、自然遺物（貝）	18C～幕末	16C末の一群がある
SX15		墓	不整形	逆梯形	$218^{+\alpha}$	$120^{+\alpha}$	35	土師器（皿・壺）、唐津（甕）、舶載陶器（茶壺）、朝鮮青磁（皿）、自然遺物（骨）	中世	SX14に切られる

Tab. 1　第68次調査遺構一覧表 ⑥

遺構名	旧遺構名	遺構種類	形態		規模（cm）			出土遺物	時期	備考
			平面形	断面形	長	巾	深			
SX16	SK16A	室	不整円形	逆梯形	323	270+α	48.5	土師器（Ⅲ・坏）、土師質土器（鍋・摺鉢）、瓦質土器（鉢・摺鉢）、唐津（Ⅲ）、瀬戸・美濃系（瓶）、肥前染付（碗）、瓦（平瓦・軒丸瓦）、鉄製品（釘）〈掘り方〉土師器（Ⅲ・鉢）、東播系（鉢）、土師質土器（鉢）、瓦質土器（鉢・摺鉢・火舎）、堺系（摺鉢）、染付（Ⅲ・碗）、瓦（平瓦・丸瓦）、石製品（硯）〈内側〉土師器（Ⅲ）、唐津（Ⅲ・碗・壺・甕・摺鉢）、朝鮮唐津（瓶）、上野（碗）、高取系（甕）、肥前（Ⅲ・碗・片口）、九州系（甕）、瀬戸（碗）、備前（摺鉢）、肥前磁器（碗）、肥前染付（Ⅲ・碗）、紬載陶器（碗）、中国青磁（碗）、中国白磁（Ⅲ・碗）、中国陶器（壺）、高麗青磁（碗）、七輪、瓦（丸瓦）、鉄製品（釘・鞘）	17C前〜18C前	SE14に切られる 16C後〜16C末の遺物も含む 板囲いを有する
SX17	欠									
SX18			——	—	136	117+α	35.5	土師器（Ⅲ・坏）、瓦（平瓦）、鉄製品（釘）	13C〜14C？	境界地にあるSK20に切られる
SX19			——	—	350	198+α	—	土師器（Ⅲ・坏）、須恵器（蓋）、瓦質土器（甕・片口・摺鉢・角火鉢）、唐津（甕）、国産青磁（壺）、中国青磁（碗）、中国白磁（碗）、高麗青磁（碗）、瓦（平瓦・丸瓦）、鉄製品（釘）、鉄滓	15C〜16C	境界地にある SE01・15・16に切られる
SX20			不整楕円形	舟底形	177	85	45	国産陶器（碗・摺鉢）、小石原（摺鉢）、肥前染付（碗）、瓦（平瓦・丸瓦）、鉄製品（釘）	17C末〜18C前	
SX21			——	摺鉢状	160+α 内法83	124+α 内法74	59	土師器（Ⅲ）、唐津（壺）、福岡系（瓶）、肥前（碗）、七輪、瓦（平瓦・丸瓦）、鞴 〈内側〉土師器（Ⅲ・坏）、土師質土器（甕・七輪）、唐津（甕・摺鉢）、福岡系（Ⅲ・瓶）、関西系（碗・土瓶の蓋・摺鉢）、備前（甕）、有田色絵（鉢）、肥前染付（Ⅲ・碗・薬合子の蓋）、瓦（平瓦・丸瓦）、鉄製品（釘）、木炭、自然遺物（骨・貝—サザエ・ハマグリ・フジツボ・ミガキナガニシ）	18C後〜幕末（19C後）	
SX22	欠									
SX23		礎石？	隅丸長方形	逆梯形	100	85	30	木炭		
SX25〜SX29	欠〜〃									
SX30		土　壙	隅丸長方形	箱　形	87−α	62	38	唐津（碗・甕・摺鉢）、京焼（碗）、有田（Ⅲ・角鉢）、肥前染付（Ⅲ）、七輪、瓦（平瓦・丸瓦・軒丸瓦）、鉄製品（釘）、石製品（滑石製石錘）、木炭	18C前〜18C中	SX03内にある
SX31		土壙墓	隅丸長方形	逆梯形	170	134	45	土師器（Ⅲ）、赤焼土器（坏）、瓦質土器（鉢）、中国青磁（碗）、自然遺物（人骨）	12C後〜13C前	3面で検出
SX32		石積み			2000+α	650		土師器（Ⅲ・鉢）、瓦質土器（鉢・摺鉢・火舎）、備前（甕）、中国青磁（Ⅲ・碗）、鉄滓	13C後半	
Pit01			不整円形	逆梯形	72	68	43	土師器（Ⅲ）、鉄製品（釘）、古銭		
Pit02			不整円形	逆梯形	98	80	40	土師器（Ⅲ）、土師質土器（甕）、唐津（Ⅲ・碗・摺鉢・蓋物）、二彩唐津（鉢）、小石原（碗）、紬載陶器（甕）、国産白磁（碗）、瓦（丸瓦）、鉄製品（釘・鋏）、青銅製品		
Pit03			——	—	—	—	—	土師器（Ⅲ）、国産青磁（碗）、肥前染付（瓶）、瓦（丸瓦）		平面図実測不可
Pit04			隅丸長方形	逆梯形	92	66	21.5	土師器（Ⅲ）、中国青磁（碗）、鉄片	中　世	
Pit05			不整円形	逆梯形	45	42	12.5	土師器（Ⅲ）、唐津系（碗）		

Tab. 2　第68次調査遺物一覧表 ①　土壙出土遺物

挿図番号	遺物番号	種類	器種	法量（cm） 口径	底径（高台径）	器高（ ）は現存高	形態の特徴	文様・施釉・色調・素地等	出土遺構	備考
8	1	土師器	小皿	7.0	5.0	1.45	糸切り底	胎土に細砂粒を含み、焼成良好、暗茶褐色。	SK01	
〃	2	〃	〃	7.1	5.6	1.35	糸切り底	胎土に細砂粒を含み、焼成は軟、淡灰褐色。	〃	
〃	3	〃	〃	7.6	5.0	1.3	糸切り底、土の塊り付着	胎土に細粒の砂を含み、焼成良好、暗茶褐色。	〃	
〃	4	〃	〃	7.2	5.0	1.5	糸切り底	胎土に細砂粒を含み、焼成良好、黄褐色。	〃	
〃	5	〃	〃	8.0	6.2	1.0	糸切り底	胎土に細砂粒を含み、焼成やや軟、茶褐色、外面は灰褐色。	〃	
〃	6	〃	〃	8.8	7.6	0.9	糸切り底	胎土に細砂粒を含み、焼土は良好。淡茶褐色。	〃	
〃	7	土師質土器	火舎	—	—	—	口縁部は直口、体部外面に1条の突帯	胎土は暗灰色砂を含み、焼成良好。外面は暗茶灰色。体部外面に梅花文のスタンプ。	〃	
〃	8	青磁	碗	—	—	—	端反り碗、輪花	素地は淡灰色、淡緑釉。外面に櫛描文。	〃	龍泉窯系 平安時代
〃	9	土師器	小皿	6.2	4.6	0.95	糸切り底	胎土に細砂粒を含み、焼成良好。茶褐色。	SK02	
〃	10	〃	〃	6.5	5.2	1.35	ヘラ切り底、底部が厚い	胎土に細砂粒を含み、焼成良好。淡黄灰色。	〃	
〃	11	〃	〃	7.0	4.6	1.05	糸切り底	胎土に細砂粒を含み、焼成良好、茶褐色。	〃	
〃	12	白磁	碗	6.0	—	(2.3)	口縁部はやや外反、器壁薄い	素地は精緻、白色。灰白色釉。	〃	肥前18C～
〃	13	〃	〃	—	4.0	(0.9)	高台は細く、尖る器壁薄い	素地は精緻、白色。青白色釉。	〃	有田
〃	14	陶器	瓶	—	6.9	(1.6)	上げ底	焼成堅い。茶灰色。	〃	国産
〃	15	〃	碗	—	4.2	(2.6)	高台は低い、削出し、体部は丸味をもつ	素地は淡茶褐色、暗緑灰色釉。焼成良好、見込み釉ハギ、かいらぎ。	〃	唐津焼
〃	16	青磁	盤	—	—	—	内面にケズリ	素地は灰色、細砂粒を含む。緑灰色釉。貫入。	〃	
〃	17	〃	碗	—	—	—	口縁部片	素地は精緻、暗灰色。オリーブ色釉、内面にヘラ片彫文。	〃	龍泉窯系
〃	18	磁器	蓋物	—	—	—	体部は半筒形 口縁端部丸い	体部外面に貫入。赤絵で、梅花文。	〃	赤絵 有田18C前～
〃	19	土師質土器	蓋	径18.0	厚 1.1	—	正円形、中心に径3.5mmの紐穴	胎土は2mm前後の砂を含み、焼成良好。淡灰色から暗灰青色。	〃	消炭壺
〃	20	瓦質土器	摺鉢	28.0	—	(3.0)	口縁部内面に三角突帯貼付。6本単位の下し目	胎土に細砂粒を含み、焼成良好。灰青色。	〃	大内系
〃	21	〃	火舎	—	—	—	胴部片	胎土に2mm前後の砂を含む。外内面黒色研磨。焼成良好。暗灰青色。外面に雲文のスタンプ。	〃	
〃	22	土師質土器	〃	—	—	—	体部内面はヨコハケ	胎土は1mm前後の砂粒を含む。内面黒色研磨。焼成良好。茶灰色。体部外面に印花。	〃	
9	26	〃	捏鉢	—	—	—	口縁部は丸味をもつ 内面ヨコハケ	胎土に細砂粒を含み、焼成良好。淡黄褐色。	SK03	
〃	27	陶器	摺鉢	—	—	—	胴部の最大径は32.8cm 内面に7本単位の下し目	素地は明茶褐色、細砂粒を含む。	〃	備前焼
〃	28	土師器	小皿	8.1	6.2	1.05	糸切り底	胎土に細砂粒を含み、焼成良好。茶褐色。	SK04	
〃	29	〃	〃	7.0	5.6	1.4	糸切り底、板目痕	胎土に砂粒含み、焼成良好。茶褐色。	〃	
〃	30	〃	〃	7.0	5.0	1.5	糸切り底	胎土に2mm程度の砂を含み、焼成良好。淡黄灰色。	〃	
〃	31	〃	坏	11.0	8.0	3.0	糸切り底	胎土に1～2mmの砂を含み、焼成良好。暗灰褐色。	〃	
〃	32	〃	〃	—	9.6	(1.8)	糸切り底	胎土に2mm程の細砂を含み、焼成良好。灰褐色。	〃	
〃	33	褐釉陶器	甕	—	—	—	体部片、内面ヨコハケ、外面タテ方向のカキ目	素地に砂粒を含む。外面は暗緑灰色釉、内面は露胎。	〃	唐津系か
〃	34	染付	碗	7.0	2.6	3.1	体部半球形	内底と体部外面に菊花文。青灰色。	SK05	肥前焼
〃	35	〃	皿	—	6.4	(1.3)	底部片、高台断面は三角形状	畳付は釉ハギ。見込みは2条の圏線。貫入。見込みに砂付着。	〃	

挿図番号	遺物番号	種類	器種	法量(cm) 口径	底径(高台径)	器高 ( )は現存高	形態の特徴	文様・施釉・色調・素地等	出土遺構	備考
9	36	土師質土器	鉢	39.0	14.3	24.6	口縁部は逆くの字形に直立、口縁端部は内側に肥厚	胎土は砂粒多い。表面は灰黄褐色。焼成軟。	SK05	江戸時代
〃	37	瓦質土器	火舎	37.8	—	(6.5)	体部内弯、口縁部は肥厚し、平坦	胎土に細砂粒を含み、焼成良好。黒灰色。口縁外面に雷文のスタンプ。	SK06	
10	38	土師器	小皿	7.0	5.0	1.65	糸切り底、煤付着	砂粒を含み、焼成良好。暗灰褐色。	〃	灯明皿か
〃	39	青磁	碗	—	5.0	(2.7)	高台は逆梯形状	素地は灰白色。緑灰色の厚い施釉。見込みに1条の圏線。貫入。	〃	明
〃	40	土師器	坏	11.6	7.2	2.6	糸切り底、板状圧痕、煤付着	胎土に砂粒が多い。焼成良好。茶灰色。	〃	
〃	41	〃	〃	13.4	9.4	2.7	糸切り底	胎土は細砂を含み、焼成良好。淡黄灰色。	〃	
〃	42	瓦質土器	火舎	—	—	—	外に張り出した脚を貼り付ける	胎土に砂粒を含み、焼成良好。灰黒色。脚部外面に雲文。	〃	
〃	43	陶器	摺鉢	22.8	—	(6.6)	口縁部は折りかえして平坦面形成。外面に1条の突帯、内面にヘラ描きの下し目	素地は暗灰色飴色。暗緑灰色釉。	〃	李朝
〃	44	白磁	皿	—	8.0	(1.3)	器壁は薄い	素地に細砂粒含む。白色、灰色を帯びた白色釉。	SK07	明
〃	45	陶器	甕	—	15.8	(4.3)	平底、器肉薄い、外底に目跡	素地は細砂粒を含む。暗い小豆色。焼成良好。暗緑灰色釉。	〃	唐津焼。李朝に近い
〃	46	〃	鉢	—	14.8	(6.5)	平底、内底見込みに砂目跡	素地に砂粒を含む。茶褐色。暗黄灰色釉。	〃	唐津焼
〃	48	白磁	皿	—	4.5	(2.1)	体部は直線的に開く	素地に細砂粒を含む。淡灰褐色。青色をおびた乳白色の釉。見込みは釉ハギ。見込みに1条の圏線。	SK08	
〃	49	染付	碗	—	3.6	(3.9)	輪高台、体部は丸味をもつが腰が強い	圏線は高台に2条、見込みと体部下位に各1条。体部外面に不明の文様。	〃	伊万里 1800年代
〃	50	〃	〃	—	3.8	(4.7)	輪高台、腰が強い	高台から高台脇に4条の圏線。外面に不明の文様。	〃	〃 〃
〃	51	土師器	小皿	6.8	4.6	1.2～0.7	糸切り底、板状圧痕	胎土に砂粒を含み、焼成軟。暗茶褐色。	SK09	灯明皿か
〃	52	陶器	皿	—	—	—	口縁部内弯気味に外反	素地は淡灰白色、精緻。暗飴色釉。	〃	唐津系
〃	53	土師器	坏	11.6	5.2	2.65	糸切り底、体部外面に指頭圧痕	胎土に細砂粒を含み、焼成良好。淡灰褐色。	〃	
〃	54	〃	〃	14.6	8.6	2.0	糸切り底、体部の外反強い	胎土に砂粒を含み、焼成良好。暗灰色。	〃	大内系
11	55	陶器	碗	12.8	—	(5.2)	腰が強く、体部は直線的に開く	素地は淡褐色、細砂粒を含む。灰褐色の釉。貫入。	SK10	唐津焼
〃	56	土師器	高坏	—	—	(6.3)	脚部	胎土に砂粒多い。焼成良好。淡灰褐色。	〃	
〃	57	陶器	摺鉢	—	—	—	体部片、内面に6本以上の下し目	素地に細砂粒を含み、灰褐色。茶褐色釉。	〃	肥前系
〃	58	〃	皿	13.2	5.0	3.4	口縁部外反、内底と畳付に胎土目4ケ所	素地は淡灰褐色、細砂粒を含む。暗緑灰色釉。	〃	唐津焼
〃	59	土師器	小皿	7.0	5.2	1.7	糸切り底、板状圧痕	胎土は精緻、灰褐色。焼成良好。	SK12	
〃	60	白磁	猪口	9.0	—	(3.1)	器壁薄い、体部は桶形	素地は精緻、白色。青味を帯びた白色釉。口銹。	〃	17C末～18C中
〃	61	染付	碗	9.8	—	(4.5)	器壁は薄い、体部は丸味をもつ	素地は白色、細砂粒を含む。外部に網目文と花文。	〃	伊万里 18C前～中
〃	62	陶器	壺	9.0	—	(2.5)	口縁部はくの字形に外反、耳は欠損	素地は暗淡灰色、細砂粒を含む。透明釉。	〃	宋代
〃	63	染付	皿	—	—	—	底部片	素地は淡灰白色、精緻。見込みに花文。染付は藍色。	〃	有田 1650～70年代
〃	64	陶器	碗	—	(3.9)	(1.7)	撥形高台、体部は直線的に開く	素地は灰黄色、細砂粒を含む。見込みは暗茶色。外面は暗黒灰褐色釉。内底釉ハギ。	〃	高取系か天目 17C
〃	65	〃	蓋	12.8	—	(2.0)	口縁端部をつまみ上げる体部は内弯	素地は灰白色、精緻。透明釉。	〃	肥前系 17C後～18C初
〃	66	〃	摺鉢	—	—	—	口縁部は玉縁状、外面に突帯1条	素地は茶褐色、砂粒を含む。暗茶褐色。	〃	唐津系 18C
〃	67	〃	〃	—	—	—	胴部片。内面の下し目は5本以上	素地は淡灰褐色、砂粒含む。外面は暗茶褐色。	〃	高取系 17C後～18C初

挿図番号	遺物番号	種類	器種	法量（cm） 口径	底径（高台径）	器高（ ）は現存高	形態の特徴	文様・施釉・色調・素地等	出土遺構	備考
11	68	陶器	甕	18.0	—	(3.7)	如意形口縁部で、端部は平坦。肩が張る	素地は淡灰褐色、細砂粒を含む。黒褐色、飴色釉。	SK12	筑前系 18C
13	70	土師器	小皿	6.8	4.8	1.35	糸切り底	胎土に砂粒多い、淡灰褐色。	SK13	
〃	71	〃	〃	6.8	5.6	1.8	糸切り底	胎土に砂粒を含み、焼成良好。淡灰黄色。	〃	
〃	72	白磁	碗	15.4	—	(2.2)	口縁端部外反	素地は淡灰白色、細砂粒を含む。淡灰緑色釉。体部上位に沈線。	SK15	Ⅷ－1類
〃	74	土師器	小皿	7.8	6.0	1.5	糸切り底	胎土に細砂粒を含み、焼成良好。淡灰黄色。	SK16	
〃	75	〃	〃	8.2	5.6	1.4	糸切り底、板状圧痕	胎土に砂粒を含み、焼成良好。灰黄色。	〃	
〃	76	〃	坏	11.8	6.5	3.2	糸切り底	胎土に砂粒を含み、焼成やや軟。茶褐色。	〃	
〃	77	〃	小皿	—	6.9	(1.0)	糸切り底	胎土に細砂粒を含み、焼成良好。淡灰黄色。	SK17	
〃	78	〃	〃	—	6.5	(1.3)	糸切り底	胎土に砂粒を含み、焼成良好。茶褐色。	〃	
〃	79	須恵器	坏蓋	10.0	—	(2.8)	内側にかえし	胎土に砂粒を含み、焼成良好。暗灰青色。	〃	
〃	80	土師器	坏	—	8.0	(2.6)	糸切り底	胎土に細砂粒を含み、焼成良好。淡灰褐色。	〃	
〃	81	土師質土器	捏鉢	34.4	—	(6.3)	体部は内弯気味に開く。口縁端部丸い。内面ヨコハケ、外面に煤付着	胎土に砂粒を含み、焼成良好。	〃	
〃	82	土師器	坏	—	8.2	(1.3)	糸切り底	胎土は精緻。焼成良好。淡茶色。	SK18	
〃	83	〃	〃	—	—	—	糸切り底	胎土に1～2㎜の長石を含む。焼成良好。淡黄褐色。	〃	
〃	84	染付	皿	—	(9.8)	(4.6)	高台は高く、内傾。体部内弯	素地は精緻。焼成良好。淡白茶色の白色釉。圏線は高台に2条、体部に1条。	〃	伊万里
〃	85	陶器	〃	—	(6.0)	(1.8)	高台は低い。体部は直線的開く	素地に砂粒を含み、灰色。焼成良好。透明釉。見込みに鉄絵。	〃	唐津焼
〃	86	〃	摺鉢	—	—	—	体部片、内面に粗いヨコハケ、下し目は格子目状に乱雑	素地に砂粒を含み、灰色。焼成良好。外面は暗灰色、内面は小豆色。	〃	備前焼
〃	87	〃	碗	—	3.9	(1.5)	三日月高台。高台畳付に砂目痕	素地は精緻、焼成良好。淡灰茶色。灰緑色の透明釉。かいらぎ。	〃	唐津焼
14	89	土師器	小皿	8.0	5.4	1.3	糸切り底	胎土は精緻。焼成良好。茶褐色。	SK19	
〃	90	須恵質土器	甕	—	—	—	外面に綾杉状叩き	胎土に砂粒含む。焼成軟。外面は暗灰色、内面は淡褐色と黄褐色。	〃	
〃	91	瓦質土器	火舎	—	—	6.7	平面形は長方形、四脚付き。内面はヨコハケ、脚外面のみヨコハケ	胎土は精緻。焼成良好。黒色。	〃	
〃	93	土師器	皿	7.5	6.4	1.2	糸切り底、板状圧痕	胎土に砂粒を含み、焼成良好。明茶褐色。	SK20	
〃	94	〃	〃	6.8	4.4	1.3	糸切り底	胎土に細砂含み、精緻。内面淡茶灰色、外面淡灰茶色。	〃	
〃	95	〃	〃	9.6	7.8	1.1	糸切り底、底に煤付着	胎土に砂粒含み、精緻。焼成軟。内面明茶色、外面明茶色～こげ茶色。	〃	
〃	96	〃	坏	11.6	8.0	2.1	糸切り底	胎土は砂粒含み、精緻。焼成良好。内面褐茶色、外面淡茶灰色。底は褐色。	〃	
〃	97	〃	〃	12.0	6.6	2.6	糸切り底、底部に煤付着	胎土に微砂含み、粗い。焼成良好。外面淡茶灰色、内面淡茶褐色。	〃	
〃	98	青磁	碗	—	7.0	(2.0)	高台は丸味を持つ。底部は厚い	素地は淡灰色、微粒砂含む。焼成良好。緑色釉。外底露胎。見込み釉ハギ。	〃	明、龍泉窯
〃	99	磁器	〃	11.6	—	(3.3)	端反り口縁、器壁薄い	素地は明灰白色、精緻。焼成良好。内面透明釉。外面は鉄釉、釉ダレ。	〃	
〃	100	染付	〃	12.0	—	(4.7)	蓮子碗	素地白色、精緻。焼成良好。灰色帯びた白色釉。圏線は口縁部に1条、外面に文様。	〃	明、龍泉窯
〃	101	青磁	〃	15.8	—	(3.0)	口縁端部は丸味をもち、外反する。二次火を受ける	素地は微砂を含む。緑色を帯びた茶褐色釉。	〃	〃 〃
〃	102	土師質土器	摺鉢	—	—	—	口縁端部は角張る。内面タテ・ヨコハケ、下し目は5本単位	胎土に砂粒を含み、焼成良好。明茶色。	〃	

挿図番号	遺物番号	種類	器種	法量(cm) 口径	底径(高台径)	器高 ( )は現存高	形態の特徴	文様・施釉・色調・素地等	出土遺構	備考
14	103	青磁	碗	—	—	—	体部片	素地は灰色、精緻。灰色帯びた透明釉。内外面に白色粘土の象嵌。	SK20	高麗
〃	104	〃	瓶	—	—	—	体部片	素地は灰色。内面は茶色、外面は灰緑色釉。外面に白色粘土と黒色土の象嵌。	〃	〃
〃	105	陶器	擂鉢	33.0	—	(4.7)	口縁端部を上・下につまみ出す。内面の下し目は5本以上	素地に砂粒含み、灰色。内面は小豆色。外面は茶色～小豆色。	〃	備前焼Ⅳ期
〃	106	白磁	紅皿	3.4	(1.0)	1.3	高台は低い。外面に条痕	素地は白灰色で、精緻。焼成良好。淡青緑色。	〃	伊万里 19C幕末
〃	107	陶器	皿	—	(3.6)	(1.1)	削り出し高台。内底・畳付に砂目跡	素地に茶灰色砂粒含み、焼成軟。暗灰青色釉。	〃	李朝 16C
17	109	土師器	皿	6.8	4.6	1.4	糸切り底	胎土に微粒の砂含み、焼成軟。茶褐色。	SK21	
〃	110	〃	〃	6.6	5.4	1.0	糸切り底、板状圧痕	胎土に砂粒含み、焼成軟。茶褐色。	〃	
〃	111	〃	坏	10.6	7.2	2.2	糸切り底	胎土に砂粒含み、焼成軟。内面明茶褐色、外面明茶色。	〃	
〃	112	〃	〃	12.6	9.2	2.4	糸切り底、板状圧痕、底部煤付着	胎土に砂粒含み、焼成軟。口縁部明茶褐色、体部茶灰色。	〃	
〃	113	〃	〃	7.8	12.0	3.0	糸切り底	胎土に砂粒含み、焼成良好。内面茶褐灰色、外面褐茶色。	〃	
〃	114	陶器	瓶	—	—	—	平底、器壁が薄い	素地は小豆色と灰色、精緻。内面暗緑灰色、外面緑茶色。自然釉。	〃	
〃	115	〃	甕	23.5	—	(4.2)	口縁部は小さく外反、器壁が厚い	素地は大粒の砂粒を含み、焼成良好。内面明小豆色、外面小豆色。付着物多い。	〃	国産 海上り品
〃	116	瓦質土器	火舎	—	—	—	口縁部片 外面に2条の突帯	胎土に細砂粒含む。焼成良好、茶灰色。体部外面木葉文のスタンプ。	〃	
〃	119	土師器	皿	7.4	6.0	1.5	糸切り底、板状圧痕	胎土は茶褐色、細砂粒多い、焼成良好。	SK22	
〃	120	〃	坏	12.1	8.4	2.6	糸切り底	胎土は砂粒少ない、精緻。内面灰褐色、外面茶灰色、焼成良好。	〃	
〃	121	瓦質土器	擂鉢	—	—	—	胴部片。外面タテハケ、指頭圧痕、内面の下し目は3本以上	胎土は灰褐色、内面灰色、外面灰褐色。	〃	
〃	122	陶器	瓶	—	—	—	胴部片	三島手。素地暗灰褐色、内面は暗茶灰色、淡茶色釉、外面灰白色釉。	〃	李朝象嵌 粉青沙器
18	126	土師器	坏	12.4	7.8	2.3	糸切り底	胎土に砂粒含み、焼成良好、茶褐色。内面に墨描の魚文と朱描文。	SK21・22	絵画土器
〃	127	陶器	皿	—	(5.7)	0.8	高台は低い	素地は砂粒を含み、明茶色、焼成良好。黄緑色釉、高台内濃茶褐色。	〃	瀬戸・美濃系
〃	128	白磁	〃	20.0	—	(2.3)	口縁部外反し、器壁薄い	素地は白茶色、焼成良好。灰色透明釉、内外面共に貫入。	〃	朝鮮
〃	129	陶器	〃	28.0	—	(4.0)	体部は丸味をもち、口縁部は強く外反	素地に砂粒を含み、淡茶色。焼成良好、灰白色釉。	〃	唐津焼 16C末～17C初
〃	131	〃	擂鉢	—	—	—	胴部片。内面に水引き痕、下し目は6本単位	素地に大粒の砂含む。内面は暗灰色、外面は暗茶色。	〃	備前焼
〃	132	〃	片口	18.0	—	(3.5)	口縁部は玉縁状	素地に砂粒含む。淡茶色、白灰色釉。	〃	上野焼 17C前半
〃	133	土師器	皿	—	4.6	(0.8)	糸切り底	胎土は細砂粒多い。内面淡灰褐色、外面は灰褐色、焼成良好。	SK24	
〃	134	〃	坏	—	4.5	(1.4)	糸切り底	胎土に砂粒含み、精緻。灰黄色、焼成良好。	〃	
〃	135	染付	皿	8.8	—	(2.2)	底部は器壁が厚い、体部内弯気味、呉笥底	素地は淡白灰色、焼成良好。淡灰色釉、絵柄、芭蕉文。	〃	明
〃	136	青磁	碗	—	—	—	体部は内弯	素地は灰白色、暗緑灰色釉、体部外面に線彫りの縞蓮弁文、内面ヘラ描文。	〃	龍泉窯系
〃	137	陶器	〃	—	(4.4)	(3.5)	削り出し高台 体部下位にケズリ	素地は淡白黄色、焼成良好。黒茶色釉、体部下位は露胎。	〃	瀬戸天目
〃	138	瓦質土器	擂鉢	—	—	—	底部片。内底はヨコハケ、下し目は3本以上	胎土は淡灰白色。砂粒を含み、焼成良好。内面は淡灰色、外面灰色。	〃	
〃	139	陶器	水注	—	—	—	水注の把手	素地は暗茶灰色、精緻。内外面は灰緑色。	〃	
〃	140	〃	擂鉢	—	—	—	口縁部は垂直に立つ 内面に粗いヨコハケ	素地は細砂粒多い、焼成良好、暗茶灰色。	〃	備前焼Ⅳ期

Tab. 2　第68次調査遺物一覧表 ②　井戸出土遺物

挿図番号	遺物番号	種類	器種	法量（cm） 口径	底径（高台径）	器高（ ）は現存高	形態の特徴	文様・施釉・色調・素地等	出土遺構	備考
20	1	陶器	碗	—	2.3	(1.1)	体部は強く開く	素地は淡灰白色で、精緻。淡灰茶色釉。高台部分は露胎、見込みに砂が付着。	SE01 井筒	国産
〃	2	染付	坏	—	—	—	体部片	素地は灰白色で、精緻。乳白色釉、染付は藍色で、鳥文（鳳凰か）。	〃	肥前　18C後～19C前
〃	3	青磁	碗	—	4.5	(3.2)	体部は強く開く、蛇ノ目高台	素地は暗灰色で、細砂粒を含み、淡灰色釉。櫛描文を内外面に施す。内底見込みに花文。	〃	同安窯系
〃	4	陶器	片口	14.7	—	(3.2)	玉縁口縁、体部の屈折強い	胎土は暗灰褐色で、砂粒を含む。暗茶色釉。	〃	筑前産　17C
〃	5	〃	擂鉢	10.0	—	(2.9)	削り高台、体部は開く。内面に２本単位の下し目	胎土は淡灰色、精緻。外面の一部に緑茶色釉。	〃	小石原産　17C末～18C前
23	11	土師器	皿	7.8	5.5	1.2	糸切り底、底部が厚い	胎土に細砂粒を含み、焼成はやや軟、淡灰褐色。	SE02 掘り方	
〃	12	〃	〃	8.6	6.3	1.5	糸切り底	胎土に細砂粒を含み、焼成良好。淡灰黄色。	〃	
〃	13	〃	〃	9.0	6.6	1.0	糸切り底、体部は丸味をもつ	胎土に砂粒多い、焼成良好、淡茶灰色。	〃	
〃	14	〃	〃	8.8	6.0	1.3	糸切り底、板状圧痕、体部丸味をもつ	胎土に細砂粒多い、焼成は軟、茶灰色。	〃	
〃	15	〃	〃	8.8	6.6	1.8	糸切り底、体部は丸味をもつ	胎土に細砂粒を含む。焼成はやや軟、灰褐色。	〃	
〃	16	〃	〃	9.4	6.9	1.8	糸切り底、底部端部にヘラケズリ	胎土に２㎜大の砂粒を含み、粗い、焼成良好。淡灰褐色。	〃	
〃	17	〃	〃	10.7	6.0	1.8	糸切り底	胎土に砂粒を少し含み、焼成はやや軟。淡灰褐色。	〃	
〃	18	〃	〃	—	9.7	(0.9)	糸切り底	胎土に砂粒を多く含み、焼成良好。茶褐色。	〃	
〃	19	〃	坏	13.5	9.0	2.6	糸切り底	胎土に砂粒を多く含み、焼成良好。茶灰色。	〃	
〃	20	〃	〃	—	6.4	(1.5)	糸切り底、板状圧痕	胎土に砂粒を含み、焼成良好。茶灰色。	〃	
〃	21	陶器	皿	10.6	7.0	2.2	高台低い 口縁端部は丸い	胎土は淡灰色で、砂粒含み、粗い。淡緑茶色釉、見込みは釉ハギ、畳付に釉ダレ、１条の沈線。	〃	瀬戸・美濃系
〃	22	〃	〃	14.9	—	(2.5)	溝縁の口縁部	素地は茶褐色で、精緻。緑灰色釉。	〃	唐津焼 1630～
〃	23	〃	〃	—	—	(2.5)	口縁部は内弯気味に外反	素地は淡茶色で、砂粒を含む。淡灰茶色釉。	〃	初期唐津 16C中～17C
〃	24	〃	〃	—	6.0	(1.7)	低平な高台、畳付に砂目	素地は淡灰褐色、透明釉、内底に鉄絵。	〃	絵唐津
〃	25	〃	〃	—	5.0	(2.4)	低平な高台 内底に胎土目	素地は灰黄褐色で、細砂粒を含む。暗茶黄色釉、体部下位は露胎。	〃	唐津焼　16C末～17C前
〃	26	〃	〃	15.6	—	(3.2)	体部は丸味をもつ、口縁端部は丸い	素地は灰褐色、細砂粒含む。淡灰色の釉。	〃	唐津焼
〃	27	〃	〃	15.0	—	(3.0)	腰折れ強く、口縁部外反	胎土は淡褐色で精緻。銅緑釉。	〃	内山窯系 17C中～末
〃	28	白磁	〃	—	—	—	口縁部は内弯気味に外反	素地は灰白色で精緻。透明釉。	〃	明末
〃	29	青磁	〃	16.0	—	(2.4)	体部は内弯気味に開く	素地は灰色で、精緻。透明釉。	〃	肥前　17C代
〃	30	白磁	〃	—	—	—	器壁が薄い	素地は白灰色で、精緻。灰白色をおびた透明釉。見込みに櫛描文。	〃	舶載
〃	31	染付	〃	18.0	—	(1.8)	器高低い、口縁部は外反	胎土は灰白色で、精緻。透明釉。口縁部外面に１条、見込みに２条の圏線。	〃	肥前　17C前
〃	32	陶器	〃	—	9.5	(0.7)	高台は断面三角形	素地は淡褐色で、精緻。白～淡茶色釉。	〃	肥前 17Cまで
〃	33	染付	〃	—	—	—	高台は低く、内傾気味	素地は淡灰色で、精緻。青味をおびた透明釉。見込みに２本の圏線、染付は藍色。	〃	肥前　17C前
〃	34	〃	小坏	7.0	—	(4.2)	端反り形	胎土は灰白色で、精緻。半透明釉、外面に草花文。	〃	
〃	35	青磁	碗	—	—	—	口縁部は小さく外反する	素地は灰色で、精緻。緑灰色釉、外面に釉ダレ、内面にヘラ片彫り文。	〃	龍泉窯系
〃	36	白磁	〃	—	5.0	(1.7)	撥高台	素地は白灰色で、精緻。灰白色釉。	〃	
〃	37	半磁器	〃	—	5.4	(2.8)	体部は丸い。畳付に砂目	素地は灰白色で、精緻。淡青灰色釉、外底部は露胎。	〃	肥前　17C前

挿図番号	遺物番号	種類	器種	法量(cm) 口径	底径(高台径)	器高 ( )は現存高	形態の特徴	文様・施釉・色調・素地等	出土遺構	備考
23	38	白磁	碗	—	4.0	(3.4)	高台は高く細い 体部は球体形	素地は乳白色、精緻。青味をおびた透明釉。外底部は露胎。	SE02 掘り方	肥前 17C後
〃	39	青磁	香炉	13.0	—	(2.0)	口縁部はくの字形	素地は乳白色、精緻。淡緑灰色釉、内面無釉。	〃	17C後
〃	40	青白磁	碗	—	5.0	(1.1)	高台は低い。畳付に砂目、内底に胎土目	素地は乳白色で、精緻。淡青色釉、貫入。外底部露胎。	〃	肥前産 17C前
〃	41	陶器	〃	12.0	—	(4.7)	体部は半球形	素地は淡褐色、細砂粒を含み、精緻。透明釉で、外面一部に銅緑釉。	〃	肥前産17C後
〃	42	〃	〃	—	4.8	(1.5)	高台は低い	素地は淡茶灰色、細砂粒を含む。藁灰釉。	〃	上野焼 慶長（1596～1614年）
〃	43	〃	〃	—	3.6	(2.4)	高台はケズリ出し	素地は暗灰色で、細砂粒を含む。黒色釉を施す。露胎部は暗茶褐色。	〃	天目
〃	44	〃	〃	14.0	—	(4.5)	口縁部は内弯	素地は淡灰色で、細砂粒を含む。飴色釉。	〃	瀬戸天目 16C
24	45	〃	摺鉢	27.6	—	(6.7)	口縁部は逆くの字形に発達	素地は小豆色で、精緻。外面は暗灰褐色。	〃	備前焼Ⅴ期
〃	46	〃	〃	—	—	—	胴部片、内面に5本以上の下し目	素地は精緻。外面は暗灰褐色、内面は茶褐色。	〃	備前焼
〃	47	〃	〃	—	—	—	口縁部外面は肥厚、Y字状口縁、内面の下し目は8本単位で、密	素地に砂粒を含む。淡茶褐色で、暗い茶色。	〃	唐津焼
〃	48	〃	〃	—	—	—	胴部片、内面の下し目は8本単位	素地に砂粒を含む。茶褐色で、表面は小豆色。	〃	〃
〃	49	〃	〃	—	—	—	口縁部の両端をつまみ出して、平坦面を形成する	素地は暗灰褐色で、砂粒を含む。暗い小豆色釉。	〃	〃
〃	50	須恵質土器	鉢	—	—	—	玉縁状口縁で、内弯する	胎土に砂粒を含み、焼成はやや軟。淡灰色。	〃	東播系
〃	51	瓦質土器	摺鉢	—	—	—	口縁部肥厚、体部外面に指頭圧痕、内面はヨコナデ、下し目は3本以上	胎土に砂粒を含み、焼成良好。淡灰褐色。	〃	
〃	52	土師質土器	鉢	—	17.5	(3.4)	外面はタテハケ後ナデ、指頭圧痕	胎土は砂粒多い。焼成はやや軟。	〃	
〃	53	陶器	甕	—	14.0	(5.0)	底部は上げ底、体部は直線的に開く	胎土は小豆色で、精緻。外面は暗い小豆色で、内面は暗茶褐色。炻器に近い。	〃	九州
〃	54	〃	〃	—	15.2	(5.9)	体部は直線的に開く	素地に3㎜大の砂粒多い。灰白色～暗茶灰色で、内面は黄色をおびる。体部外面に釉ダレ。	〃	唐津系
〃	55	須恵質土器	壺	—	—	—	外面は格子目叩き後ナデ、内面は水引き痕	胎土に細砂粒を含み、焼成軟。灰青色。	〃	朝鮮
〃	56	〃	〃	13.1	—	(2.4)	口縁部は直口し、肥厚する	胎土に細砂粒を含み、焼成軟。暗灰色。	〃	〃
〃	57	陶器	〃	24.0	—	(4.2)	口縁部は玉縁状で、平坦面を形成 内面に同心円の叩き痕	素地は暗灰色で、砂粒を含む。露胎部は茶褐色、肩部は小豆色釉。	〃	唐津系
〃	58	瓦質土器	火舎	—	30.0	(4.5)	体部下位に1条の突帯、内面カキ目	胎土に細砂粒を含む。内面は灰褐色、外面は茶褐色、焼成やや軟。	〃	
〃	59	〃	〃	39.6	—	(4.8)	体部は丸味をもち、口縁部はL字形	胎土に砂粒を含む。暗灰色。外面の口縁部下に雷文のスタンプ。	〃	
25	60	土師器	皿	7.0	5.0	1.4	糸切り底	胎土は淡茶色で、砂粒含み、焼成良好、淡茶色。	SE02 井筒	
〃	61	〃	坏	12.0	8.4	2.1	糸切り底	胎土は淡茶色で、細砂粒を含み、外面は淡茶色、内面は淡灰色。	〃	
〃	62	〃	〃	13.0	6.3	3.2	糸切り底、体部は直線的に開く	胎土は精緻。焼成良好。赤味おびた薄茶色。	〃	
〃	63	白磁	皿	20.0	—	(1.8)	器高低い 口縁部大きく外反	素地は白灰色、精緻。乳白色釉。	〃	17C初 国産
〃	64	染付	香炉	19.9	—	(1.9)	体部は鉢形で、口縁部は内側に折れる	体部外面に、呉須による絵柄。素地は灰白色、内面は露胎。	〃	
〃	65	白磁	〃	19.9	—	(4.4)	体部は鉢形で、口縁部は内側に屈折	素地は灰白色で、精緻。透明釉、内面は露胎。	〃	福岡小石原 17C後
〃	66	陶器	碗	10.5	5.0	7.2	体部は丸味をもち、蹬高台	素地は淡茶色で、細砂粒を含み、焼成良好。透明釉。	〃	京焼 17C後
〃	67	染付	〃	—	3.2	(3.6)	器壁は薄い。体部は丸味をもつ	素地は乳白色で、精緻。透明釉。体部外面下位に2条の圏線。	〃	17C後
〃	68	陶器	〃	7.5	3.0	4.0	体部は半球形 高台は低い	素地は淡褐色で、細砂粒を含む。淡灰色釉。	〃	唐津焼 16末～17C初

挿図番号	遺物番号	種類	器種	法量（cm） 口径	底径（高台径）	器高（ ）は現存高	形態の特徴	文様・施釉・色調・素地等	出土遺構	備考
25	69	陶器	摺鉢	31.0	—	(6.0)	口縁部外面を肥厚させ、直口する	素地は暗茶褐色、細砂粒を含む。口縁部外面に暗小豆色釉、内面に6本以上の単位の下し目。	SE02 井筒	高取焼 17C代
〃	70	〃	〃	11.8	—	(4.1)	底部の器壁薄い。下し目は9本単位。体部外面は指頭圧痕	胎土は暗小豆色で、細砂粒を含む。精緻。	〃	備前焼
〃	71	〃	〃	—	—	—	平底で、内面の下し目は8本以上	胎土は暗灰色で、精緻。焼成良好。外面はくすんだ茶色、内面は外面より暗い色。	〃	〃
〃	72	〃	〃	—	—	—	口縁部の断面は三角形状に肥厚、内面の下し目は4本以上の単位	素地に砂粒を含み、焼成良好。明褐色～褐色。	〃	〃
〃	73	瓦質土器	摺鉢	—	17.6	(3.3)	外面はタテハケ、内面マメツ。下し目は4本以上の単位	胎土は精緻で、茶褐色。焼成良好。	〃	
〃	74	〃	鉢	—	—	—	口縁部は肥厚、内面はヨコハケ	胎土は細かい。焼成良好。淡茶～茶灰色。内面ハケ目。	〃	
〃	75	〃	火舎	—	—	—	口縁端部は丸味をもつ	胎土に砂粒を含み、焼成良好。淡茶灰色。外面に菊花文のスタンプ。	〃	
〃	76	〃	大甕	—	—	—	胴部片、外面ヨコハケ、内面粗いタテナデ	胎土に砂粒を含み、焼成良好。暗茶灰色。	〃	
27	83	土師器	皿	7.8	6.0	1.5	糸切り底	胎土に細砂粒を含み、焼成良好。淡茶褐色。	SE03 井筒	
〃	84	〃	〃	6.9	—	1.2	糸切り底	胎土に細砂粒を含み、焼成良好。明茶褐色。	SE03 掘り方	
〃	85	〃	〃	8.2	6.0	1.3	糸切り底	胎土に砂粒を含み、焼成良好。明茶褐色。	〃	
〃	86	白磁	〃	—	7.0	(0.5)	平底	素地は細砂粒を含み、焼成良好。淡乳灰色。底部外面まで釉ダレ。	〃	Ⅺ類 中国舶載
〃	87	土師器	坏	11.9	—	2.1	底部を欠く	胎土に細砂粒を含み、焼成良好。淡褐色。	SE03 井筒	
〃	88	〃	〃	—	9.0	(1.7)	糸切り底 体部は直線的に開く	胎土に砂粒を含み、焼成良好。淡褐色。	〃	
〃	89	陶器	皿	—	6.3	(2.6)	高台は畳付の巾広い、見込みに砂目、体部は丸味をもつ、底部は器壁が薄い	素地は淡明茶色で、砂粒を含み、焼成良好。内面に淡灰緑色釉。貫入。	SE03 掘り方	唐津焼
〃	90	染付	碗	8.7	—	(2.2)	端反り 器壁が薄い	素地は淡灰色で、精緻。青味を帯びた透明釉。口縁部外面に1条の圏線。	SE03 井筒	肥前産 17C前～中
〃	91	陶器	〃	—	5.0	(1.4)	高台は低い。畳付はケズリ調整	素地は淡灰褐色で、細砂粒を含み、焼成良好。灰白色釉。体部下位・外面は露胎。	SE03	上野焼 17C初
〃	92	〃	〃	—	5.9	(1.2)	高台の断面は逆梯形 見込みに胎土目	素地は淡灰褐色で、細砂粒を含み、焼成良好。乳白色釉。	SE03 井筒	李朝
〃	93	〃	皿	25.5	—	(2.5)	溝縁の口縁部	素地は灰茶色で、砂粒多い。灰黄茶色釉。	〃	唐津焼 1600～1630年
〃	94	〃	盤	—	20.2	(2.5)	底部上げ底 体部は直線的に開く	素地は暗灰色で、精緻。緑黄色釉。	〃	舶載陶器
〃	95	〃	小片	—	—	—	内面に青海波の叩き痕 器壁薄い	素地は淡茶色。焼成良好。茶褐色釉。	SE03 掘り方	李朝
〃	96	〃	〃	—	—	—	内面に同心円の叩き痕 器壁が薄い	素地細かい。焼成良好。内面は暗灰色釉、外面は小豆色釉。	〃	〃
〃	97	瓦質土器	火舎	12.0	10.6	5.4	体部は筒形。3脚付	胎土に細砂粒を含み、焼成良好。暗灰褐色。外面は黒色研磨、梅花文のスタンプ。	〃	
〃	98	〃	摺鉢	—	—	—	口縁部は直口し、肥厚。体部外面指頭圧痕、内面ヨコハケ。5本以上の単位の下し目	胎土は細粒砂を含み、焼成良好。内面は暗茶灰色、外面は茶褐色。	〃	
〃	99	〃	〃	30.0	—	(4.0)	口縁端部内側に三角突帯。Y字状口縁、下し目は6本単位	胎土は砂粒を含み、焼成良好。暗灰色。	〃	
〃	100	陶器	〃	33.6	—	(7.4)	口縁部は外側に肥厚し、1条の突帯。内面の下し目は10本単位	素地は暗茶褐色で、砂粒を含む。口縁部外面は濃茶色釉。	SE03 井筒	唐津焼 17C前
〃	101	〃	甕	26.0	—	(6.5)	口縁端部はY字形 内外面は水引き痕	素地に砂粒を含み、褐色。焼成良好。外面に小豆色釉。	SE03 掘り方	備前焼か
29	108	土師器	皿	7.0	5.0	1.4	糸切り底 口縁端部に煤付着	胎土に細砂粒を少し含み、焼成良好。淡茶色。	SE04 掘り方	
〃	109	〃	〃	8.0	—	1.5	糸切り底、内面に煤付着	胎土に砂粒を含み、焼成良好。淡茶灰色。	〃	
〃	110	〃	坏	11.0	6.6	2.2	糸切り底	胎土に細砂粒含み、焼成良好。淡茶色。	〃	
〃	111	〃	〃	11.0	—	(2.3)	口縁部片	胎土は精緻。焼成良好。茶褐色。	SE04 井筒	

挿図番号	遺物番号	種類	器種	法量（cm） 口径	底径（高台径）	器高（ ）は現存高	形態の特徴	文様・施釉・色調・素地等	出土遺構	備考
29	112	土師器	坏	12.0	7.3	2.7	糸切り底 体部下位ヘラケズリ	胎土に砂粒を含み、焼成良好。明褐色。	SE04	
〃	113	〃	〃	12.0	—	2.3	底部を欠く。内面に煤付着	胎土に細砂粒含み、焼成良好。淡茶褐色。	〃	
〃	114	〃	〃	13.0	—	3.0	糸切り底	胎土に細砂を含み、焼成良好。明褐色。	〃	
〃	115	青磁	碗	15.0	—	—	口縁片	素地は淡灰色で、精緻。緑灰色釉。外面に蓮弁文。	SE04 井筒	中国龍泉窯系
〃	116	白磁	〃	—	4.0	(1.2)	高台は低い。三日月高台	素地に細砂粒を含み、焼成良好。内部に淡灰茶色釉。	〃	李朝
〃	117	〃	〃	—	7.0	(0.7)	高台は低い。内面の見込みと畳付に目痕	素地は白灰色。青色帯びた透明釉。	〃	李朝　16C後
〃	118	染付	皿	—	—	(0.8)	高台は低く内傾する	素地は乳白色で、精緻。白色釉。高台脇に1条の圏線。見込みに染付。	〃	明
〃	119	陶器	碗	—	4.6	(1.3)	高台は外傾 見込み畳付に目痕	素地は淡褐色、細砂粒少ない。内面は灰茶色釉。	SE04	唐津焼
〃	120	〃	〃	—	4.2	(2.6)	高台は低い。腰部の屈折強い	素地は細砂粒を含む。淡灰黄色。灰白色釉、見込みに同心円状の模様。	SE04 井筒	上野・高取系 慶長（1596～1614年）
〃	121	〃	皿	—	5.9	(1.5)	高台脇ヘラケズリ	素地は淡灰褐色で、細砂粒を含む。内面に灰黄色釉。草文の鉄絵。	SE04	唐津焼
〃	122	〃	〃	14.0	—	3.8	口縁部と腰部は強い屈折。低い削り出し高台、見込みに胎土目	素地は細砂粒を含み、灰茶色。灰緑色釉。	SE04 井筒	唐津焼　16C末～17C前
〃	123	〃	〃	—	5.0	—	畳付に胎土目。高台は低い。高台脇はケズリ	素地は淡灰色で、精緻。淡緑黄色釉。草文の鉄絵。	SE04	唐津焼
〃	124	〃	片口	10.4	—	(4.8)	口縁部は外反し、丸く肥厚。体部は球体	素地は褐色で、精緻。乳白色釉。	SE04 掘り方	唐津焼　16C末～17C前
〃	125	〃	〃	—	—	(3.5)	口縁端部は外反、丸味をもつ	素地は淡茶褐色。細砂粒を含む。淡灰緑色釉。釉にかいらぎ。	SE04	筑前産又は上野焼か
〃	126	〃	〃	—	—	—	口縁部は玉縁状に肥厚	素地に砂粒多い。暗灰色。表面は小豆色。	〃	福岡 内ヶ磯窯か
〃	127	〃	〃	—	—	—	内面は同心円の叩き痕 口縁部は直口	素地は砂粒を含み、暗灰褐色。外面は小豆色、内面は茶褐色。	〃	〃
〃	128	〃	不明	—	—	—	外面は平行叩き痕、内面は同心円状の叩き痕	素地は細砂粒含む。白灰色。	〃	
〃	129	土師質土器	摺鉢	—	—	—	口縁端部は丸味をもつ 内面ヨコハケ、下し目は5本単位	胎土は砂粒を含み、焼成良好。外面は淡褐色、内面は淡灰黄色。	SE04 井筒	
〃	130	瓦質土器	〃	—	—	—	口縁端部内面に三角突帯 内面ヨコハケ、下し目は5本以上	胎土に細砂粒を含み、焼成良好。暗灰青色。	〃	
〃	131	〃	火舎	—	—	—	口縁部は肥厚、外面に1条の突帯と1条の沈線、内面ヨコハケ	胎土に細砂粒を含み、焼成良好。淡茶灰色。	SE04 掘り方	
〃	132	〃	〃	—	—	—	口縁部はくの字形で直口する。内面ヨコナデ	胎土に砂粒含み、焼成良好。灰青色。	SE04 井筒	
〃	133	〃	〃	—	—	—	口縁部は肥厚、内面はヨコハケ、外面に1条の突帯	胎土は精緻。焼成良好。淡灰褐色。外面に梅花文のスタンプ。	SE04 掘り方	
30	134	土師質土器	坩堝	—	—	—	体部片	胎土は暗灰色で、砂粒を含む。外面は緑黄色のガラス質化。	〃	
33	145	土師器	坏	10.0	—	(2.5)	糸切り底	胎土は細砂粒含み、焼成良好。淡褐色。	SE12	
〃	146	〃	〃	—	9.0	(1.7)	糸切り底、板状圧痕	胎土は砂粒含み、焼成良好。茶褐色。	〃	
〃	147	〃	〃	—	5.0	(1.1)	底径と口径の比が大きい 器壁薄手	胎土は細砂粒含み、焼成良好。淡灰茶色。	〃	
〃	148	青白磁	碗	—	4.1	(1.4)	輪高台、砂が付着	素地は乳白色で、精良。焼成良好。青色釉。見込みは釉ハギ。	SE12 井筒	国産
〃	149	陶器	〃	—	—	(4.0)	体部は丸味をもつ	素地は細砂粒を含み、暗灰色。暗緑黄灰色釉。	SE12	
〃	150	〃	〃	—	5.5	(4.8)	三日月高台で、内側に砂付着。高台は撥形	素地は精緻で、淡茶褐色。透明に近い。乳白色釉。	SE12 掘り方	唐津焼
〃	151	〃	皿	13.0	—	—	波状口縁	素地は淡黄茶色で、やや粗い。黄土色釉。	SE12	瀬戸 16C末～17C
〃	152	〃	片口	18.0	—	(5.3)	口縁部内傾し、外面を肥厚させる	素地は細砂粒を含み、褐色。表面は暗茶褐色。	SE12 掘り方	高取系 17C代後
〃	153	〃	摺鉢	—	—	—	底部は上げ底。内面は8本単位の下し目を施す	素地は細砂粒を含み、茶褐色。暗小豆色釉。	〃	〃

挿図番号	遺物番号	種類	器種	法量(cm) 口径	底径(高台径)	器高( )は現存高	形態の特徴	文様・施釉・色調・素地等	出土遺構	備考
33	154	陶器	壺	27.0	—	(3.1)	口縁部は外に折曲。器壁薄い、口縁部平坦面に目痕	素地は茶灰色で、精緻。暗緑茶色釉。	SE12	唐津系か
〃	155	〃	摺鉢	—	—	(4.4)	口縁部は内傾し、T字形	素地に砂粒含み、暗茶色。表面は暗茶灰色。	〃	福岡初期
〃	156	瓦質土器	〃	—	—	—	内面ヨコハケ。口縁部内面三角突帯、欠損	胎土に細砂粒を含み、焼成良好。暗い灰青色。	〃	大内系
〃	157	〃	〃	26.0	—	(4.6)	口縁部はくの字形、端部は丸味。内面ヨコハケ、3本以上の下し目	胎土は精緻。焼成良好。内面灰青色、外面淡茶灰色。	〃	備前焼V期の模倣
〃	158	〃	〃	—	—	—	内面はヨコハケ、4本単位の下し目、下位はマメツ	胎土は細砂粒を含み、焼成良好。内面は淡灰茶色、外面は暗茶灰色	〃	大内系
〃	159	〃	火舎	35.0	—	(3.6)	口縁部は肥厚し、丸味をもつ。内面はヨコハケ	胎土は精緻。焼成良好。口縁部灰色。体部淡灰色、外面に梅花文のスタンプ。	SE12 掘り方	
35	167	土師器	皿	6.2	4.2	1.3	糸切り底、口縁部に煤付着	胎土に砂粒を含み、焼成良好。淡茶褐色。	SE13	
〃	168	〃	〃	7.6	5.6	1.5	糸切り底、口縁部内傾	胎土に細砂粒を含み、焼成軟。茶褐色。	〃	
〃	169	〃	〃	9.2	7.6	1.2	糸切り底	胎土に砂粒を含み、焼成良好。赤褐色。	〃	
〃	170	〃	坏	12.6	7.6	2.3	糸切り底、体部は直線的に開く	胎土に砂粒を含み、焼成良好。淡灰褐色。	〃	
〃	171	青磁	碗	—	6.2	(1.9)	輪高台	素地は灰茶色、細砂粒を含む。緑灰色釉は高台内側まで施釉。貫入。	〃	
〃	172	染付	皿	10.2	4.0	3.0	腰部で強い屈折、畳付に砂目	素地は白灰色、精緻。青色を帯びた透明釉。圏線は口縁部と見込みにアリ。内底に呉須の菊枝文。	〃	肥前
〃	173	〃	碗	10.0	3.8	5.8	体部は半球体形	素地は白灰色、精緻。透明灰色釉。呉須の草花文。外部高台内に1条、高台脇に2条、胴部下部に1条の圏線。	〃	〃
〃	174	〃	〃	—	4.4	(3.3)	体部は球体形 高台は高い	素地は灰白色、精緻。灰青色を帯びた透明釉。貫入。外面腰部に1条の圏線。	〃	〃
〃	175	陶器	甕	—	—	—	内面は青海波叩き痕 器壁が薄い	素地は砂粒を含み、焼成良好。外面は暗小豆色釉。	〃	唐津焼？
〃	176	土師質土器	摺鉢	—	—	—	胴部片、内面に4本以上の下し目	胎土に砂粒を多く含み、焼成はやや軟。茶褐色。	〃	
〃	177	土師器	皿	7.0	5.6	1.2	糸切り底	胎土に砂粒を含み、焼成良好。明茶褐色。	SE14	
〃	178	白磁	碗	—	—	—	端反り口縁部 器壁が薄い	素地は乳白色、精緻。灰色を帯びた白色釉。	〃	中国 16C～17C初
〃	179	青磁	〃	—	—	—	端反り口縁部	素地は灰白色、精緻。淡緑灰色釉。釉ダレ。内面に画花文。	SE14 掘り方	龍泉窯系
〃	180	〃	〃	—	—	—	口縁部片	素地は灰白色、精緻。緑灰色釉。外面に鎬蓮弁文。	SE14	〃
〃	181	〃	〃	—	8.0	(1.5)	底部片	素地は灰茶色で、砂粒多い。乳緑灰色釉。貫入。	〃	明前龍泉窯系 14C末～15C前
〃	182	染付	〃	—	6.8	(2.7)	高台はやや内傾	素地は乳褐色、灰色、精緻。灰白色釉。外部高台脇と胴体位見込みに1条の圏線。見込み文様。	〃	肥前
〃	183	〃	〃	12.0	—	4.2	体部は半球体	素地は乳白色、精緻。白灰色釉。外面文様。淡灰色。	〃	肥前 18C中～
〃	184	陶器	〃	—	6.0	(3.7)	体部は球体、高台は細い	素地は淡褐色、精緻。茶褐色釉。	SE14 井筒	肥前？ 17C後～18C前
〃	185	〃	〃	—	3.7	(2.0)	高台は細い	素地は淡黄褐色、精緻。淡茶褐色帯びた透明釉。外面下位と外底部は露胎。	SE14 掘り方	肥前系 18C代
〃	186	〃	〃	—	5.2	(1.6)	高台は細く低いやや外傾	素地は淡黄灰色と灰色、精緻。透明釉。外底部に「清水」の刻印。	〃	京焼か 17C後
〃	187	染付	蓋物	—	—	—	体部は筒形	素地は淡灰白色、精緻。透明釉。腰部に3条の圏線、外面に呉須の文様。	SE14	肥前 17C後～18C前
〃	188	陶器	碗	—	5.9	(3.0)	高台は細く低い。見込みに胎土目	素地は淡灰褐色、精緻。焼成良好。淡灰緑色釉。	〃	国産 筑前産か
〃	189	〃	〃	10.9	—	(3.7)	口縁部片	素地は淡黄色、精緻。焼成良好。淡黄茶色釉。	〃	京焼系肥前 18C前～中
〃	190	染付	皿	—	6.0	—	高台は細く、低い	素地は乳白色、精緻。水色を帯びた透明釉。見込みに2条、高台脇に2条、腰に1条の圏線。内底に呉須による文様。	〃	明 16C末
〃	191	〃	〃	—	7.0	(1.4)	高台は低く、内傾	素地は乳白色、精緻。乳灰色釉。高台脇に1条の圏線。内底に呉須の草花文。	〃	伊万里
36	192	〃	〃	14.4	9.0	3.9	蛇ノ目高台状で、端部は細く、尖る	素地は乳白色、精緻。透明釉。内面に文様。高台内に文様。圏線は高台脇に1条。	SE14 井筒	肥前 18C中

挿図番号	遺物番号	種類	器種	法量(cm) 口径	底径(高台径)	器高 ( )は現存高	形態の特徴	文様・施釉・色調・素地等	出土遺構	備考
36	193	染付	皿	—	6.8	(0.9)	高台は低く、内傾	素地は褐色、精緻。乳灰色の釉。内面に文様、藍色。	SE14 掘り方	肥前 1630～1650年
〃	194	陶器	〃	—	7.5	(1.8)	底部の器壁薄い	素地は淡茶褐色、精緻。焼成良好。暗茶色釉。外面下位と外底部は露胎。見込みに釉ハギ。	SE14	唐津焼
〃	195	〃	片口	11.6	—	(4.0)	口縁部は玉縁状に肥厚	素地は精緻。暗灰茶色。暗茶褐色釉。	〃	肥前
〃	196	〃	秉燭	7.3	7.8	6.0	坏部は球体、内部に油溜り。高台付。糸切り底	素地は細砂粒を含み、精緻。焼成良好。茶褐色。濃茶色釉。	〃	福岡 18C
〃	197	〃	片口	—	—	—	口縁部はL字形に肥厚 外面に片口を貼付	素地は細かく、暗灰茶色。口縁部は暗茶色釉。	SE14 掘り方	産地不明 18C代
〃	198	青磁	香炉	13.0	—	(2.1)	Y字状口縁	素地は乳白色、精緻。淡緑色釉。貫入。	SE14	肥前だと17C代、中国だと18C代
〃	199	陶器	摺鉢	25.0	—	(7.0)	口縁部は玉縁。内面ヨコナデ、下し目6本以上	素地は砂粒含み、焼成やや軟。茶褐色。黄色を帯びた暗茶色釉。	〃	唐津焼 17C後～18C初
〃	200	土師質土器	培烙	19.2	17.0	4.1	口縁端部は丸味をもつ 体部は丸味	胎土は細砂粒多い。焼成良好。淡茶褐色。	SE14 掘り方	
〃	201	瓦質土器	火鉢?	—	—	—	口縁部は直口 内外面ヨコハケ	胎土は細砂粒を含み、焼成良好。暗灰青色。	〃	
〃	202	〃	火舎	—	—	—	口縁端部は肥厚 内面ヨコナデ	胎土は精緻。焼成良好。淡灰茶色。口縁部平坦面に同心円状刻印。	SE14	
〃	203	陶器	摺鉢	—	—	—	体部片、内面の下し目7本以上	素地は細砂粒含み、焼成良好。茶褐色。	〃	国産
〃	204	土師質土器	七輪	20.8	—	(6.0)	体部筒状で二重壁、内面ヨコハケ。口縁部煤付着	素地は細粒砂含み、焼成良好。茶灰色。	〃	素焼き
〃	205	瓦質土器	摺鉢	—	—	—	外面指頭圧痕。内面ヨコハケ、下し目6本以上	胎土に細砂粒含み、焼成良好。灰色。	SE14 掘り方	
〃	206	土師質土器	七輪	32.0	—	(5.5)	口縁部肥厚、壁は二重構造。内部ヨコハケ	胎土に砂粒含み、焼成良好。茶褐色。内面白色釉。	SE15 掘り方	素焼き
39	213	土師器	皿	8.7	6.0	1.6	糸切り底	胎土に砂粒含み、焼成良好。灰茶色。	〃	
〃	214	〃	〃	9.0	6.0	1.8	糸切り底	胎土に長石含み、焼成良好。茶褐色。	SE15 井筒	
〃	215	〃	〃	9.2	8.0	1.3	糸切り底、板状圧痕	胎土は砂粒少ない。焼成良好。灰褐色。	SE15 掘り方	
〃	216	〃	〃	9.7	7.0	1.4	糸切り底、板状圧痕	胎土は細砂粒少ない。焼成良好。灰黄色。	〃	
〃	217	〃	〃	10.0	8.3	0.9	糸切り底、板状圧痕	胎土に微砂を含み、焼成良好。暗黄土色。	〃	
〃	218	〃	坏	11.0	7.4	2.8	糸切り底、貼りつけ	胎土に砂粒を含み、焼成良好。暗灰黄色。	〃	
〃	219	〃	〃	12.0	7.0	2.7	糸切り底	胎土は細砂粒多い。焼成やや軟。褐色。	〃	
〃	220	〃	〃	12.4	7.6	2.7	糸切り底 体部は丸味をもつ	胎土に砂粒を含み、焼成良好。灰茶色。	〃	
〃	221	〃	〃	12.8	7.0	3.2	糸切り底	胎土は細砂粒含み、焼成軟。淡灰黄色。	〃	
〃	222	〃	〃	12.0	7.8	3.0	糸切り底	胎土は細砂粒含み、焼成軟。灰褐色。	〃	
〃	223	〃	〃	13.0	7.4	2.6	糸切り底	胎土は1㎜前後の砂含み、焼成良好。灰褐色。	SE15 井筒	
〃	224	〃	〃	13.6	9.0	2.9	糸切り底	胎土に細砂粒を含み、焼成良好。淡黄褐色。	SE15	
〃	225	〃	〃	14.0	7.8	3.2	糸切り底、板状圧痕、内面に煤の付着	胎土は細砂粒含み、焼成良好。暗灰褐色。	SE15 掘り方	
〃	226	青磁	皿	11.0	(4.8)	3.7	腰部は丸味 外底部に目痕	素地に砂粒含み、灰色。焼成良好。緑灰色釉。	〃	高麗
〃	227	瓦質土器	火舎	—	—	—	口縁部は平坦面を作る。外面上位に雷文のスタンプ	胎土は粘質、砂粒を含み、焼成良好。黒色。	〃	
〃	228	土師器	器台	—	—	(3.5)	脚貼付	胎土は砂粒含み、焼成軟。明黄土色。	〃	
〃	229	瓦質土器	摺鉢	34.0	—	—	口縁部肥厚、4本単位の下し目。外部に指頭圧痕、内外面ヨコハケ。外面に煤付着	焼成良好。外面は灰白色。	〃	
〃	233	土師器	坏	10.0	—	1.2	糸切り底	胎土に砂粒を含み、淡灰黄色。焼成良好。	SE16 掘り方	
〃	234	〃	〃	—	13.0	3.1	糸切り底	胎土に白色細砂を含み、焼成良好。灰褐色。	〃	

挿図番号	遺物番号	種類	器種	法量(cm) 口径	底径(高台径)	器高(　)は現存高	形態の特徴	文様・施釉・色調・素地等	出土遺構	備考
41	235	土師器	皿	7.0	5.0	1.4	糸切り底	胎土はきめ細かい、茶色の粒子を含み、焼成良好、堅緻。淡茶色。	SE18	
〃	236	〃	〃	6.8	4.8	1.4	完形。糸切り底、口縁部に煤付着	胎土に大粒の砂含み、粗い。焼成やや軟。茶褐色。	〃	
〃	237	〃	〃	7.0	5.0	1.4	糸切り底	胎土は細かい砂粒を含む。焼成やや軟。明茶色。	〃	
〃	238	〃	〃	7.8	6.2	1.2	糸切り底	胎土に大粒の砂含み、やや粗い。焼成やや軟。茶褐色。	〃	
〃	239	〃	〃	7.7	5.6	1.4	糸切り底、口縁部に煤付着	胎土に大粒の砂含み、やや粗い。焼成やや軟。淡灰褐色。	〃	
〃	240	〃	〃	8.0	4.0	1.6	糸切り底	胎土に砂粒少量含み、焼成良好。淡茶色。	〃	
〃	241	〃	〃	7.2	4.8	1.7	糸切り底	胎土は砂粒少ない。焼成やや軟。茶褐色。	〃	
〃	242	〃	〃	7.0	4.6	1.5	糸切り底	胎土に砂粒含み、粗い。焼成やや軟。茶灰色。	〃	
〃	243	〃	〃	8.8	6.4	1.7	糸切り底	胎土に大粒の砂含み、やや粗い。焼成やや軟。茶灰色。	〃	
〃	244	〃	〃	10.8	7.6	1.4	糸切り底、煤付着	胎土に砂粒含み、やや粗い。焼成良好。淡灰褐色。	〃	
〃	245	〃	坏	10.6	7.2	2.0	糸切り底、底部に煤付着	胎土はやや粗い。焼成良好。内面は淡茶灰色。外面は淡茶色。	〃	
〃	246	染付	碗	13.0	—	(2.4)	口縁片 器壁は薄い	胎土は精緻。焼成良好。透明に近い灰青色の釉。内面に櫛文。口縁外面に圏線。	〃	明　16C後
〃	247	〃	〃	14.0	—	(5.0)	体部は丸く、蓮子碗	胎土は白色、黒い微粒含み、精緻。焼成良好。透明釉。内外面に呉須の文様。	〃	明末、福建省 16C末～17C前
〃	248	〃	〃	9.8	—	(3.5)	体部は直線的に開く	胎土は灰色を帯びた白色。焼成やや軟。透明釉。内面に呉須による圏線。	〃	明末、福建省
〃	249	〃	〃	13.0	—	(3.8)	体部は丸味をもつ 器壁が薄い	素地は白灰色で、精緻。焼成良好。灰色帯びた釉。口縁に1条の圏線、体部外面に絵付。	〃	肥前　17C後
〃	250	陶器	〃	—	4.8	(4.9)	撥高台状	素地は淡茶色～茶褐色、精緻。焼成良好。灰色釉。体部下位は露胎。	〃	肥前　17C代
〃	251	〃	〃	8.0	—	(3.5)	体部上位は内弯する	素地は茶褐色で、砂粒含む。焼成やや軟。淡灰茶色釉。	〃	〃
〃	252	染付	〃	—	4.0	(2.9)	腰部は強い屈折をもつ	素地は灰白色で、精緻。透明釉。焼成良好。体部外面にヘラ削り。	〃	肥前 1620～1630年
〃	253	陶器	猪口	6.0	3.2	3.9	口縁部は外反 体部は直線的に開く	素地は淡灰黄色で、精緻。焼成良好。透明釉。	〃	肥前　17C末 ～18C前
〃	254	〃	碗	8.8	—	(4.6)	体部は球体	素地は淡茶色で、やや粗い。茶褐色釉。淡茶灰色の刷毛目文様。	〃	唐津焼　17C 後～18C前
〃	255	〃	〃	8.0	—	(5.3)	体部は丸味をもつ	素地は暗灰色で、精緻。焼成良好。暗茶色釉。白灰色の刷毛目文様。	〃	〃
〃	256	〃	〃	10.4	—	(5.5)	体部は直線的に開く	素地は灰色で、一部茶褐色。精緻。焼成良好。茶灰色の刷毛目文様。	〃	唐津か現川 (長崎) 1690～18C前
〃	257	〃	〃	—	4.2	(3.1)	体部は球体	素地は淡茶色で、精緻。焼成良好。透明釉。見込みに鉄絵。	〃	京焼風 18C前
〃	258	染付	皿	—	—	—	碁笥底	胎土に微粒の砂含む。内面に呉須文様。圏線は内外に2条ずつ。青灰色帯びた透明釉。	〃	明
〃	259	〃	〃	14.2	4.6	3.8	高台は低い。口縁部外反、腰部は屈曲。外面は砂が付着	素地は白灰色で、精緻。焼成良好。淡灰色釉。内面に濃灰茶色の付着物。	〃	肥前
〃	260	〃	〃	—	5.0	(1.7)	高台は低い。内底に灰が付着	素地は灰色を帯びた白色。焼成良好。灰色帯びた釉。	〃	初期染付肥前 17C前
〃	261	白磁	〃	—	4.5	(1.1)	内底と畳付に砂目	素地は精緻。灰白色。焼成良好。緑色帯びた透明釉。	〃	李朝
〃	262	クロム青磁	〃	10.0	—	(2.0)	高台は低い。 口縁部は玉縁	素地は白地で、精緻。焼成やや軟。淡緑色釉は厚い。	〃	
〃	263	陶器	〃	13.0	—	—	溝縁口縁、腰折れ	胎土に微粒の砂含み、灰色。焼成良好。半透明釉。	〃	唐津焼 1600～1630年
〃	264	〃	片口	12.2	—	(3.0)	玉縁口縁。 腰部の屈曲は強い	素地は暗灰色で、やや細かい。焼成良好。茶色釉。	〃	高取焼
〃	265	瓦質土器	鉢	—	11.4	(3.0)	体部は筒状。 上げ底。外面に煤付着	胎土は大粒の砂多い。焼成良好。内面は暗灰茶色、外面は淡灰色。	〃	
〃	266	〃	火舎	—	—	—	胴部片	胎土に大粒の砂多い。焼成軟。内面は淡灰茶色、外面濃灰茶色。外面に菊花文と四桝文のスタンプ。	〃	
〃	267	〃	〃	—	—	—	口縁端部は肥厚し、平坦部形成。内面ヨコハケ	胎土に大粒の砂含む。淡茶灰色。焼成良好。	〃	

挿図番号	遺物番号	種類	器種	法量（cm） 口径	底径（高台径）	器高（ ）は現存高	形態の特徴	文様・施釉・色調・素地等	出土遺構	備考
42	268	陶器	摺鉢	—	—	—	口縁部は直立し、肥厚。外面に２条の沈線。５本単位の下し目	素地は微砂を含み、粗い。茶褐色。焼成良好。小豆色釉を施す。	SE18	上野又は高取 17C
〃	269	〃	〃	—	—	—	口縁端を下位につまみ出し、断面三角形の口縁部形成	素地は砂含み、精緻。茶褐色。焼成軟。黄茶色釉を口縁部内外面に施す。	〃	唐津焼
〃	270	〃	〃	—	—	—	体部片、水引き痕 11本単位の下し目	素地は砂粒含み、焼成良好。暗小豆色。	〃	備前焼
〃	271	〃	〃	—	—	—	底部は平底	素地は砂粒含み、褐色。焼成良好。暗茶色。	〃	国産
〃	272	〃	〃	—	—	—	体部片、口縁部屈折 内面の下し目10本単位	素地は大粒の砂を含む。茶褐色。焼成良好。口縁部は暗茶褐色釉。	〃	唐津焼 17C代
〃	273	〃	〃	27.5	—	(5.0)	T字口縁、口縁部は２段に屈折。下し目は12本単位、内面ヨコハケ	素地は砂を含み、精緻。焼成良好。口縁部は茶褐色釉。	〃	小石原焼
〃	276	〃	甕	—	—	—	胴部片、内面は青海波叩き痕	素地は砂粒含み、粗い。茶褐色、焼成良好。暗茶褐色釉を内外面に施す。	〃	
44	287	〃	皿	8.6	3.6	3.0	完形品、三日月高台	素地は精緻で、淡灰褐色。焼成良好。緑灰色釉を全面に施す。	SE19 井筒	唐津焼 16C末～17C初
〃	288	〃	〃	10.8	—	3.0	底部欠く、端反り口縁	素地は精緻で、淡茶色。暗緑色釉。貫入。焼成良好。	SE19	唐津焼
〃	289	青磁	碗？	—	5.4	1.3	高台は低い、底部器壁厚い	素地は微砂を含み、精緻。灰色。焼成良好。見込みに片切彫の文様。暗緑茶色釉を高台まで塗布。	〃	舶載 明青磁
〃	290	白磁	皿	17.8	—	(2.3)	体部の屈曲強い。口縁部外反	素地は精緻で、灰白色。焼成良好。青味を帯びた透明釉。	〃	伊万里
〃	291	青磁	〃	13.6	—	(2.5)	口縁端部は外反し、丸味をもつ	素地は微砂を含み、暗灰色。淡緑灰色釉。貫入。	〃	
〃	292	瓦質土器	火舎	—	—	—	内面指頭圧痕、外面黒色研磨。外面に２条の突帯	胎土は砂粒含み、焼成良好。茶灰色。突帯の間には丸菱のスタンプ。	〃	
〃	293	土師質土器	摺鉢	—	—	—	体部片、外面指頭圧痕 内面ヨコハケ、下し目は５本単位	胎土に大粒の砂含み、焼成良好。明灰茶色。	〃	
〃	294	須恵質土器	鉢	24.0	—	(2.8)	口縁端部は上へつまみ上げる	胎土は微砂含み、焼成良好。暗灰色。口縁部は濃暗灰色。	〃	東播系
〃	295	陶器	不明	—	—	—	器肉は薄い。内面は青海波叩き痕、外面タテハケ	素地砂粒含み、小豆色。焼成良好。濃茶緑色釉。	〃	李朝
46	298	土師器	皿	6.0	4.5	1.8	糸切り底	胎土精緻、焼成良好。黄褐色～黒褐色。	SE20 裏込め	
〃	299	〃	〃	7.3	5.0	1.5	糸切り底	胎土に砂粒含み、黄灰色。焼成良好。	〃	
〃	300	〃	〃	—	6.0	(1.0)	糸切り底	胎土は精緻、焼成良好。内面は淡黄灰色、外面淡灰色。	〃	
〃	301	〃	〃	8.0	6.0	1.5	糸切り底	胎土は精緻。淡黄灰色。焼成良好。	〃	
〃	302	〃	坏	—	7.0	(1.3)	糸切り底、板状圧痕	胎土は砂粒含み、淡黄褐色。焼成良好。	〃	
〃	303	〃	〃	—	6.0	(1.5)	糸切り底、板状圧痕	胎土は精緻、焼成良好。内面は淡明褐色、外面は淡黄褐色。	〃	
〃	304	〃	〃	12.4	8.0	2.4	糸切り底	胎土は精緻で、淡黄灰色。焼成良好。	〃	
〃	305	〃	〃	12.9	7.0	3.1	糸切り底	胎土は精緻。淡茶褐色。焼成良好。	〃	
〃	306	〃	〃	13.0	8.0	2.9	糸切り底	胎土は精緻。淡黄灰色。焼成良好。	〃	
〃	307	〃	〃	12.9	7.8	3.1	糸切り底	胎土は砂粒を含み、暗茶褐色。	〃	
〃	308	〃	〃	12.7	8.0	2.7	糸切り底、内面に煤付着	胎土は精緻。淡黄灰色。	〃	
〃	309	〃	〃	12.9	8.0	2.7	糸切り底	胎土に長石を含み、暗茶褐色。焼成良好。	〃	
〃	310	〃	〃	—	10.0	(1.7)	糸切り底、板状圧痕	胎土に砂粒を含み、黒茶褐色。焼成良好。	〃	
〃	311	〃	〃	14.0	7.5	1.9	糸切り底、器高低い	胎土精緻。焼成良好。灰茶褐色～茶色。	〃	
〃	312	瓦質土器	鉢？	—	4.2	(3.5)	体部屈曲し、外反。外面はヘラ研磨、内面に指頭圧痕	胎土は微砂含み、粗い。淡茶色。焼成良好。外面は濃灰色、内面淡灰茶色。	〃	器形不明
〃	313	〃	〃	—	4.8	(3.6)	体部は屈曲し、外反。外面はヘラ研磨、内面に指頭圧痕	胎土は微砂を含み、粗い。茶褐色。焼成軟弱。外面は濃灰色、内面は灰色。	〃	〃

挿図番号	遺物番号	種類	器種	法量（cm） 口径	底径（高台径）	器高（ ）は現存高	形態の特徴	文様・施釉・色調・素地等	出土遺構	備考
46	314	青磁	皿	10.8	—	(3.2)	腰部は屈曲、口縁外反	素地は微砂含み、精緻。胎土は淡茶色。淡緑灰色釉。	SE20 掘り方	明
〃	315	〃	碗	—	4.6	(2.1)	底部片、底部器壁厚い	素地は精緻で、灰色。淡緑色釉。焼成良好。	SE20 裏込め	龍泉窯系
〃	316	白磁	〃	—	5.2	(2.2)	底部片、高台際ケズリ	素地は精緻、淡灰茶色。焼成良好。内面は灰茶色～暗灰色、外面は淡茶灰色。	SE20	Ⅳ類
〃	317	染付	小碗	—	—	—	口縁部片、体部は直線的に開く	素地は精緻で白色。外面に呉須文様。	SE20 裏込め	明　天正か 16C末
〃	318	〃	皿	—	5.0	(1.5)	底部片、高台は低い	素地は精緻で、淡茶白色。内外面に呉須文様。内底に牡丹文。	〃	〃
〃	319	陶器	碗	15.8	—	(4.2)	体部は直線的に開く	素地は精緻で、淡茶色。淡緑灰色釉。	SE20	
〃	320	土師質土器	焙烙？	—	—	—	体部は垂直に立つ。外面指頭圧痕、外面に煤付着	胎土は大粒の砂含み、粗い。焼成軟。淡茶褐色。	SE20 裏込め	
〃	321	青磁	碗	15.8	—	(3.0)	口縁片	素地は灰色、砂粒を含む。暗緑色釉。体部外面は縞蓮弁文。	〃	龍泉窯系
〃	322	瓦質土器	鍋	24.0	—	(4.0)	体部は直線的に開く。外面下位に指頭圧痕、内面ヨコハケ	胎土は砂粒を含み、粗い。焼成良好。濃灰茶色。	SE20 掘り方	
〃	323	〃	火舎	—	—	—	口縁部直口、外面に2条の突帯	胎土精緻。焼成良好。灰黄褐色～黒灰色。突帯の間に丸菱文のスタンプ。	SE20 裏込め	
47	324	土師質土器	鍋	29.8	—	(6.4)	口縁部は内弯する。外面に指頭圧痕、外面に煤付着	胎土に砂粒を含み、粗い。焼成軟。内面は茶褐色。	SE20 掘り方	畿内産
〃	325	〃	〃	—	—	—	体部は内弯気味に開く。内面ヨコハケ、外面に煤付着	胎土に砂粒を含み、焼成良好。茶褐色。	SE20 裏込め	
〃	326	陶器	甕	—	—	—	N字状口縁	素地は砂粒含み、焼成良好。内面は暗小豆色、外面は暗茶色。	SE20 掘り方	常滑焼 Ⅱ－2期
〃	327	〃	摺鉢	—	—	—	体部片、内面の下し目4本以上	素地は砂粒含み、粗い。焼成軟。暗茶色。	〃	
〃	328	〃	壺	—	16.0	(2.5)	底部は平底 体部は直線的に開く	素地は砂粒を含み、褐色。外面は濃茶色と灰緑色釉。内面は暗緑灰色釉。	〃	福岡　17C
〃	329	〃	〃	12.2	—	3.8	口縁部直口 端部丸味をもつ	素地は微砂を含み、粗い。焼成良好。内面は茶褐色。	SE20 裏込め	
〃	330	〃	摺鉢	—	—	—	体部片、内面の下し目は8本単位	素地は大粒の砂含み、焼成良好。茶小豆色。	SE20	備前焼
〃	331	〃	〃	—	—	—	体部片、内面水引き痕、下し目は7本以上	素地は砂粒含み、精緻。焼成良好。外面は濃緑茶色、内面濃茶色。	SE20 掘り方	備前焼Ⅳ期
〃	332	〃	〃	35.8	—	(4.5)	口縁端部を上下につまみ出す。下し目は5本単位	素地に砂粒含み、焼成良好。小豆色。	SE20 裏込め	〃
〃	333	〃	〃	31.6	—	(7.6)	口縁部はくの字形で、外面は肥厚させる。下し目は5本単位	素地に大粒の砂を含み、茶色。焼成良好。濃茶色釉を口縁部に施釉。	SE20	唐津焼
〃	334	〃	〃	25.0	—	(3.8)	口縁部はくの字形で、直口する。内面に5本単位の下し目	素地に大粒の砂含み、内面茶褐色、外面暗小豆色。	SE20 掘り方	備前焼Ⅴ期
48	337	瓦質土器	鉢	—	—	—	口縁部若干肥厚、内面ヨコハケ、外面タテハケ後ナデ	胎土に砂粒を含み、焼成良好。外面は黄灰色、内面は黒灰色。	SE20 裏込め	
〃	338	〃	〃	—	—	—	体部は直線的に開く 内面ヨコハケ	胎土は精緻で、灰色。焼成良好。	〃	
〃	339	土師質土器	摺鉢	—	—	—	口縁部若干肥厚、内面ヨコハケ、マメツ。外面指頭圧痕、下し目アリ	胎土に大粒の砂含み、粗い。茶褐色。	〃	
〃	340	〃	〃	—	—	—	口縁端部は肥厚。内面はヨコハケ、外面タテハケ後ナデ。下し目4本以上	胎土に大粒の砂含み、粗い。茶褐色。	〃	
〃	341	〃	〃	—	—	—	口縁端部は平坦。内側に肥厚。内面ハケメ	胎土に砂粒を含み、淡茶褐色。	〃	
〃	342	〃	〃	—	—	—	体部は直線的に開く。内面ヨコハケ。下し目アリ	胎土に大粒の砂を含み、焼成良好。明茶色。	〃	№340と同じタイプ
〃	343	〃	〃	—	—	—	口縁部若干肥厚。内面タテ、ヨコハケ。下し目アリ	胎土に大粒の砂含む。口縁部は灰茶色。内面は茶褐色、外面は淡茶灰色。	SE20 掘り方	№339と同じタイプ
〃	344	〃	〃	—	—	—	口縁端部は下位につまみ出す。内面ヨコハケ、外面タテハケ。下し目は、5本単位。口縁部内面に3条の沈線	胎土に大粒の砂を含み、明茶色。	SE20 裏込め	
〃	345	〃	〃	—	—	—	口縁部を肥厚。内面ヨコハケ、外面タテハケ、指頭圧痕。下し目3本以上	胎土に砂粒を含み、淡茶褐色。	〃	№340と同じタイプ
〃	346	〃	〃	—	—	—	体部片。内面ヨコハケ。下し目は5本以上	胎土に微砂含み、粗い。淡茶色。	〃	

挿図番号	遺物番号	種類	器種	法量（cm） 口径	底径（高台径）	器高（ ）は現存高	形態の特徴	文様・施釉・色調・素地等	出土遺構	備考
48	347	土師質土器	摺鉢	27.4	11.4	14.0	口縁部若干肥厚、内面マメツ、外面タテハケ。下し目は5本単位	胎土に大粒の砂を含み、淡茶灰色。焼成良好。	SE20 掘り方	No.343と同じタイプ
〃	348	〃	〃	—	—	—	底部器壁薄い。内面の下し目は5本単位	胎土に大粒の砂を含み、粗い。焼成良好。明茶色。	SE20 裏込め	
49	349	瓦質土器	火舎	26.8	22.6	24.1	体部は筒状、三脚付、外面の上下位に突帯2条、外面黒色研磨、内面タテ、ヨコハケ	胎土は粗い。焼成良好。茶灰色。外面に渦文と花文のスタンプ。	〃	
51	352	土師器	皿	6.6	5.0	1.4	糸切り底	胎土は砂粒を含み、明茶色。焼成軟。	SE20 井筒	
〃	353	〃	坏	11.8	7.0	2.8	糸切り底、体部外面に指頭圧痕	胎土は1～2㎜の砂粒含み、茶褐色。焼成良好。	〃	
〃	354	〃	〃	10.2	7.0	1.9	糸切り底 口縁部外面に煤付着	胎土に1㎜前後の砂粒含み、焼成良好。淡茶灰色。	〃	
〃	355	〃	〃	9.8	6.0	2.2	糸切り底、板状圧痕	胎土は精緻、焼成良好。口縁部は淡灰茶色。明茶褐色。	〃	
〃	356	〃	〃	—	8.0	(2.0)	糸切り底、板状圧痕	胎土は精緻、薄茶灰色。焼成良好。	〃	
〃	357	〃	〃	10.0	7.5	1.6	糸切り底、体部丸味をもつ	胎土は微砂を含み、淡茶色。焼成良好。	〃	
〃	358	青磁	碗	—	5.2	(2.4)	畳付に胎土目痕	素地は精緻、乳灰色。焼成良好。淡緑青色の釉を高台外面まで施釉。	〃	龍泉窯系
〃	359	〃	〃	—	4.1	(2.8)	輪高台、体部丸味をもつ	素地は精緻、淡茶灰色。焼成良好。淡緑茶色釉。内底にヘラ片切りの文様。	〃	〃
〃	360	白磁	〃	—	6.0	(2.6)	蛇ノ目高台、見込みに沈線、底部器壁厚い	素地は精緻、淡茶色。焼成良好。淡灰茶色釉、貫入。	〃	Ⅳ類
〃	361	染付	〃	—	—	—	口縁部外反	素地は砂含み、精緻。白色。焼成良好。灰色帯びた透明釉。外面圏線2条と文様、内面2条の圏線。	〃	明
〃	362	陶器	〃	—	4.0	(1.2)	円盤状高台	素地は明茶色、砂粒含む。内面茶色釉、露胎部は明茶褐色。	〃	天目
〃	363	白磁	皿	11.0	—	(2.0)	口縁部外反	素地は精緻、白色。焼成良好。白色釉。	〃	明
〃	364	〃	〃	16.0	—	(2.3)	口縁部外反	素地は精緻、白色。焼成良好。青味帯びた透明釉。	〃	
〃	365	染付	〃	—	—	—	体部内弯、口縁部は外反	素地は精緻で、白色。焼成良好。口銹。見込みに圏線。	〃	明末17C前半
〃	366	陶器	〃	10.0	—	(1.9)	体部は直線的に開く	素地は微砂を含み、精緻。明茶色。焼成良好。灰白色帯びた透明釉。	〃	唐津焼か李朝
〃	367	土師質土器	摺鉢	—	15.6	(5.4)	内面ヨコハケ、下し目は5本単位、外面指頭圧痕	胎土に大粒の砂含み、粗い。焼成良好。茶褐色。	〃	SE18出土鉢と接合
〃	368	〃	〃	—	15.4	(4.8)	体部丸味をもつ、外面タテハケ、指頭圧痕。内面の下し目は3本以上	胎土は粗い。焼成良好。内面は淡茶色、外面は明茶褐色。	〃	
〃	369	〃	鉢	—	—	—	口縁部は肥厚 指頭圧痕	胎土は粗い。焼成良好。	〃	
〃	370	〃	摺鉢	—	—	—	口縁部若干肥厚、内面ヨコハケ、マメツ。下し目は3本以上、外面は指頭圧痕	胎土に大粒の砂含み、粗い。焼成軟。明茶～淡灰色。	〃	
〃	371	〃	〃	28.0	—	(7.4)	体部は直線的に開く。外面ヨコ、タテハケ、内面ヨコハケ。下し目4本以上	胎土に砂粒含み、粗い。焼成軟。内面は明茶色、外面は明茶灰色。	〃	
52	372	瓦質土器	火舎	—	—	—	口縁端、外側に肥厚、内面ヨコハケ	胎土は淡茶灰色、粗い。焼成良好。濃灰色。外面に雲形文のスタンプ。	〃	
〃	373	〃	〃	—	—	—	外面に2条の突帯 内面にヨコハケ	胎土は精緻、淡茶灰色。焼成軟。濃灰色。外面に筋交いの三角形文のスタンプ。	〃	
〃	374	〃	〃	—	—	—	脚部片、内面ヨコハケ、体部直線的に開く	胎土は3㎜前後の長石を含み、焼成良好。灰色。	〃	
〃	375	〃	鉢	36.6	—	(5.2)	逆L字状口縁 内面ヨコハケ	胎土、精緻。焼成良好。濃灰色。	〃	
〃	376	〃	壺	—	—	—	平底、内面に煤付着、体部直線的に開く	胎土粗い。焼成良好。外面は灰橙色。	〃	備前焼
〃	377	〃	瓶	—	—	—	体部は筒状	胎土は精緻。焼成軟。小豆色。	〃	〃
〃	378	〃	摺鉢	—	—	—	体部直線的に開く。内面マメツ。下し目は9本以上	胎土粗い。焼成軟。外面は褐茶色。内面は暗小豆色。	〃	〃
〃	379	〃	〃	—	14.5	(5.3)	平底、体部は直線的に開く。外面指頭圧痕、内面の下し目7本以上	胎土は精緻。小豆色。焼成良好。	〃	〃

Tab. 2　第68次調査遺物一覧表 ③　不定形土壙・墓・構築物出土遺物

挿図番号	遺物番号	種類	器種	法量（cm） 口径	底径（高台径）	器高（ ）は現存高	形態の特徴	文様・施釉・色調・素地等	出土遺構	備考
56	1	陶器	碗	—	5.0	(2.3)	高台は撥状	素地は灰褐色。黄灰褐色釉。貫入。	SX01	唐津焼
〃	2	〃	〃	—	5.0	(2.7)	高台は断面三角形状、体部丸味をもつ	素地は明灰黄色、精緻。灰黄色を帯びた透明釉。外面に一部緑釉。	〃	肥前産 17C後半代
〃	3	クロム青磁	皿	9.0	2.3	1.65	高台は低く内傾、体部は丸味をもつ、口縁部は玉縁状	素地は灰白色、精緻。青灰色釉。付着物が多い。	〃	肥前産
〃	4	染付	〃	—	5.7	(1.2)	高台は低く、内傾	素地は灰白色、精緻。青味を帯びた透明釉。絵柄は淡青色。見込みは飛龍文。圏線は高台内1条、高台外面2条、体部下位1条。	〃	〃
〃	5	〃	碗	—	—	—	蓮子碗、体部丸味をもつ	素地は灰白色、細砂粒を含む。灰黄色を帯びた透明釉。絵柄は藍色。外面は唐草文、内面は飛龍文。	〃	〃
〃	6	陶器	〃	—	4.0	(1.6)	底部片、高台断面はコの字形	素地は淡灰黄色、精緻。焼成良好。淡灰緑色を帯びた透明釉。内底は釉ハギ。	SX02 裏込め	唐津系又は福岡 18C前～中
〃	7	〃	〃	—	3.6	(1.6)	高台は細く、撥状	素地は淡灰黄色。透明釉。内底は釉ハギ。鉄釉による絵か。	〃	福岡？ 18C前～中
〃	8	〃	〃	—	4.0	(2.3)	体部丸味をもち、高台は撥状	素地は暗灰色。焼成良好。暗灰緑色釉。体部内面の中央に釉ダレ。	SX02 掘り方	上野・高取系 18C
〃	9	〃	〃	—	2.5	(1.7)	高台は低い 内底に胎土目痕	素地は暗灰色、精緻。暗緑灰色釉。体部下位、高台は茶灰色。	SX02 裏込め	唐津焼　16C末～17C初
〃	10	〃	〃	—	2.5	(3.0)	体部は丸味をもつ、高台は高い	素地は灰黄色。灰黄色釉。	SX02	上野・高取系 17C後～18C前
〃	11	〃	〃	—	4.2	(3.3)	高台は細い。体部は丸味をもつ。腰がある	素地は灰白色。焼成良好。灰緑色釉。	SX02 裏込め	福岡又は唐津 18C前～中
〃	12	〃	〃	5.7	4.4	5.4	高台は細い、体部丸味をもつ、腰がある	素地は淡灰褐色、精緻。茶灰色釉。刷毛目文様。	〃	唐津焼 18C前～中
〃	13	〃	〃	—	5.6	(4.1)	体部は半球形 高台畳付に目痕	素地は淡灰白色。淡灰黄色を帯びた透明釉。体部外面上方は釉が黄色味を増す。	〃	肥前　17C前
〃	14	〃	〃	—	6.8	(4.7)	体部は丸味をもち、高台は重厚	素地は灰白色。焼成良好。茶褐色釉。内面に釉ダレ。	〃	福岡又は肥前 17C後～18C前
〃	15	〃	皿	—	7.0	(0.9)	高台は低く、内傾	素地は淡灰黄色、細砂粒を含む。透明釉。外底は輪状の釉ハギ。	〃	福岡　17C末～18C前
〃	16	〃	〃	—	8.0	(1.3)	高台は低い、内傾、外底部糸切り、内底に渦巻状の段	素地は灰白色、精緻。茶灰色釉。	〃	福岡
〃	17	〃	〃	20.8	—	(3.3)	口縁は大きく外反	素地は暗灰色。暗緑灰色釉。ヨコ方向に灰黄色の刷毛目文様。	SX02 掘り方	唐津焼 17末～18C前
〃	18	白磁	小坏	4.6	2.4	1.6	蛇ノ目高台、体部は内弯	素地は白灰色。焼成良好。白色帯びた透明釉。	SX02 裏込め	17C後半
〃	19	〃	皿	8.2	3.6	2.4	貼付高台は低く、尖る。外底部は糸切り	素地は淡灰白色、細砂粒を含む。淡灰青色を帯びた透明釉。体部内面は型紙摺り。	〃	〃
〃	20	〃	碗	7.0	—	(2.2)	口縁部片、器壁が薄い	素地は白色。焼成良好。淡青白色釉。内面白色。	〃	18C前～中
〃	21	〃	〃	8.0	—	(2.4)	体部片	素地は灰白色。焼成良好。乳白色釉。	〃	18C前
〃	22	〃	小坏	3.5	—	(4.3)	端反り形	素地は淡白灰色。焼成良好。灰白色釉。	〃	17C後
〃	23	青磁	香炉	—	—	—	口縁端部は肥厚する。体部内弯	素地は白色、精緻。淡緑白色釉。体部内面露胎。	〃	17C後～18C後
〃	24	染付	小坏	—	2.4	(2.5)	端反り形で、高台は内傾	素地は灰白色、精緻。淡灰青色釉。高台内露胎。体部外面に淡灰青色の菊花文様。	SX02	肥前 1630～40年
〃	25	〃	碗	—	4.4	(2.2)	体部は丸味もち、高台は細い	素地は白色、精緻。淡灰白色釉。外底に文字。圏線は高台内1条、高台外面2条。	〃	肥前　18C前 太明年製の転用
〃	26	〃	〃	10.0	—	(4.2)	体部は半球形	素地は灰白色。焼成良好。灰白色釉。外面に草花文。口縁内面に釉ダレ。	〃	肥前 18C前～中
〃	27	〃	〃	9.6	—	(4.5)	体部は半球形	素地は白色。淡灰色釉。外面に花文、高台脇に圏線1条。	〃	肥前　18C後
〃	28	〃	〃	11.2	4.6	6.0	体部は半球体、内底に胎土目、畳付砂付着	素地は淡灰白色。淡灰色釉。圏線は体部外面3条、体部内面3条。内底に文字。外面に文様。	〃	「太明成化年製」肥前 1650～1670年
58	29	〃	〃	13.0	—	(3.2)	体部は筒形	素地は淡灰白色。焼成良好。外面の絵柄は藍色。	〃	肥前 18C後　段重

挿図番号	遺物番号	種類	器種	法量(cm) 口径	底径(高台径)	器高 ( )は現存高	形態の特徴	文様・施釉・色調・素地等	出土遺構	備考
58	30	染付	皿	—	8.0	(2.1)	高台は低い、体部は丸味	素地は白色、精緻。白灰色釉。見込みにコンニャク判。圏線は高台外面2条、高台内1条、見込み2条。	SX02	肥前 1690～18C初
〃	31	土師質土器	小鉢	15.0	7.8	3.9	外面指頭圧痕、内面に煤付着	胎土に砂粒含み、焼成良好。灰褐色。	〃	
〃	32	〃	焙烙	16.8	—	(3.8)	口縁端部丸く、肥厚 体部外面、指頭圧痕	胎土は暗茶灰色、砂粒多い。焼成軟。	〃	
〃	33	瓦質土器	摺鉢	—	—	—	内面ヨコハケ。下し目は2本以上	胎土は淡灰褐色。表面は灰色。	〃	
〃	34	〃	捏鉢	—	—	—	口縁部は端部をつまみ出す。内面はナナメ、タテハケ	胎土は砂粒多い。焼成良好。明茶褐色。	〃	
〃	35	陶器	摺鉢	14.7	—	(5.8)	口縁部はくの字形、端部丸い。外面に1条の突帯。内面に8本単位の下し目	素地は褐色。暗茶色釉。	SX02 裏込め	掘り方出土と接合 高取系
〃	36	〃	〃	—	—	—	Y字形口縁、外面に1条の突帯。10本単位の下し目	素地は灰褐色。砂粒含み、焼成良好。暗茶褐色。	〃	唐津系
〃	37	〃	甕	—	—	—	口縁部は肥厚し、沈線が入る	素地は暗茶褐色、0.4㎜前後の砂含む。	〃	備前系
〃	38	〃	摺鉢	—	—	—	口縁部は如意形に外反し、外面に小さな突帯がつく	素地は暗灰色、砂粒含む。暗小豆色釉。	〃	高取系
〃	39	〃	〃	—	—	—	注口が付く、Y字形口縁で、外面に小さな突帯がつく。内面に下し目	素地は灰褐色、細砂粒多い。暗茶褐色。	〃	唐津系 18C前～中
〃	40	〃	〃	—	—	—	口縁部はT字形で、内傾する、強い肩がつく	素地は暗灰色。暗茶褐色釉。体部外面に釉ダレ。	〃	唐津系
〃	41	〃	壺	17.0	—	7.2	口縁部は肥厚し、平坦、平坦面に貝目痕、内面は同心円状叩き	素地は暗茶褐色釉。暗黄褐色釉。内外面に釉ダレ。	SX02 下層	福岡系
〃	42	〃	〃	—	15.2	(4.1)	上げ底	素地は暗茶灰色、精緻。暗茶黒色釉。底部は灰緑色釉付着。	SX02 裏込め	唐津焼
〃	43	〃	甕	—	—	—	胴部片、内外面共に格子目叩き	素地は粗い。焼成軟。内面は暗灰色釉、外面は暗小豆色釉。	SX02 井筒	唐津焼 1630年～17C中
59	52	土師器	皿	—	9.6	0.7	ヘラ切り底	胎土に砂粒が多い。焼成良好。淡褐色。	SX03	
〃	53	染付	小碗	6.0	2.5	3.65	端反り口縁、腰が強い	素地は精緻、灰白色。焼成良好。透明釉。外面に草花文。	〃	肥前 18C前～中
〃	54	〃	〃	—	4.0	(4.0)	体部は丸味をもつ。高台は内傾	素地は精緻。焼成良好。淡黄褐色。灰白色釉。圏線は体部下位に1条。	〃	肥前 17C中
〃	55	〃	〃	8.0	—	3.9	体部は丸味をもつ	素地は精緻、乳白色。焼成良好。灰色帯びた透明釉。高台脇に圏線。	〃	肥前 17C後
〃	56	〃	碗	10.0	—	(4.2)	体部は丸味をもつ	素地は精緻、乳白色。焼成良好。透明釉。外面に草文。	〃	肥前 18C中葉
〃	57	〃	〃	10.0	—	(4.0)	体部は半球形、器壁薄い	素地は精緻、灰白色。焼成良好。灰色帯びた透明釉。体部外面にコンニャク判の花文。	〃	肥前 18C前
〃	58	〃	〃	—	—	—	体部は丸味をもつ	素地は精緻、灰白色。焼成良好。乳灰色釉。外面に草文。	〃	No.56と同じタイプ 18C前～中
〃	59	〃	〃	11.0	4.0	5.7	体部内弯し、高台は内傾気味	素地は精緻、灰白色。焼成良好。青味帯びた透明釉。圏線は体部外面1条、体部下位2条、高台内1条。外面に草花文。	〃	肥前 18C前～中
〃	60	〃	皿	—	—	—	口縁片 体部は丸味をもつ	素地は精緻、灰白色。焼成良好。灰色帯びた透明釉。内面に草花文。	〃	肥前
〃	61	〃	〃	8.0	—	(1.5)	高台は低く、内傾	素地は精緻、淡灰色。透明釉。内底に梅花文。	〃	肥前 17C後
60	62	〃	〃	14.2	8.2	4.0	高台は低く、内傾する。体部丸味をもつ。畳付砂付着	素地精緻、灰白色。焼成良好。透明釉。内外面に枝葉文様。外底に文字。文字は不明。	〃	肥前 18C前
〃	63	陶器	碗	9.8	3.6	4.8	高台は内傾 体部は半球形	素地精緻、暗灰色。焼成良好。鉄釉に藁灰流しかけ。	〃	小石原 18C前～中
〃	64	〃	〃	11.8	4.4	5.5	高台は低く、やや内傾、外底に目痕、腰が張る	素地は精緻。淡黄茶色。焼成良好。茶色帯びた透明釉。外面に草花文。	〃	京焼風肥前 18C前
〃	65	〃	〃	—	—	—	体部は丸味をもつ	素地は精緻、灰色。焼成良好。鉄釉。体部内面は透明釉。	〃	17C中 1630～1650年
〃	66	〃	皿	12.8	4.2	3.6	三日月高台 体部は内弯する	素地は精緻、淡茶色。焼成良好。内面は緑灰色釉。見込みに釉ハギ。体部外面は緑色帯びた透明釉。	〃	京焼か？ 18C前

挿図番号	遺物番号	種類	器種	法量（cm） 口径	底径（高台径）	器高（ ）は現存高	形態の特徴	文様・施釉・色調・素地等	出土遺構	備考
60	67	陶器	皿	—	—	—	口縁部は内傾し、丸味をもつ	素地精緻、小豆色。焼成良好。透明釉。内外に白色の刷毛目文様。	SX03	唐津焼 18C前
〃	68	〃	片口	—	—	—	口縁部は玉縁状	素地は淡茶灰色。焼成良好。透明釉。口縁端部は茶褐色。	〃	唐津焼 17C代
〃	69	〃	摺鉢	—	—	—	口縁部外面、肥厚し、直口する。内面に9本以上の下し目	素地に砂粒を含み、焼成良好。茶褐色と灰色。	〃	備前焼Ⅵ期 17C代
〃	70	〃	〃	—	—	—	口縁部外反、頸部に突帯。10本単位の下し目	素地に砂粒含み、焼成良好。茶褐色。小豆色釉。	〃	唐津焼
〃	71	〃	甕	—	—	—	内外面に格子目叩き	素地は精緻、淡小豆色。焼成良好。内面は茶色釉、外面は暗小豆色。	〃	〃
〃	72	〃	〃	—	—	—	内面同心円状叩き、器壁薄い	素地は精緻。焼成良好。小豆色。	〃	唐津焼 1600年
〃	73	〃	摺鉢	—	—	—	体部片、内面にヨコ方向のカキ目。下し目は8本単位	素地は灰色。焼成良好。内面は茶色、外面は小豆色。	〃	備前焼 江戸前期
〃	74	瓦質土器	火舎	—	—	—	口縁部片。内面ヨコ方向のカキ目	胎土は精緻、淡灰茶色。焼成良好。内面は暗灰色、外面黒色研磨。外面に牡丹唐草文。	〃	
〃	75	〃	〃	28.0	—	20.0	口縁部は丸味、脚は3本、内面はヨコ方向のカキ目	胎土に5㎜前後砂粒含み、焼成良好。暗灰色。外面黒色研磨。牡丹唐草文のスタンプ。	〃	
61	76	土師器	皿	7.4	5.8	1.0	糸切り底、煤付着	胎土に2～3㎜の砂粒を含み、焼成良好。淡明茶褐色。	SX03 4·5層	
〃	77	〃	〃	5.7	6.0	5.7	糸切り底	胎土に2～3㎜の長石の粒含み、焼成良好。淡茶灰色。	SX03 4層	
〃	78	〃	〃	10.0	4.8	2.2	糸切り底	胎土は精緻。焼成良好。淡黄褐色。	SX03 1層	
〃	79	〃	坏	10.0	8.2	1.2	糸切り底	胎土は精緻。焼成良好。淡茶色。	〃	
〃	80	〃	〃	11.5	9.2	1.9	糸切り底	胎土に砂粒含み、焼成良好。淡茶褐色。	〃	
〃	81	〃	〃	12.0	—	(2.1)	丸底か。煤付着	胎土は精緻。焼成良好。淡茶色。	SX03 5層	
〃	82	陶胎染付	皿	14.4	8.7	3.7	口縁部は内弯気味に外反、輪状高台は断面が三角形状	素地精緻。焼成良好。灰色の化粧がけ。見込みに五弁花のコンニャク判。	SX03 3層	
〃	83	〃	〃	14.0	8.0	3.7	№82と同一器形 高台尖端は平坦	素地精緻、こげ茶色。透明釉。貫入。内底中央にコンニャク判。	SX03 1層	伊万里 1750年代
〃	84	〃	〃	14.0	8.1	3.9	№82と同一器形	素地は灰色。焼成良好。淡灰色を帯びた透明釉。見込みに五弁花のコンニャク判。貫入。	SX03 3層	
〃	85	青磁染付	〃	14.2	8.4	4.0	高台は低く、外底に段がある。口縁部は端反り	素地は精緻、乳白色。焼成良好。淡緑灰色釉。内面に草文。内底にコンニャク判。	〃	伊万里 17C後
〃	86	染付	〃	—	9.2	1.0	高台は低く、尖る	素地は精緻、白色。透明釉。内底に印花文。圏線は見込みに2条、体部下位2条、高台内に1条。	SE03 4層	有田 1660～1690年
〃	87	〃	〃	—	—	—	№62と同一個体 底部片	素地は精緻、白色。焼成良好。透明釉。果実文様。	SX03 6層	SK12に同一個体 1600～1670年
〃	88	〃	〃	14.0	—	(3.2)	端反り口縁、体部丸味をもつ	素地は精緻、乳白色。焼成良好。透明釉。内外面に文様。	SX03 1層	
62	89	陶器	〃	—	5.4	(2.0)	高台は低く、尖る。器壁薄い	素地は精緻、淡茶色。焼成良好。黄茶色釉。見込みに草木文で白灰色と茶色。	SX03 3層	現川窯 1690年
〃	90	染付	碗	8.5	4.0	4.4	ほぼ完形、底部が厚い。体部は丸味。畳付に砂付着	素地は精緻、灰色。焼成良好。透明釉。体部外面に梅花文。	SX03 1層	
〃	91	〃	〃	—	4.3	(2.0)	高台は低く、尖る	素地は精緻、白色。焼成良好。透明釉。外面に網目文。	SX03 3層	
〃	92	〃	小碗	8.5	3.0	4.2	ほぼ完形。体部は半球形。高台は低い	素地は精緻、淡灰色。焼成良好。透明釉。外面に松枝文。内外面共貫入。	SX03 3·4層	18C前～中
〃	93	〃	小坏？	6.0	—	(2.0)	体部は内弯する	素地は精緻、乳白色。焼成良好。透明釉。外面に竹葉文。	SX03 1層	
〃	94	〃	碗	10.0	—	(2.9)	体部は丸味をもつ	素地は精緻。焼成良好。乳白色帯びた透明釉。外面絵柄は梅花文。	SX03 2層	18C前～中
〃	95	〃	小碗	9.0	3.3	5.6	体部は丸味をもつ。高台は細く尖る	素地は精緻、淡灰色。焼成良好。灰色を帯びた透明釉。外面に草花文。圏線は体部下位に3条。	SX03 1層	〃
〃	96	〃	碗	10.0	4.2	5.1	体部は半球形。高台は細い	素地は精緻、灰色。焼成良好。透明釉。外面に草花文。	〃	18C前半 №90と同一

挿図番号	遺物番号	種類	器種	法量(cm) 口径	底径(高台径)	器高 ( )は現存高	形態の特徴	文様・施釉・色調・素地等	出土遺構	備考
62	97	染付	碗	11.0	—	(4.3)	体部は半球形	素地は精緻。灰色帯びた透明釉。外面に草花文。	SX03 6層	18C前～中
〃	98	陶器	〃	12.5	4.2	6.65	体部は丸味をもち、口縁部わずかに外反する	素地は精緻、淡茶色。焼成良好。黄土色釉。高台は露胎。外面に草花文。	SX03 5層	京焼風又は肥前 18C前 1層出土と接合
〃	99	染付	〃	—	4.9	(2.7)	底部片、体部は丸味をもつ	素地は精緻、淡灰色。焼成良好。透明釉。釉ハギ。圏線は体部下位に3条で暗灰色。	SX03 2層	
〃	100	〃	〃	9.9	3.8	5.5	体部は丸味をもつ	素地は精緻、白色。焼成良好。淡灰色を帯びた透明釉。外面に網目文。	SX03 5層	1670～1690年
〃	101	〃	〃	10.0	—	(4.4)	体部は丸味をもつ	素地は精緻。焼成良好。淡灰色。透明釉。内外面共に網目文。	SX03 4層	18C中葉 №100と同一
〃	102	〃	蓋	4.3	—	2.1	八角形で、中央部に把手をもつ	素地は精緻、茶色帯びた白色。焼成良好。透明釉、外面に呉須文様。	〃	1690～1700年初
〃	103	陶器	小碗	—	3.4	(2.7)	体部は丸く、腰がある	素地は精緻。焼成良好。淡茶灰色を帯びた透明釉。	SX03 3層	京焼
〃	104	〃	碗	—	3.4	(2.0)	高台は低い。コの字形。体部は丸味をもつ	素地は精緻。クリーム色。焼成良好。黄茶色帯びた透明釉。	SX03 1層	〃
〃	105	白磁	猪口	—	5.6	(2.6)	桶形の器形 高台低い	素地は精緻。焼成良好。白色帯びた透明釉。	SX03 3層	伊万里系 18C前半～中葉
〃	106	〃	碗	2.4	1.0	1.2	ミニチュアの碗、体部半球形	素地精緻。青色帯びた透明釉。焼成良好。	SX03 4層	〃
〃	107	〃	〃	11.0	—	(3.9)	端反り口縁、端部波状	素地は精緻、白色。焼成良好。灰色帯びた白色釉。内面は型紙摺りの文様。	SX03 1層	伊万里 18C前半
〃	108	〃	〃	14.0	—	(5.4)	体部は丸味をもつ	素地は精緻、乳白色。焼成良好。透明釉。	〃	伊万里
〃	109	陶器	〃	10.9	5.2	5.1	体部は丸味があり、腰が張る	素地精緻、灰白色。焼成良好。天目釉、暗茶緑色。	SX03 3層	小石原 18C前
〃	110	瓦質土器	火舎	14.0	10.4	9.5	体部は桶形、3脚が付く。内面指頭圧痕、ケズリ	胎土に砂粒少ない。焼成良好。外面に円文。外面は黒色研磨。	SX03 6層	
〃	111	〃	〃	—	15.6	(4.2)	3脚付き 内底はヨコナデ	胎土は淡茶褐色と淡灰青色。焼成軟。外面は黒色研磨。	SX03 4層	
〃	112	〃	〃	—	17.0	5.1	脚数不明。内面はヨコナデ、指頭圧痕	胎土は精緻。焼成良好。暗灰青色。外面は黒色研磨。	〃	
63	113	土師質土器	焙烙	23.0	—	6.3	口縁部に外耳が1対。穿孔は2つ。丸底。	胎土は精緻。焼成良好。淡茶褐色。	SX03 1·3·6層	
〃	114	〃	蓋	9.0	—	1.65	焼塩壺の蓋で、内面に布目痕。天井部平坦	胎土は精緻。焼成良好。明橙色。	SX03 1層	
〃	115	〃	〃	—	—	—	焼塩壺の蓋で、天井部平坦、内面に布目痕	胎土に細砂粒含み、焼成良好。明褐色。	SX03 6層	
〃	116	〃	〃	—	—	—	口縁部は肥厚し、下方へつまみ出す。外面はハケ後ナデ	胎土に砂粒含み、焼成良好。淡褐色。	SX03 4層	
〃	117	〃	〃	—	—	—	口縁部は肥厚し、下方へつまみ出す。内外面ヨコナデ	胎土に2～3㎜の砂粒を含み、焼成良好。緑色の付着物。	SX03 3層	
〃	118	陶器	摺鉢	—	—	—	口縁部外反。外面に三角突帯。内面に7本単位の下し目	素地は精緻。焼成良好。外面小豆色。暗茶色の釉で、内面緑茶色。釉ダレ。	SX03 5層	唐津系 17C後
〃	119	〃	〃	—	—	—	体部片。内面に10本単位の下し目	素地は黄土色と茶褐色。茶色釉。	SX03 3層	唐津系
〃	120	〃	壺	—	—	—	口縁部は玉縁で、内傾する。	素地は精緻で、暗灰褐色。焼成良好。暗茶色釉。	SX03 6·7層	中国もしくは国産
〃	121	〃	摺鉢	—	—	—	胴部片。内面に7本以上の下し目	素地は精緻、暗茶褐色。焼成良好。内外面暗小豆色。	SX03 3層	唐津系
〃	122	土師質土器	七輪	28.0	—	(12.8)	体部は筒形で、壁は2重構造。内面上位に鍋受け突起、ヨコ方向カキ目。内面に煤付着	素地に砂粒含み、焼成良好。淡茶褐色。	SX03 裏込め	素焼き
67	161	土師器	皿	—	7.0	(1.3)	糸切り底、板状圧痕	胎土に砂粒含み、焼成良好。内面は茶褐色。外面は明茶褐色。	SX04	
〃	162	〃	〃	5.8	—	1.3	糸切り底	胎土は粗い。焼成軟。明茶褐色。	〃	
〃	163	〃	〃	5.8	4.2	2.0	糸切り底	胎土に砂粒含み、焼成軟。淡茶灰色。	〃	
〃	164	〃	〃	6.8	—	1.8	糸切り底	胎土に砂粒含み、焼成良好。淡茶色。	〃	

挿図番号	遺物番号	種類	器種	法量（cm） 口径	底径（高台径）	器高（ ）は現存高	形態の特徴	文様・施釉・色調・素地等	出土遺構	備考
67	165	土師器	坏	7.8	5.6	1.5	糸切り底	胎土に砂粒含み、焼成軟。茶褐色。	SX04	
〃	166	陶器	碗	—	4.2	(2.6)	体部下位ケズリ、体部は丸い、高台は内傾	素地は濃灰色、精緻。焼成良好。内面は暗茶黄色、外面は暗緑色釉。鉄釉。	〃	唐津焼
〃	167	青磁	壺	—	10.0	(4.7)	脚部片、裾端部は内弯、外面に1条の突帯	素地に黒い微粒子含み、精緻。灰白色。焼成良好。緑青色の透明釉。内面は露胎。	SX04 ベルト	中国 明前半
〃	168	〃	碗	16.0	—	(2.3)	口縁部は外反、二次火を受ける	素地は精緻。茶褐色。暗灰緑色釉。外面にヘラ描き条痕文。	〃	舶載青磁 同安窯系
〃	169	染付	小碗	—	—	—	口縁部片 器壁は薄い	素地は白色、精緻。焼成軟。青色帯びた透明釉。	〃	中国 明末
〃	170	陶器	摺鉢	20.8	—	(4.2)	口縁部の上端を上につまみ出す。内面の下し目は8本以上の単位	素地に大粒の砂含み、焼成良好。内面は小豆色。外面は明小豆色。	SX04	備前焼Ⅳ期
〃	171	〃	瓶	—	8.2	(7.1)	平底、体部は筒形、底部器壁が薄い	素地は灰色砂粒を含み、焼成良好。内面は小豆色、体部外面は暗い小豆色。自然釉。	〃	備前焼
〃	172	瓦質土器	摺鉢	24.0	—	—	口縁端部、内側を肥厚させる	胎土は淡茶灰色。大粒の砂含み、焼成軟。濃灰色。	〃	大内系
〃	173	〃	湯釜	—	—	—	胴部片、外面にヨコハケ	胎土はやや粗い。焼成良好。内面は淡茶灰色、外面は黒色研磨。外面に菊花文のスタンプ。	〃	
〃	174	陶器	甕	—	—	—	外面の突帯には刻目がある	素地に砂粒を含み、焼成良好。内面は暗小豆色、外面は暗灰色。	〃	筑前産 17C前
69	179	土師器	皿	7.0	5.0	1.3	糸切り底	胎土に1～2㎜前後の砂含み、焼成良好。明茶褐色。	SX07	
〃	180	〃	〃	7.0	5.6	1.45	糸切り底	胎土に1㎜前後の砂多い。焼成良好。暗茶色。	〃	
〃	181	〃	坏	14.6	—	(2.7)	体部は直線的に開く	胎土1～2㎜の砂含み、焼成良好。淡灰黄色。	〃	
〃	182	染付	猪口	8.0	6.0	5.95	体部は桶形、口縁端部は輪花状	素地は白灰色砂を含み、硬い。焼成良好。透明釉。外面の絵柄は松竹文。	〃	
〃	183	陶器	皿	8.2	4.6	2.0	体部は丸味をもち、高台は低い	素地は白黄色砂粒を含み、焼成良好。緑色透明釉。高台内は釉ハギ、外底部輪状目痕。	〃	瀬戸・美濃系
〃	184	〃	〃	—	3.4	(0.9)	碁笥底	素地は淡灰褐色、細砂粒を含む。焼成良好。見込みと体部外面に圏線。白灰色釉、貫入。	〃	明 16C前～後
〃	185	青磁	碗	—	—	—	体部は内弯	素地は灰色、砂を含む。焼成良好。薄緑色釉。圏線は内面に1条。外面に線彫り蓮弁文。	〃	明
〃	186	須恵質土器	瓶	—	—	—	平底、内面指頭圧痕、外面ヨコナデ、器壁が薄い	素地は茶色と黒色。砂粒を含み、硬い。内外面は灰青色。	〃	朝鮮
〃	187	陶器	皿	—	7.4	(2.9)	高台は低い。胎土目は見込み、畳付に9個ずつ。	素地は白色で、1～2㎜の砂含む。焼成良好。白色透明釉。	〃	初期唐津
〃	188	〃	片口	—	—	—	口縁部は如意形に外反	素地は緑茶色、砂を含む。焼成良好。透明釉。体部下位は露胎。	〃	唐津焼
〃	189	〃	大皿	12.4	—	(3.0)	溝縁口縁	素地は灰色、砂を含む。焼成良好。灰白緑色釉。口縁部は茶褐色。	〃	唐津焼 17C前
〃	190	土師質土器	鍋	—	—	—	口縁部は肥厚させ平坦面を作る。平坦面に穴、内面ヨコハケ。外面に煤付着。	胎土に1㎜前後の砂含み、焼成良好。赤味をもった茶褐色。	〃	
〃	191	瓦質土器	火舎	—	—	—	胴部片	胎土に2㎜前後の砂粒多い。焼成良好。黒灰色。外面に菊花文のスタンプ、黒色研磨。	〃	
〃	192	〃	〃	—	—	—	胴部片	胎土は灰色、砂粒を含む。焼成良好。外面は黒色研磨。外面に花文のスタンプ。	〃	
〃	193	陶器	摺鉢	—	—	—	胴部片。内面の下し目は9本単位	素地は灰色、1㎜前後の砂粒を含む。焼成良好。内面は明茶褐色、外面は暗茶灰褐色。	〃	備前焼
〃	194	〃	〃	—	—	—	胴部片。内面の下し目は11本単位。器壁が薄い	素地は精緻、淡赤褐色。砂粒を含み、焼成良好、堅緻。内外面は茶褐色。	〃	肥前系
〃	195	瓦質土器	〃	—	—	—	内面ヨコハケ、外面タテハケ。下し目は5本以上	胎土に灰色砂を含む。焼成良好、硬い。灰色。	〃	
〃	196	陶器	〃	—	—	—	胴部片。内面の下し目の密度は高い	素地はレンガ色、砂粒を含む。焼成良好。内面は赤茶色、外面は暗赤茶色。	〃	唐津焼
70	199	土師質土器	〃	—	—	—	口縁部は肥厚、体部外面はタテハケ、内面はナナメハケ、下し目は2本以上	胎土に2～3㎜の長石を含み、焼成良好。茶褐色。	SX10	
〃	200	土師器	皿	7.6	5.0	1.6	糸切り底	胎土に砂粒を含み、焼成良好。内面は茶褐色、外面は暗茶色。	SX11	

挿図番号	遺物番号	種類	器種	法量（cm） 口径	底径（高台径）	器高（ ）は現存高	形態の特徴	文様・施釉・色調・素地等	出土遺構	備考
70	201	土師器	皿	7.2	5.0	1.3	糸切り底	胎土に大粒の砂含み、焼成軟。内面は明茶褐色、外面は暗茶色。	SX11	
〃	202	〃	〃	7.8	5.0	1.6	糸切り底	胎土に砂粒含み、焼成良好。茶褐色。	〃	
〃	203	〃	坏	—	6.8	(0.7)	糸切り底	胎土に砂粒少なく、焼成良好。内面は茶褐色、外面は褐茶色。	〃	
〃	204	〃	〃	—	7.4	(0.7)	糸切り底、板状圧痕	胎土に砂粒含み、焼成良好。内面は明茶色、外面は茶褐色。	〃	
〃	205	〃	〃	12.4	8.0	2.6	糸切り底	胎土に大粒の砂含み、焼成良好。茶褐色。	〃	
〃	206	〃	〃	12.0	8.0	2.6	糸切り底	胎土に大粒の砂含み、焼成良好。内面は明茶色、外面は明茶色。	〃	
〃	207	染付	碗	—	—	—	口縁部片、器壁が薄い	素地は白色、精緻。淡灰青色を帯びた透明釉。	〃	明末
〃	208	瓦質土器	摺鉢	—	—	—	口縁部は肥厚。外面指頭圧痕、内面はヨコハケ、下し目は7本以上	胎土に砂粒含み、淡灰茶色。焼成良好。内外面は濃灰色。	〃	
〃	209	陶器	〃	33.8	—	(5.2)	口縁端部をつまみ出して直口させる	素地に砂粒含み、焼成良好。小豆色。	〃	備前焼Ⅴ期
〃	210	瓦質土器	捏鉢	—	13.4	(7.3)	上げ底。内面ヨコハケ、外面に指頭圧痕。	胎土に2㎜前後の砂粒含み、焼成良好。淡茶灰色。	SX14	
71	214	土師器	皿	6.8	5.4	1.1	糸切り底	胎土に砂粒を含み、精緻。焼成良好。淡灰褐色。	SX16 内側内	
〃	215	〃	〃	7.0	4.0	1.4	糸切り底、口縁端部に煤付着	胎土に砂粒含み、焼成良好。淡灰黄色。	〃	
〃	216	〃	〃	9.0	7.0	1.75	糸切り底	胎土に砂粒を含み、焼成良好。淡灰褐色。	SX16 掘り方	
〃	217	〃	坏	10.4	7.0	2.8	糸切り底、板状圧痕	胎土に砂粒を含み、焼成良好。淡灰黄色。	SX16 内側内	
〃	218	〃	〃	11.0	7.2	2.3	糸切り底	胎土に細砂粒を含み、焼成良好。淡灰褐色。	〃	
〃	219	〃	〃	13.8	10.0	2.4	糸切り底、板状圧痕	胎土に細砂粒を含み、焼成良好。灰茶色。	SX16 掘り方	
〃	220	白磁	皿	—	5.2	(1.3)	高台は細く尖る。煤付着	素地は白色、砂粒を含む。白色、透明釉。見込みは釉ハギ、貫入。	SX16	明末
〃	221	〃	小碗	—	3.8	(2.1)	高台は高く、細い。畳付に砂目	素地は白色、精緻。淡青色を帯びた透明釉。	SX16 内側内	
〃	222	青磁	碗	—	4.0	(1.6)	高台は細く尖る	素地は白灰色、砂粒少ない。淡緑灰色釉。体部下位に釉ダレ。	SX16	
〃	223	〃	〃	—	—	—	端反り口縁、先端は尖る	素地は灰色に、砂粒を含む。焼成良好。内外面共に象嵌。緑灰色釉。	SX16 内側内	高麗
〃	224	染付	皿	11.2	5.3	2.6	碁笥底。口縁部やや内傾、体部は丸味をもつ	素地は白灰色、精緻。透明釉。圏線は体部下位に1条、口縁部内面1条、見込み1条。外面に芭蕉文。	SX16 掘り方	明
〃	225	白磁	〃	—	13.0	(1.3)	口縁に輪花。体部は直線的に開く	素地は白色、精緻。透明釉。内面は型刷り陽刻の波状文。	SX16	肥前
〃	226	〃	碗	10.0	—	(4.0)	体部は丸味をもつ 器壁薄い	素地は白色、砂粒少なく精緻。透明釉。	SX16 内側内	17C後～18C初
〃	227	陶器	皿	11.4	—	(2.5)	口縁部は内弯気味に外反	素地は淡灰黄色。砂粒を含み、焼成良好。淡灰色釉。白化粧土。	SX16	唐津焼
〃	228	〃	小碗	10.0	5.6	3.8	高台内を斜めに削る。断面は鋭三角形	素地は灰白色、砂粒を含む。焼成良好。淡灰緑色釉、貫入。磁器手。	SX16 内側内	筑前産 18C前
〃	229	〃	皿	—	5.0	(3.6)	高台撥状。体部は丸味をもつ。見込み砂目	素地は淡黄灰色。砂粒多い。透明釉。	〃	唐津焼 慶長～元和
〃	230	〃	〃	—	4.6	(0.9)	高台は低い。コの字形	素地は灰茶色、砂粒を含む。焼成良好。透明釉。内面に鉄絵。	〃	唐津焼 16C末～17C初
〃	231	〃	〃	—	—	—	溝縁口縁	素地は灰色、精緻。灰緑色釉。	〃	唐津焼 1630年
〃	232	〃	〃	—	—	—	溝縁口縁	素地は灰白色、微砂を含む。淡緑色を帯びた透明釉。	〃	唐津焼 1600～1630年
〃	233	〃	〃	—	—	—	口縁部内側に段をもつ。	素地は茶褐色、砂粒を含む。淡灰色釉。	〃	唐津焼
〃	234	〃	片口	—	—	—	口縁部は玉縁状	素地は茶褐色、微砂を含む。暗緑茶色釉。	〃	肥前 17C後～18C

挿図番号	遺物番号	種類	器種	法量（cm） 口径	底径（高台径）	器高（ ）は現存高	形態の特徴	文様・施釉・色調・素地等	出土遺構	備考
71	235	染付	碗	—	5.0	(2.0)	饅頭芯の底部。体部内弯	素地は白色、砂粒を含む。淡灰色を帯びた透明釉。外面に貫入。圏線は体部下位に1条、高台外面に2条。	SX16	1690年～18C初
〃	236	〃	〃	10.8	4.8	5.1	高台は断面が三角形。体部の腰は強い。	素地は白色、砂粒を含む。淡緑白色を帯びた透明釉。高台脇2条、体部下位1条、口縁部外面に1条の圏線。外面に蝶文。	SX16内側内	1650～1660年
〃	237	陶器	〃	11.8	—	(3.2)	口縁部は内弯気味に外反	素地は灰色、精緻。天目釉。口縁端部は濃茶色。	SX16	瀬戸・美濃系
〃	238	〃	皿	—	5.0	(1.4)	高台は細い	素地は灰色、砂粒少なく精緻。暗茶褐色釉。白色化粧土の刷毛目。	SX16内側内	肥前　18C前
〃	239	〃	鉢	—	—	—	口縁部は外反し、端部は肥厚	素地は茶褐色、砂粒を含む。焼成良好。灰褐色釉。白化粧土の刷毛目文。	〃	唐津　17C末～18C中
〃	240	〃	瓶	—	7.4	(7.0)	鶴首、平底。内面に同心円の叩き痕	素地は灰色、微砂粒含む。藁灰。淡灰白色と暗緑色釉。下位は露胎。外底部に付着物。	〃	朝鮮唐津　慶長～1620年
〃	241	〃	壺	10.0	—	(3.6)	口縁端部は小さく外反、肩が張る	素地は暗茶褐色、砂粒多い。暗茶褐色釉。	〃	中国
72	242	土師質土器	鉢	—	—	—	口縁端部は若干肥厚。内面ヨコハケ	胎土に砂粒多い。焼成良好。淡灰褐色。	SX16掘り方	
〃	243	瓦質土器	摺鉢	—	—	—	胴部片。内面ヨコハケ、下し目は7本以上	胎土に砂粒含み、淡灰色。焼成良好。外面は暗灰色。	〃	
〃	244	土師質土器	鉢	—	—	—	口縁端部は若干肥厚。内面ヨコハケ	胎土に2～3㎜の砂粒多い。焼成良好。淡灰黄色。	〃	
〃	245	〃	〃	—	—	—	口縁端部は内側に肥厚。内面ヨコハケ	胎土に砂粒多く、焼成良好。淡茶褐色。	〃	
〃	246	瓦質土器	火舎	—	—	—	脚付。体部は鉢形に開く、内面はヨコハケ	胎土に微砂多く、焼成良好。黒灰色。外面は黒色研磨。	〃	
〃	247	土師質土器	鍋	—	—	—	くの字形口縁部で、端部をつまみ出す。外面に煤付着	胎土は3㎜前後の砂粒を含み、焼成良好。淡灰褐色。	SX16内側内	
〃	248	須恵質土器	鉢	—	—	—	口縁部は玉縁状	胎土に砂粒多い。焼成良好。内面は灰色、外面は暗灰色。	SX16掘り方	東播系
〃	249	陶器	摺鉢	—	—	—	やや上げ底、底部は薄い。内面の下し目は櫛状で、9本以上の単位	素地は暗灰色、微砂を含む。外面は小豆色。	SX16内側内	備前焼
〃	250	〃	鉢	—	—	—	L字形口縁	素地は茶褐色、微砂を含む。外面に黄茶色と淡青色の二彩の文様。	〃	唐津焼　17C後～18C前
〃	251	〃	甕	—	—	—	逆L字形口縁。平坦面に貝目痕、肩が張る	素地は暗茶灰色、微砂を含む。精緻。暗緑色釉。	〃	筑前産　17C初
〃	252	〃	摺鉢	24.6	—	(5.1)	口縁端部をつまみ出して直立させる。内面の下し目は7本単位	素地は砂粒を含み、暗小豆色。表面は暗茶褐色。	〃	備前焼Ⅳ期
〃	253	〃	〃	—	—	—	口縁部を肥厚し、外面に2条の沈線、内面はヨコナデ、下し目は4本以上	素地は砂粒を含み、淡褐色。表面は茶褐色。	SX16掘り方	高取系
〃	254	〃	〃	37.4	—	(5.2)	口縁部は内側につまみ出し三角突帯状。内面の下し目は3本以上	素地は茶褐色、細砂粒を含む。口縁部は暗茶色。体部は茶褐色。	SX16内側内	唐津焼　17C
74	258	土師器	皿	7.5	6.2	1.2	糸切り底	胎土は精緻。焼成良好。薄茶色。	SX18	
〃	259	〃	坏	15.0	10.0	2.1	糸切り底	胎土は粗い。焼成良好。淡褐色。	〃	
〃	260	〃	〃	12.0	—	(2.2)	底部を欠く	胎土は砂粒少なく、精緻、茶褐色。焼成良好。	SX19	
〃	261	〃	〃	—	10.0	(1.3)	糸切り底、板状圧痕	胎土に砂粒少ない。焼成良好。淡茶灰色。	〃	
〃	262	須恵器	蓋	—	—	—	口縁端部下位をつまみ出す。	胎土は精緻。焼成良好。灰色。	〃	
〃	263	青磁	碗	—	4.6	(2.3)	高台は撥状。体部は直線的に開く。	素地は精緻、淡灰色。焼成良好。灰緑色の透明釉。内面は櫛描文、列点文。外面は櫛描文。	〃	同安窯系
〃	264	〃	瓶	5.8	—	3.4	玉縁状口縁、頸部は筒状	素地は精緻、灰色。青味を帯びた緑灰色釉。	〃	
〃	265	瓦質土器	角火鉢	—	—	—	口縁部直口、肥厚する。内面指頭圧痕、タテハケ	胎土に大粒の砂を含み、濃灰茶色。焼成軟。口縁部外面に四方襷文スタンプ。	〃	
〃	266	〃	摺鉢	—	—	—	胴部片。内面にヨコハケ。下し目は5本単位	胎土は粗い。焼成良好。淡茶灰色。	〃	

挿図番号	遺物番号	種類	器種	法量（cm） 口径	底径（高台径）	器高（ ）は現存高	形態の特徴	文様・施釉・色調・素地等	出土遺構	備考
74	267	瓦質土器	捏鉢	—	—	—	口縁部を肥厚、内面ヨコハケ	胎土は粗い。焼成良好。暗灰色。	SX19	
〃	268	〃	火舎	—	—	—	口縁部片	胎土は精緻。焼成良好。暗灰色。外面は黒色研磨。外面に菊花文のスタンプ。	〃	
〃	272	染付	碗	—	4.0	(3.2)	体部は丸味をもつ。高台は細い、畳付に砂目跡	素地は精緻、白色。白色釉。圏線は高台2条、体部下位1条、高台内1条。外面に文様。	SX20	肥前 1690年～18C前
〃	273	陶器	摺鉢	—	—	—	Y字型口縁、外面を肥厚させ、2条の沈線を施す。内面の下し目は7本単位	素地は茶褐色、砂粒含む。口縁部に濃茶色釉。	〃	小石原か 17C末～18C前
75	274	土師器	皿	6.6	4.8	0.9	糸切り底	胎土に砂粒多く、焼成良好。淡茶褐色。	SX21	
〃	275	白磁	小碗	—	2.3	(1.7)	体部は丸味をもつ。高台は細く高い。	素地は精緻、白色。焼成良好。青味を帯びた透明釉。	〃	18C後～19C初
〃	276	染付	〃	6.8	2.6	2.4	体部は半球形、高台は細い、畳付砂目	素地は白茶色、透明釉。外面に文様。	〃	肥前 18C
〃	277	陶器	碗	9.0	5.4	2.6	高台脇ケズリ。体部は内弯気味	素地は精緻、淡黄白色。茶色帯びた透明釉。内外面に貫入。	〃	関西系 18C中～末
〃	278	染付	〃	—	3.4	(3.0)	高台は細く、高い。体部は丸味をもつ	素地は白色で、精緻。青色を帯びた透明釉。内底・外面に絵柄。圏線は高台2条、体部下位1条、見込みに2条。	〃	肥前 19C前～幕末
〃	279	〃	皿	11.1	6.5	2.4	高台は細い。体部は直線的に開く。口縁部輪花	素地は精緻、白色。透明釉。内面に絵柄。	〃	肥前 19C初～幕末
〃	280	〃	碗	10.2	4.0	5.7	高台は外傾。口縁部は端反り気味。腰が張る。	素地に細砂粒を含み、白色。青色帯びた透明釉。圏線は見込みに1条、内面2条、外面に松竹葉文（型刷）。	〃	肥前 1820年～幕末
〃	281	〃	蓋	4.8	—	1.3	天井部は丸味をもつ。薬合子の蓋	素地は精緻で、白色。透明釉を全面塗布。天井部外面に花文。	〃	肥前 19C初～幕末
〃	282	〃	〃	9.0	—	(2.7)	口縁部の内側にかえし。つまみは球形状、土瓶の蓋	素地は灰色、精緻。外面は灰緑色を帯びた透明釉。貫入。内面は露胎。	〃	関西系 19C末～幕末
〃	283	〃	瓶	7.8	—	(1.2)	口縁部片、端部は肥厚	素地は粗い。暗灰色。緑茶色の透明釉。	〃	筑前 18C
〃	284	陶器	摺鉢	37.6	—	(10.3)	口縁部は玉縁状に肥厚。片口。9本単位の下し目	素地に砂粒多い。焼成良好。暗小豆色。	〃	筑前、又は唐津 19C代
〃	285	〃	水甕	—	—	—	口縁部はL字形、体部は直線的に開く	素地に2㎜前後の砂粒多い。焼成良好。茶褐色。口縁部外面のみ緑茶色釉。	〃	国産
76	287	染付	皿	—	6.5	(1.5)	高台は低く、丸味をもつ	素地は白色、精緻。透明釉。内面を分割し、草花文を描く。	SX30	肥前 18C中頃か
〃	288	陶器	〃	—	5.8	(1.5)	高台は低く、体部は丸味をもつ。畳付砂目	素地は灰色、精緻。灰色を帯びた透明釉。	〃	唐津焼 18C前～中
〃	289	染付	〃	—	4.8	(1.0)	外底を削り込み、碁笥底状にする	素地は精緻で、茶色を帯びた乳白色。青色を帯びた透明釉。内底に草花文。見込みに圏線1条。	〃	初期の有田 1630～1640年
〃	290	青磁	角皿	—	—	—	体部はやや丸味をもつ。高台は尖る。畳付に砂目	素地は白色、精緻。灰色を帯びた緑色釉。	〃	有田 1660～1670年
〃	291	陶器	甕	—	—	—	内外面に格子目叩き、外面はナデ消し	素地に砂粒含み、精緻。内外面は小豆色～暗小豆色。	〃	唐津焼
〃	292	土師質土器	七輪	—	13.0	10.3	外面指頭圧痕、内面はヨコ方向のカキ目、底受けの突帯1条	素地に大粒の砂粒含む。茶褐色。	〃	素焼き
77	296	青磁	碗	16.6	6.8	7.4	完形品。口縁部は外反気味、高台は断面コの字形	素地は灰白色、精緻。暗緑灰色釉。見込み「金玉満堂」の刻印。	SX31	龍泉窯系 I－1類
79	297	土師器	坏	—	7.4	(0.9)	糸切り底、板状圧痕	胎土は精緻。焼成良好。淡灰褐色。茶色の付着物。	SX32	
〃	298	〃	〃	—	8.2	(1.5)	糸切り底、板状圧痕	胎土に細砂粒多い。淡灰褐色。	〃	
〃	299	瓦質土器	火舎	19.2	14.6	7.9	口縁部の内側を肥厚させ平坦面。脚付、内面ヘラケズリ	胎土は淡灰黄色。砂粒多い。焼成良好。外面は暗灰色、研磨。	〃	
〃	300	青磁	碗	—	—	—	口縁部は外反	素地は灰白色。焼成良好。暗緑灰色釉。口縁部内面に2条の線彫。	〃	龍泉窯系
〃	301	土師質土器	捏鉢	—	—	—	口縁部片。端部をつまみ出す、内面ヨコナデ	胎土に大粒の砂含み、明茶褐色。焼成良好。	〃	
〃	302	瓦質土器	摺鉢	—	—	—	口縁部片、若干肥厚、内面ヨコハケ。下し目は6本以上	胎土は暗灰色。細砂粒多い。焼成良好。内外面は淡灰褐色。	〃	
〃	303	陶器	甕	—	—	—	N字状口縁	素地に3㎜前後の砂粒多い。暗灰褐色。外面は暗茶褐色、内面は茶褐色。	〃	常滑焼

Tab. 2　第68次調査遺物一覧表 ④　その他の出土遺物

挿図番号	遺物番号	種類	器種	法量(cm) 口径	底径(高台径)	器高( )は現存高	形態の特徴	文様・施釉・色調・素地等	出土遺構	備考
82	304	白磁	碗	—	6.0	(2.6)	高台は内傾、体部は直線的に開く	素地は淡灰白色。焼成良好。透明釉。	A·BT	
〃	305	土師器	皿	7.8	6.2	1.3	糸切り底、板状圧痕	胎土に砂粒を含む。表面に鉄分付着。灰褐色。	〃	
〃	307	瓦質土器	鉢	—	—	—	口縁端部は丸味をもつ。内面ヨコハケ、外面タテハケ	胎土に砂粒を含み、暗灰色。焼成良好。	AT	SX32石積遺構
〃	308	〃	〃	—	—	—	口縁部は肥厚、端部丸い、内面ヨコハケ	胎土に細砂を含み、淡灰黄色。焼成良好。	〃	
〃	309	土師器	皿	9.2	7.0	1.1	糸切り底、板状圧痕	胎土に砂粒を含み、焼成良好。暗茶灰色。	BT	最下部鉄分含有層
〃	310	瓦器	〃	11.0	—	(2.5)	体部は内弯、口縁端部は丸い	胎土は精緻。淡灰色。焼成良好。内外面は暗灰色。	〃	
〃	311	土師器	坏	12.8	8.0	2.5	糸切り底	胎土は灰褐色。焼成良好。	〃	
〃	312	青磁	碗	—	(5.0)	(2.6)	底部器壁が厚い、内底見込みに沈線	素地は灰白色。焼成良好。淡青緑色釉。外面に櫛描文。	〃	同安窯系 上層Ⅳ期砂層
〃	313	土師質土器	鍋	29.4	—	(10.4)	口縁部は内弯気味に外反、端部つまみ出し、外面下位ヨコハケ、内面ヨコハケ。体部外面に煤付着	胎土は淡灰黄色。焼成良好。	〃	
〃	314	青磁	皿	9.4	4.0	2.1	腰部は強い屈折	素地は灰白色、精緻。暗灰緑色釉は体部中位まで。	CT	龍泉窯系
〃	315	〃	碗	—	—	—	体部は丸味をもつ	素地は灰白色、焼成良好。淡緑灰色釉。内底に釉ハギ。内外面に櫛描文。	〃	同安窯系
〃	316	〃	〃	—	6.2	(3.0)	体部は丸味をもつ	素地は淡灰色。淡緑灰色釉。内外面に櫛描文。	〃	同安窯系 Ⅳ期砂層
〃	317	瓦質土器	鉢	—	—	—	口縁部肥厚	胎土に砂粒含み、粗い。焼成軟。	〃	最下部層
〃	318	土師器	坏	14.8	10.0	2.4	糸切り底	胎土は精緻、淡茶褐色。	〃	Ⅳ期砂層
〃	319	〃	〃	17.4	6.0	2.6	糸切り底、板状圧痕	胎土に細砂含み、焼成良好。灰褐色。	〃	上層
〃	320	瓦器	碗	—	—	—	器壁は薄い、体部は丸味をもつ、内面ヘラ研磨、外面は指頭圧痕	胎土に細砂含み、淡灰黄色。内面は黒褐色、外面は暗灰黄色。	〃	最下部層
〃	321	須恵器	高坏	—	—	—	脚部片	胎土に砂粒含み、焼成軟。内面は灰色、外面は濃灰色。	〃	〃
〃	322	〃	蓋	—	—	—	口縁片	胎土に砂粒含み、黒灰色。焼成良好。	〃	Ⅳ期砂層
83	323	土師器	皿	8.0	6.4	0.9	糸切り底、板状圧痕	胎土に砂粒を含み、焼成良好。淡黄褐色。畳付の一部は茶褐色。	〃	〃
〃	324	〃	坏	12.4	8.0	2.3	糸切り底、板状圧痕	胎土は精緻。焼成良好。茶灰色。	〃	
〃	325	青磁	碗	15.8	—	(3.5)	口縁部は外反気味	素地は精緻。焼成良好。淡灰色。灰黄茶色釉。外面に櫛描文、内面に片切彫りと櫛描文。	〃	同安窯系
〃	326	〃	〃	—	(4.4)	(3.4)	体部は丸味をもち、開く	素地は精緻、淡黄土色。焼成良好。オリーブ色釉。外面に櫛描文、内面に片切彫文。	〃	〃
〃	327	白磁	〃	14.8	—	(5.3)	口縁部外反。口禿	素地に砂粒を含み、明灰色。青味をもった灰色釉。	〃	Ⅸ類
〃	328	青磁	〃	—	(4.5)	(2.1)	高台は低く、コの字形	素地は精緻、淡灰色。焼成良好。淡緑灰色釉。畳付は釉ハギ。外面は縞蓮弁文。	〃	龍泉窯系
〃	329	〃	〃	16.0	—	(5.5)	口縁部は外反	素地は灰色、砂粒少ない。暗緑灰色釉。外面に縞蓮弁文。縞が高い。	〃	〃
〃	330	白磁	〃	—	(6.0)	(3.2)	高台は高い。体部はやや内弯	素地に砂粒を含み、白灰色。焼成良好。灰色釉。	〃	Ⅶ類
〃	331	瓦質土器	壺	—	—	—	口縁部片で、頸部は短い外面にタテハケ	胎土は精緻。焼成良好。黒色	〃	
〃	332	炻器	甕	—	13.4	(4.4)	器壁は厚い、平底	素地に砂粒を含み、焼成良好。外面は暗茶褐色、内面は暗灰茶褐色。	〃	備前焼
〃	335	土師質土器	羽釜	33.8	—	(6.4)	体部は内傾し、外面に鍔が付く	胎土に砂粒多い。焼成良好。体部外面は淡茶褐色、内面は淡黄褐色。	〃	畿内産
84	1	陶器	皿	—	—	—	口縁部は外反	素地精緻、淡灰褐色。焼成良好。淡緑灰色釉。	Pit02	唐津焼
〃	2	〃	碗	—	5.8	(3.3)	高台は内傾、底部の器壁厚い	素地に砂粒を含み、暗灰茶褐色。	〃	〃
〃	3	〃	〃	12.0	4.6	6.1	高台は撥状。体部は内弯気味に開く	素地は淡灰色。焼成良好。飴色釉。黒釉。	〃	小石原　17C末～18C中
〃	4	〃	〃	7.4	—	(6.3)	蓋物の身。半筒碗形	素地は灰白色。焼成良好。暗灰褐色釉。体部外面には草花文。	〃	絵唐津

挿図番号	遺物番号	種類	器種	法量（cm） 口径	底径（高台径）	器高（ ）は現存高	形態の特徴	文様・施釉・色調・素地等	出土遺構	備考
84	5	陶器	鉢	28.4	—	(7.7)	体部内弯気味に開く、口縁部外反	素地に砂粒を含み、茶褐色。外面は暗茶褐色釉。内面は刷毛目、緑色・飴色の二彩。	Pit02	二彩唐津 17C後～18C中
〃	6	白磁	碗	—	(4.9)	(1.6)	高台は断面コの字形	素地は灰白色。焼成良好。暗淡緑灰色釉。見込みに櫛描文。	Pit04	舶載
85	1	土師器	皿	6.2	4.4	1.3	糸切り底	胎土に砂粒を含み、焼成良好。明茶褐色。	遺構面	
〃	2	〃	〃	7.2	4.4	1.8	糸切り底、口縁部内面に煤付着	胎土に2㎜前後の砂粒を含む。明茶褐色。	〃	
〃	3	〃	〃	7.8	6.0	1.3	糸切り底	胎土に砂粒を含み、焼成良好。淡黄灰色。	〃	
〃	4	〃	〃	8.6	6.2	1.4	糸切り底	胎土に砂粒を含み、焼成良好。淡黄茶褐色。	〃	
〃	5	〃	〃	9.0	6.2	1.4	糸切り底	胎土に砂粒を含み、焼成良好。黄灰褐色。	〃	
〃	6	〃	〃	10.0	7.4	1.7	糸切り底、煤付着	胎土に砂粒を含み、焼成良好。暗茶灰色。	〃	
〃	7	〃	〃	10.8	8.0	1.6	糸切り底、底部に煤付着	胎土に砂粒を含み、焼成良好。淡黄灰褐色。	〃	
〃	8	〃	〃	14.0	10.0	1.6	口縁部は外反	胎土に砂粒を含み、焼成良好。淡灰茶褐色。	〃	平安時代
〃	9	瓦質土器	高坏	13.8	—	(3.2)	口縁部片	胎土に砂粒を含み、焼成良好。灰青色。圏線は口縁部内面に1条。	〃	
〃	10	陶器	碗	11.9	—	5.0	口縁部下で屈曲し、口縁は外反	素地は明淡黄色。焼成良好。暗茶色釉、釉厚い。	〃	天目茶碗
〃	11	〃	〃	11.8	4.6	5.5	削出し高台。口縁外反	素地は淡茶色。暗茶色釉、釉厚い。焼成良好。	〃	〃
〃	12	白磁	〃	—	(5.5)	(2.5)	高台は高く、細い	素地は精緻、灰茶色。淡灰色釉。沈線は見込みに1条。	〃	Ⅷ類
〃	13	陶器	皿	—	(5.7)	(1.5)	高台は低い。内面に目痕	素地は1～3㎜砂粒を含む。灰色釉。内底に鉄絵草文。	〃	絵唐津
〃	14	〃	〃	13.5	4.4	4.0	三日月高台。腰が強く張り、口縁部は内弯気味に外反	素地に砂を含み、明黄茶色。灰緑色釉。内底に鉄絵（草文）	〃	〃
〃	15	〃	碗	—	4.0	(2.0)	体部内弯、高台は細い	素地は精緻。暗灰色。茶緑色釉、鉄釉。畳付は茶褐色。	〃	小石原 18C
〃	16	〃	皿	—	(5.3)	(1.7)	高台は低く、腰が張る。見込みに目痕	素地は精緻、黄土色。黄茶褐色釉。	〃	唐津焼
〃	17	〃	〃	—	(4.6)	(1.6)	高台はコの字形、腰が張る。畳付と見込に砂目痕	素地は精緻、灰色。緑色を帯びた透明釉。	〃	古唐津
〃	18	〃	碗	9.1	4.0	4.6	体部上位が屈折し、口縁部は直口	素地は精緻、淡茶灰色。焼成良好。淡黄茶色の透明色釉。外面上部に鉄釉。草文。	〃	唐津焼
〃	19	青磁	〃	16.0	—	(5.8)	口縁部外反	素地は精緻、灰色。灰緑色釉。内面にヘラ片彫り文。	〃	龍泉窯系Ⅰ類
〃	20	陶器	皿	—	(11.8)	(1.5)	器壁は厚い、見込みに砂目痕	素地は精緻、淡茶褐色。焼成良好。淡黄茶色釉。	〃	唐津焼
〃	21	〃	〃	—	(5.4)	(1.9)	高台は低い、腰が張る。畳付と見込みに砂目痕	素地は精緻、茶褐色。焼成良好。灰色釉。	〃	古唐津
86	22	染付	〃	—	(5.5)	(1.5)	高台は低い。断面三角形状	素地は精緻、灰白色。焼成良好。透明釉。畳付は釉ハギ。	〃	肥前 1630～1650年
〃	23	陶器	鉢	25.4	—	(3.7)	口縁部は内側に屈曲	素地は精緻。内面は暗茶黒色、外面は茶灰色～淡灰色。	〃	備前焼
〃	24	〃	壺	13.7	—	(5.0)	口縁端部を外側に肥厚させる。玉縁状	素地は精緻、茶褐色。緑灰茶色釉。	〃	中国舶載
〃	25	土師質土器	鉢	—	—	—	口縁部を肥厚させる	胎土に砂粒を含み、黄灰色。口縁部は黒色。	〃	
〃	26	陶器	壺	9.7	—	(13.5)	口縁部外反、頸部は細い。体部の内面に同心円の叩き目	素地に砂粒を含み、茶灰色。茶緑色釉。	〃	李朝
〃	27	瓦質土器	火舎	—	—	—	頸部は短い。口縁部は平坦面を形成	胎土に4㎜大の砂粒を含む。口縁部外面に一辺5㎜の角穴を刻む。外面は黒色、内面は黄灰褐色。	〃	
〃	28	〃	〃	—	—	—	内面にヨコハケ、指頭圧痕	胎土に砂粒を含み、焼成良好。暗灰色。黒色研磨。体部外面に草花文の刻印。	〃	
〃	29	陶器	壺	—	—	—	平底。体部は内弯気味、筒状。内面に叩き痕	素地に砂粒含む。暗茶灰色釉。	〃	李朝
〃	30	瓦質土器	火舎	—	—	—	体部は内弯気味に開く。外面に突帯	胎土に砂粒を含み、灰黄褐色。口縁部下に花文のスタンプ。	〃	
〃	31	〃	〃	20.8	—	(3.1)	口縁部は直口、端部をつまみ出す。器壁は厚い	胎土に砂粒を含み、暗灰青色。外面は黒色研磨。外面はタテ方向の条痕、円状スタンプ。	〃	
〃	32	〃	摺鉢	31.0	14.2	10.9	底部は薄い、口縁部を肥厚させる。内面はマメツ。下し目は5本単位	胎土に砂粒を含み、黒灰褐色～黄灰褐色。	〃	

Tab. 3　第68次調査出土瓦類一覧表 ①　軒平瓦

挿図番号	遺物番号	出土遺構	種類	文様	厚さ	上外線		下外線		脇区幅	顎厚さ	色調	胎土	焼成	形態・製作技法	備考
						厚さ	高さ	厚さ	高さ							
10	47	SK07	軒平瓦	唐草文	4.6	0.8	0.7	0.7	0.6	2.8	1.5	黒灰色	大粒の砂を含む	良好	中心飾り不明 ナデ調整	
17	117	SK21	〃	〃	4.7	0.9	0.2	0.7	0.3	1.5	1.6	灰青色	砂粒を含む	〃	ナデ調整 中心飾りは宝珠形	
〃	124	SK22	〃	〃	—	—	—	0.8	0.3	2.3	1.5	茶灰色	精緻	やや軟	ヨコナデ調整	
30	139	SE04 掘り方	〃	〃	4.5	1.3	0.3	0.9	0.4	—	1.6	暗灰色	精良	〃	中心飾りは三葉文	
〃	140	〃	〃	〃	3.0	0.8	0.3	0.5	0.3	2.0	1.3	淡茶灰色	2～3㎜大の砂粒含む	〃	〃	
33	160	SE12 井筒	〃	〃	3.3	0.9	0.2	—	—	1.9	2.1	暗灰青色	精良	〃	〃	
39	230	SE15	〃	—	2.0	—	—	—	—	—	—	灰黒色	微砂を含む	良好	糸切り 斜格子状叩き目	
42	277	SE18	〃	〃	4.4	0.8	0.2	0.9	0.3	1.2	2.3	灰色	1～3㎜程砂粒を含む	やや軟	ナデ調整	
53	384	SE20	〃	〃	3.7	1.0	—	0.9	0.6	0.7	2.2	淡灰色～淡灰茶色	大粒の砂を含む	〃	ナデ調整	A類
〃	385	〃	〃	〃	3.0	0.5	0.3	0.6	0.4	—	2.0	淡茶色～濃灰色	大粒の砂を含む	〃	ナデ調整 中心飾りは宝珠形	B-Ⅰ類
〃	386	〃	〃	〃	3.6	0.6	0.4	0.8	0.4	0.9	2.0	濃灰色～灰色	砂粒を含む	〃	〃	〃
〃	387	〃	〃	〃	4.4	0.6	0.4	0.6	0.4	—	2.1	淡灰茶色	砂粒を含む	〃	ナデ調整	A類
〃	388	〃	〃	〃	4.4	0.5	0.4	0.7	0.5	1.1	2.2	淡灰茶色～暗灰色	砂粒を含む	〃	〃	〃
〃	389	〃	〃	〃	3.8	0.5	0.5	0.4	0.5	—	1.9	明茶褐色～暗茶色	大粒の砂を含む	〃	〃	〃
〃	390	〃	〃	〃	3.4	0.5	0.4	—	—	—	1.5	濃灰色	大粒の砂を含む	〃	〃	〃
〃	391	〃	〃	〃	3.4	0.6	0.5	0.7	0.5	1.5	2.5	淡灰茶色～灰色	大粒の砂を含む	〃	ナデ調整 中心飾りは宝珠形	C類
〃	392	〃	〃	〃	4.2	0.8	0.6	0.7	0.5	0.9	2.0	やや赤味帯びた茶灰色	精良	〃	ナデ調整	D類
〃	393	〃	〃	〃	3.8	0.5	0.1	0.7	0.3	1.2	2.4	淡灰茶色～濃灰色	大粒の砂を含む	〃	〃	E類
〃	394	〃	〃	〃	3.8	—	—	—	—	—	1.3	淡灰色～灰茶色	精良	〃	〃	B-Ⅱ類
〃	395	〃	〃	〃	3.6	0.8	0.5	0.7	0.4	—	2.0	茶灰色	砂粒を含む	〃	〃	C類
〃	396	〃	〃	〃	4.1	0.6	0.6	—	—	1.1	2.0	濃灰色～淡灰色	大粒の砂を含む	やや軟	ナデ調整	F類
〃	397	〃	〃	〃	4.5	0.5	0.3	0.7	0.8	0.9	2.5	淡灰色	大粒の砂を含む	〃	〃	G類
59	46	SX02	〃	均整 唐草文	4.4	1.4	0.6	0.9	0.6	1.3	1.8	暗灰色	砂粒を含む 精良	良好	ヨコナデ調整 中心飾りは宝珠形	
〃	47	〃	〃	唐草文	4.0	0.8	0.2	0.5	0.3	—	1.8	暗灰色	砂粒を含み精良	〃	ヨコナデ調整	
69	197	SX07	〃	梅花文	4.1	—	—	—	—	4.0	1.9	灰青色	2～3㎜の砂粒を含む	〃	ヨコナデ調整とナデ調整	
87	36	遺構面	〃	唐草文	—	—	—	0.8	0.5	—	1.6	茶色	1～3㎜程の砂を含む	〃	中心飾りは宝珠形 ヨコ方向にヘラケズリ	
〃	37	〃	〃	〃	—	—	—	1.3	0.6	—	1.5	灰色	2～3㎜程の砂を含む	良好	ヨコ方向にヘラケズリ後ナデ調整、中心飾りに三葉文（柏葉文）	高麗瓦

② （軒丸瓦）

挿図番号	遺物番号	出土遺構	種類	文様	径	内区径	外区幅	外縁 幅	外縁 高さ	珠文 径	珠文 高さ	厚さ	胴部高	色調	胎土	焼成	形態・製作技法	備考
13	88	SK18	軒丸瓦	三巴文	13.7	—	—	2.2	0.8	0.9	0.3	1.1	—	灰青色	淡灰色で砂粒を含む	良好	巴文左巻き、尾が短い。珠文は14個	
42	274	SE18	〃	〃	—	—	—	1.9	0.7	0.8	0.2	1.2	—	灰黒色	2㎜前後の砂粒を含む	〃	瓦当の一部のみ	
〃	275	〃	〃	〃	—	—	—	0.9	0.8	0.3	0.3	1.1	—	茶灰色	砂粒と微砂含む	やや軟	瓦当の一部のみ	
52	380	SE20	〃	卍文	—	—	—	1.3	1.2	—	—	1.8	—	茶灰色	砂粒を含む	〃	瓦当の一部のみ	
〃	381	〃	〃	〃	18.5〜20.0	—	—	1.4〜5.5	1.3〜3.7	—	—	2.9	13.5	やや赤味帯びた灰色	2〜3㎜の砂粒を含む	良好	卍文の高さ0.8cm、瓦当面ヘラ調整	
53	382	〃	〃	三巴文	12.6	—	—	1.0	0.8	0.5	0.2	1.8	—	淡灰茶色〜濃灰色	砂粒を含む	〃	巴文左巻き、珠文は16個	
〃	383	〃	〃	〃	13.3	—	—	1.4	0.8	0.5	0.2	1.7	—	暗灰色〜茶灰色	砂粒を含む	〃	巴文左巻き、珠文は16個	
64	127	SX03	〃	〃	(16.4)	—	—	—	—	1.5	0.2	1.2	—	灰青色	2〜3㎜の砂粒含む	〃	巴文左巻き、珠文は12個	
〃	128	SX03 6層	〃	〃	14.2	—	—	1.8	0.3	1.3	0.2	1.3	14.2	灰青色	2〜3㎜の砂粒含む	〃	巴文左巻き、尾は長いが他の巴文との接続なし。珠文は12個	
〃	129	SX03 3層	〃	〃	13.3	—	—	1.6〜2.3	0.3	1.0	0.3	1.8	—	暗灰色	細砂を含む	〃	巴文左巻き、珠文は9個	
67	175	SX04	〃	蓮華文	10.0	—	—	1.0	0.4	—	—	1.5	—	灰褐色	大粒の砂粒含む	〃	蓮子は欠損、8弁の蓮華文	
76	235	SX30	〃	三巴文	(15.0)	—	—	1.8	0.6	0.9	0.2	1.9	—	灰色	砂粒を含む	〃	巴文左巻き、珠文12個	
87	33	遺構面	〃	〃	(15.0)	—	—	2.8	0.7	1.0	0.4	2.2	—	灰色	1㎜程の砂を含む	〃	巴文左巻き、珠文14個	
〃	34	〃	〃	帆掛け舟文	10.0	—	—	1.5	0.6	—	—	2.5	—	黒灰色	微砂を含む	〃	帆掛け舟文の高さ0.3cm	
〃	35	〃	〃	扇文	9.0	—	—	—	—	—	—	2.0	—	黒灰色	1㎜程の砂粒を含む	〃	扇文の高さ0.7cm	

③ （丸瓦）

挿図番号	遺物番号	出土遺構	種類	長さ 玉縁部	長さ 筒部	幅 前端部	幅 後端部	高さ	弧深	色調	胎土	焼成	形態・製作技法	備考
8	24	SK02	丸瓦	3.5	—	—	—	—	—	黒灰色	砂粒を含む	良好	背はヘラケズリの後ナデ調整、谷は布目痕	
17	118	SK21	〃	3.0	—	—	—	4.7	2.4	茶褐色〜淡褐色	1〜3㎜程の大砂粒含む	〃	背はナデ調整、谷は縄紐痕	
〃	123	SK22	〃	—	—	—	—	—	—	灰色	5㎜程の砂粒を含む	〃	背は縄目叩き、谷は布目痕	
28	103	SE03 井筒	〃	—	—	12.6	—	6.8	5.2	黒灰色	大粒の砂を含む	〃	背はナデ調整、谷は布目痕	
〃	104	SE03 掘り方	〃	—	—	—	—	—	—	灰色	3㎜程の砂粒を含む	〃	背は縄目叩き、谷は布目痕	
34	165	SE13	〃	2.4	—	—	12.3	5.7	3.5	暗灰色	砂粒を含む	〃	背はヘラケズリの後ナデ調整、谷は布目痕	
43	280	SE18	〃	—	—	—	—	—	—	黒灰色	1㎜の砂を含む	〃	背は縄目痕、谷は布目痕	
〃	281	〃	〃	—	—	—	—	6.5	3.8	黒灰色	大粒の砂を含む	〃	背はナデ調整、谷は布目痕	
54	398	SE20	〃	—	—	—	—	6.0	3.9	灰色	大粒の砂を含む	〃	背は縄目痕、谷は布目痕	
〃	399	〃	〃	—	—	—	—	5.7	3.7	淡灰茶色	大粒の砂を含む	〃	背は一部に縄目痕、谷は布目痕と縄紐痕	
〃	400	〃	〃	—	—	—	—	5.0	2.5	淡灰茶色	砂粒を含む粗い	〃	背はヘラケズリの後ナデ調整、谷はヘラケズリ、糸切り痕	
〃	401	〃	〃	—	—	—	—	6.4	4.2	濃灰色〜灰色	砂粒を含む	〃	背はヘラケズリの後ナデ調整、谷は縄紐痕	

挿図番号	遺物番号	出土遺構	種類	長さ		幅		高さ	弧深	色調	胎土	焼成	形態・製作技法	備考
				玉縁部	筒部	前端部	後端部							
54	402	SE20	丸瓦	—	—	—	—	5.6	3.7	淡茶灰色～灰茶色	大粒の砂を含む	良好	背は縄目痕と指頭圧痕 谷は布目痕	
〃	403	〃	〃	3.6	—	—	—	6.0	3.4	黄灰色	砂粒を含む	〃	背はヘラケズリの後ナデ調整、谷は縄目痕	
59	48	SX02	〃	3.6	23.6	—	14.1	6.7	4.9	暗灰色	大粒の砂含むが細良	〃	背はヘラケズリの後ナデ調整、中央部に「利右衛門」の刻印	
〃	49	〃	〃	—	—	—	—	—	—	暗灰色	細砂粒を含む	〃	背には「六郎右衛門」の刻印、ナデ調整、谷は布目痕	
64	130	SX03 4層	〃	—	—	—	—	—	—	暗灰色	細砂粒を含む	〃	背は「左衛門」の刻印、タテナデ調整、谷は布目痕	
〃	131	〃	〃	—	—	—	—	—	—	灰青色	細砂粒を含む	〃	背はヘラケズリの後ナデ調整、「右衛門」の刻印、谷は布目痕	
〃	132	SX03 5層下	〃	3.4	—	—	—	6.6	4.6	淡灰青色	細砂粒を含む	〃	背はヘラケズリの後ナデ調整、「了三郎」の刻印、谷は布目痕	
〃	133	SX03 3層	〃	3.6	—	—	14.0	6.5	4.3	暗灰色	細砂粒を含む	〃	背はヘラケズリの後ナデ調整、一部指頭圧痕、谷は布目痕、釘穴	
〃	134	SX03	〃	—	—	—	—	6.3	4.8	淡灰褐色	砂粒は含まない	〃	背は縄目叩き痕、谷は布目痕、ヘラで斜方向にケズリ	
〃	135	〃	〃	3.2	—	—	—	6.4	4.4	灰青色	2～3㎜の砂粒を含む	〃	背はヘラケズリの後ナデ調整、谷はヘラケズリと布目痕	
〃	137	SX03 裏込め	〃	—	—	—	—	6.2	3.9	暗灰色	細砂含む	〃	背は指頭圧痕、谷は布目痕、釘穴2つ	
70	211	SX14	〃	2.9	—	—	14.0	6.6	4.2	暗灰色	砂粒含まず精良	〃	背はナデ調整、谷は布目痕、タテ方向に深いケズリ	
〃	212	〃	〃	—	—	—	—	—	—	淡茶灰色	砂粒を含む	〃	背はヘラケズリの後ナデ調整、谷は布目痕と縄紐痕	
72	256	SX16	〃	—	—	—	—	—	—	黒灰色	大粒の砂を含む	〃	背は縄目叩き痕、谷は強い縄紐痕	
74	270	SX19	〃	—	—	—	—	—	—	淡灰茶色	5㎜大の砂粒を含む。精良	〃	背は縄目叩き痕・一部ヘラケズリ、谷は布目痕	
75	286	SX21	〃	2.4	—	—	—	6.2	3.8	暗灰色～茶灰色	砂粒は含まず精良	〃	背はヘラケズリの後ナデ調整、谷は布目痕	
87	38	遺構面	〃	2.0	23.0	12.9	13.0	6.5	4.6	黒灰色	大粒の砂と微砂を含む	〃	背はヘラケズリの後ナデ調整、谷ヘラケズリ	

④ 平　瓦

挿図番号	遺物番号	出土遺構	種類	長さ	厚さ	幅		弧深	色調	胎土	焼成	形態・製作技法	備考
						前端部	後端部						
17	125	SK21・22	平瓦	—	2.0	—	—	—	灰色	2～3㎜程の砂粒を含む	良好	谷は布目、背には斜格子叩き痕	
20	7	SE01 井筒	〃	—	1.2	—	—	—	灰色	精良	〃	背はナデ調整、谷は布目痕	
〃	8	〃	〃	25.0	2.8	20.5	20.4	1.2	濃灰色	微砂を含み精良	〃	ヘラケズリの後ナデ調整	井戸瓦
〃	9	〃	〃	25.0	2.8	20.5	20.4	1.3	濃灰色	砂粒含み粗い	〃	ヘラケズリの後ナデ調整	〃
26	80	SE02 掘り方	〃	—	2.1	—	—	2.7	暗灰色	大粒の砂を含み精良	〃	谷はヘラケズリ、後ナデ調整、背は離れ砂付着	
〃	81	SE02	〃	29.8	3.0	25.8	25.8	2.0	濃灰色	砂粒含む	〃	谷は指頭圧痕	井戸瓦
〃	82	〃	〃	28.8	3.1	25.9	25.6	2.0	濃灰色	大粒の砂を含むが精良	〃	谷は指頭圧痕、背はヘラケズリの後ナデ調整	〃
28	105	SE03 井筒	〃	—	1.9	—	—	2.1	灰色	大粒の砂を含む	〃	谷はヘラケズリの後ナデ調整	
〃	106	〃	〃	29.9	2.6	23.7	23.5	1.5	灰色	大粒の砂を含む	やや軟	背はヘラケズリの後ナデ調整	SE04と同一規格井戸瓦
〃	107	〃	〃	31.0	2.9	24.7	24.6	1.9	灰色	大粒の砂を含む	良好		〃
30	141	SE04	〃	30.0	2.7	24.0	23.5	1.6	濃灰色	小粒の砂を含む	〃	谷は指頭圧痕、背はナデ調整	SE03と同一規格井戸瓦
〃	142	〃	〃	30.8	3.2	24.5	23.7	1.8	濃灰色	大粒の砂を含む	〃	指頭圧痕	〃
31	143	SE05	〃	24.9	2.8	20.6	20.5	1.3	濃灰色	大粒の砂を含む	〃	背はナデ調整	井戸瓦
〃	144	〃	〃	24.5	2.9	20.6	20.3	1.2	濃灰色～灰色	大粒の砂を含む	〃	谷はヘラケズリの後ナデ調整、背はナデ調整	〃

挿図番号	遺物番号	出土遺構	種類	長さ	厚さ	幅 前端部	幅 後端部	弧深	色調	胎土	焼成	形態・製作技法	備考
34	164	SE12	平瓦	29.7	3.2	—	—	0.8	暗灰色～茶灰色	砂粒を含む	良好	ナデ調整	井戸瓦
〃	166	SE13	〃	—	3.6	—	—	1.4	茶灰色	1㎜程の砂粒を含む	〃	ナデ調整	〃
37	211	SE14	〃	25.2	2.8	20.5	20.4	1.5	暗灰色	砂粒は含まれず精良	〃	谷はヘラケズリの後ナデ調整、背はナデ調整	SE05と同一規格井戸瓦
〃	212	〃	〃	25.0	2.6	20.5	20.4	1.3	暗灰色	砂粒は含まれず精良	〃	谷はヘラケズリの後ナデ調整、背はナデ調整	〃
43	282	SE18	〃	—	2.5	—	—	—	灰黒色	砂粒を含む	〃	糸切り、直径1.3㎝の釘穴有り	
〃	283	〃	〃	—	1.8	19.0	—	2.8	灰茶色	3～4㎜砂粒を多く含む	〃	ナデ調整	
〃	285	〃	〃	27.5	2.9	—	23.4	1.5	茶灰色	白い砂粒を含む	やや軟	ナデ調整	井戸瓦
〃	286	〃	〃	27.8	2.7	—	23.2	2.0	茶灰色	砂粒は含まれず精良	良好	ナデ調整	〃
44	296	SE19	〃	30.9	3.0～3.8	24.1	24.0	2.0	濃灰色	大粒の砂含み粗い	やや軟	ヘラケズリの後ナデ調整	〃
〃	297	〃	〃	29.2	2.9	23.8	23.5	2.0	暗灰色	砂粒を含み精良	良好	ナデ調整	〃
54	404	SE20	〃	—	1.7	—	—	—	淡灰茶色～明茶褐色	大粒の砂含み粗い	〃	谷には円状痕、背はナデ調整	
〃	407	〃	〃	—	2.2	—	—	0.4	淡灰茶色	砂粒を含み精良	〃	谷はヘラケズリの後ナデ調整、背には離れ砂付着、糸切り痕	
59	50	SX02	〃	—	1.7	—	—	3.0	黒灰色	砂粒を含む	〃	ヘラケズリの後ナデ調整	
65	139	SX03	〃	27.3	2.0	25.3	23.2	2.1	黒灰色	砂粒を含む	〃	ヘラケズリの後ナデ調整	
〃	140	SX03 4・5層	〃	—	1.7	—	—	—	暗灰青色	砂粒は含まず精良	〃	糸切り痕、離れ砂付着	
〃	141	SX03 2層	〃	—	1.7	—	—	—	灰青色	砂粒を含む	〃	谷は「利右衛門」の刻印、糸切り	
〃	142	SX03	〃	—	2.7	—	—	—	灰茶色	1㎜程の砂粒を含む	〃	ナデ調整、釘穴	
72	255	SX16	〃	—	2.6	—	—	1.5	淡灰色～濃灰色	砂粒を含む	〃	ナデ調整	

⑤ 桟瓦・道具瓦・瓦塼

挿図番号	遺物番号	出土遺構	種類	計測値（ ）は現存（単位 ㎝） 長さ	幅	厚さ	色調	胎土	焼成	形態・製作技法	備考
8	25	SK02	桟瓦	29.7	2.0	5.0	黒灰色	1㎜程の砂粒を含む	良好	ナデ調整	1675年以降
43	284	SE18	瓦塼	21.8		3.0	茶灰色	1～4㎜程の砂粒含む	やや軟	ヘラケズリの後ナデ調整	
54	405	SE20	〃	(11.6)		3.0	濃灰色～淡茶色	砂粒を含む。粗い	良好	四角塼	
〃	406	〃	〃	(7.3)		4.4	淡茶色	大粒の砂を含む	〃	三角塼	
〃	408	〃	伏間瓦	(15.3)		2.1～2.7	濃灰色	大粒の砂を含む。精良	〃	ヘラケズリの後ナデ調整	
65	138	SX03 4・6層	桟瓦	20.6	1.9	3.9	淡灰色～暗灰色	大粒の砂を含む。精良	〃	ヘラケズリの後ナデ調整	
〃	143	SX03	鬼瓦				灰青色	砂粒を含む	〃	外縁の一部、接合部に刻目がある	
69	198	SX07	隅瓦	16.1		1.5	淡茶灰色	大小の砂粒を含む	〃	径0.9㎝の釘穴、ナデ調整	
74	269	SX19	〃	(7.8)	(11.5)	2.1	暗灰色～茶灰色	砂粒は含まず精良	〃	径0.9㎝の釘穴、ハケ目痕	

Tab. 4　第68次調査石製品及び土製品一覧表

No.	挿図番号	遺物番号	出土遺構	種類	器種	計測値（単位cm）	石材	備考
1	8	23	SK02	石製品	硯	現存長5.9、厚さ1.1、深さ0.25	小豆色凝灰岩	陸部のみ1/2残る。表面は研磨
2			〃	土製品	人形型			布袋様の顔の部分のみ
3	26	79	SE02 掘り方	石製品	砥石	現存長6.5、幅4.4、厚さ最大1.0、最小0.4	粘板岩	使用による磨滅。色調は灰色
4	28	102	SE03 井筒	土製品	鞴羽口	現存長6.3、幅6.2、孔径2.0		欠損大。焼成軟。色調は明褐色
5	30	135	SE04	石製品	硯	現存長3.1、現存幅1.8、縁の高さ0.8	粘板岩	陸部一部残る。小形の硯
6	30	136	〃	〃	挽臼	直径38、上縁幅2.3、厚さ2.3～2.6	凝灰岩	下臼の受皿部片
7	33	161	SE12 掘り方	〃	茶臼		砂岩	下臼。擦り目1.5mm幅。2～3mm間隔
8	33	163	SE12	土製品	土錘	現存長3.5、最大幅1.3、孔径0.6		環状の土錘で、円筒形
9			SE14	〃	人形			頭部欠損。男性の座像。底に2つの穴
10			〃	原石			滑石	色調は淡灰茶色
11	42	279	SE18	石製品	挽臼	直径34、高さ10.3、芯棒孔径2.4、擦り目幅0.4 間隔0.7～1.9	凝灰岩	上臼。擦り目は不規則。8等区分
12			〃	〃	砥石	現存長5.8、幅2.3	頁岩	茶灰色
13	49	350	SE20 掘り方	〃	板碑	現存長17.8、幅15.2、厚さ6.5	砂岩	頭頂部は山形。額との境に薬研彫りの横線2条。裏は粗いケズリ
14	50	351	〃	〃	石塔	長さ15.5、幅15.6、高さ14.0	花崗岩	四方仏。金剛界四仏か
15	65	144	SX03	土製品	土錘	長さ3.7、最大径0.9、孔径0.3		ほぼ完形。環状の土錘で円筒形
16			〃	〃	土鈴			1/2が欠損する
17			〃	〃	人形			頭部欠損。男性の座像。底に1つの穴
18			〃	〃	魚形			1/2が欠損する
20	67	176	SX04	石製品	硯	現存長9.1、幅4.7、縁の高さ1.9	砂岩	表面は茶灰色。裏面は黒色
21	76	294	SX30	〃	石錘	長さ3.6、幅1.9、厚さ1.4	滑石	形態は楕円形。紐用の溝が縦方向に1条

Tab. 5　第68次調査青銅製品一覧表

No.	挿図番号	遺物番号	出土遺構	種類	計測値（単位cm）	備考
1			SE12	針金	現存長6.7、径0.2	
2			〃	〃	現存長3.3、径0.2	
3	37	208	SE14	煙管吸口部	現存長6.4、接合部幅1.1	吸口部端欠損
4	42	278	SE18	匙	全長16.1（柄は11.5）、受口部分幅2.4	完形。柄が弓なり
5			SX04	小片	長さ2.8、幅1.4、厚さ0.8	塊
6			〃	〃	長さ2.4、幅1.9、厚さ1.3	塊
7			遺構面	針金	現存長3.6＋2.1、径0.2	L字型に曲がる
8			〃	器種不明　円盤状	径5.8、厚さ0.5、裏に0.5の折り返し	一部欠損
9			〃	〃	径4.75、厚さ0.15、中心部と間隔1.3で上・下部に径0.4の穴	中心部少し盛上がる
10			〃	〃	径5.3、厚さ1.7、内部中心に長さ1.3、幅0.9で柱状支えか？	蓋物か？表面に鳳凰
11			〃	器種不明　棒状	全長14.7、径0.4～0.3	両端が細い
12			〃	器種不明	現存長5.3、幅2.1、高さ2.3	煙管の雁首のように先が広がる
13			〃	〃	現存長3.9、幅1.1、厚さ0.2	内部空洞
14			〃	〃	全長3.3、幅1.1～0.5、厚さ0.6	片端が細い
15			〃	〃	現存長3.7、幅1.2、厚さ0.3	若干弯曲する

Tab. 6　第68次調査鉄製品一覧表 ①

No.	挿図番号	遺物番号	出土遺構	種類	計測値（単位cm）			備考
					長さ	幅	厚さ	
1			SK01	釘	3.7	0.6	0.5	
2			SK02	〃	現存長 4.3	1.2	1.7	
3			〃	〃	現存長 3.1	1.1 0.9～0.6	1.1～0.6	先端部欠損。弯曲
4			〃	〃	現存長 2.1	0.7～0.3	0.8～0.3	頭部欠損
5			〃	〃	現存長 4.3	2.3 1.1～0.8	1.4 0.8～0.2	先端部欠損
6			SK14	〃	現存長 5.7	1.1 0.8～0.5	0.8 0.7～0.5	先端部わずかに欠損
7			SK19	〃	3.0	0.9～0.3	0.5～0.3	
8			〃	〃	現存長 2.5	0.7	0.8	頭部欠損
9	14	108	SK20	刀子	現存長 7.6	1.0～0.4	0.6～0.3	刃部破損
10			〃	鎹	現存長14.1	2.5～1.6	1.0	
11			〃	釘	4.8	0.7	0.7	曲がっている
12	18	130	SK21・22	〃	現存長 8.0	2.1～0.7	1.8～0.5	先端部わずかに欠損
13			SK24	〃	現存長 4.7	1.2～0.8	1.0	先端部欠損
14			SE01	〃	現存長 6.6	0.6	0.4	頭部欠損
15			SE01　井筒	〃	現存長 4.8	3.3 2.3～1.3	2.1 1.8～0.9	先端部欠損
16			〃	〃	現存長 4.5	0.9	0.6	先端部欠損
17			SE02　掘り方	〃	5.8	1.6 0.9～0.3	1.0	
18			〃	〃	現存長 3.6	1.0 0.5～0.4	0.9 0.6～0.3	先端部欠損。頭部を折り曲げる
19			〃	〃	現存長 4.8	0.7 0.5～0.4	0.8～0.5	先端部欠損
20			〃	〃	11.5	1.3	1.1	
21			〃	〃	現存長 1.9	0.9	0.7	先端部欠損
22			〃	〃	現存長 2.4	0.9	0.8	先端部欠損
23			〃	〃	現存長 3.3	0.5	0.6	小片。先端部と思われる
24			〃	〃	現存長 2.2	0.5	0.4	小片。先端部と思われる
25			〃	〃	4.1	1.0 0.7～0.5	0.8 0.6～0.5	曲がっている
26			〃	〃	現存長 4.6	0.5	0.5	頭部欠損
27			〃	〃	3.7	0.6 0.5～0.2	0.6 0.4～0.1	頭部を折り曲げる
28			〃	〃	5.3	1.0 0.8～0.2	0.6 1.0～0.2	
29	25	78	SE02　井筒	〃	9.1	2.6 2.0～1.1	1.5 1.4～0.9	先端部欠損
30			〃	〃	現存長 6.3	1.1～0.6	1.2～0.9	先端部欠損
31			〃	〃	現存長 4.1	0.9	0.8	先端部欠損
32			〃	〃	現存長 3.1	1.4～0.8	0.9	先端部欠損。頭部を折り曲げる
33			〃	〃	4.4	1.1 0.6～0.5	1.0～0.7	
34			〃	〃	現存長 4.3	0.7	0.6	頭部欠損
35			〃	〃	現存長 7.3	0.7	0.6	頭部欠損
36	25	77	〃	〃	7.4	0.7	0.6	両先端が曲がっている
37			〃	〃	現存長 4.1	0.6	0.8	先端部欠損
38			〃	〃	現存長 2.0	0.6	0.6	頭部欠損

Tab. 6　第68次調査鉄製品一覧表 ②

No.	挿図番号	遺物番号	出土遺構	種類	計測値（単位cm）			備考
					長さ	幅	厚さ	
39			SE02　掘り方	釘か？	現存長 6.1	1.8	1.2	曲がっている
40			〃	〃	現存長 2.9	0.85	0.5	№39と同形状の小片
41			SE03　井筒	釘	6.0	0.8 0.4～0.2	0.6 0.4～0.2	
42			〃	〃	現存長 7.0	1.8～0.8	1.2	先端部欠損。頭を折り曲げる
43			〃	〃	4.5	1.2	0.8	
44			〃	〃	現存長 2.9	1.0	0.9	先端部欠損
45	30	137	SE04　掘り方	鎹か？	2.5	0.7	1.0	
46	30	138	SE04	鑿（のみ）か？	11.2	1.7	1.7	
47			SE04　掘り方	釘	7.6	1.5	1.2	
48			SE04　井筒	〃	9.7	1.4	1.4	
49			SE12	鎹	現存長 6.4	2.0～1.2	0.6～0.2	
50			〃	釘	6.4	1.8	0.6	曲がっている
51			〃	〃	5.4	1.3	1.3	
52			〃	〃	現存長 4.6	1.0～0.6	1.1	頭部欠損
53			SE12　井筒	〃	現存長 4.6	0.7～0.4	0.5	わずかに両端が欠損
54	37	207	SE14	〃	現存長 7.3	2.5	2.6	木質残る
55			〃	〃	現存長 4.6	1.3	1.2	先端部欠損
56			〃	〃	5.7	1.2 0.9～0.8	1.3 0.9～0.7	
57			〃	〃	現存長 5.0	2.2～0.9	1.8	先端部欠損
58			〃	〃	現存長 6.5	2.0～0.7	1.2～0.6	先端部欠損。木質残る
59			〃	〃	現存長 5.0	2.1～0.7	1.1～0.5	先端部欠損。木質残る
60			〃	〃	現存長 5.7	1.1	1.0	頭部欠損
61	39	232	SE15　井筒	釣針	7.4	2.9	0.5	返りが逆に付いている
62	39	231	SE15　掘り方	〃	現存長 4.8	2.1	0.4	基部を欠く
63			SE15	釘	4.8	0.7～0.3	0.7～0.3	頭を折り曲げる
64			〃	〃	現存長 2.5	0.8	0.6	先端部欠損。頭を折り曲げる
65			〃	〃	現存長 3.2	0.5	0.6	頭部欠損
66			〃	〃	6.1	0.7	0.8	
67			〃	〃	現存長 5.3	1.1～0.6	1.1～0.4	先端部わずかに欠損
68			〃	〃	現存長 3.3	0.9～0.3	0.7	先端部欠損
69			〃	〃	現存長 3.1	0.4	0.4	頭部欠損
70			SE15　掘り方	〃	現存長 3.2	0.9 0.6～0.4	1.2 0.2	
71			〃	〃	現存長 3.6	0.9 0.6～0.4	0.9 0.8～0.6	先端部欠損
72			〃	〃	現存長 1.5	0.8	0.6	先端部欠損
73			〃	〃	6.4	0.4	0.4	頭部欠損
74			〃	〃	現存長 6.4	1.3 1.0～0.5	1.2 0.9～0.3	頭部わずかに欠損
75			SE18	〃	4.4	0.9～0.3	0.8	

Tab. 6　第68次調査鉄製品一覧表 ③

No.	挿図番号	遺物番号	出土遺構	種類	計測値（単位cm）			備考
					長さ	幅	厚さ	
76			SE19	釘	現存長 3.5	0.7	0.7	曲がっている
77			SE19　裏込め	〃	現存長 4.2	現存幅1.4～0.6	1.2～0.4	先端部欠損。頭部は折り曲げる
78			〃	〃	現存長 4.7	現存幅　1.8	1.3	先端部欠損。頭部は折り曲げる
79			〃	〃	現存長 6.5	0.9～0.5	0.7～0.5	
80			SE19　掘り方	〃	4.7	0.9 0.6～0.4	1.1 0.6～0.4	頭部は折り曲げる
81			SE19　井筒	〃	現存長 3.2	0.6	0.6	先端部欠損
82			〃	〃	現存長 2.2	0.3	0.5	頭部欠損
83			SE19井筒内下層	〃	4.8	0.8～0.2	1.0～0.3	曲がっている
84	47	335	SE20　裏込め	〃	8.6	2.0～0.6	1.1～0.8	
85			SX01	〃	6.6	0.3 0.25～0.1	0.35 0.25～0.1	
86			SX02　下層	〃	現存長 2.7	1.0 0.5	0.7 0.5	
87			〃	〃	現存長 3.1	0.9	1.0	先端部欠損
88			〃	〃	現存長 2.7	1.1	1.1	先端部欠損
89	63	124	SX03　4・5層	庖丁	21.4	3.8	0.4	刃部に欠損がある
90	63	125	SX03	不明	現存長 4.7	1.9	0.8	刃部切先部分と思われる
91	63	123	SX03　1層	鎹	現存長16.3	0.8	1.3	両端が開いている
92			SX03	釘	現存長 5.2	1.4	0.7	先端部欠損
93			〃	〃	6.1	0.6 0.5～0.2	0.5	
94			〃	〃	現存長 4.2	0.8～0.4	0.5	先端部欠損。頭部は折り曲げる
95	63	126	〃	〃	7.6	0.9～0.3	0.5	頭部がくの字に曲がる
96			SX03　3層	〃	現存長 4.2	0.9～0.6	0.7	先端部欠損
97			SX03　4層	〃	現存長 5.1	0.5	0.6	先端部欠損
98			SX03　溜桝内	〃	7.1	2.9 1.6～0.6	1.7 1.0～0.6	木質が残る
99			〃	刃物	現存長 2.8	1.3	0.8	
100			SX04	釘	7.3	1.4～0.6	1.0	頭部は折り曲げる
101			〃	〃	現存長 4.8	0.4	0.4	頭部欠損
102			〃	〃	現存長 3.6	0.7 0.6～0.2	0.5	先端わずかに欠損
103			〃	〃	現存長 3.5	0.9 0.5～0.4	0.6	先端わずかに欠損
104			SX04　ベルト	〃	現存長 7.3	1.4 1.1～0.8	1.4 1.1～0.8	先端部欠損
105			SX07	〃	9.5	4.2 0.9～0.6	1.8 0.7～0.5	頭の部分が長い
106			〃	〃	7.5	1.3～0.7	1.2	
107			SX10	鎹	4.2	2.7～0.9	1.2	
108	72	257	SX16　内側内	鞘？	現存長 5.9	1.9(0.3)	1.4(1.5)	中空になっている
109			〃	釘	3.2	0.7	0.7	L字型に曲がる
110			〃	〃	現存長 6.7	2.9～1.2	1.9～0.7	先端部欠損
111			SX18	〃	現存長 6.6	0.8 0.6～0.3	0.7 0.6～0.3	頭部欠損
112			SX19	〃	5.7	1.3 0.8～0.6	1.5 0.8～0.6	

Tab. 6　第68次調査鉄製品一覧表 ④

No.	挿図番号	遺物番号	出土遺構	種類	計測値（単位cm）			備考
					長さ	幅	厚さ	
113			SX19	釘	現存長 7.4	1.4 0.9～0.5	1.2 0.9～0.6	先端部欠損
114			〃	〃	5.9	1.1 0.6～0.5	0.8 0.6～0.5	頭部が潰れている
115			〃	〃	現存長 5.0	0.6～0.4	0.7～0.3	頭部欠損
116			〃	〃	現存長 3.6	0.7 0.5～0.3	0.6 0.5～0.4	先端部欠損。頭部は潰れている
117	74	271	〃	〃	現存長 8.8	0.6	0.6	両端部欠損
118			〃	〃	現存長 2.9	0.8～0.3	0.6	先端部欠損。頭部は折り曲げる
119			〃	〃	現存長 3.6	0.6～0.3	0.5	頭部欠損
120			SX20	〃	現存長 5.1	2.4～1.3	0.9	先端部欠損。木質残る
121			〃	〃	現存長 4.5	1.9	1.4	先端部欠損。木質残る
122			〃	〃	現存長 4.6	0.8 0.6	1.1 0.8～0.7	先端部欠損
123			SX21内	〃	現存長 3.8	1.8	1.3	先端部欠損
124			〃	〃	現存長 4.6	1.3～0.6	1.2	頭部欠損
125			〃	〃	現存長 2.9	0.6～0.3	0.9～0.4	頭部欠損
126			〃	〃	4.5	0.6～0.3	0.6	頭部は折り曲げる
127	76	293	SX30	〃	現存長 5.8	3.1～0.8	1.2	先端部欠損。木質残る
128			SX32　上面	〃	3.1	1.0 0.6～0.3	0.7～0.4	頭部は折り曲げる
129			Ⅳ期砂層	〃	5.4	1.5～0.3	1.3～0.3	
130			〃	〃	現存長 2.9	1.4	1.5	先端部欠損
131			〃	〃	現存長 2.5	2.2～1.5	1.4	先端部欠損。頭部は折り曲げる
132			〃	〃	現存長 9.2	1.3～0.9	1.5～0.6	先端部は少し欠損
133			Pit01	〃	6.1	1.0～0.3	1.1～0.5	
134			〃	〃	6.4	1.2～0.4	1.2～0.3	
135			〃	〃	現存長 3.8	0.5～0.3	0.4	木質残る
136			Pit02	鎹	現存長 3.9	1.6～0.5	0.7～0.5	コの字型に曲がる
137			〃	釘	現存長 3.6	1.2	1.0～0.4	先端部欠損。頭部は折り曲げる
138			〃	〃	現存長 3.5	1.1 0.8～0.2	1.0～0.5	頭部の一部欠損
139			〃	〃	現存長 3.4	1.0	0.8	くの字に曲がる
140			遺構面	〃	9.3	1.5 1.0～0.6	1.5～0.6	
141			〃	〃	現存長 3.1	1.6	1.45	先端部欠損
142			〃	〃	現存長 3.45	0.7	0.7	先端部欠損
143			〃	〃	6.3	0.5～0.2	0.8～0.2	
144			〃	〃	現存長 8.1	1.1～0.4	0.7～0.4	先端部わずかに欠損
145			不明	〃	5.7	1.4 0.9～0.5	1.2～0.6	SK21、又はSX11
146			〃	器種不明	4.8	1.0 0.7～0.5	0.8～0.3	頭部を折り曲げる。SK21、又はSX11
147			〃	釘	7.2	1.8 0.8～0.3	1.2 0.6～0.4	頭部を折り曲げる。SK21、又はSX11
148			〃	〃	現存長 7.7	1.2	1.2	頭部欠損。SK21、又はSX11
149			〃	刃物	現存長 2.9	1.9	1.7	SK21、又はSX11

Tab. 7　第68次調査 SX02・03出土木製品及び竹製品一覧表

No.	挿図番号	遺物番号	出土遺構	種　類	樹種	計　測　値　（単位cm）			木取り	備　考
1	59	44	SX02	漆器椀		高台径　5.0	現存高　2.6			内外面は黒漆。内面のみ朱漆を上から塗布。漆の塊が内面に付着
2	〃	45	〃	器種不明		長さ　9.1	幅　3.0	厚さ　1.4 穴径　0.2～0.3	ナナメ	名札か。釘穴
3	66	147	SX03　1層	栓⑤		長さ　5.8	上面径　3.5	下面径　2.2～2.4	板　目	鋸で切った痕
4	〃	148	〃	栓③－B		長さ　5.4	上面径　3.2～3.4	下面径　2.4～2.6	タテ割り	
5	〃	149	〃	栓④		長さ　4.3	上面径　3.4～3.6	下面径　2.9～3.0	板　目	面取り
6	〃	150	SX03 4・5層	栓⑧		長さ　4.4	上面径　2.9～3.5	下面径　2.1～2.3	板　目	面取り
7	〃	151	SX03　1層	栓⑥		長さ　3.8	上面径　2.5	下面径　2.1	板　目	面取り
8	〃	152	〃	栓①		長さ　4.0	上面径　3.1～3.5	下面径　1.9～2.1	板　目	面取り
9	〃	153	〃	栓③－A		長さ　4.2	上面径　2.9～3.2	下面径　2.3～2.6	芯持ち	面取り
10	〃	154	〃	栓⑦		長さ　3.9	上面径　2.4～2.9	下面径　2.3	板　目	面取り
11	〃	155	SX03　4層	栓⑨		現存長　4.6			板　目	面取り
12	〃	156	SX03　1層	器種不明		長さ　23.4	現存幅　11.6			面取り。下部欠損
13	〃	157	〃	栓②		長さ　7.5	幅　2.0		板　目	長方形。面取り
14	〃	158	SX03 4・5層	漆器椀		口径　11.3	現存高　4.3			内外面に朱漆。外面は剝落
15	〃	159	SX03	筆柄①		現存長　6.2	筆管径　1.8～2.3	尻骨径　2.1～2.5	芯持ち	尻骨部の外面は鉄、内部は木製、柄は竹
16	〃	160	SX03　1層	筆柄②		現存長　5.8	筆管径　2.1	尻骨径　2.3 鉄の厚さ0.08		尻骨部の外面は鉄、内部は木製、柄は竹
17			〃	筅①	竹	現存長　10.2	柄　2.7	径　3.1		
18			〃	筅②	〃	現存長　11.5	柄　1.7	径　2.9		
19			〃	筅③	〃	現存長　13.7	柄　4.5	径　3.6		
20			〃	筅④	〃	現存長　24.9	柄　10.0	径　3.3		節はケズリ落とし
21			〃	筅⑤	〃	現存長　10.2	柄　2.8	径　3.8		
22			〃	筅⑥	〃	現存長　12.3	柄　3.1	径　3.9		
23			〃	筅⑦	〃	現存長　7.5	柄　1.5	径　3.8		
24			〃	筅⑧	〃	現存長　8.2	柄　2.8	径　2.4		
25			〃	筅⑨	〃	現存長　9.9	柄　2.3	径　3.4		
26			〃	筅⑩	〃	現存長　16.0	柄　1.7	径　2.8		
27			〃	筅⑪	〃	現存長　13.6	柄　2.1	径　3.7		
28			〃	筅⑫	〃	現存長　10.2	柄　3.4	径　3.1		
29			〃	筅⑬	〃	現存長　23.8	柄　3.5	径　3.2		
30			〃	筅⑭	〃	現存長　11.0	柄　3.3	径　3.3		
31			〃	筅⑮	〃	現存長　13.0	柄　2.3	径　3.6		
32			〃	筅⑯	〃	現存長　10.3	柄　(3.6)	径　3.5		
33			〃	筅⑰	〃	現存長　19.8	柄　1.6	径　3.7		
34			SX03	筅⑱	〃	現存長　13.1	柄　6.1	径　3.6		節はケズリ落とし
35			〃	筅⑲	〃	現存長　12.7	柄　3.1	径　3.8		

作　業　風　景

博多（はかた） 32

博多遺跡群第68次発掘調査報告
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第287集

1992年（平成4年）3月13日発行

編集
発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷　アオヤギ株式会社